

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 8 —

下 卷

福岡県築上郡築城町所在
十双遺跡の発掘調査

1992

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

— 8 —

下 卷

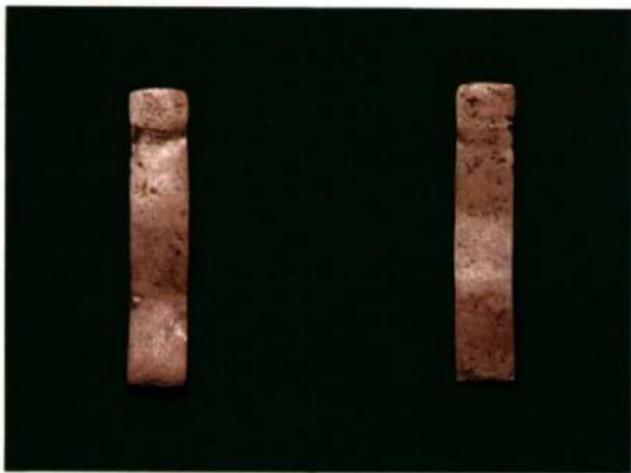
福岡県築上郡築城町所在
十双遺跡の発掘調査



(1) 十双遺跡から東方を望む (路線つきあたり丘陵は広幡城跡)



(2) 十双遺跡住居跡集中地区 (西から)



(1) 第9号住居跡出土銀製品



(2) 第13号住居跡出土漢式土器

例 言

1. 本書は福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した、一般国道10号線椎田バイパス建設に伴う事前発掘調査の8冊目の報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡は、築城町に所在する第7-C地点（十双遺跡）である。
3. 遺構の写真撮影・実測図作成は調査担当者が行った。
4. 出土遺物の整理は、九州歴史資料館および福岡県文化課甘木事務所で岩瀬正信の指導のもとに行った。
5. 出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館石丸洋氏、岡紀久夫氏による。実測・製図等は、渡辺輝子・小崎みゆき・柳町陽子・中川真理子・友永澄子・関久江・岡由美子・黒木美幸・水野美奈・豊福弥生及び調査担当者が行った。
6. 十双遺跡出土銀製品については、新日本製鉄株式会社TACセンターに分析を依頼し、大澤正己氏に分析結果について玉稿をいただいた。
7. 出土した石庖丁を中心とする石器の石材鑑定については、北九州市立自然史博物館藤井厚志氏の御好意による。
8. 出土した鉄器については、九州歴史資料館にて横田義章氏の指導のもとに保存処理を行った。
9. 本文の執筆は、3-(5)のうち土器のすべてを井上裕弘、4-(1)を大澤正己、その他を中間研志が担当した。
10. 本書の編集は、中間が担当した。

本文目次

	頁
1. 調査の概要	1
2. 縄文時代の遺構と遺物	3
(1) 竪穴住居跡	4
(2) 土壌	6
(3) 包含層出土の遺物	6
3. 弥生・古墳時代の遺構と遺物	18
(1) 竪穴住居跡	18
(2) 掘立柱建物	91
(3) 土壌	95
(4) 溝状遺構	106
(5) 谷	111
4. 自然科学的分析	131
(1) 十双遺跡出土銀製品の分析調査	131
(2) 石廂丁等の石材鑑定	134
5. 小結	135
(1) 弥生後期集落について	135
a 竪穴住居の構造	135
b 集落の変遷	141
(2) 漢式土器について	144
(3) 銀製品について	145
(4) 挟りのある器台について	147
(5) まとめ	148

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 (1) 十双遺跡から東方を望む (路線つきあたり丘陵は広槽城跡)
(2) 十双遺跡住居跡集中地区 (西から)
- 巻頭図版 2 (1) 第 9 号住居跡出土銀製品
(2) 第 13 号住居跡出土漢式土器
- 図 版 1 (1) 十双・森ヶ坪遺跡遠景 (南から)
(2) 十双遺跡西半部全景 (南西から)
- 図 版 2 (1) 十双遺跡西半部全景 (北から)
(2) 第 1 号竪穴住居跡周辺全景 (北から)
- 図 版 3 (1) 第 1 号竪穴住居跡 (西から)
(2) 第 2 号竪穴住居跡・第 3 号溝周辺 (南から)
- 図 版 4 (1) 第 2 号竪穴住居跡 (北西から)
(2) 第 3 号竪穴住居跡 (東から)
- 図 版 5 (1) 第 4 号竪穴住居跡 (北東から)
(2) 第 3・4 号竪穴住居跡 (北から)
- 図 版 6 (1) 第 5 号竪穴住居跡 (南西から)
(2) 第 6 号竪穴住居跡 (北西から)
- 図 版 7 (1) 第 7・11・17~19 号竪穴住居跡
(2) 第 7 号竪穴住居跡 (北から)
- 図 版 8 (1) 第 8 号竪穴住居跡 (南西から)
(2) 第 9 (手前)・8 号竪穴住居跡 (北西から)
- 図 版 9 (1) 第 9 号竪穴住居跡 (南西から) (床面の 2 本棒位置に銀製品出土)
(2) 第 10 号竪穴住居跡 (西から)
- 図 版 10 (1) 第 11 (7~13) 号竪穴住居跡 (南西から)
(2) 第 11・17~19・33 号竪穴住居跡 (南から)
- 図 版 11 (1) 第 12 号竪穴住居跡 (南から)
(2) 第 13 号竪穴住居跡 (南東から)
- 図 版 12 (1) 第 14 号竪穴住居跡 (南東から)
(2) 第 15 号竪穴住居跡北半部 (北から)
- 図 版 13 (1) 第 15 号竪穴住居跡南半部 (南から)
(2) 第 16・21 号竪穴住居跡 (上空から)

- 図版 14 (1) 第16号竪穴住居跡 (北西から)
(2) 第7・11~13・17~19号竪穴住居跡, 第6号溝 (上空から)
- 図版 15 (1) 第17号竪穴住居跡 (北から)
(2) 第18号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版 16 (1) 第18号竪穴住居跡 (北東から)
(2) 第19号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版 17 (1) 第19号竪穴住居跡遺物出土状態 (北西から)
(2) 第15号竪穴住居跡付近側道部分全景 (南東から)
- 図版 18 (1) 第20号竪穴住居跡 (南東から)
(2) 遺跡西半部全景 (北西から)
- 図版 19 (1) 第21号竪穴住居跡 (北から)
(2) 第22~24号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版 20 (1) 第24号竪穴住居跡 (北西から)
(2) 第25・26号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版 21 (1) 第27~31号竪穴住居跡 (北東から)
(2) 第27号竪穴住居跡 (西から)
- 図版 22 (1) 第28号竪穴住居跡 (北東から)
(2) 第29号竪穴住居跡 (南から)
- 図版 23 (1) 第29号竪穴住居跡 (上空から)
(2) 第30号竪穴住居跡 (北東から)
- 図版 24 (1) 第31号竪穴住居跡 (北から)
(2) 第28~31号竪穴住居跡 (東から)
- 図版 25 (1) 第11・17~19・32・33号竪穴住居跡 (東から)
(2) 第32号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版 26 (1) 第33号竪穴住居跡 (北西から)
(2) 第34号竪穴住居跡 (南東から)
- 図版 27 (1) 第1号土壌 (北西から)
(2) 第2・4号土壌 (北から)
- 図版 28 (1) 第2号土壌 (西から)
(2) 第3号土壌 (北から)
- 図版 29 (1) 第4号土壌 (東から)
(2) 第5号土壌 (北から)
- 図版 30 (1) 第6号土壌 (北から)

- (2) 第7号土壙 (北から)
- 図版 31 (1) 第8号土壙 (南東から)
(2) 第9号土壙 (東から)
- 図版 32 (1) 第10号土壙 (北から)
(2) 第13号土壙 (南西から)
- 図版 33 (1) 第2号孤立柱建物 (西から)
(2) 遺跡東端付近全景 (北東から)
- 図版 34 (1) 第2号溝周辺全景 (北東から)
(2) 第12号溝土層断面 (北東から)
- 図版 35 (1) 第1号谷完掘後全景 (北東から)
(2) 第1号谷北壁土層断面 (南西から)
- 図版 36 (1) 第1号谷南半部上層面完掘後全景 (東から)
(2) 第1号谷南壁土層断面 (北東から)
- 図版 37 (1) 縄文包含層トレンチ発掘状況 (北西から)
(2) 同上作業風景
- 図版 38 第2・3・6号住居跡出土土器
- 図版 39 第6・7号住居跡出土土器
- 図版 40 第8号住居跡出土土器 (その1)
- 図版 41 第8号住居跡出土土器 (その2)
- 図版 42 第8・9・10号住居跡出土土器
- 図版 43 第10・11・15~17号住居跡出土土器
- 図版 44 第17・18号住居跡出土土器
- 図版 45 第19号住居跡出土土器 (その1)
- 図版 46 第19号住居跡出土土器 (その2)
- 図版 47 第23・28号住居跡出土土器
- 図版 48 第28・29・30号住居跡出土土器
- 図版 49 第30~33号住居跡出土土器
- 図版 50 第33号住居跡・土壙・包含層出土土器
- 図版 51 包含層, 第4・12号溝出土土器
- 図版 52 第12号溝出土土器・第9号住居跡出土銀製品・第13号住居跡出土漢式土器・各遺構出土扁平打製石斧
- 図版 53 各遺構出土扁平打製石斧
- 図版 54 各遺構出土石器・土製品

- 図版 55 各遺構出土縄文土器 (その1)
 図版 56 (1) 各遺構出土縄文土器 (その2)
 (2) 各遺構出土弥生時代鉄器 (その1)
 図版 57 各遺構出土弥生時代鉄器 (その2)
 図版 58 各遺構出土石庖丁 (その1)
 図版 59 各遺構出土石庖丁 (その2)
 図版 60 各遺構出土砥石 (その1)
 図版 61 各遺構出土砥石 (その2)
 図版 62 谷出土土器 (その1)
 図版 63 谷出土土器 (その2)
 図版 64 谷出土土器 (その3)
 図版 65 谷出土土器 (その4)
 図版 66 谷出土土器 (その5)
 図版 67 谷出土土器 (その6)
 図版 68 谷出土土器 (その7)

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 十双遺跡周辺地形図 (1/2,000)	2
第 2 図 十双遺跡住居跡・掘立柱建物配置図 (1/1,200)	3
第 3 図 第20号縄文晩期住居跡・屋内焼土土壌実測図 (1/60)	4
第 4 図 第20号住居跡出土縄文土器実測図 (1/3)	5
第 5 図 第 9 号土壌出土縄文土器実測図 (1/3)	5
第 6 図 各遺構出土縄文土器実測図 (その1) (1/3)	7
第 7 図 各遺構出土縄文土器実測図 (その2) (1/3)	8
第 8 図 各遺構出土縄文土器実測図 (その3) (1/3)	11
第 9 図 打製石鏃実測図 (2/3)	11
第 10 図 縄文時代各種石器実測図 (1/2)	12
第 11 図 扁平打製石斧実測図 (その1) (1/2)	14
第 12 図 扁平打製石斧実測図 (その2) (1/2)	15
第 13 図 扁平打製石斧実測図 (その3) (1/2)	16
第 14 図 扁平打製石斧実測図 (その4) (1/2)	17

第 15 図	第 1・2号住居跡実測図 (1/60)	19
第 16 図	第 1号住居跡出土土器実測図 (1/4)	20
第 17 図	第 2号住居跡出土遺物実測図 (石庖丁のみ1/2, 他は1/4)	21
第 18 図	第 3・4号住居跡実測図 (1/60)	22
第 19 図	第 3号住居跡出土遺物実測図 (石庖丁のみ1/2, 他は1/4)	23
第 20 図	第 4号住居跡出土土器実測図 (1/4)	24
第 21 図	第 5・6号住居跡実測図 (1/60)	25
第 22 図	第 5号住居跡出土土器実測図 (1/4)	26
第 23 図	第 6号住居跡出土遺物実測図 (その 1) (1/4)	27
第 24 図	第 6号住居跡出土遺物実測図 (その 2) (砥石のみ1/2, 他は1/4)	28
第 25 図	第 7号住居跡実測図 (1/60)	30
第 26 図	第 7号住居跡出土遺物実測図 (石庖丁のみ1/2, 他は1/4)	30
第 27 図	第 8・9号住居跡実測図 (1/60)	31
第 28 図	第 8号住居跡出土遺物実測図 (その 1) (1/4)	32
第 29 図	第 8号住居跡出土遺物実測図 (その 2) (1/4)	34
第 30 図	第 8号住居跡出土遺物実測図 (その 3) (石器類は1/2, 他は1/4)	36
第 31 図	第 8号住居跡出土遺物実測図 (その 4) (1/2)	37
第 32 図	弥生時代鉄器実測図 (その 1) (1/2)	38
第 33 図	弥生時代鉄器実測図 (その 2) (1/2)	39
第 34 図	第 9号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 他は1/4)	40
第 35 図	第 9号住居跡出土銀製品実測図 (実大)	41
第 36 図	第 10号住居跡実測図 (1/60)	42
第 37 図	第 10号住居跡出土遺物実測図 (石庖丁のみ1/2, 他は1/4)	44
第 38 図	第 11号住居跡実測図 (1/60)	46
第 39 図	第 11号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 他は1/4)	47
第 40 図	第 12・13号住居跡実測図 (1/60)	48
第 41 図	第 12号住居跡出土土器実測図 (1/4)	49
第 42 図	第 13号住居跡出土遺物実測図 (石庖丁のみ1/2, 他は1/4)	50
第 43 図	第 13号住居跡出土漢式土器実測図 (1/3)	51
第 44 図	第 14・15号住居跡実測図 (1/60)	52
第 45 図	第 14号住居跡出土土器実測図 (1/4)	53
第 46 図	第 15号住居跡出土遺物実測図 (石庖丁のみ1/2, 他は1/4)	54
第 47 図	第 16・17号住居跡実測図 (1/60)	55

第 48 図	第16号住居跡出土遺物実測図 (砥石のみ1/2, 他は1/4)	56
第 49 図	第17号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 土器は1/4)	57
第 50 図	第18・33号住居跡実測図 (1/60)	59
第 51 図	第18号住居跡出土遺物実測図 (砥石のみ1/2, 他は1/4)	60
第 52 図	第19・21号住居跡実測図 (1/60)	62
第 53 図	第19号住居跡出土遺物実測図 (その1) (1/4)	64
第 54 図	第19号住居跡出土遺物実測図 (その2) (11・12は1/8, 13~16は1/4)	66
第 55 図	第19号住居跡出土遺物実測図 (その3) (石器類は1/2, 他は1/4)	67
第 56 図	第22・23・24号住居跡実測図 (その1) (1/60)	68
第 57 図	第22・23・24号住居跡実測図 (その2) (1/60)	69
第 58 図	第22号住居跡出土遺物実測図 (砥石のみ1/2, 他は1/4)	70
第 59 図	第23号住居跡出土土器実測図 (1/4)	71
第 60 図	第24号住居跡出土土器実測図 (1/4)	72
第 61 図	第25・26号住居跡実測図 (1/60)	73
第 62 図	第25・26(9のみ)号住居跡出土遺物実測図 (砥石は1/2, 土器は1/4)	74
第 63 図	第27・28号住居跡実測図 (1/60)	76
第 64 図	第28号住居跡出土土器実測図 (1/4)	78
第 65 図	第29号住居跡実測図 (1/60)	79
第 66 図	第29号住居跡出土遺物実測図 (石廬丁は1/2, 他は1/4)	80
第 67 図	第30・31号住居跡実測図 (その1) (1/60)	82
第 68 図	第30・31号住居跡実測図 (その2) (1/60)	83
第 69 図	第30号住居跡出土土器実測図 (1/4)	84
第 70 図	第31号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 他は1/4)	85
第 71 図	第32・34号住居跡実測図 (1/60)	87
第 72 図	第32号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 他は1/4)	88
第 73 図	第33号住居跡出土土器実測図 (1/4)	89
第 74 図	第1・2号掘立柱建物実測図 (1/60)	92
第 75 図	各ピット出土土器実測図 (1/4)	93
第 76 図	包含層出土遺物実測図 (1~7は1/4, 8~10は1/2)	94
第 77 図	十双遺跡土壁配置図 (1/1,200)	95
第 78 図	第1・3・4・7・9号土壁実測図 (1/40)	96
第 79 図	第1号土壁出土土器実測図 (1/4)	97
第 80 図	第2・5・6号土壁実測図 (1/40)	98

第 81 図	第 2 号土坑出土土器実測図 (1/4)	99
第 82 図	第 4 号土坑出土土器実測図 (1/4)	99
第 83 図	第 8・10・12号土坑実測図 (1/40)	100
第 84 図	第10号土坑出土土器実測図 (1/4)	102
第 85 図	第12号土坑出土土器実測図 (1/4)	103
第 86 図	第11・13号土坑実測図 (1/40)	104
第 87 図	第13号土坑出土土器実測図 (1/4)	105
第 88 図	十双遺跡溝配置図 (1/1,200)	106
第 89 図	第 1 号溝出土遺物実測図 (1 は1/4, 2 は1/2)	107
第 90 図	第 4・5 (6のみ) 号溝出土土器実測図 (1/4)	107
第 91 図	第12号溝土層実測図 (1/20)	109
第 92 図	第12号溝出土遺物実測図 (砥石のみ1/2, 他は1/4)	110
第 93 図	谷部分測量図 (完掘後) (1/400)	112
第 94 図	谷部分南・北壁土層実測図 (1/120)	113
第 95 図	第 1 号谷出土石庖丁実測図 (1/2)	114
第 96 図	第 1 号谷出土砥石等実測図 (1/2)	115
第 97 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 1) (1/4)	118
第 98 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 2) (1/4)	120
第 99 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 3) (1/4)	121
第 100 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 4) (1/4)	122
第 101 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 5) (1/4)	124
第 102 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 6) (1/4)	125
第 103 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 7) (1/4)	126
第 104 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 8) (1/4)	127
第 105 図	第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 9) (1/4)	128
第 106 図	第 1 号谷出土土師器実測図 (1/3)	129
第 107 図	十双遺跡出土銀製品 (実大)	131
第 108 図	銀製品定性分析結果	132
第 109 図	住居跡のベッド状遺構配置による分類	138
第 110 図	壁際土坑前面に小穴のある例 (1/60) (番号は住居No.)	139
第 111 図	弥生後期～古墳初期集落の変遷とグループ (1/1,200)	140
第 112 図	抉りのある器台使用例想像図 (岩瀬正信氏図)	147

付 図 十双遺跡遺構全体図 (1/300)

表 目 次

	頁
第 1 表 十双遺跡土壇一覧表.....	97
第 2 表 十双遺跡竪穴住居跡一覧表	136

1. 調査の概要

本遺跡は、福岡県築上郡築城町大字赤幡・広末に所在する縄文・弥生・古墳初頭各期にわたる集落遺跡である。中心は弥生後期の大きく3グループに分かれる竪穴住居群である。

遺跡の広がりとしては、西隣の赤幡森ヶ坪遺跡（本書所収）と連続し、北側はかつて箱式石棺墓が調査された地点まで含まれる可能性がある。南側は丘陵裾まで遺跡が広がると予想され、全体としては直径500m内外の大遺跡になると考えられる。ただし、西隣の赤幡森ヶ坪遺跡とは時代・遺構の性格ともに様相が異なる。十双遺跡との間に谷が入っていることがわかっているが、森ヶ坪側には弥生住居は数棟あるのみで、その大部分は古墳～奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物・鍛冶工房跡・土壇墓等で占められている。

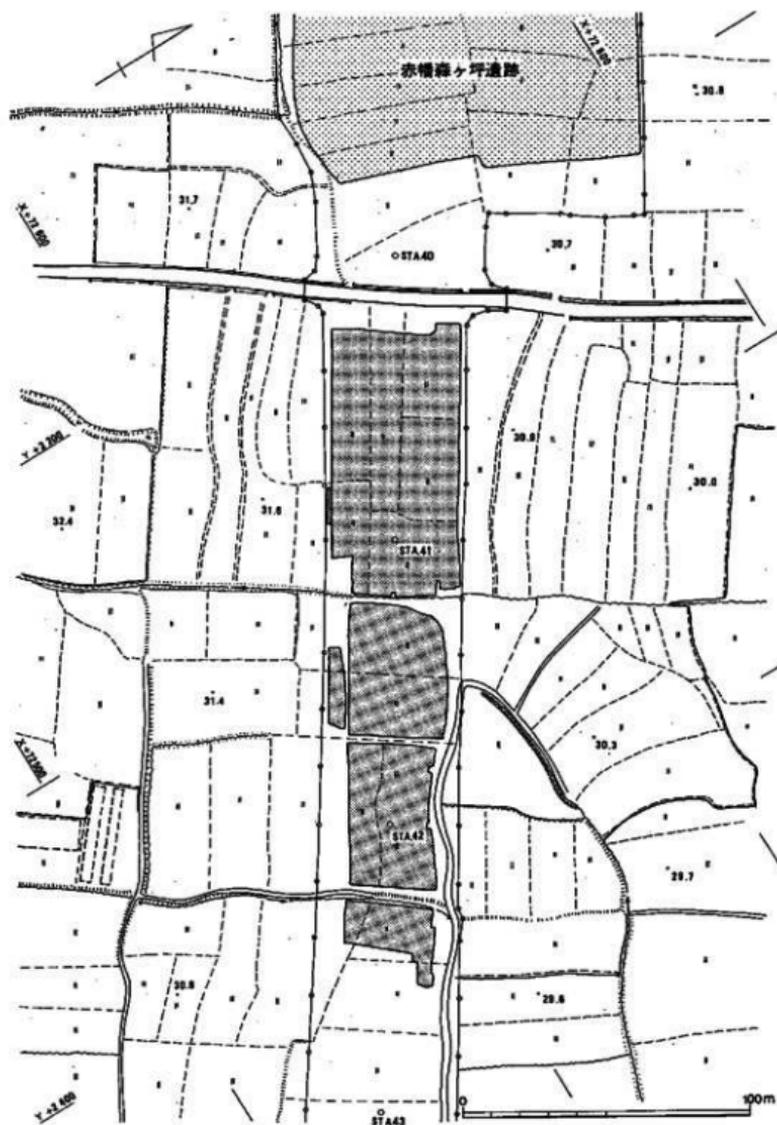
赤幡森ヶ坪遺跡中央に東西に走る大きな谷が検出され、その南岸斜面から夥しい弥生後期土器が出土していることをみると、十双遺跡の中心を占める弥生後期集落の西北限はこの谷までであることが判断される。

現地での発掘調査は、昭和63年12月1日に東端部から開始し、昭和64年2月10日までに遺跡中央部水路ボックス建設部分までを調査終了して、工事計画に従って、東南方の丘陵上の広末遺跡の方へ移動した。その後赤幡森ヶ坪遺跡の料金徴収所建設部分について発掘調査を開始し、平成元年7月21日から十双遺跡の西半部について再び調査に入った。その間、森ヶ坪遺跡と併行して調査を進め、10月21日多大な成果を得て現地調査を完了した。

調査関係者等については上巻に掲載したので参照されたい。日本道路公団の諸氏、地元の関係者各位に深く感謝したい。雪の吹きすさぶ中、カンカン照りの酷暑中にもともに協力いただいた作業員の方々には特に心からのお礼を申し上げたい。

調査した遺構・遺物から見られる成果は以下の如くである。

縄文時代後晩期	包含層	
	竪穴住居跡	1軒
	土壇	1基
弥生時代前期	竪穴住居跡（円形）	2軒
	貯蔵穴	3基
	土壇	1基
弥生時代後期	竪穴住居跡（方形）	31軒
	土壇	2基
古墳時代初頭	竪穴住居跡	1軒



第 1 圖 十双渡跡周辺地形図 (1/2,000)

時期不明	土壌	7基
	獨立柱建物	2棟
	溝状遺構	15本

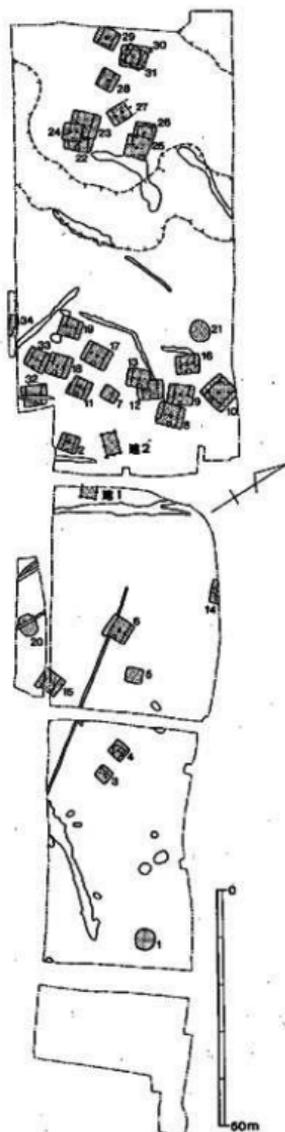
これらの中でも特筆すべきは、純銀に近い銀製品の出土、本邦でも数少ない乗浪系漢式土器の発見であった。これらは、出土当初から研究者、報道関係者の注目を集め、西北九州海岸部との交流をも含めて多くの問題を残すところとなった。また、谷部等から出土した大量の土器の中に吉備系の一群が相当量含まれていることが判明し、国内での瀬戸内海を介した交流の実態も把握されることになり、予想外の成果を得ることができた。

2. 縄文時代の遺構と遺物

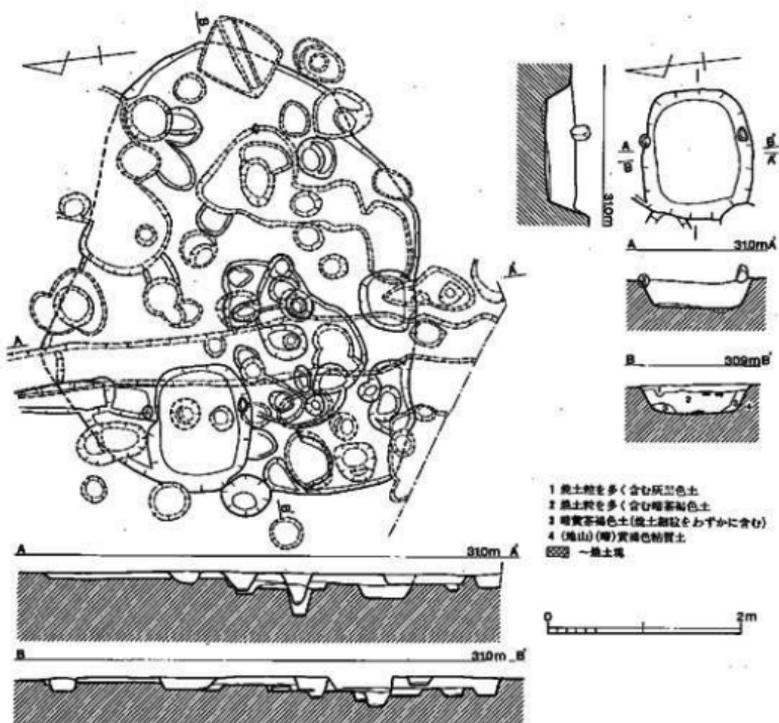
本遺跡の中央付近に弥生後期の方形住居が密集する部分があるが、その周辺から西側の谷までの間に5~15cmほどの薄い暗褐色土包含層があり、縄文後晩期の土器片や石斧類が出土したが、それ程密なものではない。方形住居調査終了後、トレンチを入れて遺構等の検出を試みたが、検出できなかった。

この住居群東側の浅い微低地の不整形掘り込みの中から縄文後期磨消縄文系土器が出土しており、この付近でも南側へ包含層が広がっていることが予想された。南側の側道部分について調査した際、不整形ではあるが、住居跡とみられる遺構（第20号竪穴住居跡）が検出され、その周辺には縄文晩期の包含層が薄く存在していたことがわかった。

また、各住居跡や小ピットなどの各遺構に混入した縄文土器片もかなりの数にのぼる。ここでは、本遺跡



第2図 十双遺跡住居跡・獨立柱建物配置図(1/1,200)



第 3 図 第20号縄文晩期住居跡・屋内焼土土壌実測図 (1/60)

内から出土した縄文土器を出土遺構に関らずまとめておきたい。

(1) 竪穴住居跡

第20号竪穴住居跡 (第3図, 図版 18)

南側の側道部分を拡張した際に、夥しい小ビット群中にて検出された。5.0×4.0mの不整形をなすが、本来楕円形に近いものが上半を削平されてしまったと推定される。

西側壁にくっついて、屋内炉と覚しき焼土塊が検出された。この内部には焼土粒・焼土塊を多く含み、灰と思われる灰黒色土も堆積している。南北両端に河原石を1個ずつ立てており、

何かの支えにしたものと考えられる。南側の石は紫灰色の凝灰岩で、北側は花崗岩である。

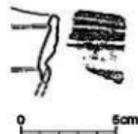
住居の床面までは10cmほどしか残っておらず、柱穴らしき小ピットも多く検出されたが、主柱穴としてまとまりをみせる類ではない。

床面中央に、長さ25cm、幅23cmの磨白状の磨石が置かれていた。出土土器は少なく、図示できるものも1点のみである。

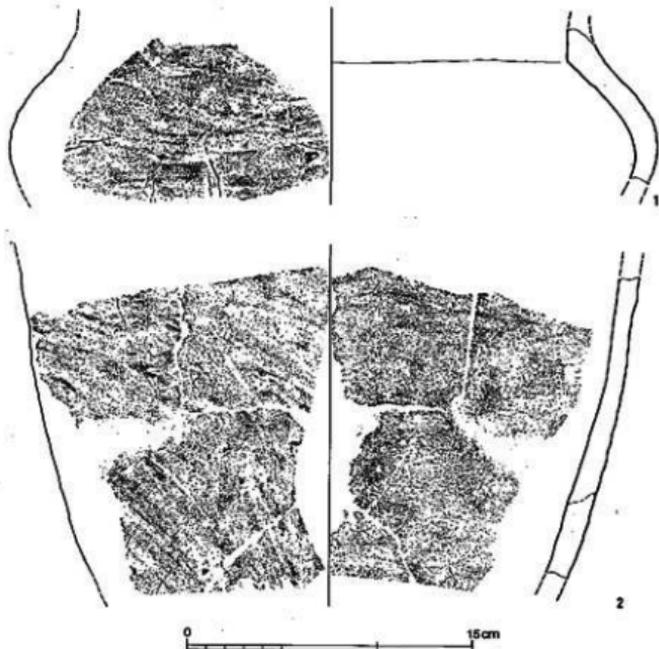
出土遺物 (第4図)

浅鉢 口縁内側に段をつくり、断面を玉縁状にした口縁で、体部との境で、2段に角ばって屈曲する。外面には3条の沈線が施され、口縁上面は左方向へせり上がっており、波状口縁をなすと思われる。内面は丁寧な研磨が施され、胎土は精良で、焼成はやや良好で、内外面ともに淡黄褐色をなす。

この土器は、縄文晩期後葉に位置付けられ、黒川式土器期に次ぐ型式にあたる。当住居の時期を示すものであろう。



第4図 第20号住居跡出土縄文土器実測図 (1/3)



第5図 第9号土壌出土縄文土器実測図 (1/3)

(2) 土 壙

第9号土壙 (第78図, 図版31)

遺跡東半の第4号溝の北東端に位置する。長さ130cm、幅77cmの不整形長方形プランで、深さは17cmと浅い。東側底面が一段高くなっているが、不整形であり枕等を意識した作りではない。形態・規模等あまりしっかりしたものではないが、この西側一帯は縄文期の遺構・包含層があり、同期の土墳墓としての可能性も考えられる遺構である。

出土遺物 (第5図)

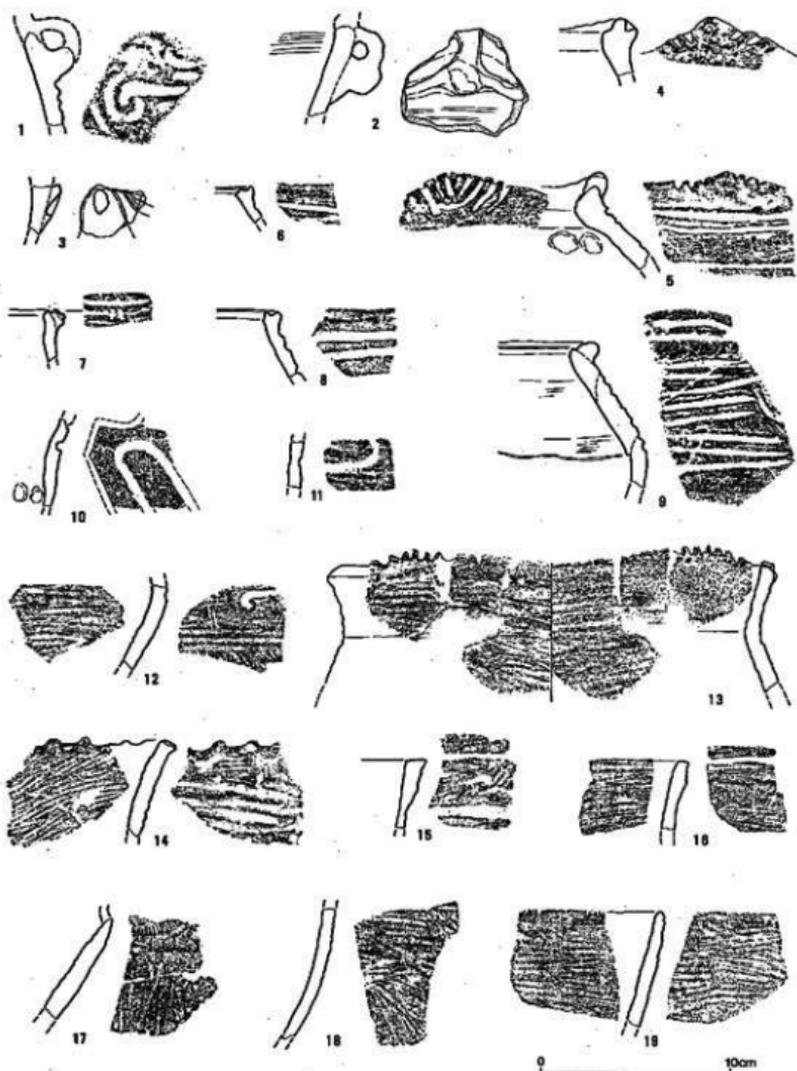
深鉢(1・2) 1は、頸部内面に稜をつくり、肩が張り壺状となる器形で、器壁の厚い粗製土器である。外面は板状工具による極めて粗い横位擦過痕がみられ、内面は頸部稜より上がナデ、稜直下が削り状の横位擦過、それ以下は雑なナデのままである。胎土に石英・雲母・角閃石・茶色粒等の細砂粒を多量に含む。焼成はやや不良で、内外面ともに淡黄褐色～黒色をなす。2は粗製深鉢下半部で、器壁が厚い。外面は雑な斜位の擦過がみられ、内面は上半が横位のヘラナデ、下半はナデのままである。胎土に長石・角閃石の粗大粒が多量含まれており、焼成はやや不良で、外面は黒～淡茶色、内面は灰褐～黒色をなす。

(3) 包含層出土の遺物

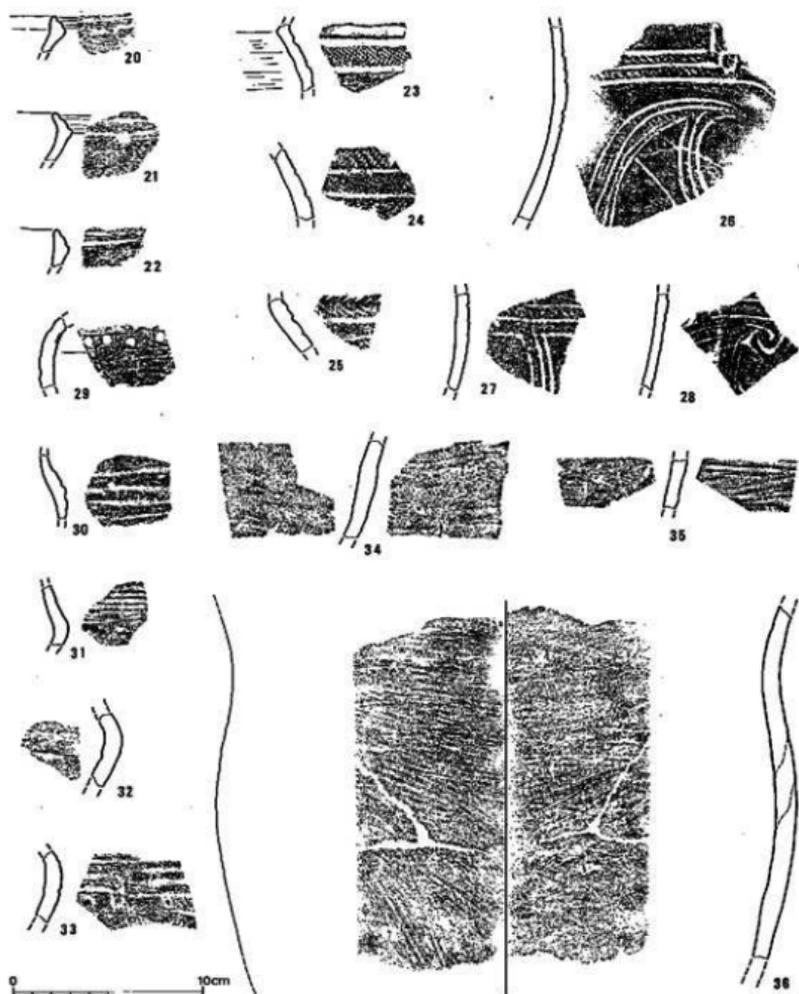
ここでは、縄文時代以降の各遺構に混入した縄文土器と、包含層出土のものとをあわせて、報告しておきたい。

縄文土器 (第6～8図)

A類(1～12) 山形突起直下に把手状のリングを付けるもの(1・2)、山形突起部分を太めの沈線で飾るもの(4・5)、口縁を肥厚させ、その上面に2～3条の沈線を巡らすもの(6～9)に大別できるが、いずれも太めの曲線文を主体とする類である。1は、焼成不良で全面かなり磨滅しているが、太い曲線をからませた文様をなす。谷の側道部分砂礫層出土品で、胎土に石英・長石をかなり含む。2は第8号住居跡混入品で、山形突起部分直下にリングを付けるものである。内面はナデだが上半と外面下半にはアナグラ条痕が残る。胎土に粗大石英粒が異常に目立ち、焼成良好で、内面は淡黄褐色、外面は暗黄灰色をなす。3は、第10号住居跡混入品で、粘土を貼り付けて平坦面にした上端に、斜め上方からの棒状工具を差し込んだものである。器表は全面磨滅しており、突起の右側には太めの凹線がみられる。胎土に粗砂粒を多量含み、焼成不良で、灰黒～淡灰褐色をなす。4は、谷の北端砂礫層出土品で、肥厚した山形突起部頂部に刺突円孔を施し、その両側を斜位の刻目状凹線で飾る。全面磨滅しており、胎土に粗砂粒を



第 6 図 各遺構出土縄文土器実測図 (その 1) (1/3)



第 7 図 各遺構出土縄文土器実測図 (その 2) (1/3)

若干含み、焼成不良で、外面肌色、内面は暗灰色をなす。5は、第12号溝に切られる東側包含層出土品で、山形突起部上面から内側に凹線を施す類で、外面には平行沈線を巡らしている。内面は指オサエの上を横位擦過、外面はヘラナデが施されている。6は、第3号住居跡に混入したもので、わずかに肥厚させた口縁上面に2条の凹線を巡らせたものである。外面には太い沈線が施され、内面は横位板ナデ調整で、胎土に粗砂少量含む。焼成やや不良で、外面は淡茶色、内面は淡黄褐色をなす。7は、第2号溝東側包含層出土品で、6と同形態であるが、上面に2点の工具端の押圧が施される。3条の沈線間には縄文が残されている。内面は横位のナデ、外面は横位ヘラ磨き、胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内外面ともに淡茶～暗褐色をなす。8は、第12号溝混入品で、口縁上面に太い凹線と内面寄りに浅い段をつくる。外面には太い凹線を巡らせ、内面は横位の板ナデを施す。胎土に粗石英粒をかなり含み、焼成不良で、内面淡黄褐色、外面は暗褐色をなす。9は、P-205出土品で、口縁上面に太い沈線を巡らせ、胴部外面上半に8条の太めの沈線を施す。内面は板状工具による横位擦過がみられる。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや良好で、外面は茶～暗茶色、内面は黒褐色をなす。10は、深い沈線を曲線的に文様化したもので、P-10出土品である。内外面ともに磨滅しており、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成やや良好で、淡黄褐色をなす。11は、第21号住居混入品で、外面に太い沈線で曲線文を施したものである。内外面磨滅しており、胎土に粗砂粒をわずかに含み、焼成不良で淡白褐色をなす。12は第2号土壙混入品で、内外面ともにヘナタリ横位条痕を施し、外面には太い沈線文が残っている。胎土に雲母・石英粒をいくらか含み、焼成不良で淡褐色をなす。

B類 (13・14) 13は、第1号溝の北側包含層出土品で、わずかに盛り上がった口縁部分に深い6個の刻目を入れている。口縁内外面は横位のヘラナデ、他内外面はヘナタリ横位条痕を施している。胎土に石英・雲母・長石等の粗砂粒を多量含む。焼成やや不良で、外面は茶色、内面は暗黄茶褐色をなす。14は、第14号住居跡混入品で、指頭による押圧で口縁が波状となる。内面はアナグラ条痕、外面はヘラ先による粗い沈線状の調整がみられる。胎土に粗大石英粒をいくらか含み、焼成やや不良で、内外面ともに暗褐色をなす。

C類 (15-19) 口縁部あるいは胴部外面に、ヘナタリ条痕を基本とし、部分的に回転押圧の擬似縄文を意識的に施した類である。15-17は、第12号溝に切られる東側包含層出土品である。15は、平坦な上面と外面直下に回転押圧を施しており、内面は横位のヘラナデ調整である。胎土に角閃石が目立ち、焼成やや不良で、淡茶色をなす。16は、口縁直下の外面に擬似縄文を施し、胴部外面は横ヘラ磨き、内面は横位ヘラナデである。胎土には細砂粒をいくらか含むのみで、焼成やや良好で、外面は暗黒褐色、内面は暗褐色をなす。17は、外面上端に擬似縄文、下半には縦位の、内面には横位のヘナタリ条痕を施す。粗砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は淡茶～暗褐色、外面は暗茶色をなす。18は、第2号住居跡混入品で、外面は17と同じ調整

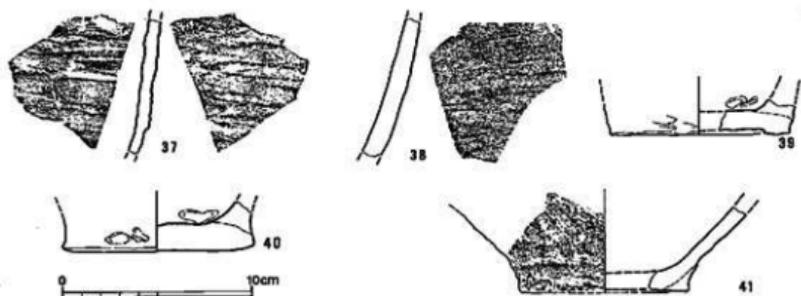
で、内面は横位板ナデかと思われる。粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、外面は暗茶色、内面は暗灰褐色をなす。19は、第13号住居跡混入品で、外面は擬い縄文を横位に、内面は横位条痕を施す。胎土に粗・細石英粒を多く含む。焼成は不良で、外面茶色、内面は赤茶～暗黄褐色をなす。

D類 (20～23) 口縁を断面三角形に肥厚させ、その外面に2条の沈線を巡らす、三万田・西平式系の土器である。23は明らかにこの類であるため、E類からはずしてD類とした。20と22は第20号住居跡の東側包含層出土品である。20は、外面はナデであり、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。21は、第15号住居跡混入品で、内面は横ナデを施す。粗砂粒は少なく、焼成不良である。22は、内面をナデであり、細砂粒を若干含む。焼成やや良好で、淡白褐色をなす。23は、P-69出土品で、内面に絞をつくり、外面には2本の沈線間に縄文を残している。内面は横位板ナデによる。粗石英粒をかなり含み、焼成良好である。

E類 (24～28) 磨消縄文類で、D類に含まれる可能性のあるものもある。24は、P-203出土品で、沈線間に縄文を残す。内外面とも磨滅しており、粗石英粒を多量に含み、焼成は不良である。25は、第17号住居跡混入品で、外面上端にはへら先による刺突文を連続させ、その直下に縄文が残る。内面はナデと思われ、胎土に粗大石英粒が多く、焼成やや不良である。26は、P-16出土品で、曲線と直線区画により構成された磨消縄文で大きく飾られている。内面は丁寧なナデ調整で、粗砂粒をいくらか含む。焼成はやや良好で、内面は暗茶褐色～黒褐色、外面は暗褐色～茶褐色をなす。27・28も同じくP-16出土品で、27は26と同一個体と思われる。28は、全体に磨滅著しく、曲線文をからませてはいるが、磨消縄文であるかどうかは定かではない。胎土に粗砂粒を少量含み、焼成は不良である。

F類 (29～33) 平行沈線文帯を有するものと、その他のものを合せてこの類にまとめた。29はP-43出土品で、外面に竹管文を巡らせたものである。外面は板ナデ、内面は板ナデの上を横ナデしている。粗石英粒をいくらか含み、焼成良好で、淡茶色をなす。30は、STA41+20センチ一杭付近包含層出土品で、内外面ともに磨滅するが、やや太めの平行沈線を4条巡らせている。粗石英粒を多く含み、焼成不良である。31は、谷中央部東岸付近砂礫層出土品で、屈曲部付近破片である。外面上半にはアナグラ横位条痕を施し、内面には磨きに近いへらナデ調整が行われている。胎土はわりと精良で、焼成は良好である。32は、第8号土壇混入品で、屈曲部付近小片である。外面は板ナデ、内面は粗い横方向板ナデが施されている。粗砂粒は極めて少く、焼成やや不良である。33は、第10号住居跡混入品で、平行沈線による文様帯を形成している。内面は横位擦過で、粗大石英粒をかなり含んでいる。焼成はやや良好である。

G類 (34～38) アナグラ条痕、板ナデ等の調整のみしかみられない粗製土器片を中心とした類である。34は、谷の北端トレンチ第16層出土品で、全体に磨滅著しい粗製土器である。内外面ともにアナグラ条痕がかすかに観察できる。35は、第5号溝混入品で、外面はアナグラ条痕、



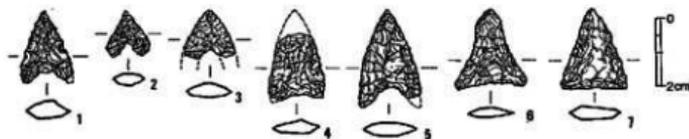
第 8 図 各遺構出土縄文土器実測図 (その 3) (1/3)

内面は横位の板ナデを施す。胎土に粗砂粒をわずかに含む。36は、第21号住居跡出土品であるが、第21号住居跡からはこの土器しか出土しておらず、縄文時代住居の可能性もある。ただ、弥生前期円形住居の第1号住居と様相が似ているため、縄文期の遺構からははずした。器壁の厚い粗製土器で、内外面ともにアナグラ条痕がみられる。胎土に粗石英・雲母片を多量に含み、焼成良好で、暗褐色～黒褐色をなす。37は、谷の北端砂礫層出土品で、内外面ともに粗い板ナデを施す。胎土はかなり精選されている。38は、第4号溝混入品で、外面は板ナデ、内面は丁寧にナデている。焼成はやや不良である。

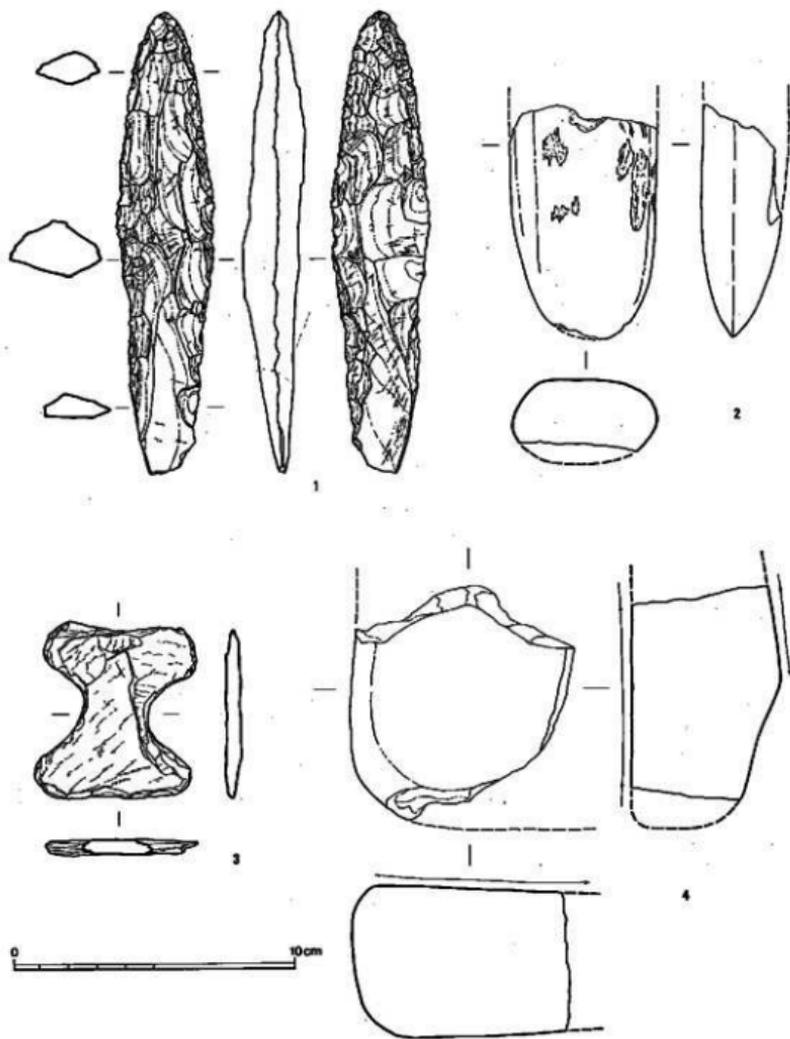
底部 (39-41) 39は、P-51出土品で、外縁部寄りの1.5cm幅のみが接地して、その内側は上げ底となる類である。内外面ともに粗くナデられている。粗砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。40は、STA41+20センター杭付近包含層出土品で、外端がわずかに張り出す平底となる。全面磨滅している。41は、P-13出土品で、わずかな上げ底となる。外面は雑な板ナデで、内面は丁寧にナデている。胎土に粗砂粒をかなり含み、焼成やや良好で、内外面ともに淡茶～肌色をなす。

石器類

打製石鏃 (第9図) 1は、第1号溝出土品で、姫島産黒曜石製で、弥生前期のものと思われ、



第 9 図 打製石鏃実測図 (2/3)



第 10 圖 繩文時代各種石器實測圖 (1/2)

長さ2.1cm, 幅1.5cm, 厚さ0.5cmとなる。2は, 谷の砂礫層出土品で, 長さ1.3cm, 幅1.3cm, 厚さ0.35cmの小型品である。漆黒色不透明の黒曜石製で先端がわずかに欠損している。3~6も谷の砂礫層出土品である。3は, サヌカイト製銀形鏃で, 表裏ともに丁寧な仕上げを行っている。4は, サヌカイト製で表裏とも粗い調整のままで, 現存長2cm, 幅1.6cm, 厚さ0.4cmとなる。5は, 姫島産黒曜石製で, 長さ2.8cm, 幅1.8cm, 厚さ0.4cmとなる。6は, サヌカイト製の変形五角形鏃で, 薄手である。長さ2.4cm, 幅2.1cm, 厚さ0.25cmとなる。7は, 第10号住居跡混入品で, サヌカイト製縄文晩期剥片鏃である。長さ2.4cm, 幅2cm, 厚さ0.4cmとなり, 表裏ともに原剥離面を大きく残している。横長剥片を素材として, 縁辺のみのリタッチで作られている。

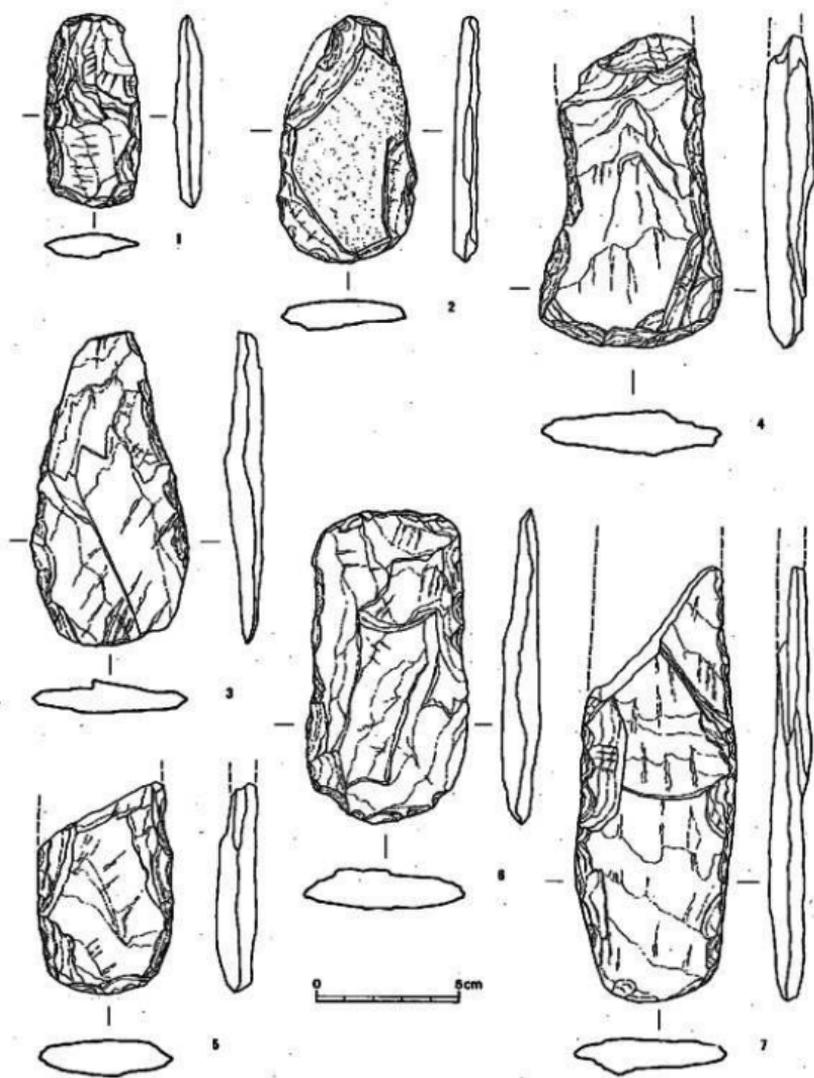
石槍(第10図-1) 第2号土壌の東隣小ピット中出土品で, 当地方では特異な逸品である。サヌカイト製で, 全長16.3cm, 最大幅3.4cm, 最大厚さ2cmとなる。上半部のみ縁辺を細かく調整している。表裏の下半部と表面近くは原剥離面を残している。基部下端と片側の側面には全く刃部調整はしていない。下半6.3cmは木柄に含まれる基部となろう。表面は灰白色に風化しているが, 剥離痕はシャープにみえ, 旧石器~縄文早期に属するものとは疑問も感ずる。弥生前半期畿内地域でみられる類似品と同種の可能性もあるが, 部厚くてちょっと趣が異なっている。筆者としては, どちらかというとな後者の, 瀬戸内海を通じた交流の中で畿内地域の打製品を模倣したものと考えたい。諸学究の御教示を仰ぎたい一品である。

磨製石斧(第10図-2) P-269出土品で, 扁平打製石斧と同石材の暗緑色片麻岩系の石を用いている。表面は風化しており, 刃部上面観が丸く, かなり鋭角に研ぎ出されている。現存長8.1cm, 幅5.2cm, 厚さ2.5cmで, 全面丁寧な研磨している。縄文土器に伴う後~晩期に属するものであろう。

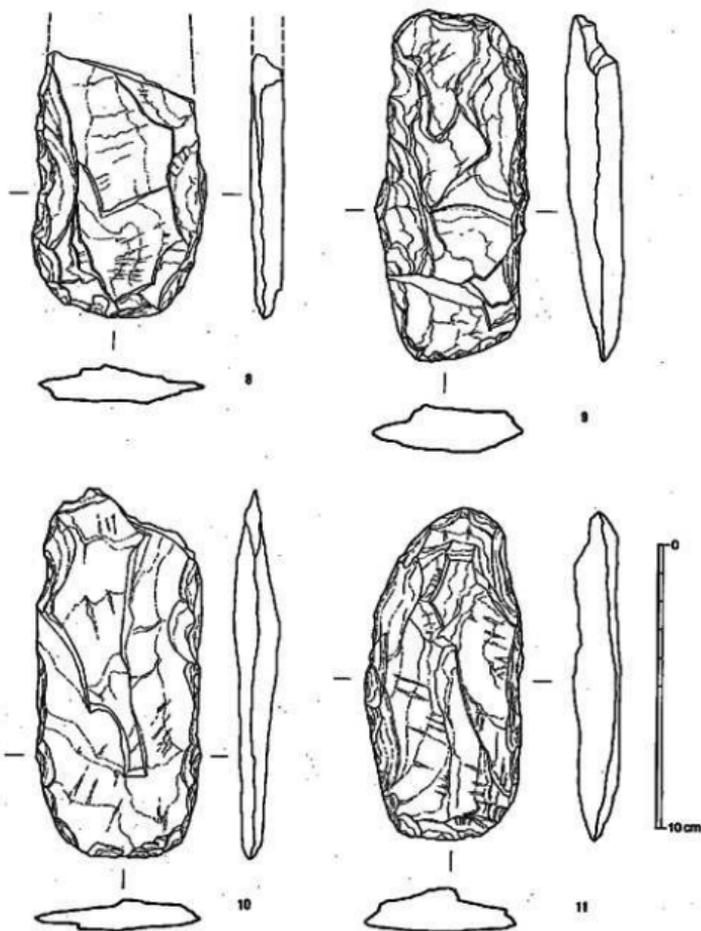
糸巻形石器(第10図-3) 中央に抉りを入れた薄手打製品である。谷の北側溝トレンチ第29層出土品で, 長さ6.3cm, 幅5.4cm, 厚さ0.55cmとなる。抉り部側面は特に磨滅した感じではない。上下縁辺は薄くなっており, 刃部的にみえる。縄文後期の土器に伴うものであろう。

磨臼(第10図-4) P-211出土品で, きめの粗い砂岩製である。8.4×7.6cmで厚さ5.4cmとなり, 上面だけが使用され磨り減っている。縄文後晩期に伴うものであろう。

扁平打製石斧(第11~14図) 小型類(1・2), 撥形のもの(3・4), 短冊形(5~11), 刃部が斜めになり楕円形状のもの(12~18), 幅広で刃部が丸く研磨を施したものの(19・20)などに分けられる。1は, 谷中央部砂礫層出土品で, 黒色片岩製で, 長さ6.8cm, 幅3.3cm, 厚さ0.9cmの極小品となる。全体にやや磨滅しているが, 研磨・使用痕はない。2は, 谷中央部砂礫層出土品で, 黒色片麻岩製である。長さ8.7cm, 幅4.8cm, 厚さ1cmで, 表面に原石自然面を残したままである。転礫の横割ぎによる皮の部分を用いたもので, 刃部はいくらか磨耗した感じが残るが, 全体として顕著な使用痕・研磨は認められない。3は, P-131出土品で, 緑色の片麻岩

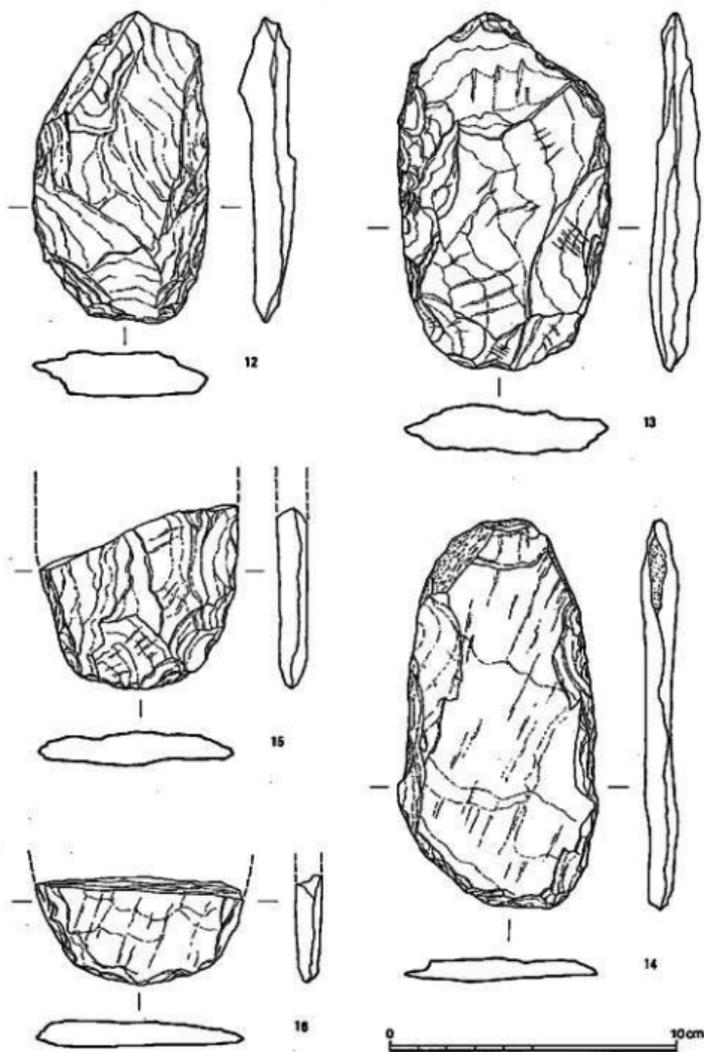


第 11 図 扁平打製石斧実測図 (その 1) (1/2)

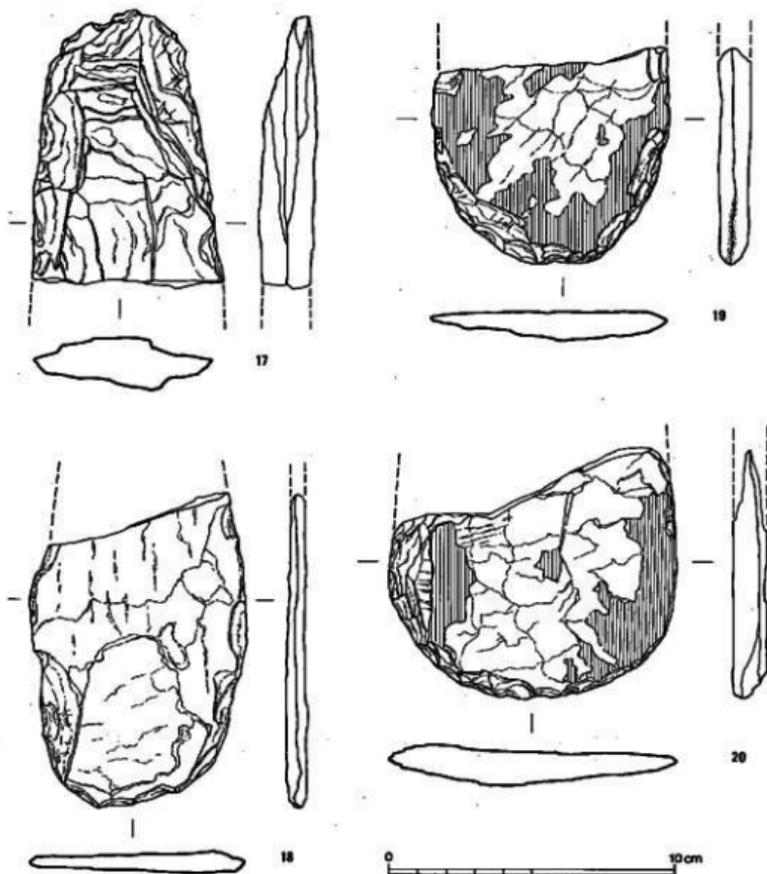


第 12 図 扁平打製石斧実測図 (その 2) (1/2)

系の石材を用いる。長さ11.1cm, 幅4.5cm, 厚さ1.2cmで、全体に風化している。4は、第19号住居跡混入品で、緑色の片麻岩系の石材を用いている。長さ11cm, 幅6.5cm, 厚さ1.6cmとなる。5は、谷中央部砂礫層出土品で、灰色の片麻岩系石材を用いている。長さ7.5cm, 幅4.7cm, 厚



第 13 圖 扁平打製石斧実測圖 (その 3) (1/2)



第14図 扁平打製石斧尖測図(その4)(1/2)

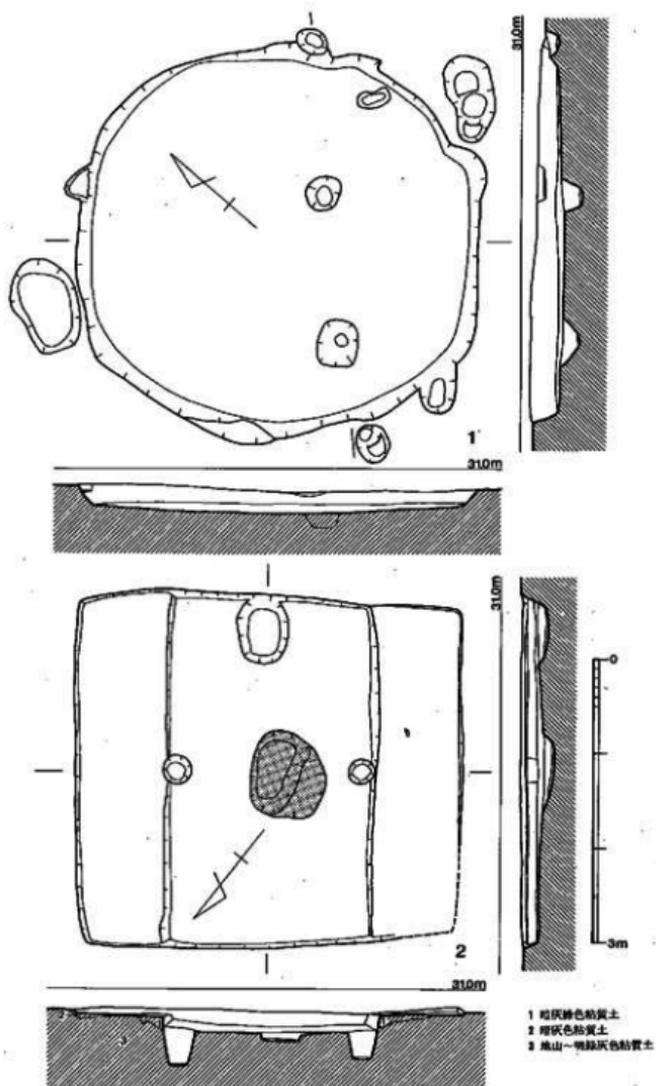
さ1.3cmとなり、やや小ぶりである。全体に風化・磨滅している。6は、第15号住居跡の北側包含層出土品で、片麻岩系の石を用いている。長さ11.1cm、幅5.6cm、厚さ1.4cmとなる。7は、P-269出土品で細長い類である。現存長15.4cm、幅5.4cm、厚さ1.3cmとなる。片麻岩系の石を用い、下半刃部周辺は使用によるかと思われる磨耗がみられる。8は、杭46付近包含層出土品で、長さ9.3cm、幅5.9cm、厚さ1.3cmとなる。片麻岩系の石で、研磨・使用痕はみられない。9

は、谷中央部砂礫層出土品で、長さ12.3cm、幅5.3cmで、厚さ2cmとわりと厚めになる。10は、P-269出土品で、硬質の片麻岩系石材を用いる。長さ13cm、幅5.8cm、厚さ1.6cmで、刃部周辺がいくらか使用磨耗している。11は、P-180出土品で、緑色の片麻岩系石材を用いている。長さ11.7cm、幅5.5cmで、全体に反りがみられる。表面はかなり風化しており、使用痕等不明である。12は、谷中央部砂礫層出土品で長さ10.9cm、幅6.1cm、厚さ1.6cmとなる。片麻岩系の石で、全体に反った感じで、研磨・使用痕はない。13は、第21号住居跡出土品で、緑色の片麻岩系の石材を用いる。長さ12.5cm、幅7.3cm、厚さ1.6cmとなる。研磨・使用痕はない。14は、P-269出土品で、長さ13.7cm、幅7cm、厚さ1.2cmとなり、全体に薄手である。基部側に原石自然面を残し、皮に近い部分を用いている。緑色の片麻岩系石材で、研磨使用痕はない。15は、谷中央部砂礫層出土品で、現存長6.5cm、幅7cm、厚さ1.2cmとなる。16は、谷の北半砂礫層出土品で、緑色の片麻岩系石材を用いる。刃部はかなり磨滅しているが、風化のためと考えられる。現存長3.8cm、幅7.3cm、厚さ0.9cmの薄手品である。17は、谷中央部砂礫層出土品で、雲母をかなり含む片麻岩系の石材である。現存長9.8cm、幅6.7cm、厚さ1.9cmとなる。18は、第15号住居跡の北側包含層出土品で、緑色の片麻岩系の石材を用いる。現存長11cm、幅7.6cm、厚さ0.8cmとなる極めて薄手品である。研磨・使用痕はない。19は、谷の側道部分砂礫層出土品で、長さ7.7cm、幅8.3cm、厚さ1cmとなる。20と同様の幅広く丸い刃部となる異類である。表裏面ともに研磨がみられ、刃部はかなり磨耗した感じである。黒色の片麻岩系の石材を用いている。20は、P-108出土品で、長さ8.9cm、幅10.1cm、厚さ1.3cmと19よりも幅広である。表裏面ともに研磨部分がみられる。右側辺は刃部状に研ぎ出されており、ひょっとしたら右辺が刃部となる丸鋸風の用途となるのかもしれない。

3. 弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

本遺跡では全部で34軒の竪穴住居跡が検出されたが、うち明らかに縄文期の1軒を除いた33軒についてここで報告しておきたい。また、中には土師器を伴う古墳時代初頭の住居もあり、本来別に章を改めるべきであるが、遺構の変遷上連続するものと考えるので、ここでまとめて報告しておきたい。



第 15 圖 第 1・2 号住居跡実測図 (1/60)

第1号竪穴住居跡 (第15図, 図版 3)

遺跡の最東端の不整形ピットが集中する付近に位置する。また、貯蔵穴と推定される円形土壇群 (第2～4号土壇) にも近い。直径4.2mで面積13.9㎡となる円形住居であるが、東南辺と西北辺はやや直線的となり、正円にはならない。床面は中央へ傾斜をもち、炉の位置は確認できなかった。支柱穴は明確でなく、壁際沿いにいくつかピットがみられるが、全体としてのまとまりは無い。

出土遺物 (第16図)

壺 (1・2) 1は、如意形口縁の外端面に刻目を施し、三角凸帯にも刻目を巡らす類である。小片であるが、遺物の少い当遺構としては貴重な時期のわかる資料である。2は、復原口径13.4cmの、部厚



第16図 第1号住居跡出土土器実測図 (1/4)

い鉢形に近い器形となる。内面はナデのあと、一部にへら磨きが見られる。外面は指圧痕の上をハケ調整している。胎土に石英等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は黒灰色、内面は暗黒色をなす。

以上の土器から、当住居跡は、弥生前期後葉の時期のものと考えられる。

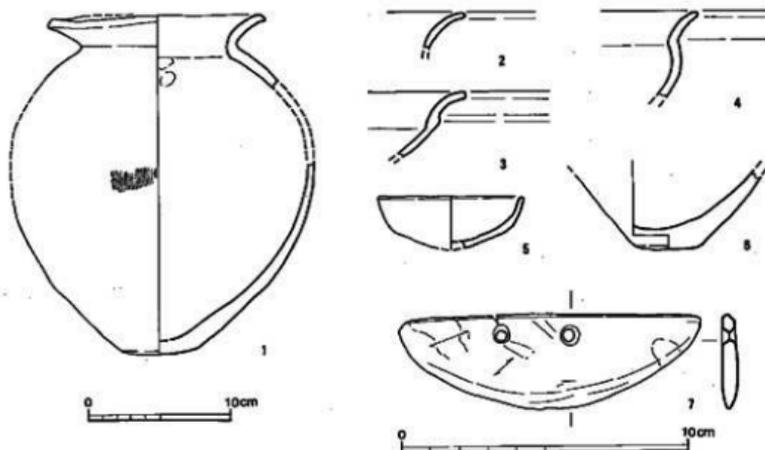
第2号竪穴住居跡 (第15図, 図版 4)

遺跡の中央の住居が最も集中する群内に位置する。4.06×3.74mの長方形住居で、面積15.2㎡の中型住居の中でも小ぶりの類となる。両側辺沿いにベッド状遺構を設けているが、断面図にみる如く、部分的に貼り付けてならした構造になっている。中央に炉、東南壁際に小さめの壁際土壇を設けている。支柱穴は2本で、棟方向はN52°Eとなる。周壁溝は認められない。西側のベッド直上から石彫丁が出土している。

出土遺物 (第17図)

壺 (1・6) 1は、上半と下半は接合しないが、同一個体と思われるので、図上復原したものである。口径15.4cm、推定器高24cm、胴部最大径21.4cmとなり、口縁が屈曲して開く類である。底部は凸レンズ状にふくらみ、胴外面は磨滅しているが、縦ハケがいくらか残っている。頸部直下の内面には横方向のハケ工具痕が残っているが、以下内面はすべてナデ消している。胎土に雲母・石英等の砂粒を多く含む、焼成良好で内外面ともに暗褐色をなす。6は、部厚い底部片で、凸レンズ状にふくらむ類である。底径4.6cmで、内外面ともに磨滅している。胎土に石英・角閃石・暗赤褐色粒の細砂粒を多く含む、焼成良好で、内外面ともに肌色をなす。

高杯 (2・3) 2は、小片であり、鉢の口縁の可能性もある。端部は丸くおさめ、薄手で、内外面ともに器表は磨滅している。細砂粒を多く含む、焼成良好で、内外面ともに乳灰色をなす。



第 17 図 第 2号住居跡出土遺物実測図 (石廬丁のみ1/2, 他は1/4)

3は、体部上半で反転して開く口縁となるタイプで、口縁先端はやや角ばる。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土に微砂粒をやや多めに含み、焼成良好で内外面ともに暗赤橙色をなす。

鉢(4)体部上半で屈曲して開く口縁につくる類である。口縁端部は丸くつくり、内外面ともに器表は磨滅する。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内外面ともに暗赤橙色を呈している。

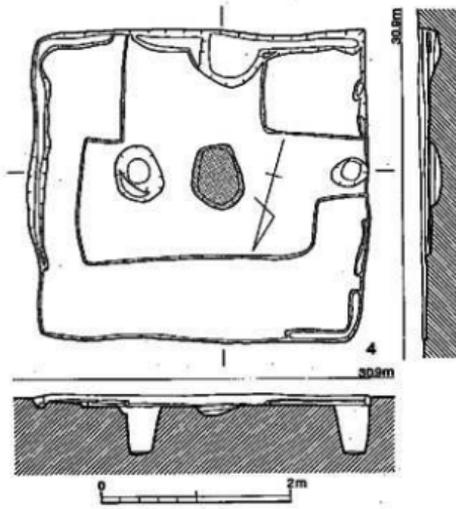
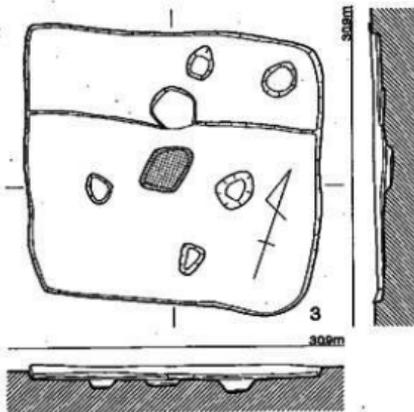
小鉢(5)鉢が大小あるため、大まかに小型のものを小鉢とした。口径10.2cm、器高3.6cmで、口縁周辺内外面は横ナデ、体部内面は粗いナデ、外面は磨滅している。胎土に石英等の細砂粒をやや多く含み、焼成やや良好で、外面は淡褐灰色、内面は暗黄灰～灰褐色をなす。

石廬丁(7)ベッド状遺構直上出土のもので、長さ10.5cm、幅3.4cm、厚さ5.5mm、孔間隔2.0cmの小型品である。重量26.8gの赤紫色砂岩(凝灰質)製で表裏ともに丁寧に研磨している。

以上の出土遺物は、弥生後期中頃から後葉のものであり、石廬丁も倭小化した類である。甕の出土がみられないので明確にできないが、この第2号住居跡は、弥生後期中頃に近い後葉段階のものと考えられる。

第3号壘穴住居跡(第18図、図版5)

遺跡の東側グループのうちの東端に位置する。3.06×2.85mの長方形住居で、面積は8.7㎡と



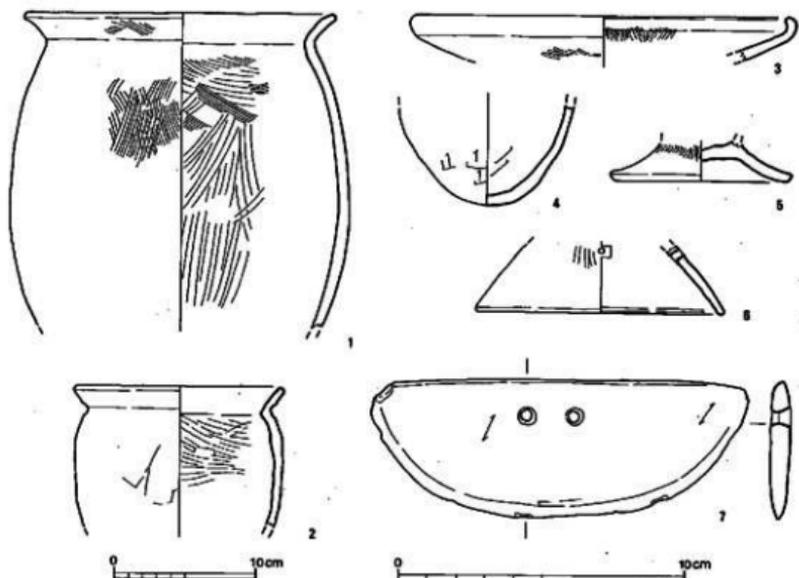
第 18 図 第 3・4 号住居跡実測図 (1/60)

なり、本遺跡中で最小の小型住居である。北辺沿いだけにベッド状遺構を設ける。中央に炉が有り、床面は川原石でゴツゴツしている。柱穴は屋内にいくつか検出されたが、支柱位置は、確定できない。対になる 2 柱穴もあるが、浅すぎて支柱穴とは断定し難い。弥生後期小型住居の場合、支柱穴が明確でないことが多く、本例もその類に含まれようか。壁際土壇と周壁溝も認められない。

出土遺物 (第19図)

甕 (1・2) 1 は、やや長胴気味となる甕で、口径 22cm、胴部最大径 24cm を測る。胴中位で最大径をとり、胴部内面は粗いハケ、外面上半はハケを施している。下半は器表が剥落しており調整は不明である。胎土に石英・雲母・角閃石等の砂粒を多く含む、焼成良好である。外面は暗橙灰色、内面は橙灰褐色をなす。2 は、胴のあまり張らない小甕で、口径 14.6cm、胴部最大径は 14.8cm となる。頸部内面の稜が明瞭で、胴部外面は板状工具による擦過痕がみられ、内面は横ハケ状の工具擦過痕が残っている。胎土には石英等の砂粒をや

や多く含む、焼成良好であり、外面は肌色、内面は暗黄灰色をなす。
 甕 (4) 丸底となる底部片である。内外面ともに板状工具による擦過痕が残されている。外面一部に黒斑が認められる。胎土に粗石英粒や細角閃石等を多く含む。焼成良好で、外面は暗乳灰褐色、内面は暗乳灰色をなす。



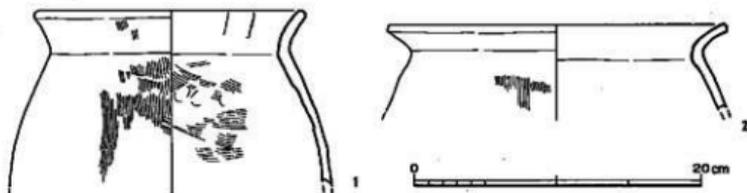
第19図 第3号住居跡出土遺物実測図(石慮丁のみ1/2, 他は1/4)

高杯(3・6) 3は、口径26.2cmの口縁端を丸く曲げるタイプである。体部内面には縦へら磨き、外面下半には横へら磨きが施されている。胎土に石英等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗黄褐色、内面は乳黄灰色をなす。6は、脚部下半片で、内湾気味に開いている。端部内側はわずかに突出している。小円孔が4個みられる。外面はかなり磨滅しているが、縦ハケがわずかに残り、化粧土をかけていたことがわかる。内面はナアている。胎土に雲母・石英・角閃石等の細砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は暗赤橙色、内面は暗橙灰色をなす。復原底径は17.2cmとなる。

台付鉢(5) 低く外方へ広がる脚台を付ける鉢、乃至は壺となると思われる。脚端径13cmで、外面下半から脚台部内面は横ナア、底部内外面は指押さえ痕が残る。体部外面下半には細かい縦ハケを施している。胎土に雲母・角閃石・石英等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗赤橙色をなす。外面には黒斑部がみられる。

石慮丁(7) 凝灰質粘板岩製の外湾刃類である。長さ13.2cm、最大幅4.9cm、最大厚さ7mmで、重量69.7gとなる。2孔間は1.3cmと極めて接近している。研磨は丁寧である。

以上の第3号住居跡出土品は、弥生後期後半以降の特徴をよく示している。甕の1は長胴化



第20図 第4号住居跡出土土器実測図(1/4)

しつつあり、4や2の外表面は削り的な様相をみせはじめている。3の高杯も新しい類である。以上のことから、この第3号住居跡は、弥生後期末期の所産と考えられる。

第4号竪穴住居跡(第18図, 図版5)

遺跡の東側住居群の第3号住居の北隣に位置する。3.55×3.3mの方形住居で、面積が11.7㎡となる小型類である。南壁中央の土壇と西壁際中央の柱穴を避けるようにベッド状遺構をめぐらせている。炉は住居のほぼ中央に位置するが、2主柱穴は住居自体が小さいためか、西側の柱穴は珍しく壁際に掘られている。周壁溝は板材打ち込み痕状のものが各辺沿いに検出された。床面は河岸段丘成因による川原石が多い。

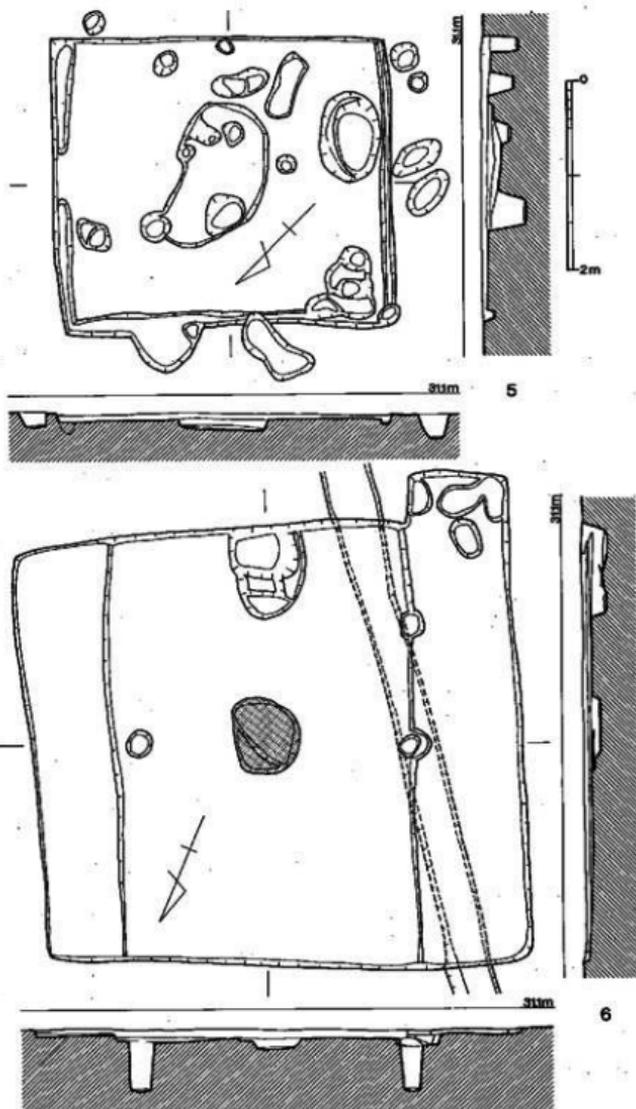
出土遺物(第20図)

甕(1・2)1は、口径18.6cm、胴部最大径22.6cmとなり、ゆるやかに開く口縁につくる。端部は丸くつくり、長胴気味になりそうである。胴部外面は細かい縦ハケ調整で、一部に横位の叩きか認められる。内面は横～斜位のハケ調整で一部に指押さえ痕が残っている。胎土に雲母・石英・白色粒等の砂粒を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗黄褐色をなす。2は、頸部で強く屈曲反転して開く口縁となる類で、復原口径23.2cmを測る。胴部内面はナデており、外面は縦ハケ調整が施されている。口縁外端部は面をなし、胴は上半で張ると思われる。胎土に石英・白色粒等の細砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面ともに暗橙灰色をなす。

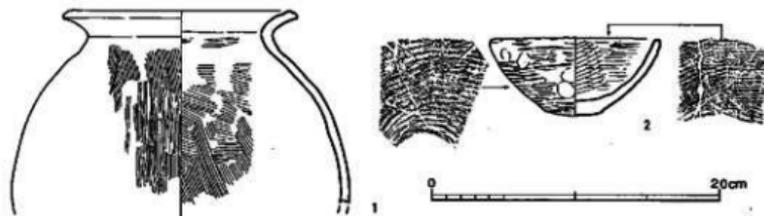
以上の土器は、2が古い様相を示すのに対し、1は口縁の傾き等新しい傾向をみせる。このことから、第4号住居跡は、新しい時期をとって、弥生後期末のものと考えておく。

第5号竪穴住居跡(第21図, 図版6)

遺跡の東寄りのA群に属し、第6号住居跡の東隣に位置する。3.55×3.0mの長方形住居で、10.7㎡と小型の類である。深さ10cm前後と残りは悪く、ベッドは無く、明確な炉も判断できない。主柱穴は不明で、床面は硬化している。3壁沿いにやや幅の広い周壁溝が検出されたが、排水用等に連結されたものではない。住居内には小柱穴がかなり認められたが、上面が大きく



第 21 图 第 5·6 号住居跡実測图 (1/60)



第22図 第5号住居跡出土土器実測図(1/4)

削平されているため、時期の異なる遺構との区別は不可能であった。

出土遺物(第22図)

甕(1) 頸部で強く屈曲し、反転して開口口縁となる。口径15.6cm、胴部最大径23.8cmとなり、強く張る胴部を有する。胴部内面は横～縦方向のハケ、外面は縦ハケの上から粗い縦方向のへラ磨きが施されている。また、外面は煤が付着している。胎土に石英・白色粒・角閃石の微細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は橙灰色～褐色、内面は暗橙灰褐色をなす。

鉢(2) 厚手で内湾気味に開く体部で、底部は凸レンズ状にふくらむ。口径11.5cm、器高5.5cm、底径4.0cmとなる。体部外面は横位の太い叩きのあと、指押さえ痕が残る。内面は粗い横ハケ調整で、底部は内外面ともにナデている。胎土に角閃石・石英等の細砂粒をやや多く含む、焼成良好で、内面は暗橙褐色、外面は暗黄褐色をなす。

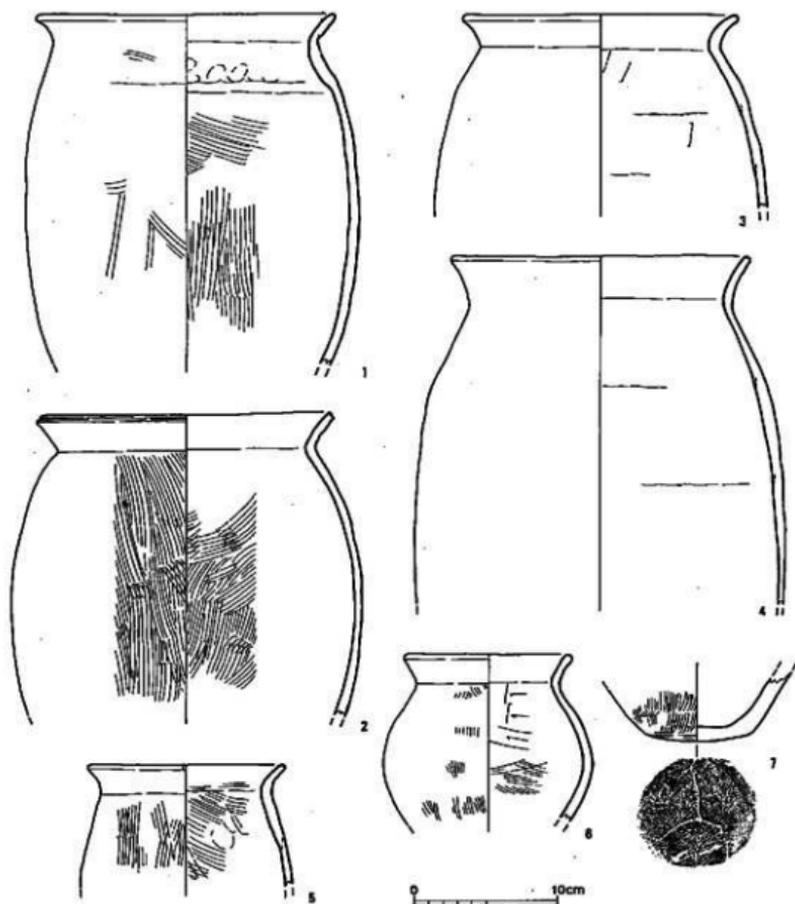
以上の土器は、1の甕からみて、後期終末まで降るものではなく、2の底部のあり方もそれに矛盾するものではない。出土量が少なくて確定は難しいが、土器からみる限り、この第5号住居跡は弥生後期後葉を中心とする時期に営まれたものと判断したい。

第6号竪穴住居跡(第21図、図版6)

遺跡の東側微高地上の第5号住居跡の西隣に位置する。この微高地を横断するように直線的に掘られた第4号溝を切って作られている。5.15×4.6mの長方形住居で、23.7㎡の面積となる中型類である。両短壁沿いにベッド状遺構を有し、中央炉、2主柱の典型的住居である。南西隅のベッド部分か外側へ50cmほど張り出しており、その部位に深さ15cm前後の浅い掘り込みがいくつかみられる。第15・25号住居でも、全く同じ位置に同様の突出部がみられ、住居の出入り口と考えておきたい。

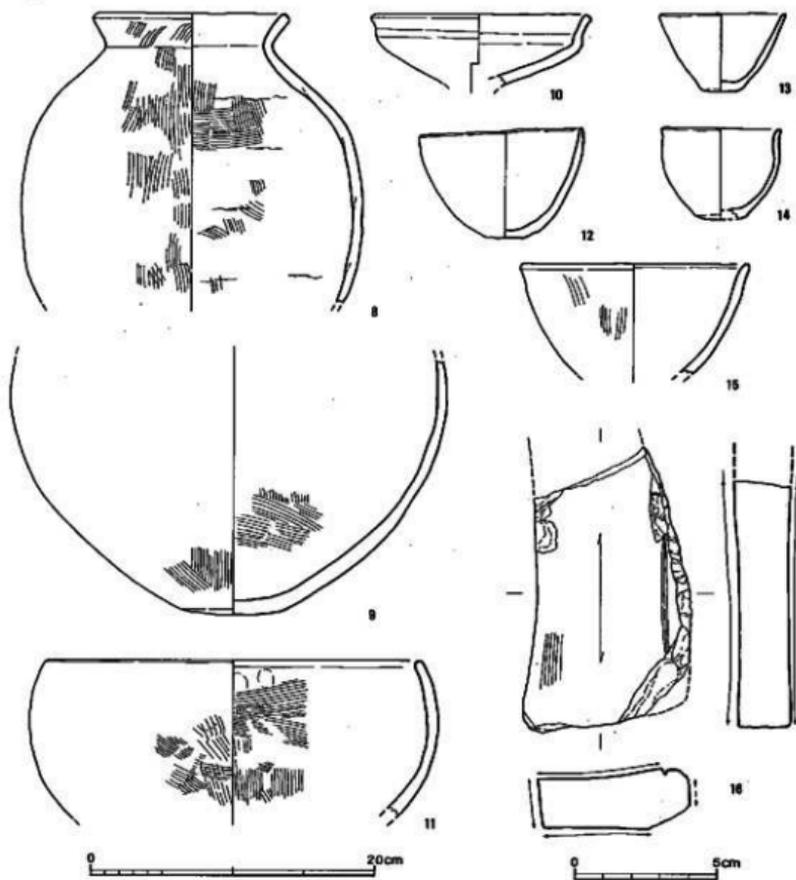
出土遺物(第23・24図)

甕(1～7) 1は、口径20.5cm、やや張る胴部の最大径は23.5cmとなる。胴部内面は横ハケ、下方は縦ハケを施し、外面はハケをナデ消している。胎土に砂粒をやや少なめに混ぜており、



第 23 図 第 6 号住居跡出土遺物実測図 (その 1) (1/4)

口縁端は丸くつくる。2 は、胴上半で張り、頸部内面に稜をつくり、端面が凹状となる口縁を有する。口径 20.3cm、胴部最大径 24.8cm となり、胴部内面は雑な斜位・縦位のハケ、外面は縦ハケを施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成は良好である。3 は、口径 18.9cm、胴部最大径 23.6cm で、胴部内面はハケをナデ消しており、外面は磨滅している。4 は、長胴となる器形で、口



第 24 図 第 6 号住居跡出土遺物実測図 (その 2) (砥石のみ 1/2, 他は 1/4)

縁は外傾する程度であまり開かない。口径20.5cm, 胴部最大径26.2cmとなる。全面磨滅しており、調整不明。胎土に細砂粒を多く含む。5は、口径13.6cm, 胴部最大径15cmとなる小甕である。内面は粗い斜めハケ, 外面は縦ハケを施す。6は、口径11.2cm, 胴部最大径14.8cmで、胴中位で丸く張る壺状の形態となる。胴部外面は磨滅しているが、縦ハケが残っており、内面は上半が横位のへら削り, 下半がハケ調整を施す。7は、凸レンズ状にふくらみをみせる底部で、

胴部外面は雑な縦ハケ、内面はナデ、底部外面はハケのあとナデている。

壺(8・9) 8は、短く外反する口縁で、球形に近い胴部となる。口径13.3cm、胴部最大径24.3cmとなり、外面は雑な縦ハケ、内面は上端付近がナデ、それ以下は雑なハケとなる。胎土に細砂粒をやや多く含み、焼成良好で、外面は乳灰色～灰褐色、内面は暗黄褐色～黒灰色をなす。

9は、強く張る胴部に、凸レンズ状によくらむ不安定な底部をもつ。胴部最大径40cmになり、内面はハケをナデ消している。外面は磨滅するが、わずかにハケが残る。

器台(10) 口径14.9cmで、上半で屈曲して外傾して開く口縁となる。高杯ではなく、古墳時代初頭の脚付小型器台に先行するタイプと考えられる。焼成良好で内外面ともに肌色をなす。内外面ともに磨滅して調整不明。

鉢(11～15) 11は口径25.2cmで内湾する器形となる大型品で、脚台が付くものと思われる。内外面ともにハケを施すが、外面上半はナデ消している。12は、口径11.2cm、器高7.8cm、底径2.5cmの内湾気味に立ち上がる器形である。内外面とも磨滅している。13は、口径8.6cm、器高5.5cm、底径2.8cmとなる。直線的に開く器形となる。内面はナデしており、外面は磨滅している。14は、丸っこい体部から上端でわずかに外反する口縁となる器形である。復原口径8cm、器高6.4cm、底径3.8cmとなる。内外面ともに丁寧にナデている。15は、復原口径15.8cmの中型品で、内面はナデ、外面はハケ調整を施すが大部分磨滅している。

砥石(16) 上質の粘板岩製仕上げ砥で、現存長10cm、幅5.4cm、厚さ2cmとなる。表裏面と左側面がよく使用されており、右側面は溝を入れて折りとしており、その破断面を縦方向にノミ状工具で削り込んでいる。裏面には金属利器先端によるキズが多くみられる。

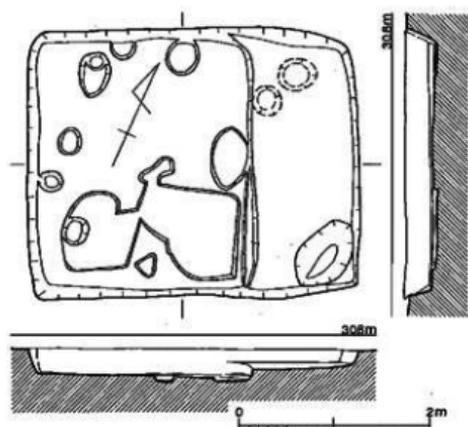
鉄片(第32図-1) 薄い鉄板片で、2.6×2.3cmの不明用途品である。裏面は剥けており、何かに貼ってあったものと思われる。

以上の第6号住居跡出土品は、2時期に大別できる。壺4のように長胴であまり開かない口縁を持つものや、6のように内面をへら削りするものなど弥生後期終末期に属するものと、他の大部分の後期後葉のものとなる。住居の形態や主軸方位が、南側の第15号住居跡と酷似することから、この2軒は同時存在であったと推定できる。よって、この第6号住居跡は弥生後期後葉の所産と考えられる。

第7号竪穴住居跡(第25図、図版・7)

遺跡中央の住居密集地のほぼ中心に位置する。3.5×2.8mの長方形住居で、面積9.8㎡と最小の部類に入る。東壁沿いのみにはベッド状遺構を設け、炉・支柱穴・壁際土壌は検出されなかった。周壁溝も無い。住居内には、掘り込み以前のピット等がかなり認められる。小型の特殊用途家屋と考えられる。

出土遺物(第26図)



第 25 図 第 7 号住居跡実測図 (1/60)

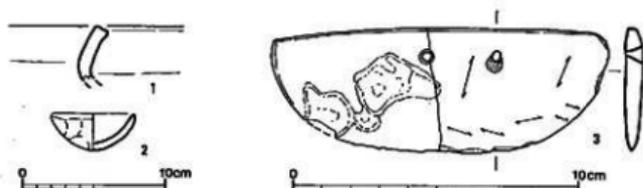
甕 (1) ゆるやかに外傾する程度
の口縁片である。内外面ともに磨
減しており、口縁端部は凹状とな
る。

手捏ね土器 (2) 口径 5.8cm、器高
2.6cm で、不安定な尖底から内湾気
味に開く。内外面ともにナデてお
り、外面には指頭圧痕が多く残る。
胎土に細砂粒を多く含み、焼成は
やや良好で、乳灰色をなす。

石庵丁 (3) 真中から半分が割れ
ているが、第 19 号住居跡出土品が
片側で、両者が接合したものであ
る。凝灰質粘板岩製で全長 11.9cm、
幅は 4.4cm、厚さ 0.6cm で、2 孔間

は 2.2cm ある。右側の孔は、両面穿孔の際、位置がずれて貫通したものである。

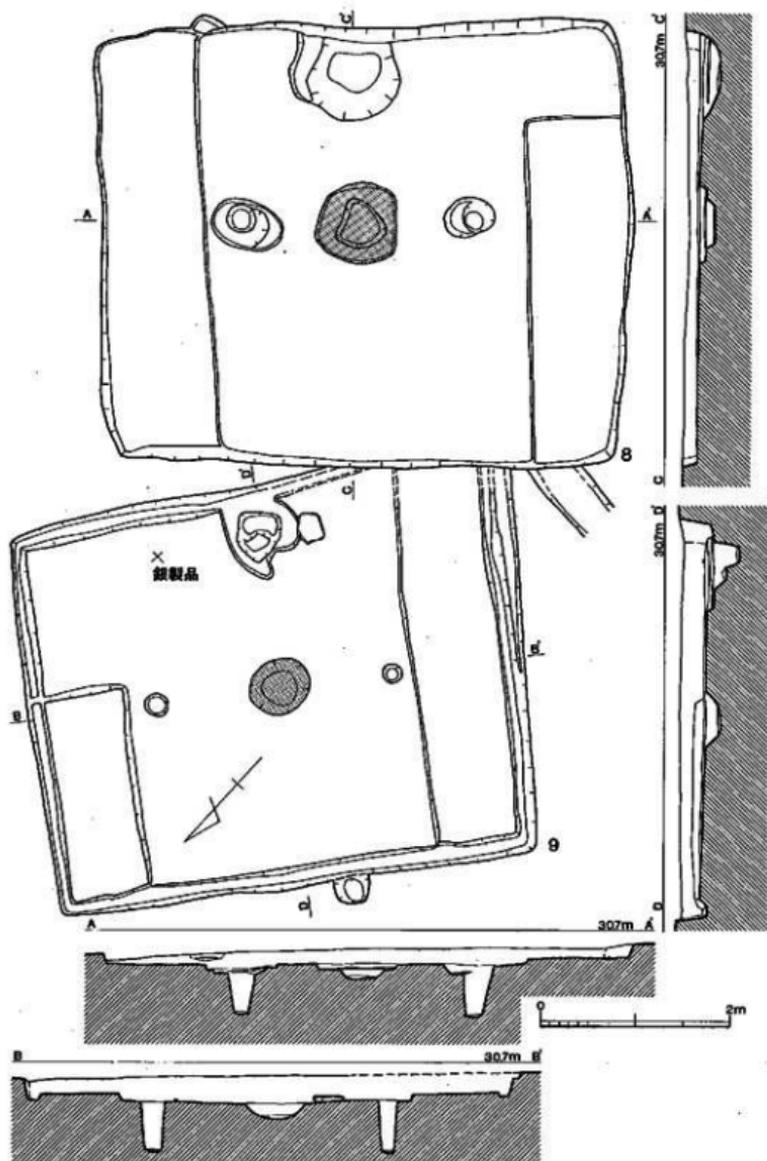
以上の第 7 号住居跡出土品で住居の年代を確定することは困難であるが、I は弥生後期末のものであり、この前後の住居と判断しておきたい。



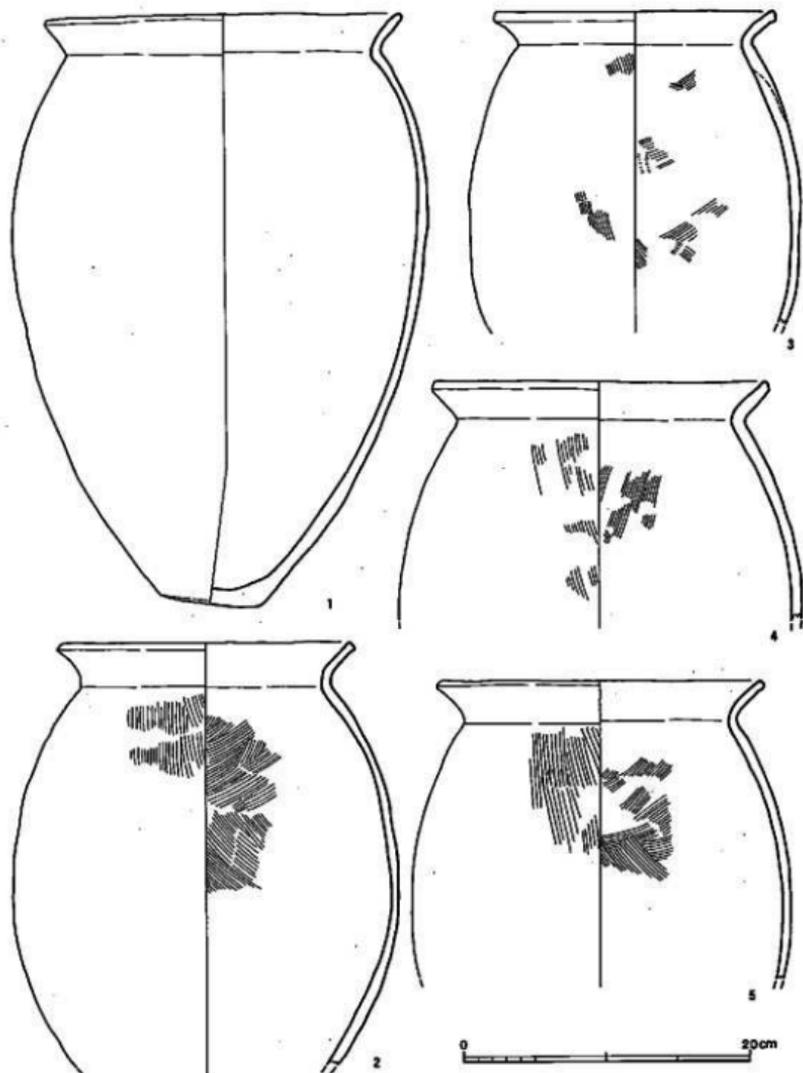
第 26 図 第 7 号住居跡出土遺物実測図 (石庵丁のみ 1/2、他は 1/4)

第 8 号竪穴住居跡 (第 27 図、図版 8)

遺跡中央の密集群中に位置し、第 9 号住居跡と第 6 号溝を切っている。5.57×4.6m の長方形住居で、面積 25.6m² となり、中型でも大きい部類に入る。両短壁沿いにベッド状遺構を設けるが、南西隅ではベッドが切れて床面の高さのままである。このベッドが切れた部分は、第 15・6・25・30 号住居の張り出し部と位置が共通することから、出入口部を意識したものと考えられる。中央に炉があり、2 支柱穴で、壁際土壇を設けている。周壁溝は全く認められない。



第 27 图 第 8・9号住居跡実測图 (1/60)

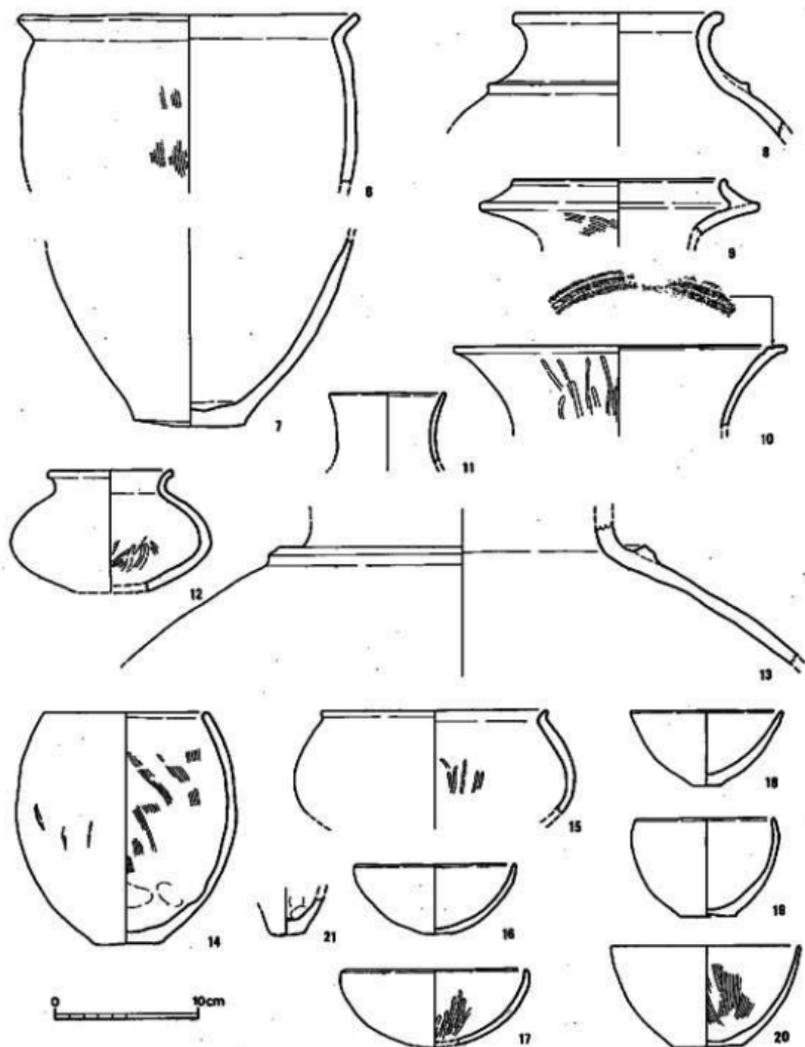


第 28 圖 第 8 号住居跡出土遺物実測図 (その 1) (1/4)

出土遺物 (第28-31図)

甕 (1-7) 1は、くの字口縁の長胴となる甕で、胴部上半に最大径をとる。口径24.5cm、器高43cm、胴部最大径29.3cmとなる。底部はわずかに凸レンズ状となる。胴部内面は磨滅しているが、ナデしていると思われる。外面は磨滅して調整は不明であるが、煮沸使用による赤変がみられる。胎土に1-2mm大の石英・白色粒・雲母・暗赤褐色粒等の粗砂粒を多量に含む。焼成は良好で、外面は橙灰色-暗赤褐色、内面は橙褐色をなす。2は、胴中位に最大径をとるタイプで、口径20cm、胴部最大径27cmとなる。胴部外面は磨滅しているが上半にわずかに縦ハケが残る。内面上半は斜位のハケを施すが、下半は磨滅している。胎土には1-5mm大の石英・雲母等の粗砂粒を多量に含む。焼成は良好で、内面は暗橙灰-黒褐色、外面は下半に二次火熱による赤変部がみられる。3は、口径19.3cm、胴部最大径23.3cmで、口縁端部はやや角ばる。胴部は中位に最大径をとり、内面はハケ調整をナデ消している。外面は磨滅しているが、縦ハケが残っている。外面中位以下は焼けこげている。胎土に1-2mm大の石英・角閃石・暗赤褐色粒等を多量に含む。焼成は良好で、外面は暗橙褐色は、内面は暗黄褐色をなす。4は、頸部で屈折するくの字口縁で、口径23.2cm、胴部最大径28.4cmとなる。胴部は内外面ともに磨滅しているが、いずれにもハケ調整が残っている。胎土に角閃石・石英・暗赤褐色粒等の細砂粒を多量含む。焼成良好で、外面は肌色、内面は乳灰色をなす。5は、頸部で丸く屈曲して開く口縁となる。胴部中位で最大径をとる類で、復原口径22.4cm、胴部最大径26.8cmとなる。胴部外面は磨滅しているが、粗い縦ハケが残り、内面も磨滅しているが斜位のやや細かいハケが残っている。胎土に3-4mm大の石英・暗赤褐色粒の粗砂粒を多く含む。焼成は良く、外面は一部に焼けこげがあり、橙色-橙褐色、内面は暗乳灰色をなす。6は、頸部内面に稜をつくり直線的に外傾する口縁につくる。胴部はほとんど歪らず、復原口径23.8cm、胴部最大径23.4cmとなる。胴部内面はナデ、外面は磨滅しているが、わずかに縦ハケ調整が残っている。胎土に石英・暗赤褐色粒等の砂粒を多量含む。焼成良好で、外面は橙褐色、内面は乳灰色をなす。7は、底径7.8cmで、わずかに凸レンズ状にふくらみをみせるが、まだ平底形状を残している。内面はナデ調整で、外面はすべて磨滅している。胎土に1mm大の石英・雲母・暗赤褐色粒等の粗砂粒を多量含む。焼成は良好で、外面は暗赤橙灰色、内面は暗乳灰色-黒色をなす。

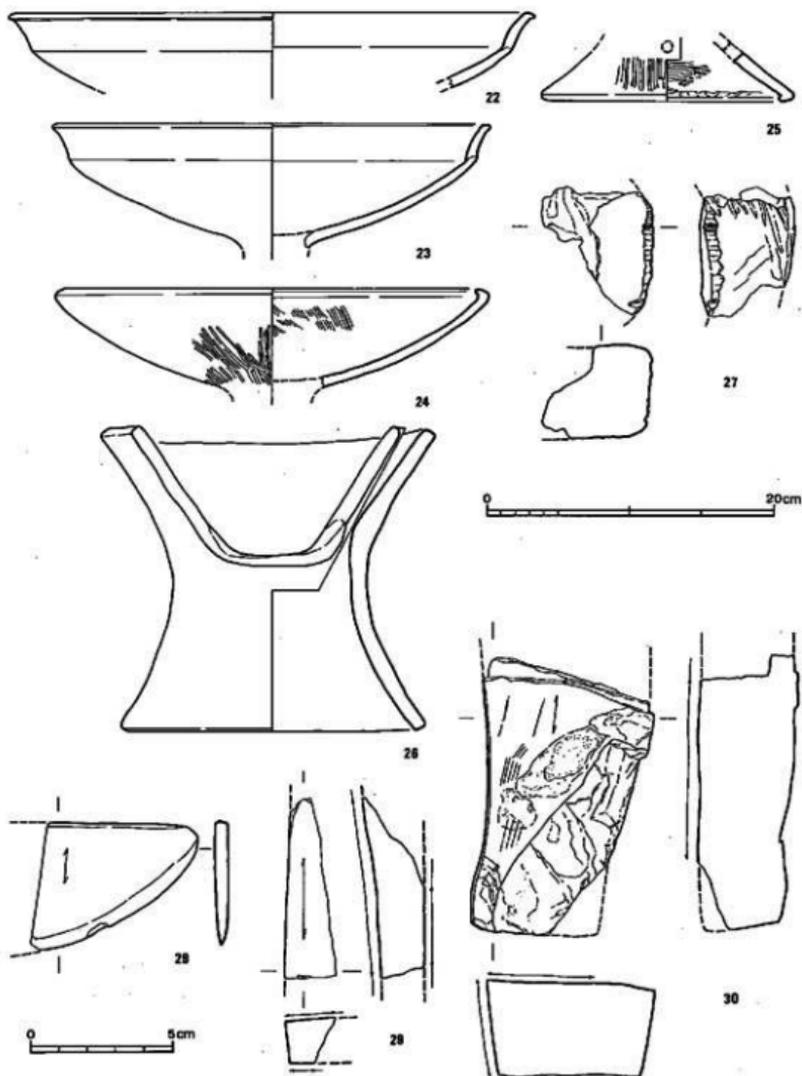
壺 (8-14) 8は、頸部下端に断面三角凸帯を付けて、頸部上方へすぼまり短く反転して口縁となる異形の形態である。口縁内外面の横ナデ以外は磨滅して調整不明である。復原口径14.4cmで、胎土に石英・角閃石・暗赤褐色粒・白色粒等の細砂粒を多量に含む。焼成は良好で、外面は橙褐色、内面は暗乳灰色をなす。9は、鋭角に内傾して最上端が短く立ち上がる複合口縁壺である。復原口径14.7cmで、頸部外面にはハケ調整が残るが、他面は磨滅している。胎土に1-2mm大の石英・角閃石・暗赤褐色粒等の粗砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面ともに肌色をなす。10は、口径23.2cmで、ラッパ状に開く広口壺の形状となる。口縁上面に2本の沈



第 29 図 第 8 号住居跡出土遺物実測図 (その 2) (1/4)

線がめぐる異類である。或いはこの上に内傾する口縁が付き、複合口縁壺となる可能性もある。頸部内面はナデ、外面はナデのあと暗文風のへら磨きが施されている。胎土に角閃石・石英・暗赤褐色粒等の細砂粒を多く含む、焼成良好で、内外面ともに暗赤褐色をなす。11は、直口壺で、わずかに頸部から外傾している。口径8cmで、全面磨滅して調整不明。胎土に角閃石・石英・雲母等の微細砂粒を多量に含む。焼成良好で、内外面ともに暗黄灰色をなす。12は、小型短頸壺で、口径8.4cm、胴部最大径14cm、器高8.7cmとなる。胴部外面は磨滅しているが、内面はハケ工具端の痕跡を残してナデしており、下半部にはへら磨き状の調整がみられる。胎土に石英・雲母・暗赤褐色粒等の細砂粒を多量に含んでいる。焼成良好で、外面は橙灰色、内面は橙灰色～黒色をなす。13は、肩部に断面梯形凸帯を付ける大型壺である。頸部径21.2cmで、器表は全面磨滅している。胎土に1～3mm大の石英・長石・暗赤褐色粒・白色粒等の砂粒を多量に含む。焼成良好で、内外面ともに暗赤褐色をなす。14は、無頸壺で、口径11.4cm、器高16.5cm、胴部最大径15.4cmとなる。底部は直径4.6cmの平底である。口縁端部は丸くつくり、胴部内面は縦ハケをナデ消している。外面は磨滅して調整不明であるが、一部にへらキズ痕が残る。胎土に長石・石英・角閃石等の粗細砂粒を多量に含む。焼成は良好で、内面暗灰黄褐色、外面は橙灰褐色をなす。

鉢 (15～20) 15は、胴が張り、口縁が短く折れるなど、無頸壺的な感じもするが、取りあえずここでとり上げる。復原口径15.8cm、胴部最大径19.8cmで、胴部内面の一部にはナデのあとへら磨き痕がみられるが、他部分と外面は磨滅して調整不明である。胎土に石英・雲母・角閃石・白色粒等の細砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は橙灰色、内面は橙褐色をなす。16は、内湾気味に開く体部となるもので、直径2cmの小さい不安定な底部を有している。口径11.2cm、器高4.9cmで、口縁周辺内外面は横ナデ、体部内外面はナデている。内面にはへら磨きが残る。胎土に雲母・石英・暗赤褐色粒等の細砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面は橙褐色～肌色、内面は橙褐色～橙灰色をなす。17は、椀状の器形で、丸底となろうか。復原口径12.6cm、器高5.5cmで、体部内面はナデのあと縦位のへら磨きを施している。外面は磨滅している。胎土に1mm大の粗石英粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗黄色～黒褐色、内面は暗茶褐色をなす。18は、直径2.1cmの小さな不安定な底からやや直線的に開く体部となるものである。復原口径10.6cm、器高5.3cmで、内外面ともナデ調整を施している。胎土に1mm大の粗石英粒を多量に含む。焼成は良好で、内外面ともに暗黄灰色をなす。19は、中央部がわずかに上げ底状となる安定した平底から丸く内湾して立ち上がる器形となる。復原口径9.5cm、器高6.9cm、底径3.9cmで、内面は丁寧にナデしており、外面は磨滅して調整は不明である。胎土に石英・角閃石・白色粒等の微細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は橙褐色、内面は暗赤橙褐色をなす。20は、安定した平底から内湾して開く頸で、全体に薄手精製である。復原口径13.1cm、器高7.2cmとなり、体部内面はナデのあと縦ハケを施しているが、外面は磨滅して調整不明。角閃石・石英等の微細粒を含



第 30 図 第 8 号住居跡出土遺物実測図 (その 3) (石器類は1/2, 他は1/4)

ひのみで、焼成は良好で、外面は暗い肌色、内面は暗黄褐色をなす。

手捏ね土器 (21) 不安定な厚い底部をもつ小型品である。内面に指頭圧痕を残す。外面はナデている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、外面は暗黄灰色、内面は暗乳灰色をなす。

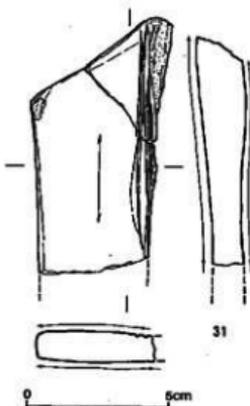
高杯 (22-25) 22は、体部中途から屈折して開く口縁部が未だ長くのびず、外面の稜もシャープである。復原口径35.8cmで、口縁外端はわずかに突出している。全面磨滅しており、調整は不明である。胎土に長石・石英・角閃石・暗赤褐色粒等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗橙灰褐色、内面は暗橙灰色をなす。23は、22よりひとまわり口径が小さく30.3cmとなる。口径に対して杯部が深く、より古相を示している。体部中途屈折部からの口縁も短かめで、外傾度も少い。口唇外端は外方へわずかに突出している。全体に器表は磨滅するが、体部外面下半には縦位のへら磨き痕がかすかに残っている。胎土に多くの角閃石が目立ち、石英・暗赤褐色粒等の細砂粒を多量に含んでいる。焼成良好で外面は暗赤褐色、内面は暗赤橙灰色をなす。

24は、口縁が短く屈曲する内曲げ高杯で、体部は直線的にはなく内湾気味に開いている。復原口径28.9cmで、内面上半は縦ハケを残してナデている。外面下半には、ナデのあとへら磨きを施している。胎土に石英・角閃石・暗赤褐色粒等の砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、外面は暗赤茶褐色、内面は暗赤橙灰色をなす。25は復原底径15.9cmとなる脚端部片である。内端が内側へ突出し、小円孔を穿っている。外面は縦位のへら磨き、内面には横ハケを施す。胎土に石英・暗赤褐色粒・白色粒位の微砂粒をやや多く含む。焼成良好で、外面は暗赤褐色、内面は橙灰色をなす。

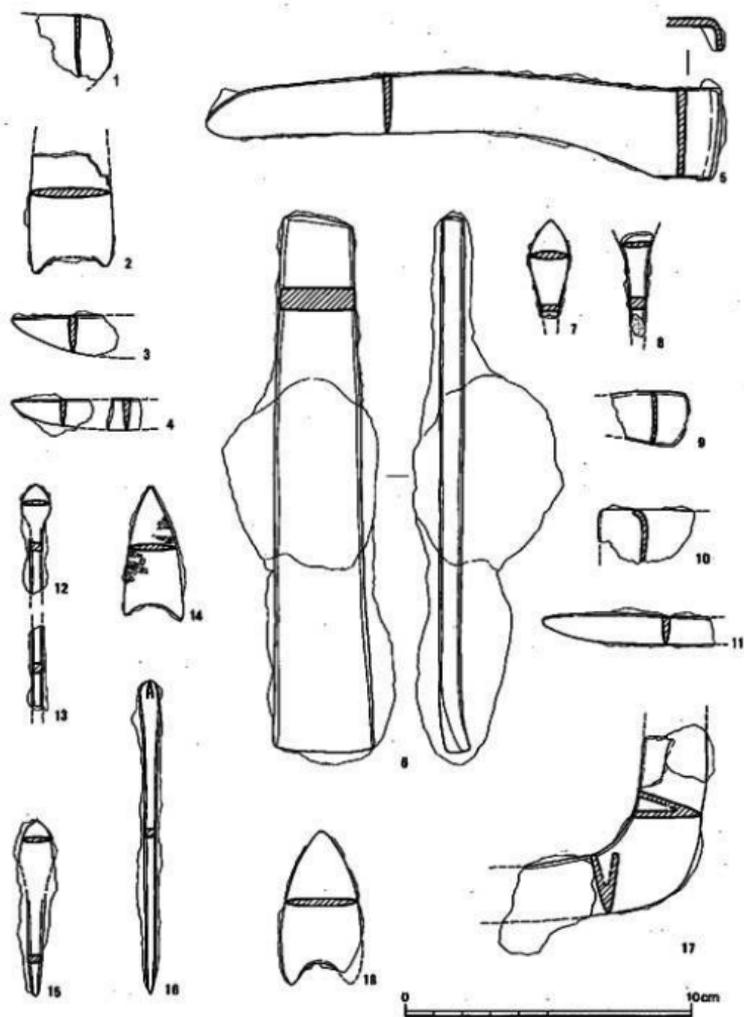
器台 (26) 片端を大きく挟り込んで特殊用途と考えられる大型挟り込み器台である。図上では取りあえず挟り部分を上にして図示したが、天地逆の可能性もある。上端径22.3cm、器高21.5cm、下端径20.2cm、中央部最小径13.8cmとなる。内外面とも器表はナデしており、胎土には1-4mm大の石英・雲母・暗赤褐色粒等の砂粒を多量に含む。焼成良好で内外面ともに暗黄橙褐色をなす。

不明土製品 (27) 上面からみて不整形形状になるかと思われる土塊状のもので、高さ6.7cmとなる。側面から裏面にかけては指ナデ痕がみられ、上面はわりと丁寧にナデている。上面縁には刻目状の加工がみられる。胎土に細石英粒をやや多く含む。焼成良好で、暗黄灰褐色をなす。何かをのせて、作業台的な用途のものと考えられる。

石磨丁 (28) 長さ5.9cm、幅4.5cm、厚さ5mmの半折品で、表裏ともに丁寧に研磨している。粘板岩製で、重量15.1

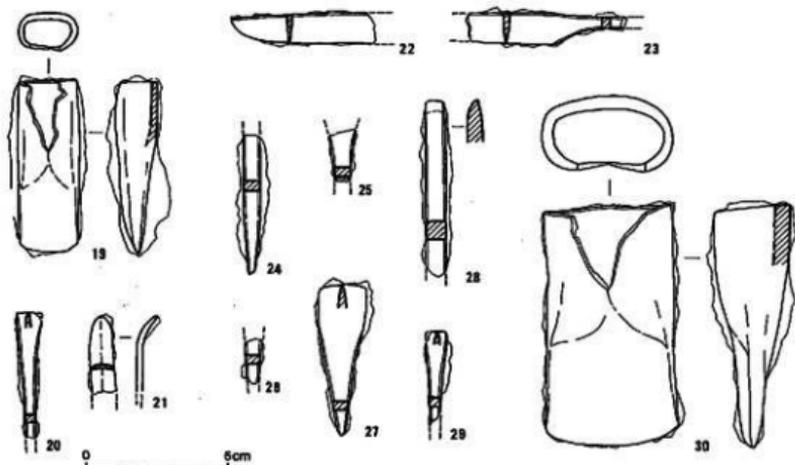


第31図 第8号住居跡出土遺物
実測図 (その4) (1/2)



第 32 図 弥生時代鉄器実測図 (その 1) (1/2)

(1 : 住 6, 2 ~ 4 : 住 8, 5 ~ 11 : 住 10, 12 ~ 13 : 住 12, 14 : 住 17, 15 : 住 18, 16 ~ 17 : 住 22, 18 : 住 23)



第33図 弥生時代鉄器実測図(その2)(1/2)

(19:住24, 20~23:住29, 24~26:住31, 27:住32, 28~30:谷1)

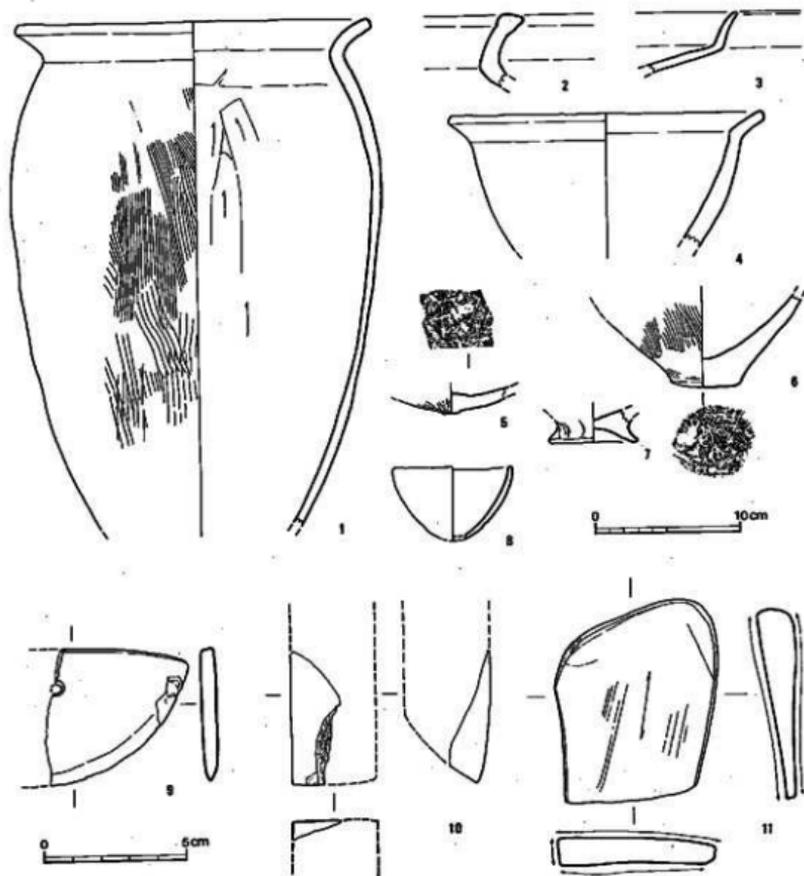
gとなる。

砥石(29~31) 29は、粘板岩製仕上げ砥の破片で、表裏ともに使用している。側面は粗く削ったままである。30は、最大幅5.9cm、厚さ3.5cmの粘板岩製仕上げ砥である。表面と左側面を使用しており、裏面は未調整のままである。31は、幅4.5cm、厚さ1.6cmの薄手で、表裏面とも使用している。粘板岩製仕上げ砥で、左側面は研磨はしているが使用面ではない。右縁辺には金属利器による鋭い直線が何本も彫り込まれており、大きな砥石を縦に切断したものと考えられる。

鉄鏃(第32図-2) 上半部を失った無茎鏃で、現存長4.2cm、幅2.9cm、厚さ3mmほどの、やや大型類である。

鉄刀子(第32図-3・4) 3は、現存長3.7cm、最大幅1.5cm、厚さ2mm強となる大きめの刀子先端部片である。4は、長さ4cm以上、幅1.1cm、厚さ2mm弱となる細身のタイプとなる。いずれも弥生後期後葉代の鉄器として貴重な資料である。

以上の第8号住居跡出土遺物は、多量・多種にわたるが、大別して2小期の時期差がみられる。即ち、壺1・6、高杯23などの弥生後期中葉に位置付けられるものと、それ以外の甕や壺・高杯などの後期後葉のものとなる。ここでは、出土遺物の出土状況から当該住居の時期を判断できないため、とりあえず、新しい方の弥生後期後葉を第8号住居の時期としておきたい。後



第 34 図 第 9 号住居跡出土遺物実測図 (石器類は 1/2, 他は 1/4)

葉でもより中頃に近い段階のものであろう。

第 9 号竪穴住居跡 (第 27 図, 図版 9)

遺跡中央の集中する住居群中に位置し、南隅をわずかに第 8 号住居跡に切られる。5.2×4.25 m の長方形住居で、面積 22.1 m² となる中型類である。両短壁沿いにベッド状遺構を設けるが、東

隅ではベッドが切られて床面となる。中央部に炉を設け、2主柱穴で、壁際土壌を有する。周壁溝は全周に認められ、しっかりしており、大旨壁際土壌方向へ低くなるように傾斜を持っている。壁際土壌の脇には、32×25cmで厚さ6cmほどの上表面がツルツルした作業台石が置かれていた。また、当遺跡最大の発見である銀製品が、壁際土壌北東側の床面から出土した。

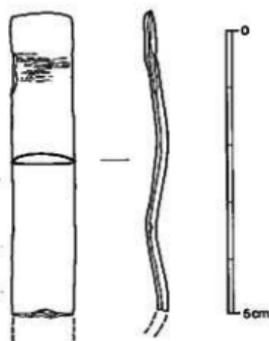
出土遺物 (第34・35図)

壺(1) 復原口径24.4cm、胴部最大径26cmで、器高が45cm前後となりそうな長胴の甕である。胴上位に最大径をとり、口縁もやや強く開くが、胴部内面は削り上げている。口縁内外面から頸部内面までの下3cmまでは横ナデ、胴部外面は縦ハケを雑に施す。下半は二次火熱を受けて焼けこげている。胎土に微砂粒を多量に含み、焼成良好で外面は暗肌灰色、内面は暗黄灰褐色をなす。

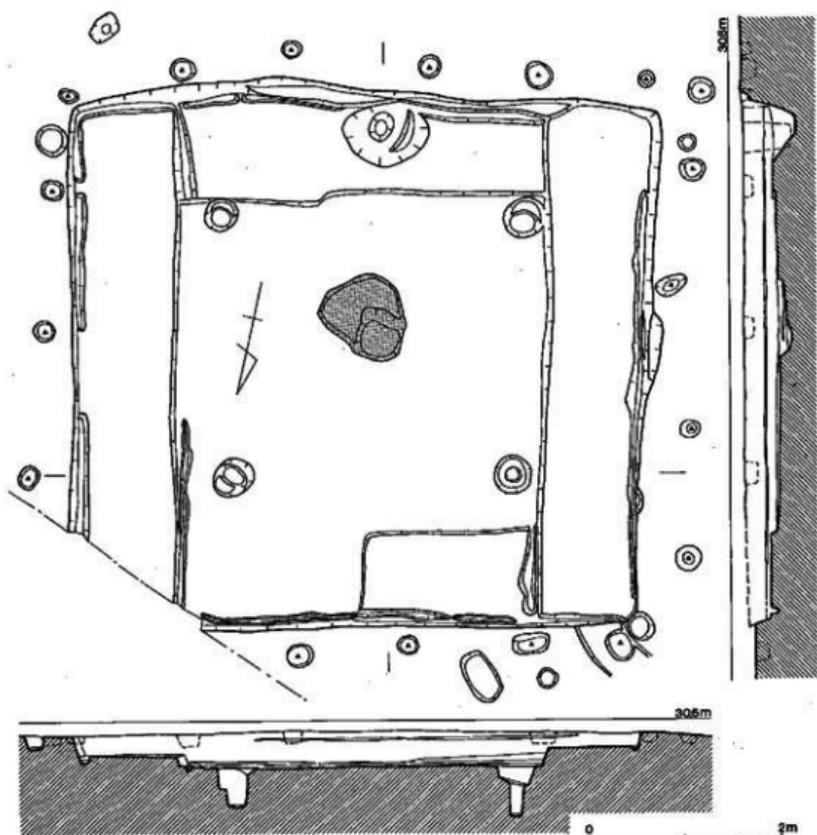
壺(2・3・5・6) 2は、口縁端が肥厚して内外へわずかに突出する類で、頸部以上の内外面は横ナデ、胴部内面はナデている。胎土に細砂粒多く含み、焼成良好で、内外面ともに肌色をなす。3は、高杯の可能性も強いが、とりあえずここで記述しておく。口縁が外傾気味に立ち上がる類で、横ナデ調整を施す。胎土に石英・暗赤褐色粒等の砂粒を多く含む。焼成良好で内外面ともに乳灰色をなす。5は、直径1.2cmという小さな底部をつくり出した畿内第Ⅴ様式に特徴的なものである。下ぶくらみの壺になると思われ、外面はヘラ磨きが施され、内面はヘラナデ状である。胎土に石英等の微細砂粒を含むが精選されたものである。焼成良好で外面は暗黄灰色～黒色、内面は暗灰色をなす。6は、底部全体が充実に尖り気味になり、凸レンズ状の不安定な底面につくる類である。内面はナデ、外面はハケ調整が施される。胎土に角閃石・石英・ガラス質粒等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は乳灰色、内面は暗乳灰色をなす。

鉢(4・7・8) 4は、口径21.6cmのやや大ぶりの類で、口縁内外面横ナデ、体部内外面は丁寧にナデている。胎土に石英・長石等の砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗黄灰色～黒灰色、内面は暗黄褐色をなす。7は、大きく上げ底となる脚台部で、外面には指オサエ痕が強く残されている。底径6.4cmで、内面はナデている。8は、薄手で小型のもので、口径8.2cm、器高5.1cmとなる。内外面ともにナデており、胎土に微細砂粒をやや多く含む。焼成良好で、外面は肌色、内面は肌色～黒色をなす。

石庵丁(9) 住居内埋土上層からの出土品で、赤紫色凝灰岩製である。残存長4.5cm、幅4.8cm、厚さ5



第35図 第9号住居跡出土銀製品
実測図(実大)



第 36 図 第10号住居跡実測図 (1/60)

mmで、重量15.2gとなる。

石斧片 (10) 挿入柱状片刃石斧の刃部付近小破片である。珪質凝灰岩製で、表面は丁寧に研磨された精品である。現存重量7.3gとなる。当住居の時期のものではなく、第1号住居跡など弥生前期の遺構に伴うもので、混入品であろう。

磁石 (11) 暗青灰色の砂岩製中磁で、きめは細かい。表裏・左側面ともに極めてよく使い込まれており、右下の隅付近は薄くなりすぎて刃部状を呈している程である。現存重量58.2g。

銀製品（第35図、巻頭図版 2）成分の分析等・製品としての由来等についての考察などは後章にて詳述する。現存長さ5.4cm（曲がった状態での）、幅1.1cm、厚さ2mmの純銀製で、片端は折り曲げて折りとったような感じを受ける。側面からみると蛇行状に曲がっており、曲がる部分の表面には、シワがみられる。現状表面は白灰色に風化している。断面は片面側がふくらみをもつ片丸状をなしており、明らかな製品であるが、何に使用されたものか判断できない。

以上の第9号住居跡出土遺物は、貴重な銀製品を含めて多種にわたるが、時期的には土器でみる限り、弥生後期末期以降のものといえよう。即ち、内側をへら削りする1の甕や、畿内第Ⅶ様式の影響の強い小さい底の5や、6など、隣の第10号住居からの投棄品と推定される。住居自体の年代は、第8号住居から切られるため、後期後葉前後と考えられる。

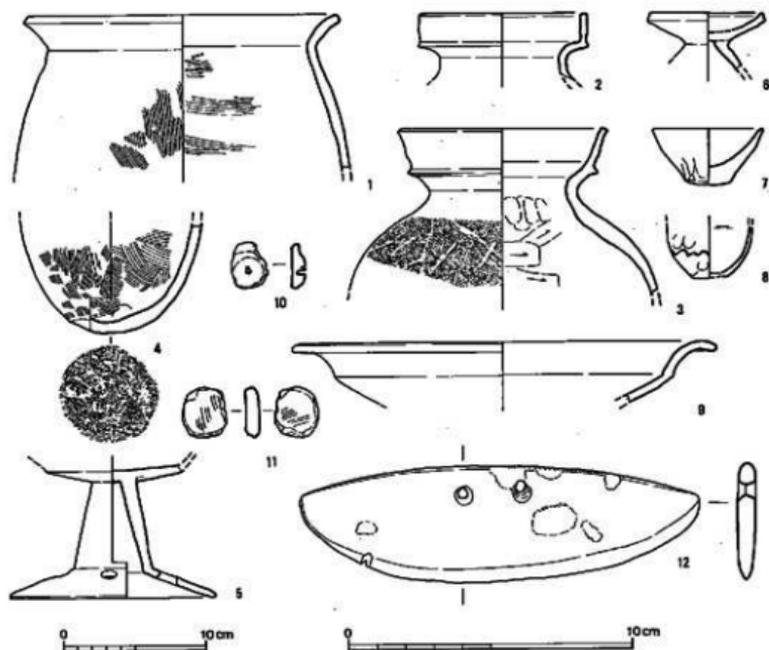
第10号壘穴住居跡（第36図、図版 9）

遺跡の中央の最集中住居群の最東北端に位置する。6.0×5.65mの方形住居で、面積33.9㎡の本遺跡中最大の大形住居となる。ただ、この面積の大きさは、当住居が時期の異なる最新期のものであることにもよる。東西の両側面に高いベッド状遺構を削り出し、南辺と北辺の西半分側にも一段低いベッドを設けている。炉は中央にあり、その底面はいくらか赤く焼けている。支柱穴は4本で、その柱間距離は東西間の方が長いので、棟は東西方向であったと考えられる。南壁中央内側にやや小ぶりの壁際土壇を掘り込んでいる。この住居に関して特筆すべきは、壁外沿いに小柱穴が並ぶことである。直径15～25cm、深さ15cm前後のもので、100～150cm間隔で、各辺5～6個ずつ並ぶ。似たような例が後述する第31号住居跡でもみられるが、本例と異なり径10cm前後の棒杭状の痕跡であり、住居壁構築の際の壁心支持杭と考えられる。本例は柱穴がやや大きいことから、垂木の支えの機能も有していたと推定される。周壁溝は、板材打ち込み痕跡のものが、各壁際と、ベッド内側沿いの一部に認められる。

出土遺物（第37図）

甕（1）口径21.6cmで、胴はあまり張らず長胴となりそうである。頸部で丸く屈曲して外反する口縁となる。胴部外面は縦ハケ、内面はナデのあと横ハケを施す。胎土に砂粒をやや多く含む。焼成良好で、外面は暗褐色、内面は暗灰灰色をなす。

壺（2～4）2は、口縁が直立する二重口縁壺で、口径11.6cmとなる。頸部内面はナデ、他の内外面は横ナデとなる。胎土に石英・角閃石・白色粒等の微砂粒を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗黄褐色をなす。3は、口縁が外傾する頸で、口径14.2cmとなる。肩部にはハケ工具端を押圧して斜位に連続させた文様が施される。胴部内面は横位のへら削り、外面肩部以下は板状工具によるナデを施す。胎土に1mm大の石英・暗赤褐色粒・白色粒等の細砂粒を多量に含む。焼成良好で、外面は暗赤橙灰色、内面は暗赤橙色をなす。4は、丸底の下半片で、外底面は未調整に近いナデ、内面はナデを施す。胴部内外面は雑なハケ調整である。胎土に細砂粒



第 37 図 第10号住居跡出土遺物実測図 (石甕丁のみ1/2, 他は1/4)

をやや多く含む。焼成良好で、外面は乳灰褐色、内面は暗黄灰色をなす。

高杯（5・9）5は、短い脚柱部からシャープに折れて直線的に開く裾部をもつ。4個の円孔を裾部に穿つ。脚端部径14.6cmとなり、外面のほとんどは磨滅している。胎土に微砂粒を多量に含み、焼成良好で、内外面ともに乳灰色をなす。9は、5と異なり在地的形態の中で口縁が長く延びて残ったものである。復原口径28cmと大きく、口縁内外面横ナデ、体部内面はナデている。胎土に微細砂粒を多く含む。焼成やや良好で、外面は暗肌色～黒色、内面は暗橙灰色をなす。

器台（6）受け部径7.9cmで、端部は上方へわずかにつまみ出されている。内外面ともに磨滅している。胎土に細砂粒をやや多く含み、焼成良好で、内外面ともに肌色をなす。

手捏ね土器（7・8・10）7は鉢形で、口径7.6cm、器高4cmとなる。底部は厚く不安定な凸レンズ状につくる。内面はナデ、体部外面は板ナデを施す。胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は暗黄灰色、内面は肌色をなす。8は、薄手で平底の異形品である。胴外面下半には

一条の連弧に近い波状文を巡らせ、内面には一条の沈線らしきものがある。内外面ともにナデている。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、外面灰黄色、内面暗黄灰色をなす。10は長さ3.2cm、幅2.6cmの用途不明土製品である。中央に焼成前の刺突孔がみられる。胎土に微細砂粒少量を含むのみで、焼成良好、外面は暗黄灰色、内面は乳灰色をなす。

土器片転用品 (11) 内外面にハケの残る土器片の周辺を打ち欠いて丸くしようとしたものである。直径3.5×3.1cmとなり、遊具の一種か。

石庵丁 (12) 床面から出土したもので、赤紫色砂岩製。長さ14cm、幅4.2cm、厚さ6.5mm、2孔間は1.7cmである。重量57.6gで、孔は両面からあけている。背部面には小さい刻み状に調整痕が残されている。

鉄鎌 (第32図-5) 全長18cm、基部幅3.2cmで、細身の類となる。基部端は片方へ折り曲げており、刃部側の基部寄り2cm間は刃をつけていない。

タガネ状鉄製品 (第32図-6) 全長18.8cm、基部幅2.5cm、先端部幅3.5cm、厚さ8mmの板状鉄製品である。先端の片角はそり上がっており、反対側は錆のため明らかではない。板状鉄斧・タガネ・或いは丸ノミ的なものかもしれないが、刃の有無等明瞭ではないため、いずれとも判断し難い。

鉄鎌 (第32図-7・8) 7は現存長3.5cm、最大幅1.4cmの柳葉形鎌で、8は同一個体ではないが7と同類になるものと思われる。

鉄刀子 (第32図-11) 現存長6cm、身幅1cm、背の厚さ2.5mmの細身の類で、基部側は残存していない。

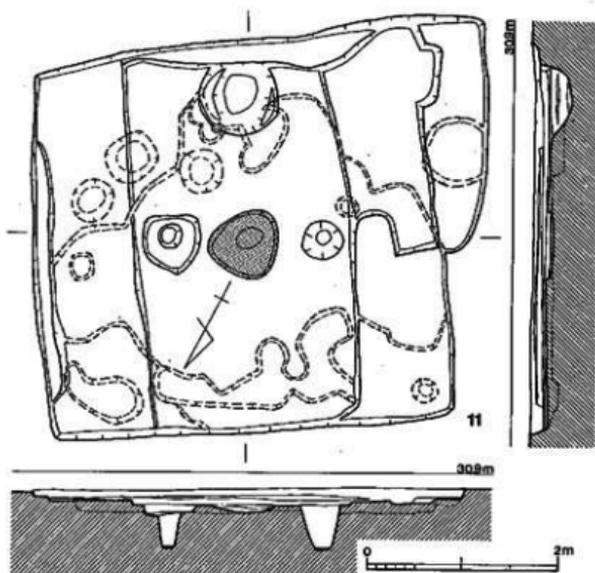
不明鉄片 (第32図-9・10) 9は現存長2.6cm、幅1.9cmで、10は長さ3.3cm、幅1.9だけ残っている。いずれも、裏側は剥げたような状態で、木か何かに貼り付けた飾板の破片かとも思われる。

以上の第10号住居跡出土品は多種にわたるが、中でも石庵丁と鉄鎌の共存は非常に興味深く思える。石庵丁は完形品でしかも床面出土品であることから、当住居住人が使用したものであると否定し去ることはできない。明らかに古墳時代にはいる当住居で、いまだに石庵丁が使用されていたことに驚きの念を禁じ得ない。

出土土器については、大部分は他地域系の新来のものに占められるが、甕や高杯に在地型のものが残っている。以上の土器からみて、当住居跡は古墳時代初頭のもので、下降しても布留古式までのうちに含まれよう。

第11号壘穴住居跡 (第38図、図版 10)

遺跡の中央で住居の密集する中に位置する。4.34×4.15mの方形住居で、18.0㎡の中型でもやや小よりの規模となる。東西両面沿いにベッド状遺構を設けるが、南隅部分は一段低くなり、

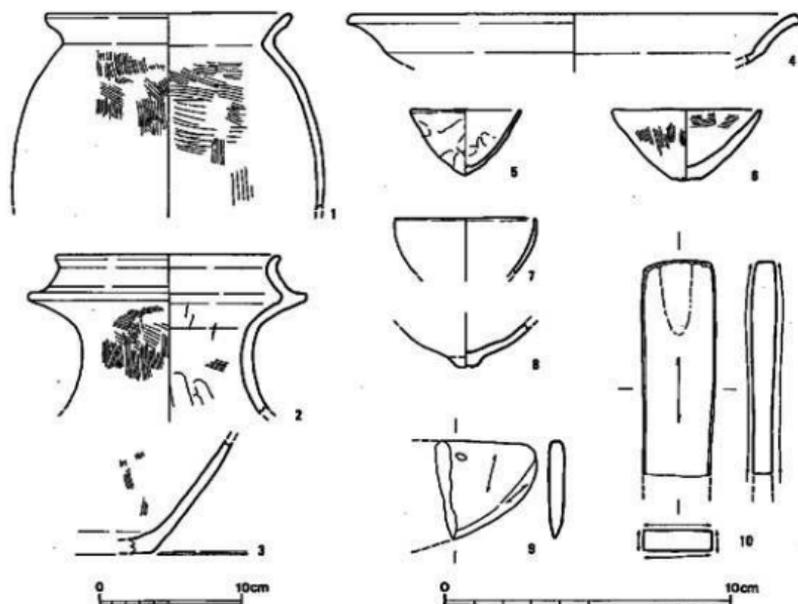


第 38 図 第11号住居跡実測図 (1/60)

その部分は壁外方へ張り出している。この位置を出入口としたものと推定される。炉は中央にあり、その底面は赤く焼けている。主柱穴は炉を挟んで対になる2個であるが、その心々距離はわずか1.65mと本遺跡中で最も短い。その結果、炉端から柱までの間隔は40cmしかない。逆にベッド内辺からは25-30cmほど離れた内側に柱が立てられており、通常のベッド内辺際に立てられるのと異り、意識的に柱間距離を狭めたことがわかる。また、南壁中央付近に壁際土壌が検出されたが、これも他と異り、壁張り込みラインから25cmほど内側から掘り込まれている。これらの真相は全体として遺構の古相を残したものと判断しておきたい。周壁溝は認められない。なお、図面に破線で示したものは、当住居に関連しない、それ以前の掘り込みであり、一部に扁平打製石斧も出土していることから、縄文晩期のものである可能性もある。

出土遺物 (第39図)

壺(1・3)1は、口径17.1cmで、頸内面に稜をつくり、胴部上半でかなり張る器形となる。胴部最大径21.9cmで、内外面ともにハケ調整を施している。胎土に細砂粒をやや多く含み、焼成良好で、外面は乳灰色-黒色、内面は暗乳灰色をなす。3は、底部片で、内外面ともに磨滅するが、内面には縦ハケが残る。凸レンズ状の底面となるかどうかは定かでない。

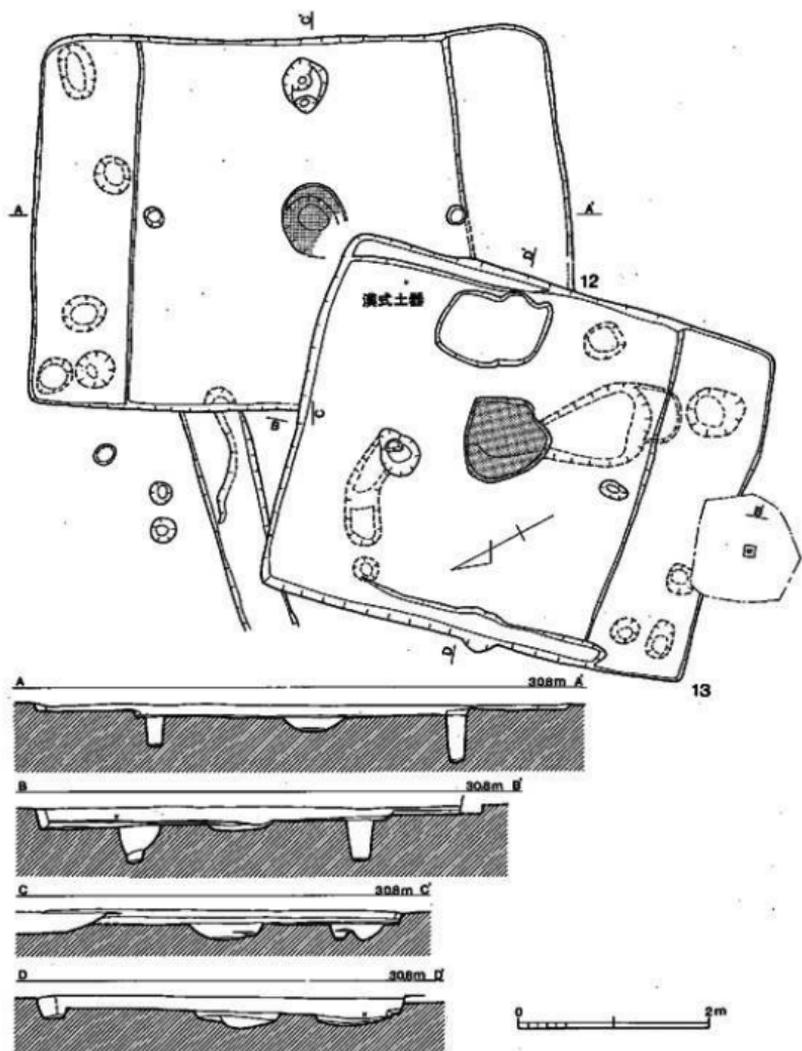


第39図 第11号住居跡出土遺物実測図(石器類1/2, 他は1/4)

壺(2) 口径が15.6cmとなる大きめの複合口縁壺で、口縁端の外方への折れは、丸みをおびて反転屈曲している形態で、短くシャープに折れる形状には未だなっていない。頸部外面は縦ハケ、内面上半はハケをナデ消しており、下半は指押さえナデが施される。胎土に1mm位の石英・雲母・暗赤褐色粒等の細砂粒を多量に含む。焼成良好で、内外面ともに暗赤橙色をなす。

高杯(4) 復原口径31.2cmとなる口縁片で、中途屈曲部からかなり強く外傾して開く。口縁の長さはまだ長くなってはいない。内外面ともに横ナデ、焼成良好で内外面ともに肌色をなす。胎土に細砂粒を多量に含む。

鉢(5~8) 5は、極めて薄手の手捏ね土器で、内外面ともに指頭圧痕を多く残してナデている。口径7.7cm、器高4.6cmの尖底となる。胎土に角閃石・石英・白色粒等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面暗黄茶褐色、内面暗灰黄色をなす。6は、直径2.1cmの小さな不安定な凸レンズ状底部から直線的に開く体部となる器形である。復原口径10.4cm、器高5cmの小型品にしては器壁が厚い。外面上半は縦ハケ、下半は磨滅している。体部内面上半は縦ハケ、下半は丁寧ナデている。胎土に微砂粒を多く含む、焼成良好で、内外面ともに肌色をなす。7は、復原



第 40 图 第12·13号住居跡实测图 (1/60)

口径9.8cmの薄手で内湾して立ち上がる体部となる器形である。内外面ともに磨滅して調整不明である。胎土に石英・暗赤褐色粒の微砂粒を少量含み、焼成良好で、外面は橙灰色、内面は橙灰色～淡橙色をなす。8は、出ヅク状に突出した小さい不安定な底部をもつ鉢乃至は壺であろうと思われるが、明確ではない。内外面ともにナデしており、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で、外面は黄橙色、内面は黒灰色をなす。

石庵丁(9) 現存長3.5cm、現存幅3.5cm、厚さ5mmとなる。赤紫色砂岩製で、表裏ともに丁寧な研磨し、刃部も研ぎ出しが明瞭である。8.1gの重量となる。

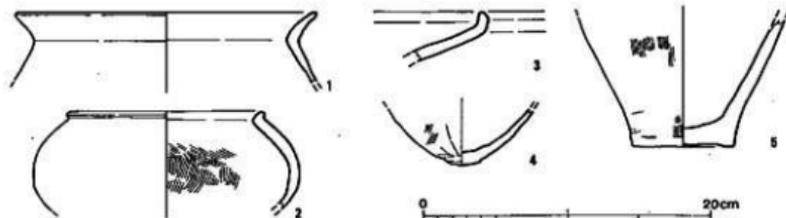
砥石(10) 現存長7.5cm、幅2.5cm、厚さ0.9cmの砂岩製中砥である。全面ともに丁寧に研磨され使用面となっている。表面上端側中央にはわずかにへこむ部分がある。重量33.8gで、携帯用の小型品である。

以上の第11号住居跡出土遺物のうち、時期を示すものをみても、まず甕1が胴張りをなしておりやや古相を示す。壺2も口縁端の折れ曲がり具合がまだシャープではない。4の高杯の形状をも併せ検討すると、全体としては、弥生後期後葉の段階であるが、中でも8の底部や高杯の開きが強くなってきていることなど新しい様相もみられ、後期終末に近い後葉段階と考えてよさそうである。

第12号竪穴住居跡(第40図、図版 11)

遺跡の中央の住居の密集する群中に位置する。南西側の第13号住居に東南隅1/4を切られている。また、第6号溝を切っている。更に、北東隣の第8・9号住居とは近接しすぎており、同時存在はあり得ない。5.65×3.95mの長方形住居で、22.3㎡の中型類となる。両短辺沿いにベッド状遺構を設け、東南壁中央に壁から20cm離れて、小ぶりの壁際土塊を掘り込んでいる。支柱穴は2本分で、その心々距離は3.2mと、本遺跡中では最も長い。炉は床面の中央にあり、周壁溝は無い。

出土遺物(第41図)



第41図 第12号住居跡出土土器実測図(1/4)

壺(1・5) 1は、復原口径21cmで、内外面ともに磨滅している。胎土に2~3mmの粗大石英粒を多量に含み、焼成良好で、外面は暗褐色、内面は暗茶褐色をなす。5は、中央がわずかな上げ底状となる類で、外面はハケを残して板ナデ状をなす。内面は丁寧になデている。胎土に砂粒を多く含み、焼成やや良好で、外面は肌色~暗橙褐色、内面は黒色~暗橙褐色をなす。この底部は、弥生前期段階のもので、明らかに混入品である。

壺(2・4) 2は、わずかに上方へ突出する口縁を有した無頸壺の類である。復原口径13.6cm、胴部最大径18.8cmとなる。胴部内面上位から外面上端までは横ナデ、内面中位以下は雑なハケ、外面中位以上は磨滅しているがナデ調整と思われる。器形からは第8号住居跡出土の15と同種となるが、調整技法が異なる。4は、出べそ状の直径2.5cmの小さい不安定な底部を有するものである。外面は工具痕の残る粗いナデ、内面はナデている。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成やや良好で、外面は肌灰色、内面は暗黄灰色をなす。

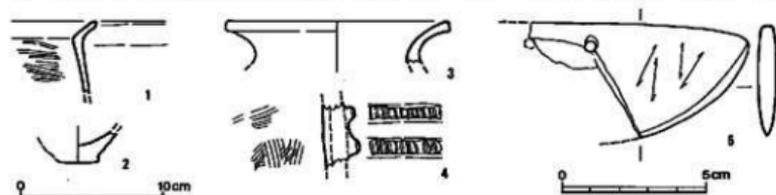
高杯(3) 内曲げ口縁の類で、屈曲はゆるやかである。砂粒を多く含み、焼成良好で、外面は暗黄灰褐色、内面は肌色をなす。内外面ともに器表は磨滅している。

鉄鏃(第32図-12・13) 2点が同一個体となるかどうかは判らないが、細根状の形態となりそうな具合である。鋒先部が丸味をもって小さく広がっており、異例である。鏃ではなく工具である可能性も考えられる。12の現存長は3.9cm、鋒幅1cmとなる。13は現存長2.9cmで、断面は角ばる。

以上の第12号住居跡出土遺物から住居の時期をみてみると、5は明らかに混入品で除外されるところとしても、それ以外が同一時期とは思われない。1と4は明らかに新しい終末期以降の様相をみせており、1が1/6残存の小片であることを考えると、これらも住居の時期を示すものとは推定し難い。2が第8号住居跡出土品と同種であることや、3の高杯片などから、第8号住居と同じく、弥生後期後葉がこの第12号住居跡の営まれた時期と判断したい。

第13号竪穴住居跡(第40図、図版 11)

中央群に位置し、第12号住居と第6号溝を切って営まれている。4.8×3.85mの長方形住居で、18.5㎡となる中規模類である。片側の西南辺沿いのみにはベッド状遺構が設けられる。炉は



第42図 第13号住居跡出土遺物実測図(石廬丁のみ1/2, 他は1/4)

中央にあり、東南壁中央には浅い壁際土
 壌が掘り込まれている。主柱は2本で、
 周壁溝は北西壁沿いに幅の広い類が検出
 されたのみである。床面及びベッド状遺
 構上には、図の破線で示したように当住
 居以前の掘り込みがいくらかみられる。
 この住居で特筆すべきは、第9号住居で
 純銀製品が出土したことにも劣らない漢
 式土器の出土である。壁際土壌北東側の
 床面直上より出土した。

出土遺物 (第42・43図)

甕 (1) 胴部がほとんど張らず、頸内面に稜をつくり折れて開く口縁となる。胴部内面は磨き
 風のヘラ工具による横位ナデ状。外面はナデている。胎土は砂粒の混入がやや少く、焼成良好
 で、外面乳灰色、内面は乳黄灰色をなす。薄手で、調整ともに異類である。

甕 (2~4) 2は外面が剝落しており詳細不明である。3は、復原口径15.7cmの大きく開く口
 縁となる類である。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成良好で外面は橙灰色、内面は灰褐色をな
 す。4は、大型壺或いは甕の胴部中途凸帯部分片である。2条の連接凸帯で、刻目を施す。内
 面はハケの上をナデている。胎土に砂粒を多量に含む。

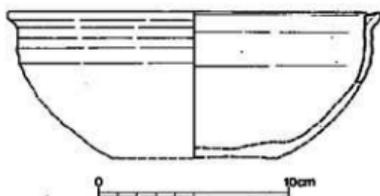
石唐丁 (5) 粘板岩製の外湾刃類である。厚さが7mmほどあり部厚い。2孔間は1.8cmある。刃
 部の研ぎ出しも明瞭で、現存重量16.6gとなる。

漢式土器鉢 (第43図) 復原口径19.8cmとなる瓦質土器片である。口縁の1/7のみ残っており、
 口縁内角はシャープで、上面はわずかに内側へ傾斜する。内外面ともに丁寧なろくろナデで、
 外面は強いナデによる凹凸が特徴的である。胎土は極めて精良である。焼成は瓦質で、器表面
 は黒色にいぶされ、胎は灰白色である。内面には赤色顔料が薄く付着している。図示した復原
 図は、前原町三雲遺跡の番上土器溜出土のものを参考にして復原してみた。詳細な検討・考察
 については、後章でまとめたので参照されたい。

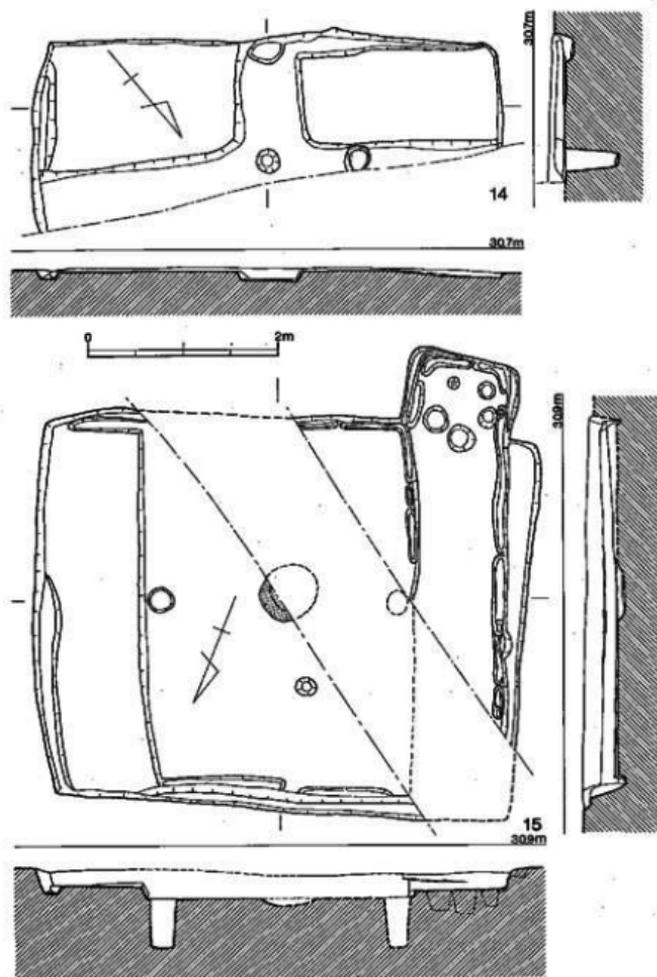
以上の第13号住居出土遺物から時期を確定するのは困難であるが、切り合いからみて第12号
 住居より新しいことや、甕Iが新しい様相を示していることなどから、弥生後期終末期と判断で
 きる。貴重な漢式土器についても、他遺跡出土例からみて、時期的にも符号するところである。

第14号竪穴住居跡 (第44図、図版 12)

遺跡の中央の住居が最も密集する部分と、東側の住居群との間は、第2号溝に平行して東側
 が低くなっている。そして、この低地によって東西の住居グループが分かれている。当第14号

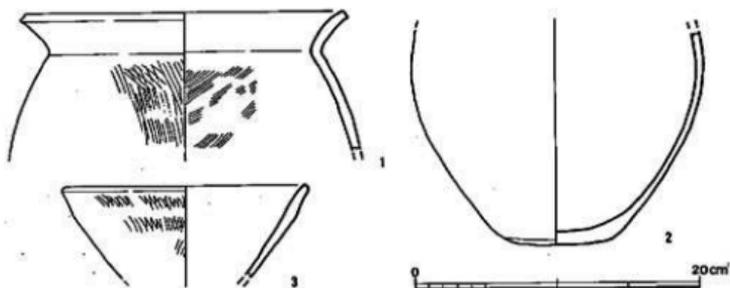


第43図 第13号住居跡出土漢式土器実測図 (1/3)



第 44 図 第14・15号住居跡実測図 (1/60)

住居は、この低地際の東側に位置し、住居グループでみると、強いて言えば東グループに入れざるを得ない。ただ東グループからも20m近く離れ、調査区域外東側に存在するかもしれない全



第45図 第14号住居跡出土土器実測図(1/4)

く別のグループに属する可能性も考えられる。

住居の北東側の大半は調査区域外で、不明な点が多いが、24㎡前後の長方形住居になると思われる。西南辺沿に設けられたベッド状遺構が中央で切れており、第10号住居のような古墳時代初頭住居に近いのではないかと類推される。

主柱穴の1つと思われるピットが、ベッドが切れた部位の内側にみられ、未だ2主柱建物だったと考えられる。部分的に周壁溝が検出されている。

出土遺物(第45図)

壺(1) 口径22.3cmで、胴上半で最大径を持ちそうな類である。口唇外面はわずかに凹状となる。胴部内外面ともにハケ調整であり、胎土に砂粒をやや多く含む。外面には頸部まで煤が付着している。

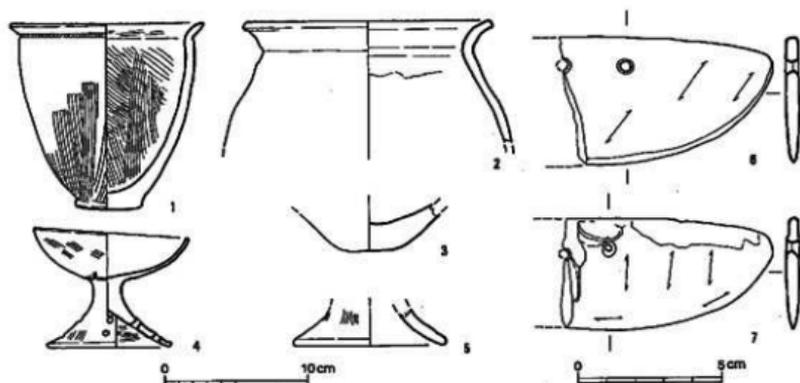
壺(2) 底径7.7cm、胴部最大径20.7cmで、底外面が凸レンズ状にふくらむ類である。内外面ともにナデしており、胎土に石英・長石等の砂粒を多く含む。焼成やや良好で、内外面ともに、乳灰色をなす。

鉢(3) 直線的に開く形態で、口縁寄りの方が下方より器壁が厚くなる特徴がある。外面はハケが残り、内面は丁寧にナデている。胎土に細砂粒を多く含む、焼成良好である。

以上の土器からみる限り、この第14号住居跡の時期は、弥生後期後葉と比定される。全体を発掘していないので明確にはできないが、既述した如く、ベッド状遺構の配置が異様であることから、住居自体はもっと新しくなる可能性もあることを付け加えておきたい。

第15号竪穴住居跡(第44図、図版 12・13)

東側の住居群に属し、側道部分をあとで調査したため、中央部に帯状に未調査部分が出てしまった。5.2×4.2mの長方形住居で、21.8㎡の中規模類となる。短壁沿いの両側にベッド状遺構を設け、南西角は南側へ80cmほど張り出して、その内側には小ピットがいくつか検出された。



第46図 第15号住居跡出土遺物実測図（石庵丁のみ1/2，他は1/4）

この張り出し部は第6号住居と全く同類であり，入口部分となると思われる。炉は中央にあり，壁際土壌は北辺ではみられなかったので，南辺中央の未掘部分に存在すると推定される。周壁溝は各壁の直下と，西側ベッドの内辺直下に顕著にみられ，板材打ち込み痕と考えられる。支柱穴は西側の1個が未掘部分に想定され，2支柱であったと思われる。

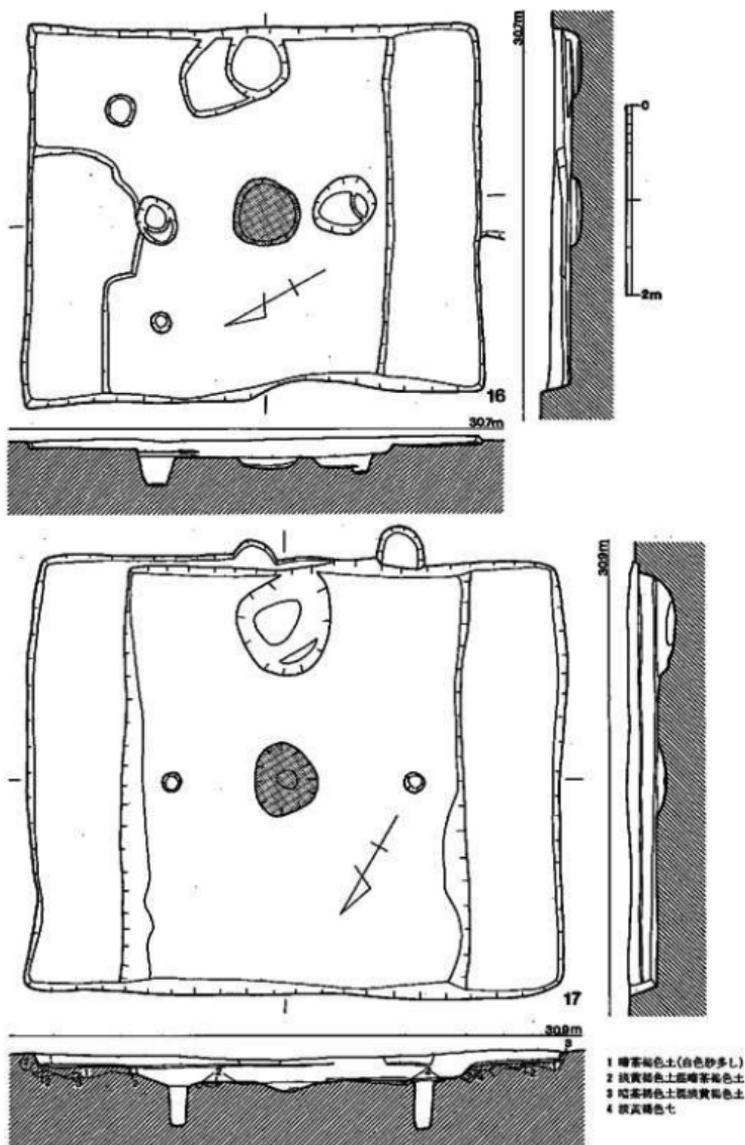
出土遺物（第46図）

甕（1・2）1は，口径13.6cm，器高13.2cm，底径4.7cmの小甕である。口縁は内面に稜をなして折れて外傾し，内外面ともにハケ調整を施すが，口縁内面から胴部外面上半にかけてはナデている。底部はわずかにふくらみをみせており，丁寧にナデている。胎土に細砂粒をやや多く含み，焼成は良好である。2は，張る胴部から丸く反転して開く口縁となる類である。口径17cmで，胴部は内外面ともに丁寧にナデている。胎土に微細砂粒をやや多く含む。

壺（3）底部片のみであるが，厚ぼったいつくりで，内外面ともにナデている。胎土に粗砂粒を多く含む。

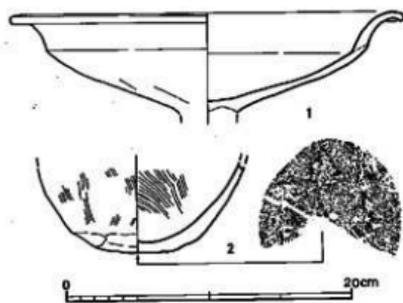
脚付鉢（4・5）4は，口径10.8cm，器高8.5～7.7cm，脚端径8.4cmで，薄手の内湾して開く鉢部に上半の充実した脚部を付けるものである。脚据部には，2個が縦に並んだ円孔が4ヶ所に配されているが，これらは焼成後の内側からの穿孔であり，強いて8個もの穴を穿たねばならなかった強い理由があったのであろう。鉢部内面はナデ，外面はハケをナデ消している。脚部外面はヘラ磨き，内面は横ハケを施す。胎土に微細砂粒をやや多く含む。5は，脚据部のみであるが，外面には縦ヘラ磨きが施されており，器台ではないことがわかる。内面は横ナデで，脚端径10.2cmとなる。胎土に細砂粒を少量含み，焼成良好で肌色をなす。

石庵丁（6・7）6は凝灰質粘板岩製で，現存長7.4cm，幅4.5cm，厚さ0.5cmとなる。2孔間は



第 47 图 第16·17号住居跡実測图 (1/60)

1.8cmで、両面から穿孔している。刃部の研ぎ出しは明瞭である。7も凝灰質粘板岩製で、現存長7.5cm、幅3.9cm、厚さ0.5cmとなる。2孔間は1.3cmと短い。この石庖丁の特徴は上下方向に極めて粗い擦痕が顕著であることで、剝離箇所が多いことから、全面的に研ぎ直しを行っていると思われる。



以上の出土遺物からこの第15号住居跡の時期をみてみると、1・2の要からみて新しい様相は認められず、弥生後期中葉と比定できる。

第16号竪穴住居跡 (第47図, 図版 14)

中央の住居密集群中の北寄りに位置する。4.7×3.9mの長方形住居で、面積18.3㎡の中型でもやや小さめの規模となる。両短辺沿いにベッド状遺構を設けるが、東北隅付近では切れており、隣接する第19号住居と同タイプとなる。炉は中央にあり、主柱穴は2本で、東壁中央内側に壁際土壌を掘り込んでいる。周壁溝は無い。

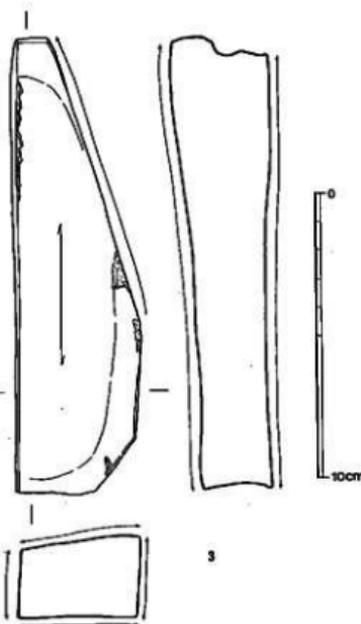
出土遺物 (第48図)

壺 (2) 床面出土品で、不安定な丸底に近い形態となる。底外面は削りに近い粗い工具ナデ、胴部内外面は磨滅しているがハケ調整が残る。胎土に砂粒を多く含む。

高杯 (1) 復原口径25.9cmで、杯部屈折部から長く延びて、端部が下垂するほど開く口縁となる。器表は全面磨滅している。胎土に細砂粒をやや多く含む。

砥石 (3) 粘板岩製の仕上げ砥で、長さ16cm、幅4.4cm、厚さ3.5cmとなる。表裏及び両側面ともに使用面である。

以上の出土遺物のうち、1・2は、第

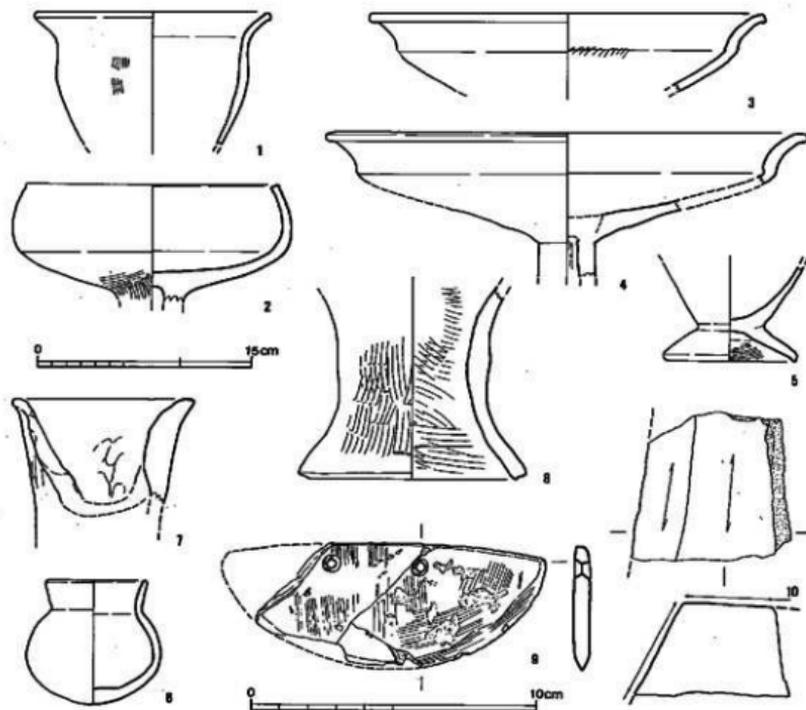


第 48 図 第16号住居跡出土遺物実測図
(砥石のみ1/2, 他は1/4)

10号住居跡出土遺物の中に同種のみがみられ、土器でみる限り、この第16号住居は古墳時代初頭期のものということになる。ただし、この住居の形態・構造の中には確かにやや新しい様相が無いことはないが、それほど下降するものとは思えない。あくまでも推測の域を出ないが、第10号住居が隣接していることから、後期終末期ごろに営まれたこの第16号住居が廃棄され、古墳初頭期の第10号住居の時期になって、格好の生活残滓捨て場となったと推測することもできる。

第17号壘穴住居跡 (第47図, 図版 15)

住居が最も密集する中央群の中ほどに位置する。5.6×4.6mの長方形住居で、面積が25.8㎡となり、中央住居群の弥生期のものでは第8号住居と同規模の大型の部類となる。短辺の両側に



第 49 図 第17号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 土器は1/4)

ベッド状遺構を設けるが、断面図にみる通り、地山を削り出したものではなく、ほぼ全体を盛っており、所謂貼り床構造をとっている。炉は中央にあり、主柱穴2個はベッド内側辺から20-30cm離れて内側床面に掘られている。壁際土壌は南東壁中央内側に在り、周壁溝は検出されなかった。床面も全体に小さな凹凸をならすように薄く貼り床調整されている。

出土遺物 (第49図)

脚付鉢(1・2・5) 1と5が同一個体ではないかと思われるため、1をこの器種に含めた。1は口径16.2cmで、外面にハケが残り、内側はナデている。5は脚端径9cmで、胴部内面はナデ、脚部内面は横ハケを施している。胎土に細砂粒を多く含む。2は、口径17.8cmのワイングラス状の内湾する器形をなす。鉢部内面下半はナデ、上半から口縁外縁までは横ナデ、外面下半にはへら磨きが施されている。

高杯(3・4) 3は、口径27.3cmで、杯部中途の屈曲部から上の口縁部は未だ長く延びてはいない。口縁部内外面は横ナデ、他は磨滅している。4は、復原口径32.2cmの大口径品で、基本的器形は3と大差ない。

器台(7・8) 7は、大きく抉りの入った類であるが、他住居出土例からみるとやや小ぶりである。外面にはハケ調整が、内面は強い指オサエナデが施される。口径10cmとなり、上下逆で特殊用途となる可能性もある。8は、下端径14.6cmで、内外面ともに粗いハケ調整である。

壺(6) 口径6.8cm、器高8.8cmの小壺で、わずかに尖り気味の厚い不安定な丸底となる。全面磨滅しており調整は不明である。胎土は精良である。

石庖丁(9) 不純物粒を多く含む赤紫色砂岩(凝灰質)で、現存長10cm、幅4.4cm、厚さは0.6cmとなる。孔は両面からの穿孔で、2孔間は2.8cmとやや長い。刃部以外の面の仕上げは粗くて、研磨の強い擦痕が各所に残る。

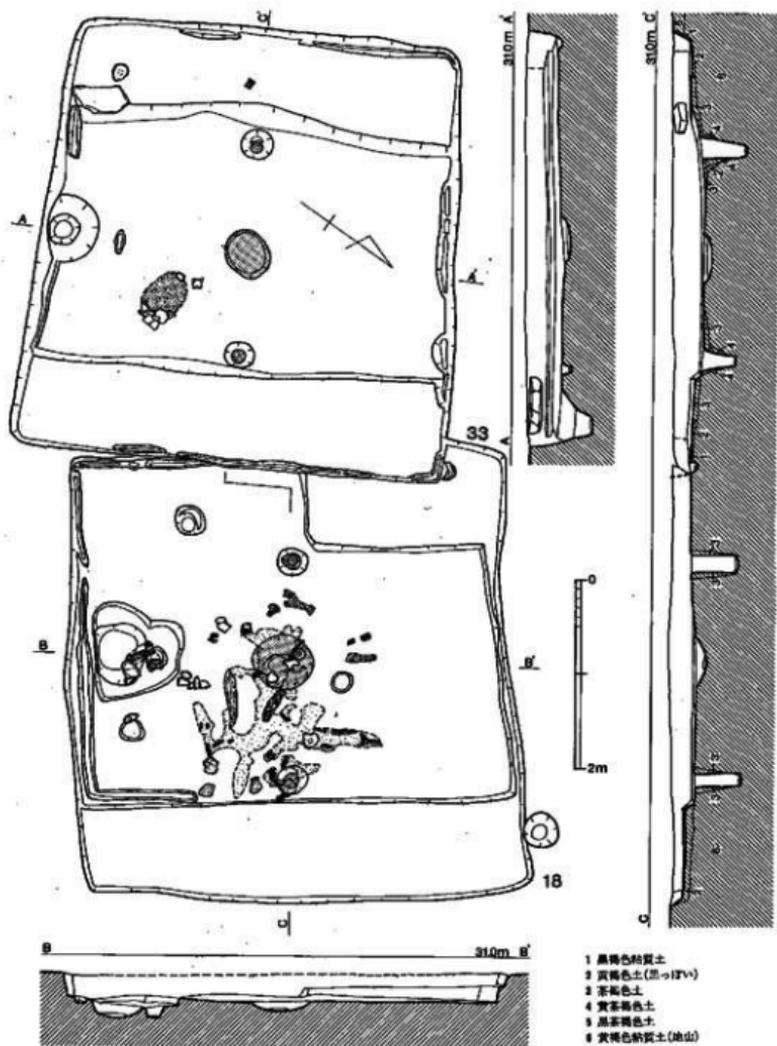
砥石(10) 粘板岩製の大型仕上げ砥の破片である。上面と側面をよく使用している。現存長5cm、幅5.6cm、厚さ3.2cmとなる。

鉄鏃(第32図-14) 無茎鏃で基部に丸く抉りを入れて脇抉部をつくり出している。長さ4.6cm、幅2cmで、藁か木皮の細紐のようなものを巻きつけたような痕跡がみられる。

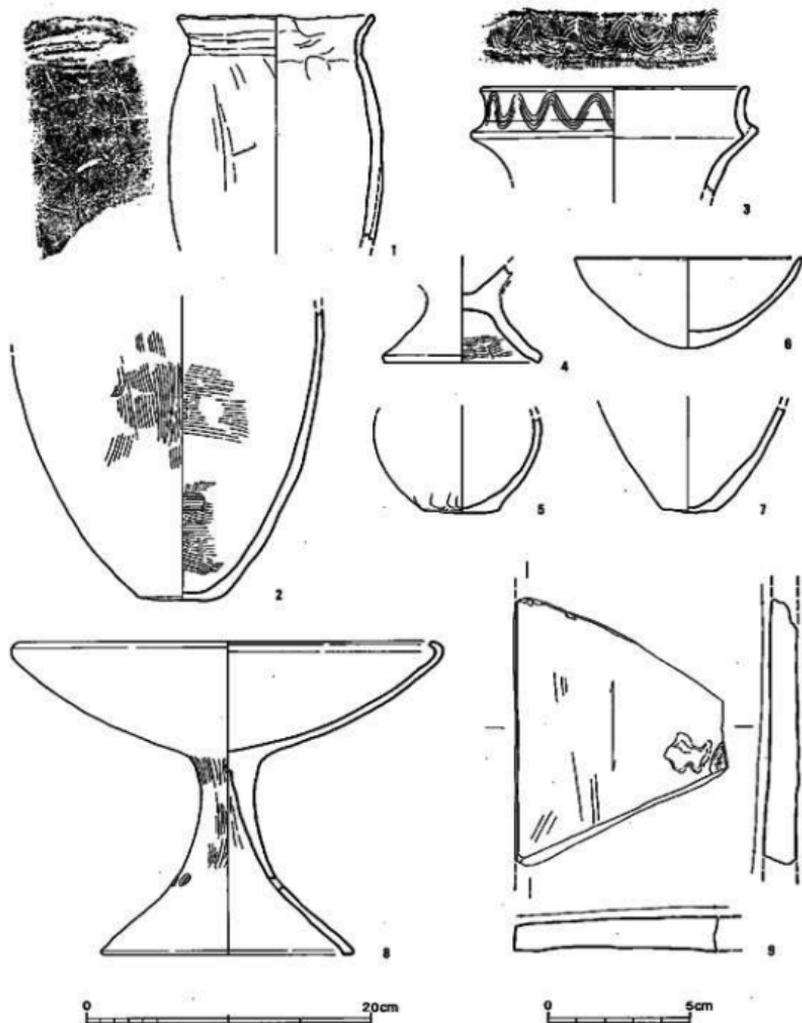
以上の第17号住居跡出土遺物は、高杯等からみて、弥生後期後葉の時期を示すと思われる。鉄鏃の出土は、穂摘具においては未だに石庖丁を用いていたにも関わらず、武器については既に鉄器化されており、両者の同時性が興味深く思われる。

第18号壘穴住居跡(第50図、図版 15・16)

遺跡中央の住居密集部の南寄りに位置する。西壁部分を第33号住居に切られる。4.8×4.6mの長方形住居で、22.1㎡となる中規模類である。東壁に沿って幅1mのベッド状遺構が設けられるが、西壁側は北半のみにベッドが検出された。このベッドは断面図に見る如く、その殆どを地



第 50 圖 第 18・33号住居跡夹测图 (1/60)



第 51 図 第18号住居跡出土遺物実測図 (砥石のみ1/2, 他は1/4)

山土である黄褐色粘質土で盛ったものである。主柱穴は2個で、この場合偶々、柱痕と柱穴掘方の関係が判明した。柱の直径は15cm強の細いものであり、掘方は柱径からみるとかなり狭いものである。

が中央に浅く皿形断面のものがあり、壁際土壌は東南壁中央内側に在り、土壌の更に内側に小ピットを有する。周壁溝は部分的に検出されたが、壁際土壌の住居壁側では、土壌と周壁溝が連結しておらず、住居壁面保護のための板材打ち込み痕であったと判断される。

なおこの住居は床面中央部近くで、炭化材・焼土がかなり検出され、焼失家屋であったことがわかる。土器も床面に当初のものがいくらか残っていて、住居の年代決定のために良好な資料となった。

出土遺物 (第51図)

甕(1・2・7) 1は、復原口径13.6cmで長胴となる異類である。頸部外面に粗い叩き痕が残る、胴部外面は板状工具でナデ消している。内面はナデしており、口縁内面には指頭圧痕を多く残している。製塩土器風で、特殊用途品と考えられる。2は、長胴甕下半部であるが、内外面ともハケ調整を施している。外面下半は剝離・赤変している。底部は薄く、凸レンズ状によくらみみせる。7は、胴部下半であるが、内外面磨滅して調整はわからない。底部は薄くなっており、わずかに下方へふくらむ。

壺(3・5) 3は、ほぼ垂直に外反りしながら立ち上がる口縁外面に帯目波状文を飾る複合口縁壺である。帯目は粗い4本で、施文法は稚拙である。器表は全面磨滅している。口径18.6cmを測る。5は、胴部下半で、わずかに凸レンズ状によくらむ底部となる。内外面ともにナデしており、小ぶりの壺となる。

台付鉢(4) 幅広い脚台部分で、脚端径10.9cmとなる。裾部内面は横ハケ、鉢部内底面はナデている。

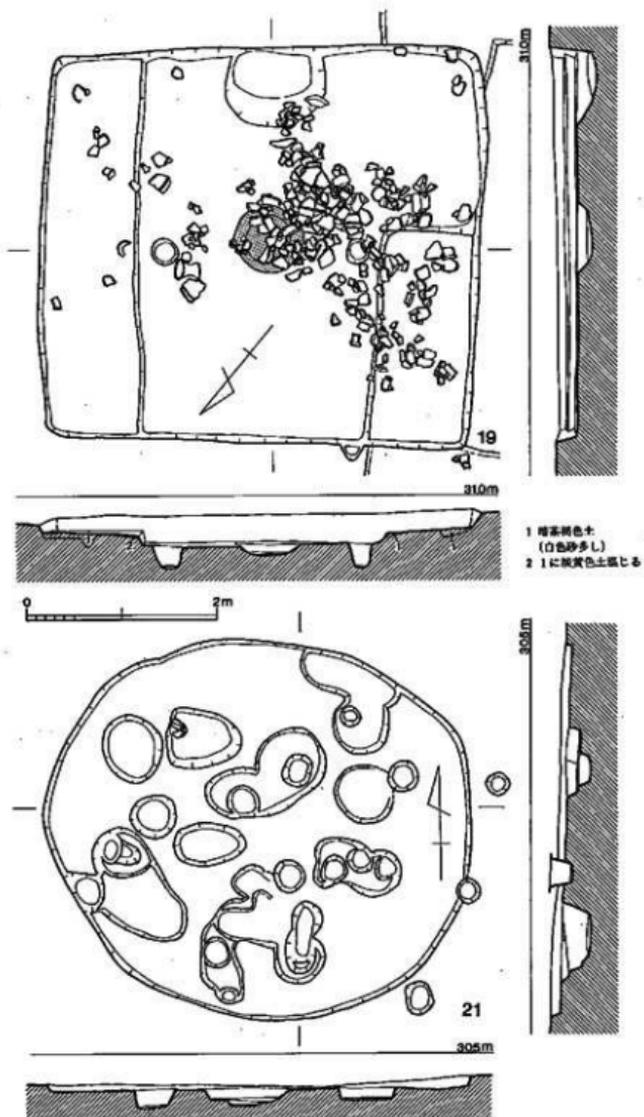
鉢(6) 口径15.8cm、器高6.6cmの不安定な尖り底からわずかに内湾気味に開く類となる。内面は板ナデ、外面は磨滅している。

高杯(8) 口径29.6cm、器高22.1cm、脚端径17.7cmとなる大ぶりな類である。口縁端は内側へ強く曲げており、杯部内面はナデ、外面は磨滅、脚柱部外面は縦位のヘラ磨きが施される。脚部中位には小円孔が2個横並びで2ヶ所対称位置に配されている。焼成後の穿孔である。

磁石(9) 良質の粘板岩製仕上げ磁で、現存長9.4cm、幅7.5cm、厚さ1.2cmである。表面だけが使用面で、裏面はかなりの擦痕や部分的研磨部もあるが使用面ではない。

鉄鏃(第32図-15) 長さ6.1cm、最大幅1.2cmほどの茎を持った柳葉形鉄鏃と考えられる。ただ鏃先と茎との間が跡で形状を明確にできない。

以上の第18号住居跡出土遺物から時期を考えてみたい。1の甕は異類で時期の判断は困難であるが、第33号住居出土の同種の甕が内面へラ削りであることからすると、より古い時期とさ



第 52 図 第19・21号住居跡実測図 (1/60)

れよう。3の複合口縁壺の口縁が立ち上がっていることは、後期終末期を示すものであろう。2・7のおずかに下方へふくらみをみせる底部も小さく不安定になってきている。このように多くの土器は後期終末であるが、住居自体は第33号住居に切られるため、古い土器の時期をとって弥生後期後葉期の所産と推定できる。

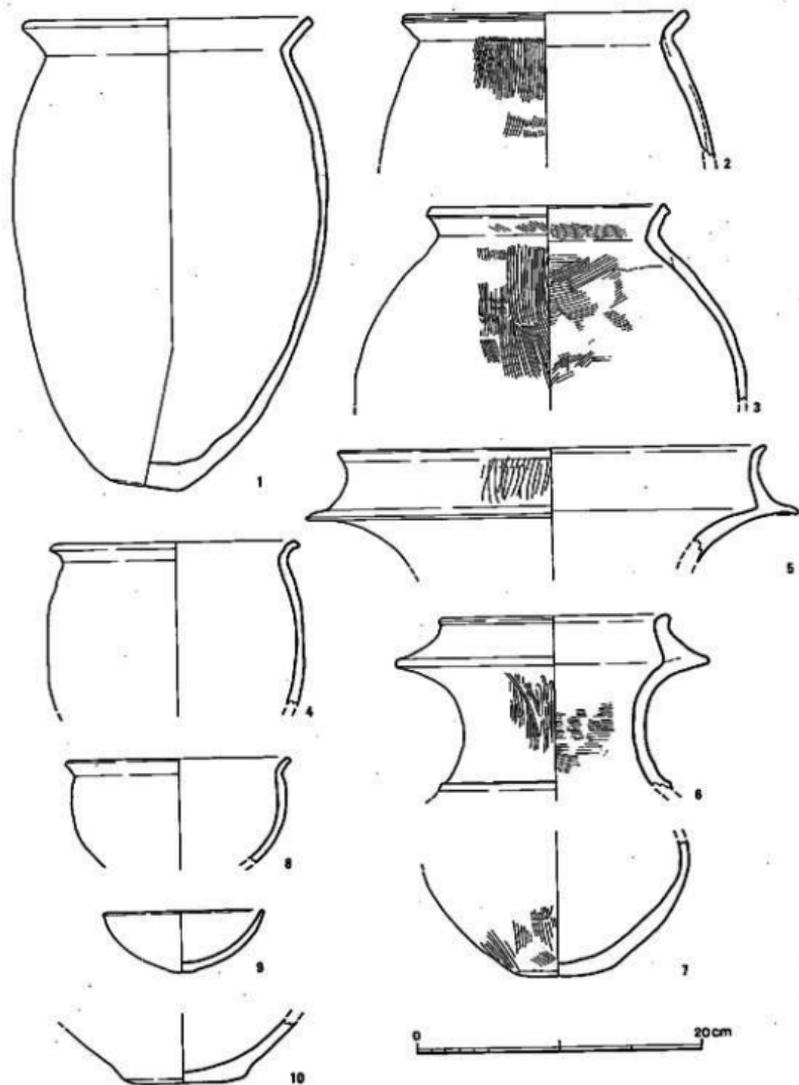
第19号竪穴住居跡（第52図、図版 16・17）

遺跡の中央部、住居の群集する部分の西南端近くに位置する。第12号土塋を西隅で切り、第13号土塋に南隅で切られている。4.6×4.1mの長方形住居で、面積が18.9㎡の中規模類となる。東西両壁沿いにベッド状遺構を設けるが、西側のものは北半部のみで南半部は無い。このベッドも断面図に見る如く、部分的に貼った構造となっている。主柱穴は2個で、ベッド内辺から20cmほど内側にある。炉は床面中央にあり、東南壁中央内側には壁際土塋が掘り込まれている。周壁溝は検出されなかった。この住居覆土中からは、甕棺様的大型土器を含めて大量の土器が出土した。明らかに住居廃棄後の碟等ともども投棄されたものである。

出土遺物（第53図）

壺（1～4）1は、内面にシャープな稜をつくり、直線的に外傾して開く口縁に、胴部中位に近い上半に最大径をもつ長胴類となる。復原口径19.7cm、器高33.5cm、胴部最大径22cm、底径5.2cmとなる。底部はわずかに凸レンズ状にふくらみをみせる。胴部内面は凹凸のはげしいナデ、外面は丁寧になデている。外面中位以下は二次加熱により剥落したり、著しく焼けこげている。胎土に石英・長石・ガラス質粒・暗赤褐色粒等を多量に含んでいる。焼成は良好で、外面は暗乳灰色～黒褐色、内面は暗黄灰色～褐色をなす。2は、口径13.6cmで、胴上半で張る胴部から丸みをおびて屈曲外反する口縁となる。胴部外面は縦ハケ、内面はナデている。口縁端部に一条の細い沈線を入れている。口縁外面には煤が付着し、胴部外面も焼けこげている。3は、強く張る胴部を持つ、壺に近い形態をなす。口径16.4cm、胴部最大径27.6cmで、口縁内面下半は横ハケ、外面はハケをナデ消している。頸部内面は横ナデ、胴部内外面はハケ調整を施している。胎土に石英・長石・角閃石・白色粒等の細砂粒を多く含む。焼成良好で、内外面ともに暗橙褐色をなす。胴部外面下半には焼けこげ部分がみられる。4は、復原口径16.8cm、胴部最大径18cmの、胴上半でいくらか張る程度の甕である。頸部は丸く屈曲している。胴部は内外面ともナデている。

壺（5～7・10～12）5は、口縁端が外方へ短く折れ曲がるタイプの複合口縁壺で、復原口径29.7cmとなる大型品である。上下口縁接合部の外方への張り出しが長い。立ち上がり部外面には目の粗い縦ハケが施される。6は、立ち上がり部が厚く、いくらか内傾する程度で、5と比べて対称的である。頸部内面は横ハケの上をナデており、外面には縦へら磨きが施される。口径15.7cmで、頸部と胴部の境目には断面三角凸帯が付けられる。7は、凸レンズ状にふくらむ



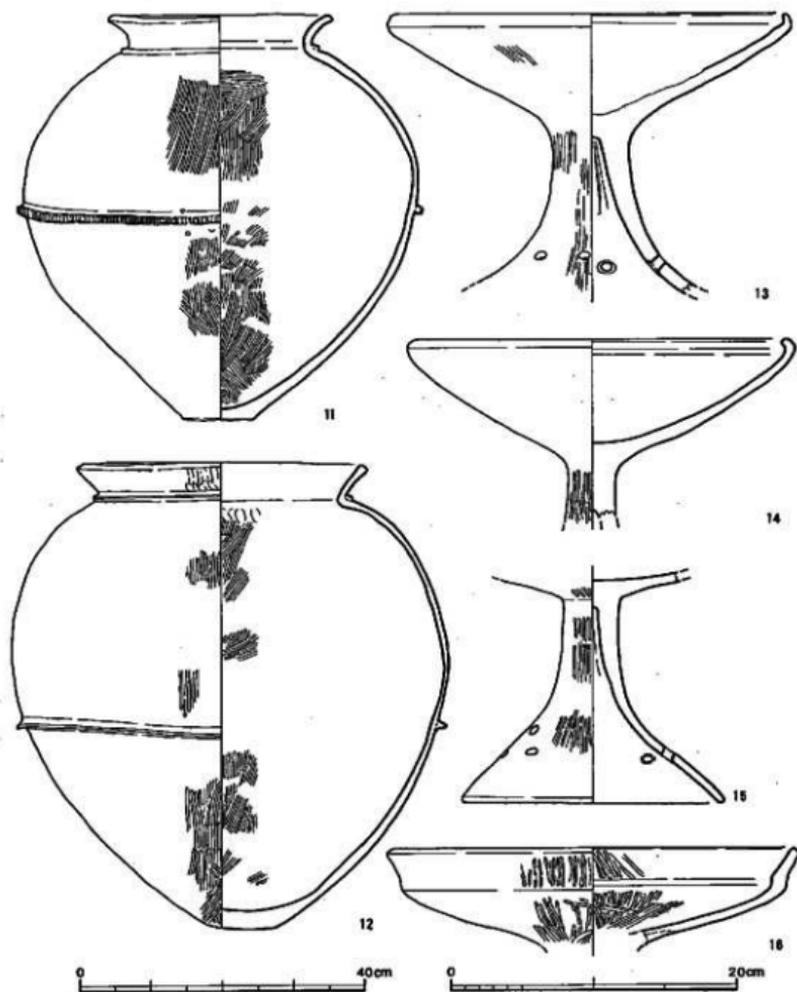
第 53 図 第19号住居跡出土遺物実測図 (その1) (1/4)

底部となる下半部である。内面はハケをナデ消している。胴部外面は雑な縦ハケ、底外面はナデている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で、内外面ともに肌色をなす。10も凸レンズ状にふくらみをみせる底部である。底径8.5cmで、内外面ともにナデている。11は、口径30.2cm、器高57.3cm、胴部最大径55.6cmの大型壺である。頸部で丸く屈曲して内湾気味に開く口縁となる。頸部外面には低い三角凸帯を付け、胴部中位にはへらによる刻目を施す断面コ字形凸帯を付ける。この凸帯の上面およびその上下には一部に竹管文がみられ、上下のものはナデ消されている。胴部は内外面ともにハケ調整のままであるが、外面下端付近はナデ消されている。胎土に石英・角閃石・雲母・暗赤褐色粒等を多量に含み、焼成は良好で、外面は橙色～橙灰色、内面は橙褐色をなす。底部は平底である。12は、口径38.8cm、器高65.6cm、胴部最大径62cmとなる。口縁は直線的に開き、胴部は上半で強く張る。頸部外面に低い三角凸帯、胴中位より下がった位置に高い三角凸帯を付けている。口縁外面と頸部直下内面には指押圧痕が残り、胴部内面はハケの上をナデている。外面は縦へら磨きを施すが、一部に横位叩き痕が残っている。底部は直径9.7cmで凸レンズ状にふくらむ類となる。胎土に暗赤褐色粒・石英・白色粒・雲母等を多く含み、焼成良好で、外面は肌色、内面は暗黄灰色に近い肌色をなす。

鉢(8・9) 8は、復原口径15.3cmで、丸く立ち上がる体部から反転して短い口縁となる器形である。内外面ともにナデている。9は、復原口径11.3cm、器高4.3cm、底径1.2cmの小さな平底から内湾気味に開く器形となる。内面はナデているが、外面は磨滅しており調整不明。

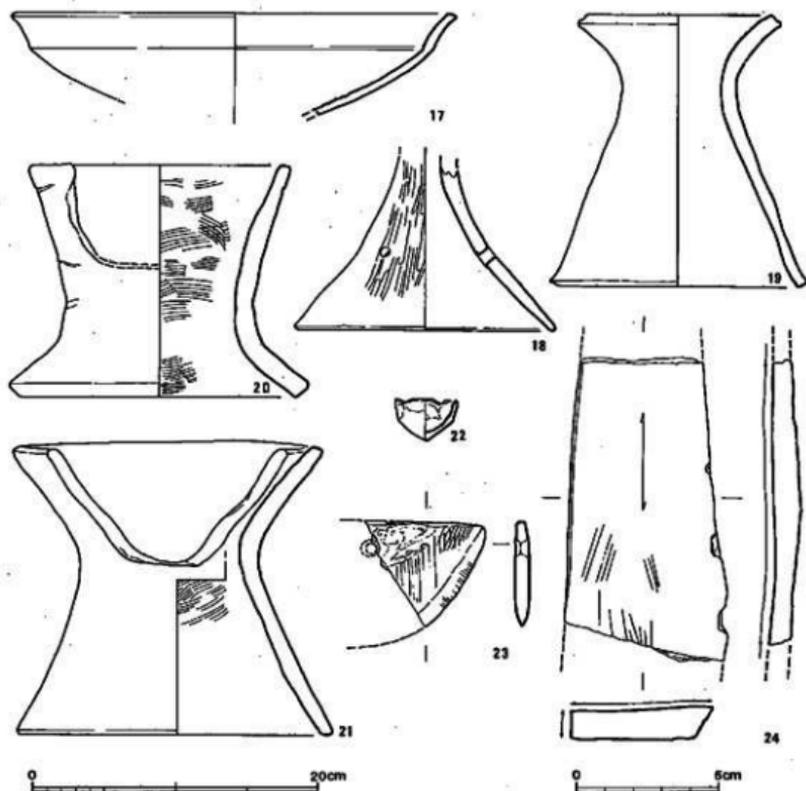
高杯(13~18) 短い内曲げ口縁となるタイプで、復原口径27.3cmとなる。脚裾には、焼成前に穿った、横に2個づつ並ぶ円孔が3ヶ所に配されている。内外面ともに磨滅しているが、杯部内面はナデ、外面は脚部までへら磨きが施されている。14は、口径26cmで内曲げ口縁が13よりも強く曲がる類となる。脚柱は上半が充実している。杯部内面はナデ、外面はへら磨きかと思われる。脚柱外面は縦位のへら磨きで飾っている。15は、脚部のみで、脚端径18.1cmとなる。裾部下半はわずかに内湾気味に開く。裾には焼成前に穿った円孔が、3個を1組として、対称となる位置に2ヶ所配されている。この3個1組は正三角形の角の位置を占めるように穿たれている。外面はへら磨きが施され、脚内面下半は板ナデを施している。16は、復原口径18.2cmで、杯部中途の屈曲から上は部厚く短い特異な形態をなしている。内外面ともにへら磨きが施されている。17は、口径30.5cmで、杯部上半で屈折して開く標準タイプであるが、口縁が未だ短かめである。口縁内外面は横ナデ、体部は内外面ともに丁寧にナデている。18は、脚端径18cmで、下半部は直線的に開く。焼成前の外からの穿孔が1個ずつ3ヶ所に配されている。外面はへら磨きで、内面はナデている。

器台(19~21) 19は、上半で締まるタイプで、上端径12.8cm、器高19.2cm、下端径16.6cmとなる。上端面は凹状となり、内外面ともナデしており、全体に精製品の部類となる。外面下端の一部に焼けこげがみられる。20は、片側を大きく抉った類で、上端径16.8cm、器高16.4cm、下端



第 54 図 第19号住居跡出土遺物実測図 (その2) (11・12は1/8, 13~16は1/4)

径19.4cmとなる。内面は横ハケ、外面は叩きやハケ工具痕の残るナデを施している。21も同様

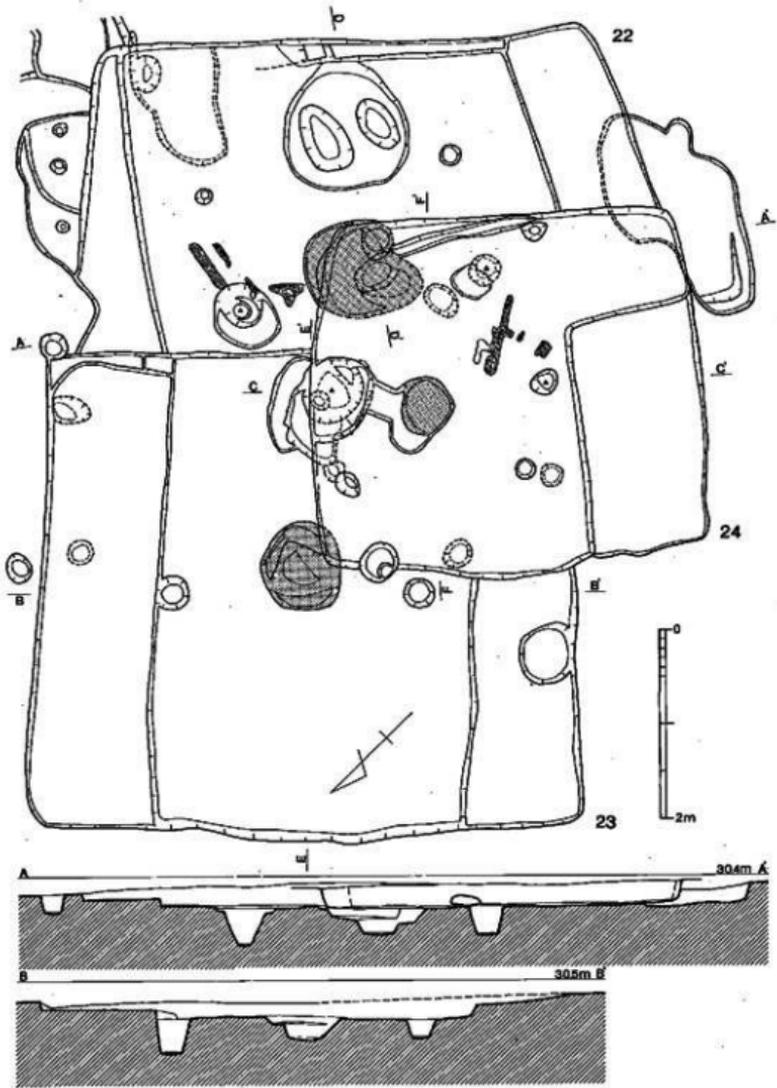


第 55 図 第19号住居跡出土遺物実測図(その3)(石器類は1/2, 他は1/4)

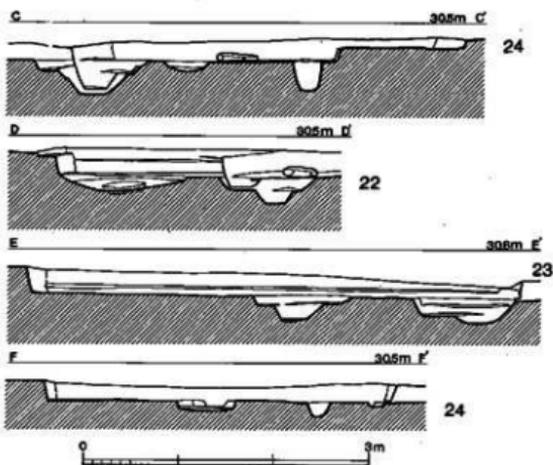
であるが、上下逆となって特殊用途品であった可能性もある。21は、上端径20.5cm、器高20.9cm、下端径21.5cmで、V字形に抉っている。外面はナデしており、内面は中位にハケを残してナデている。

手捏ね土器(22)口径4.1cm、器高2.9cmで、尖底となる稚拙品である。内外面ともに、指オサエナアのままである。

石庵丁(23)小豆色の凝灰岩製で、現存長4.2cm、同幅3.7cm、厚さ0.5cmとなる。孔は両面から穿孔している。



第 56 図 第22・23・24号住居跡実測図 (その1) (1/60)



第 57 図 第22・23・24号住居跡実測図 (その2) (1/60)

磁石 (24) 粘板岩製の仕上げ砥で、現存長10.8cm、幅5.7cm、厚さ1.1cmの薄片品である。表面と左側面を使用しており、裏面と右側面は未加工のままである。表面には金属利器先端によるキズがいくらかみられる。

以上の第19号住居出土遺物は多量で、多器種にわたる。特に2個の大型壺は、竈棺を思わせるほどのもので、明らかに住居廃棄後に投棄されたものが多いと思われる。土器は大別して2時期に分けられる。1・5・6・14・18などの後期後末期に近いものと、その他の甕・壺・高杯等のより古相を示すものとのである。ここでは住居跡の時期として、弥生後期後葉を考えておきたい。中でも後期中葉により近い時期と思われる。

第21号竪穴住居跡 (第52図, 図版 19)

遺跡中央の群集する住居の北西端に位置する。4.5×4.0mの楕円形住居で、面積は14.2㎡となる小型住居である。主柱穴は明確でない。穴の位置からみると5～6本がめぐるともみえるが、整然と並ぶ訳ではなく、深さも揃わない。炉は住居内外に検出されず不明である。周壁溝もみられない。

出土遺物は、縄文土器片のみで既に掲載した(第7図)。当初は縄文後晩期の住居かとも考えたが、周囲が縄文期の包含層であり、住居形跡が弥生前期円形住居の第1号住居と酷似するため、この第21号竪穴住居も弥生前期のもので、縄文期遺物は混入品と考えたい。

第22号竪穴住居跡 (第56・57図, 図版 19)

遺跡の西側に蛇行する谷 (本来河川か) があり, その西側に住居のグループがある。その中の南端に3軒が切り合っているものがあり, 当住居はその中で最古となる。北西側の大半を第23・24号住居に切られている。面積が29㎡前後となると推定される大型住居である。

両側壁沿いにベッド状遺構を設けるが, 北東辺のものは上面の削平が著しかったために住居壁のラインが確定できず, 変な形となったが, 本来の住居壁ラインはもっと東側で, その壁に沿った幅1mほどの通常のベッドと同じであったと考えられる。

炉は中央に在り, 支柱穴は2個で北東-南西に棟をとる住居であったことがわかる。壁際土壌はだらだらとして不明確であるが, 壁からは若干離れている。周壁溝は認められない。床面には炭化材が残り, 焼失家屋であったと思われる。

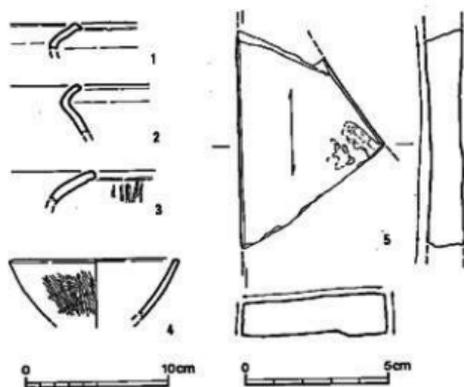
出土遺物 (第58図)

壺 (1・2) 1は, 頸部内面に稜をつくり, 折れて, 外方へ直線的に開く口縁となる。口縁部はシャープな面をなしている。胎土は細砂粒をわずかに含むのみで, 焼成良好である。2は, 張る胴部から丸く屈曲して外反する口縁となる。胴部内面はナデ, 外面は磨減している。

高杯 (3) 口縁部の小片である。外面には横ナデの上から縦位へラ磨きが施されている。胎土に細砂粒を多く含む。

鉢 (4) 復原口径11.4cmで, 外面は縦ハケの上に粗いへラ磨きを施している。胎土に微砂粒を少量含むのみで, 焼成良好で内外面ともに暗灰黄色をなす。

砥石 (5) 粘板岩製の仕上げ砥で, 上面と両側面を使用している。裏面は凹凸があり未調整。



第58図 第22号住居跡出土遺物実測図
(砥石のみ1/2, 他は1/4)

鉄鎌 (第32図-16) 床面出土品で, 全長11cm, 鎌幅7mmほどで, 細根鎌の形態をしている。先端は丸くなり, 錆で詳細が今ひとつ明確につかめないが, あるいは小型ノミ状の木工具の一種となるのかもしれない。

鉄鎌先 (第32図-17) 断面が鋭角なV字形となるソケット式の鎌先片である。幅は2.0~2.7cmで, 厚さは1cmほどである。これも床面出土品で, 刃部の幅がせまく厚手のつくり

のため、鋤先ではなく、開墾耕具用の鋤先と考えた。

甕1は明らかに終末期のもので、2とは時期が異なる。3軒の切り合いで最古の住居であることを考えると、2の弥生後期中葉（～後葉）を当住居の年代と考えたい。

第23号竪穴住居跡（第56・57図，図版 19）

前述の第22号住居を切つて、南側を第24号住居に切られた長方形住居である。5.65×5.2mで面積が29.4㎡となり、本遺跡内での弥生後期住居では最も広い大型住居である。東西両壁沿いにベッド状遺構を設け、中央に炬を掘り込んでいる。支柱穴は2個で、南壁際中央に壁際土壌を設ける。この壁際土壌中央部には、第24号住居の2支柱穴のうち北東側の柱穴が切り込んでいる。周壁溝は検出されなかった。

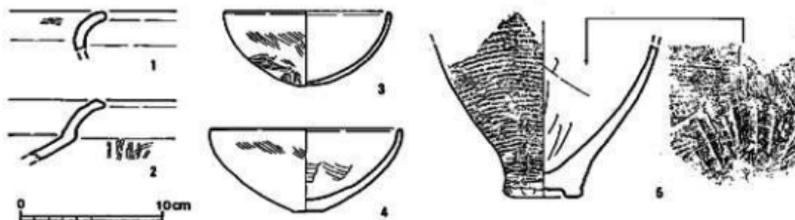
出土遺物（第59図）

甕（1・5）1は、丸味をおびて外反する口縁片で、内側にわずかにハケが残る。胴部内面はナデている。5は、外面に粗い横位肌を施した特徴的な下半部である。底径5.5cmで、内側のみが上げ底となる器形である。内面はハケをナデ消しており、胎土には砂粒を多く含んでいる。焼成は良好である。

高杯（2）杯部屈曲部から上は短く、端部がわずかに肥厚気味となって外方へ突出する特徴をもつ。口縁部内外面とも横ナア、体部外面はナアの上を縦位へラ磨きする。内面はナデている。胎土精良で、焼成良く、肌色をなす。

鉢（3・4）3は、薄手で、不安定な丸底から内湾して立ち上がる器形で、口径11.7cm、器高5.2cmとなる。体部外面は斜位のハケを施し、下半にはへラ磨きを施す。内面は丁寧になデている。細砂粒を少量含むのみで、焼成良好、外面は暗橙灰色、内面は暗褐色をなす。4は、口径13.4cm、器高5.8cm、底径2.1cmの、上半が内湾気味となる類である。内面はハケをナデ消しており、外面はハケ及び下半は板ナアを施している。

鉄鏃（第32図-18）床面出土品で、長さ5.4cm、幅2.8cm、厚さ3mm弱となる。基部を丸く抉つ



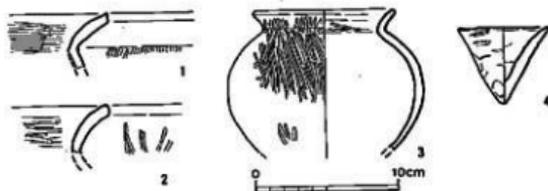
第59図 第23号住居跡出土土器実測図（1/4）

た無茎甕で、貴重な資料である。

以上の第23号住居跡出土品から年代を考えてみよう。5は甲きの顕著さや底部形態の異様さからみて、特殊用途のものと考えられる。或いは、本遺跡出土例が他に無いことから、他地方からの移入品かとも考えられる。1・2からは当住居が弥生後期後葉の時期であることがわかる。鉄鏝も該期のものとして貴重である。

第24号壘穴住居跡 (第56・57図, 図版 20)

前述の第22・23号住居を切って営まれている。4.1×3.6mの長方形住居で、面積14.8㎡となる小型住居である。南西壁に沿ってベッド状遺構を設けているが、南隅部分は切れている。炉は、床面中央ではなく、北東壁寄りに浅く掘り込まれている。支柱穴は2個であるが、北東側の1個は小規模住居の制約を受けて、北東壁際に掘られている。壁際土塊は検出されなかった。周壁溝は、南東壁沿いにのみ幅の広い類が認められた。床面には若干の炭化材と焼土片がみられ、焼失家屋であった可能性も強い。



第60図 第24号住居跡出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (第60図)

甕(1)内面にシャープな稜をつくり、口縁外端もシャープで、口縁内面は横ハケ、外面には横ナデが施される。胴部外面には縦ハケが施さ

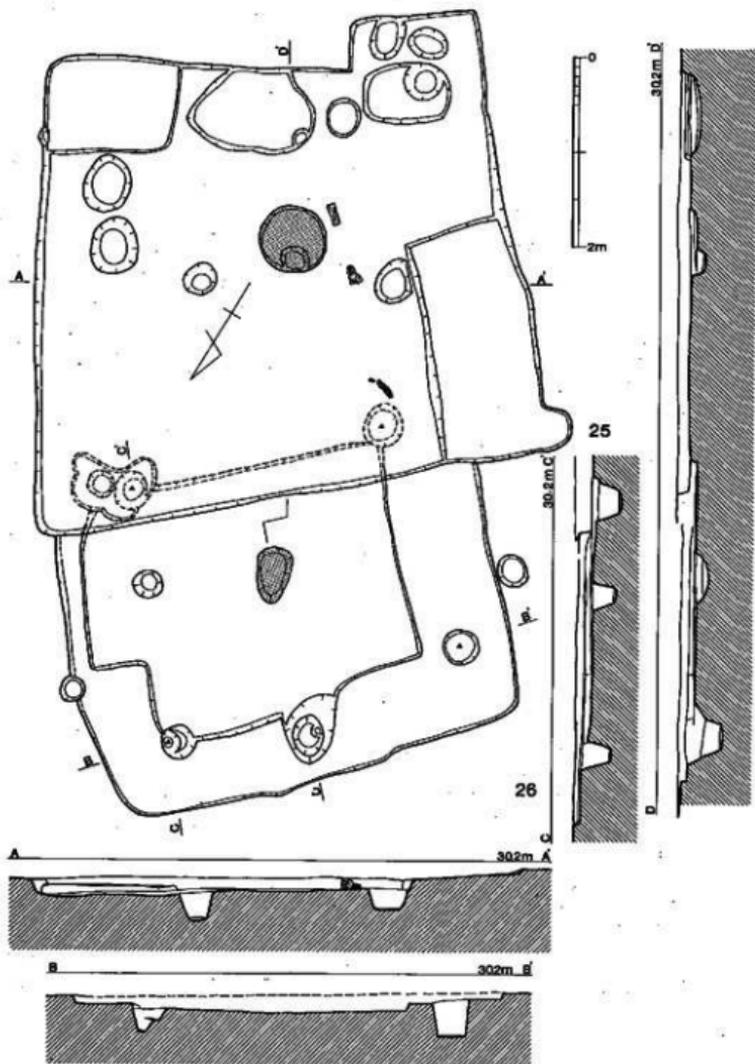
れている。胎土精良である。

甕(2・3)2は、内面に横位へら磨き、外面には横ナデの上に縦位へら磨きが施される。胎土には細砂粒を少量含むのみである。3は、口径9.6cm、胴部最大径13.8cmとなる。短く外反する口縁に球形胴を有するもので、口縁外面から胴部外面上半にかけてはナデの上に縦へら磨きを施し、外面下半には板ナデの上にへら磨きが施される。口縁内面は横へら磨き、胴部内面は丁寧にナデられている。胎土精良で、焼成やや良好である。

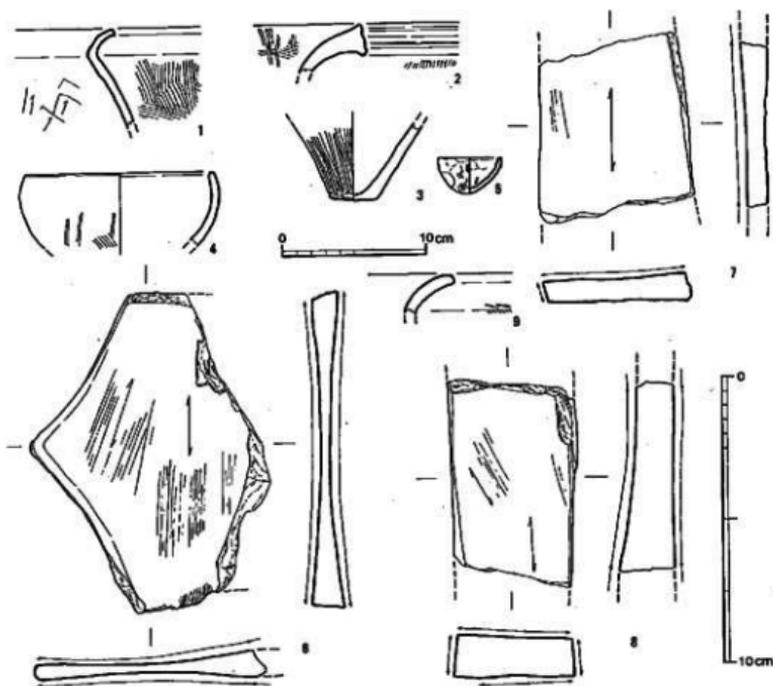
手捏ね土器(4)口径6.5cm、器高5.4cmで尖底となる器形である。外面は叩き痕の残るナデで、内面は強い指ナデが残る。

小型鉄斧(第33図-19)長さ6cm、幅2.2cm、袋部厚さ1.5cmとなる小型品であるが、ミニチュアではなくて、手斧あるいはノミ等の用途であったと推定したい。

以上の第24号住居跡出土品から考えられる住居の時期は、1が示す弥生後期終末が妥当な年代であろう。



第 61 图 第25·26号住居跡实测图 (1/60)



第 62 図 第25・26 (9のみ) 号住居跡出土遺物実測図 (砥石は1/2, 土器は1/4)

第25号竪穴住居跡 (第61図, 図版 20)

谷1の西側に位置し, 第26号住居跡を切る。全体に歪つな形となるが, 平均して5.0×4.6mの長方形住居となり, 面積23.0㎡の中規模類に含まれる。西壁沿い北半部と東隅部にベッド状遺構を設けている。南隅部は張り出しており, 入口を示すものと考えられる。床面中央よりやや南寄りに浅い炉が掘り込まれ, 南壁中央内側に壁際土壇を付設している。主柱穴は2個と考えられるが, 深さがやや浅いのが気になる。床面に炭化材が若干残っており, 焼失家屋の可能性がある。周壁溝は検出されなかった。

出土遺物 (第62図)

壺(1)胴張りはするが, 胴部内面はヘラ削りを施している。外面は雑なハケ調整である。口縁外端はシャープに平面をなしている。

甕(2・3) 2は、肥厚させた口縁端面に2条の凹線を巡らす。内面はハケの上をへら磨きしている。外面は縦ハケを施す。胎土に石英・白色粒等をやや多く含む。焼成良好で、外面は暗赤褐色、内面は暗褐色をなす。吉備地方の土器であろう。3は細くすばまった異様な底部で、外面は底部までへら磨き、内面はナデている。底面はわずかにふくらみをみせる。胎土には細石英粒を少量含むのみで、焼成良好である。外面は暗黄灰色、内面は黒灰色をなす。この底部も東瀬戸内系の移入土器であろう。

鉢(4) 口径13cmで、内湾して立ち上がる器形となる。内面はナデ、外面はナデの上をへら磨き、ハケがわずかに施される。

手捏ね土器(5) 口径4.2cm、器高2.6cmのミニチュアである。外面にはハケがみられるが、全体に指オザエ痕が顕著である。

砥石(6~8) 6は粘板岩製仕上げ砥で、長さ11.2cm、幅8.4cm、厚さ1.1cmとなる。表裏と左上辺の側面が使用面で、極めてよく使い込んでおり、中央では厚さわずか3mmになっている。下端側面は割れた後に、ノミ状工具で縦方向に削っている。7は、薄手の粘板岩製仕上げ砥で、現存長6.5cm、幅5.4cm、厚さ1cmとなる。表面と左側面を使用しており、裏面は粗く磨いてはいるが、使用面ではない。8は、床面出土の粘板岩製仕上げ砥で、現存長7.2cm、幅4.5cm、厚さ2cmである。表裏両側面ともに使用面で、裏面片側縁には未調整部分もある。

以上の第25号住居跡出土品から時期を確定するのは困難であるが、4本主柱の第26号住居跡を切って営まれていることや、1の甕が内面へら削りを施し、庄内期併行の様相をみせていることなどから、古式土器最古段階前後の古墳時代初頭期と考えられる。

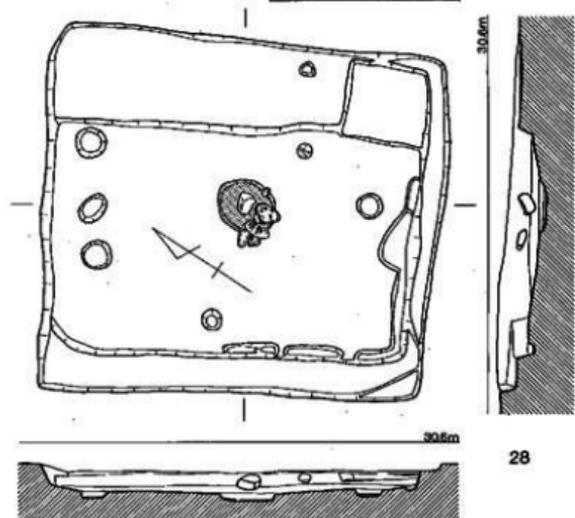
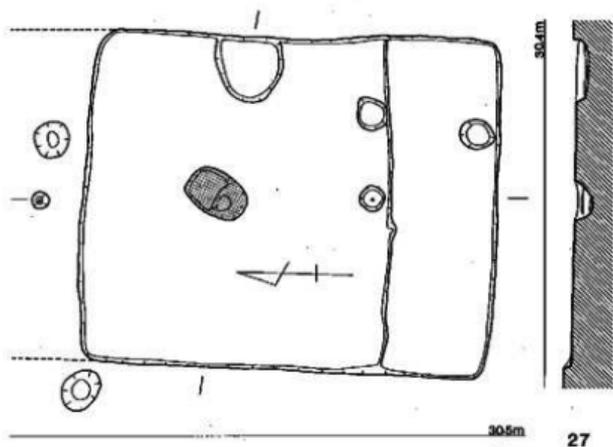
第26号甕穴住居跡(第61図、図版 20)

遺跡西側の谷1の西側住居群中に位置する。南東側を第25号住居跡に切られている。一辺4.5mの方形住居になると思われ、20㎡弱の中規模類となろう。四周にベッド状遺構を設けるが、東壁沿いは中央が狭くなる。4主柱穴となり、床面中央に小さな炉を設け、北西壁沿い中央に深い壁際土壇を掘り込んでいる。周壁溝は検出されなかった。

出土遺物(第62図)

甕(9) 口縁小片で全体の器形がわからないが、口縁端面に面はつくるが丸味をおびた感じで第25号住居出土の甕1ほどシャープではない。内外面とも横ナデで、胴部外面はハケ調整のようである。

以上の第26号住居跡は、出土土器のうち図示できるものも上記1点のみで、時期確定はむづかしい。庄内式併行期の第25号住居に切られているが、すでに4本柱となった構造で、土器片からみても、弥生終末期を遡るものではない。よって、当住居は弥生後期最終末乃至古墳当初期のもと考えられる。



第 63 图 第27・28号住居跡実測図 (1/60)

第27号竪穴住居跡 (第63図, 図版 21)

谷1の西側住居群中にあり、前述の第25・26号住居の西隣に位置する。短辺が3.5mで、北半が削平されているため、確実な北壁が確認できなかった。中央炉を挟んで丁度対称位置にある2柱穴が主柱穴になるとすれば、南北方向に6.1mほどとなる長方形住居と推定することもできよう。南辺沿いに、幅1.1mほどのベッド状遺構を設けているが、北辺にも対となるベッドがあったかどうかは判からない。床面中央に炉が掘り込まれ、東壁内側中央に壁際土壌がある。周壁溝は検出されなかった。

出土遺物は無く、時期は決め難いが、住居の構造からみて、弥生後期後葉～終末期の幅の中に収まるものであろう。

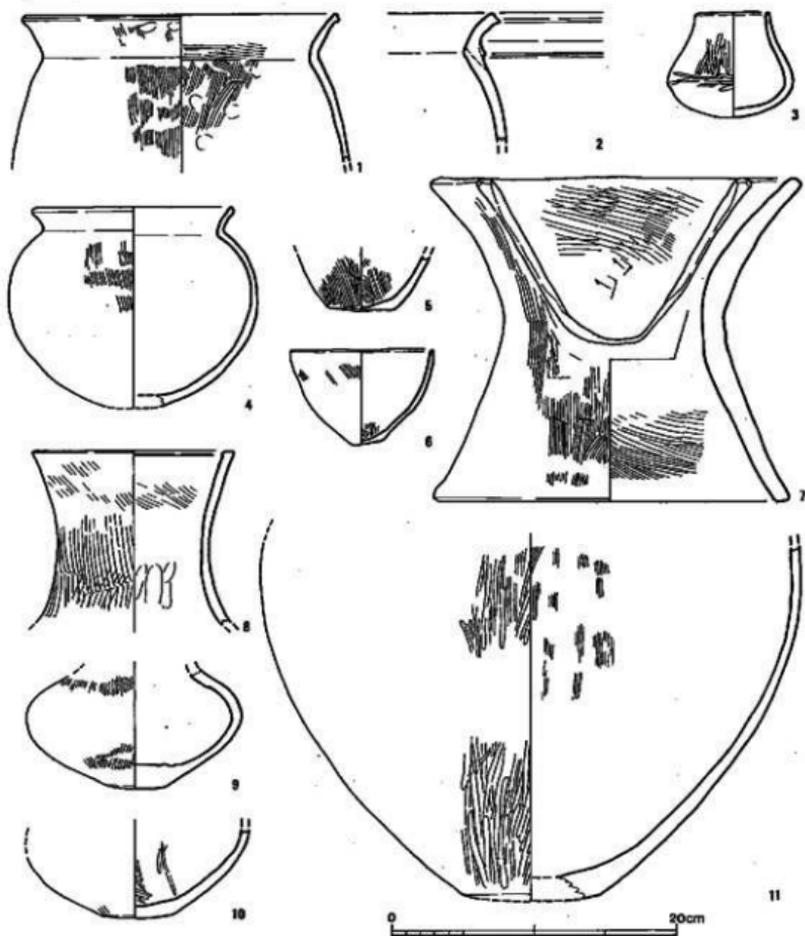
第28号竪穴住居跡 (第63図, 図版 22)

谷1の西側住居群中に位置する。4.2×3.7mの長方形住居で、面積15.5㎡となる中型類でも最小規模の小型類に近いものである。ベッド状遺構は東壁沿いのみに設けられており、東南隅は一段低くなっている。炉は中央にあり、その上部には大形の器台や礎が残存していた。床面には幾つかの小ピットがみられるが、主柱穴になりそうなものは無い。壁際土壌も検出されず、小規模住居故の傾向かと思われる。周壁溝は部分的に認められるが、板材打ち込み痕と考えられる。

出土遺物 (第64図)

甕(1・2・5) 1は、口径11.8cmで、やや長めの口縁があまり開かず、胴部もそれほど張らない器形である。口縁外端面は凹状となり、口縁内面下半は横ハケ、胴部内面は縦ハケの上をナデしており、外面は縦ハケを施している。外面には上まで煤が付着している。2は、頸部内面にシャープな稜をつくり、外面には低い三角凸帯を付ける大型甕片である。口縁外端面は凹状となり、口縁内外面から頸部内面稜下2cmまでは横ナデ、胴部内面は磨き風のナデ調整を施している。胴部外面は磨滅しており調整不明。5は、底径4.6cmの小甕の底部である。胴部外面は縦ハケ、内面はハケの上をナデている。底外面は板ナデで、胎土精良である。

壺(3・4・8~11) 3は口径4.9cm、器高7.4cm、胴部最大径8.7cmの丸底壺である。胴下半に最大径を持つものであるが、まだ稜線をつくって角ばるまでには至っていない。口縁外面から内面にかけては横ナデ、その他外面はへら磨きを施している。胎土に微砂粒は多く含むが大旨精良で、焼成良好、内外面ともに橙灰色をなす。この種の器形は朝鮮半島に祖形を持つもので、これ以降、算盤玉状に変化してゆくものと考えられる。4は、口径13.6cm、器高14.1cm、胴部最大径17.6cmの短頸壺である。胴部内面は丁寧なナデしており、外面上半には細かいハケ調整、下半にはナデ仕上げを行っている。8は、頸の太い長頸壺であろうが、異類の感をまねがれない。口径13.8cmで、内面上半はハケの上から横ナデ、下半は指オサエナデ、外面は目の粗いハ



第 64 図 第28号住居跡出土土器実測図 (1/4)

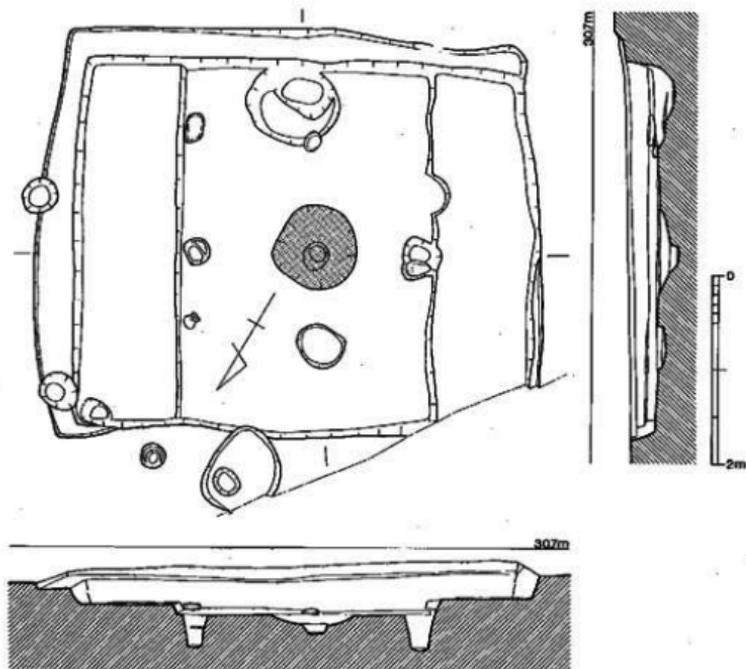
ヶ調整を施すが上半は横ナデで消している。口唇内端が小さくつまみ出される特徴がある。9は、胴部最大径15.1cmの偏平な胴部となる。底部は部厚く、凸レンス状にふくらみをみせる。胴部外面はハケ、底部外面とその周囲はナデている。10も底部がわずかにふくらみをみせる類

で、胴部外面はナデしており一部にヘラ磨きがみられ、底外面はナデている。胴部内面は、ナデており、一部のみヘラ磨きがみられる。11は、胴部最大径36.1cmの大型品である。底部は厚く、凸レンズ状にふくらみ、胴部外面には縦位のヘラ磨きが施されている。内面上半は縦ハケの上をナデており、下半は丁寧なナデ調整である。

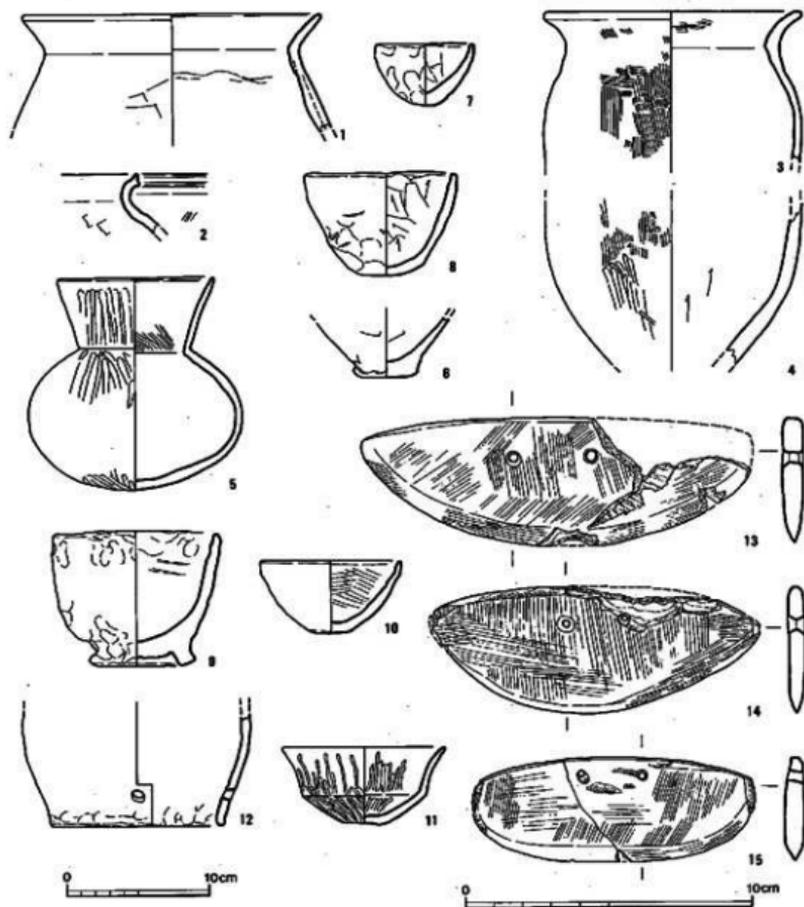
以上の第28号住居跡出土土器は、1のような弥生後期終末に近い器形をなすものもあるが、他は未だ新しい様相はみられない。よって、当住居は弥生後期後葉期に営まれたものと考えておきたい。

第29号竪穴住居跡 (第65図、図版 22)

谷1西側の住居群のうち最西端に位置する。4.9×4.0mの長方形住居で、面積が19.6㎡となる中規模類である。東西両辺沿いにベッド状遺構を設け、床面中央に浅い断面皿形の炉を掘り込



第 65 図 第29号住居跡実測図 (1/60)



第 66 図 第29号住居跡出土遺物実測図 (石甕丁は1/2, 他は1/4)

んでいる。主柱穴は2個で、南壁内側中央には壁際土壌が検出された。周壁溝は認められなかった。壁際土壌東側の床面上には、長さ30cm、幅20cm弱、厚さ8cmの扁平な作業台石が置かれていた。周壁溝は検出されなかった。

出土遺物 (第66図)

壺 (1~4) 1は、復原口径20.6cmで、頸部内面に稜をつくり外傾して直線的に開く口縁となる。頸部内面稜下2cmから口縁内外面は横ナデ、胴部内面は丁寧なナデ、外面は板ナデを施す。2は張る胴部から丸く屈曲して外反する口縁につくる。胴部内面は板ナデ、外面はわずかにハケもある板ナデを施す。口縁外端面は凹状となり、本遺跡例としては異類で、他地域からの移入品であろう。3は、口径17.2cmで、頸部内面に稜をつくり、胴部内面はナデ、外面はハケを施す。4は、胴部下半で、内面は削りであとをナデている。外面は上半が縦ハケ、下半は板の擦過痕がみられる。

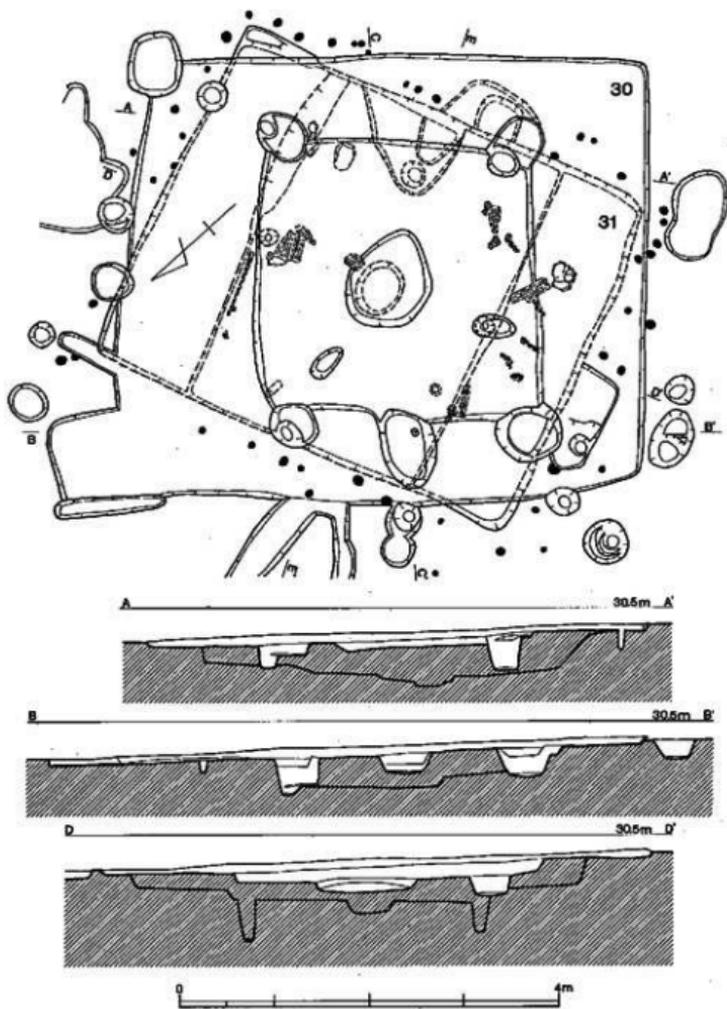
壺 (5・6) 5は埋土上層出土品で、口径10.8cm、器高15cm、胴部最大径15.2cmとなる。薄手精製で、口縁内端は小さくつまみ出されている。外面は全面へら磨きを施し、胴部内面はナデている。6は、底径3.7cmの不安定な底部片で、胴部内外面は板ナデ、底外面はナデている。

鉢 (7~11) 7は、手捏ね土器で外面に指オサエナデを施す。内面は板ナデがみられる。口径6.6cm、器高4.4cmの小型品である。8は、口径10.1cm、器高6.2cmで、内面は削り、外面は強い指ナデ調整である。9も手捏ね土器で、あたかも歴史時代高台碗の如き底部をなし、口径11.3cm、器高9.6cmとなる。内外面ともに凹凸のはげしい指ナデを施している。10は、口径9.8cm、器高5.2cmで、内面はハケ、外面はナデている。11は、口径11.3cm、器高5.5cm、底径2.6cmとなる。体部下半で屈折し開く口縁となる。内外面ともに縦へら磨きを施す。12は、天地逆となり無頸壺状となる可能性がある。内外面ともに指ナデ調整で、円孔が穿たれている。1/4残存片であるため、全周で何個あったのかわからない。ちょっと大きめではあるが、蟄壺の可能性もある。

石庵丁 (13~15) 13は現存長13.6cm、幅4.5cm、厚さ0.7cmとやや厚い。赤紫色砂岩(凝灰質)製で、全体に極めて丁寧なつくりで、研磨も丁寧である。2孔間は2.4cmあり、表裏面から穿孔するが、その中間は稜を磨り取っている。14は、紫灰色の砂岩製で、長さ11.4cm、幅4.4cm、厚さ0.6cmとなる。表裏面ともに極めて粗い研磨時擦痕を残したままで、背部の割れ部には、二次加工しようとした刻目状の痕跡がみられる。刃部にはその大部分に、使用によると思われる磨耗小凹凸がみられる。2孔間は1.8cmあり、両面から穿孔している。15は、濃灰色の砂岩製で、長さ9.8cm、幅3.7cm、厚さ0.7cmとなる小型品である。2孔間は1.9cmあり、孔は擦れ方がひどく、かなり使い込んでいる。

鉄刀子 (第33図-22・23) 床面出土のもので、22は現存長5.1cm、幅1.1cmで、23は長さ5.6cm、刃部幅1.1cmとなる。両者は同一個体の可能性もあるが現状では接合しない。片削側となり茎は細身である。

鉄鏃 (第33図-20) 現存長5.4cm、幅0.9cmとなり斧箭式となる。細根状となりそうだが、小細工用のノミ状木工具と考えるのも可能ではなからうか。



第 67 図 第30・31号住居跡実測図 (その1) (1/60)

鉄籠(第33図-21)

現存長2.7cm, 幅0.9cmで, 刃先が反り上がっている。細身タイプの当該期例として貴重な資料である。

以上の第29号住居跡出土遺物は, 多量・多種にわたり, 中でも異類の

9・12のような何に使われたのかわからないような土器など興味深いものが多い。石庵丁3点の出土もおもしろい。この3本が同時に当住居で使用されたものと仮定すると, 大きさ, 形態の異なる3種が同時期となり, 従来の石庵丁形態編年観にいささか波紋をなげかけそうだ。また, 3人の穂摘み手が居たことを示すのかもしれない。土器をみってみると全体に弥生終末期以降と思われるものが多く, 5は埋土上層でもあり, 明らかに古式土師器類である。当住居は構造・形態からみて, 決してそう新しい類ではなく, むしろ本遺跡内の最盛期のベッド付住居と何ら変わった点はなく, 典型的とさえいえるタイプである。よって壜3・4や壺5など新しい様相をみせる土器は, 隣接する第30号住居が営まれる時に格好の生活廃棄物投棄用くぼみとなっていた第29号住居の跡地に捨てられたものと考えておきたい。よって当住居の時期は, 弥生後期終末期と考えておきたい。

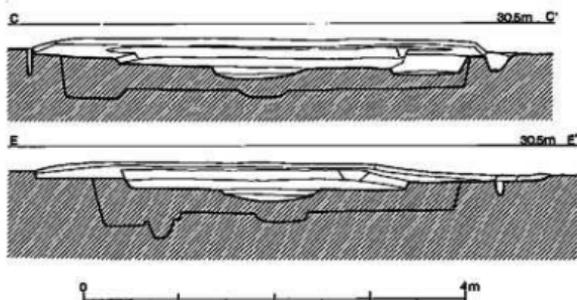
第30号壜穴住居跡(第67図, 図版 23)

谷1の西側住居群中, 前述の第29号住居跡の東隣に位置する。大部分が重複する第31号住居跡を切っている。5.5×4.7mの長方形住居で, 面積は25.9㎡となり, 中型規模の中でも大きい部類になる。北隅部が張り出しており, 入口部になると思われる。四周にベッド状遺構を設けるタイプで, 主柱穴は4個で, 床面中央に浅い炉を掘り込んでいる。北西壁中央内側に小さめの壁際土壇を有する。

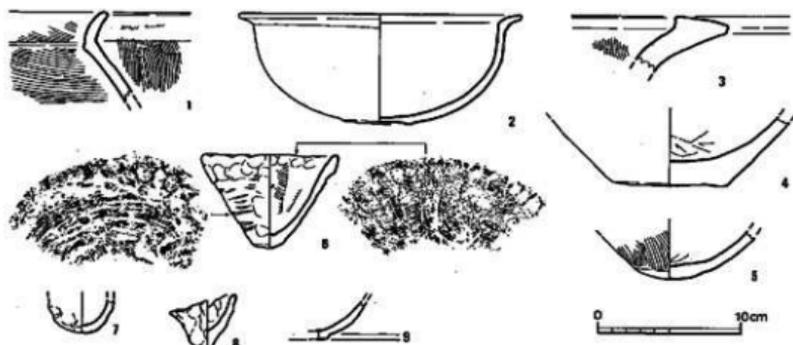
出土遺物(第69図)

壜(1) 頸内面に襷をつくり, あまり開かない口縁で胴部の張る器形となる。胴部内外面ともに細かいハケ調整を施す。

鉢(2・9) 2は, 口径9.7cm, 器高7.8cmの薄手精製品である。内面はナデ, 外面は磨滅している。内面は黒灰色にいよされたようになっている。9は, 底部が円盤貼付状となるが, 全容



第68図 第30・31号住居跡実測図(その2)(1/60)



第 69 図 第30号住居跡出土土器実測図 (1/4)

は定かではない。内外面ともにナデしており、壺となるかもしれない。

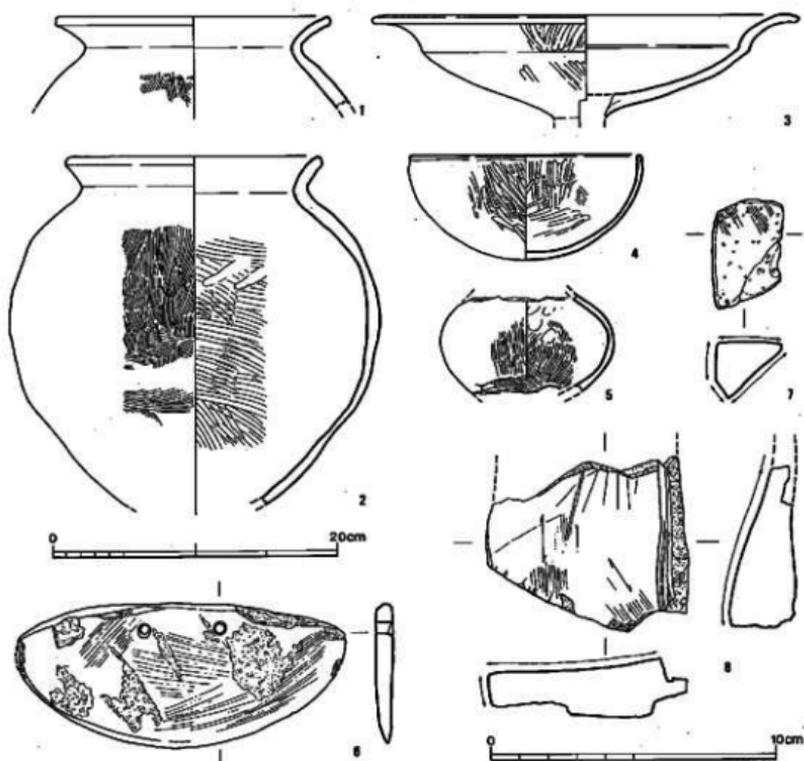
壺(3~5) 3は、口縁内端を肥厚させた弥生中期的な雰開気のある小片で、内面には縦ハケが残る。4は大型品の平底類で、内面はへら削り、外面は底部まで板ナデが施されている。5は、ほとんど丸底に近いが、底面はまだ意識してナデている類である。内面は板ナデ、胴部外面は縦ハケを施す。

手捏ね土器(6~8) 6は、口径9.3cm、器高6.6cmの尖底状品で、内面はハケ工具による回転方向調整、外面は横位叩きの上を指ナデを施す。口縁内外面は指頭圧痕が著しい。7は、胴部径が4.5cmのミニチュアで、内面はナデ、外面は指オサエ痕が著しく残る。8は、口径4.4cm、器高2.4~3.9cmの尖底形のミニチュアである。内外面ともに指紋の残るほどの強い指オサエのままで、全体に歪つとなっている。

以上の第30号住居跡出土の土器は、1・5のように弥生後期最終末期の特徴をよく示しているものもあるが、4の内面へら削りなどより新しい様相も多い。よって、当住居跡の時期は、第31号住居跡を切ることから、庄内併行期ほどの古墳初頭期と考えられる。

第31号壑穴住居跡 (第67図、図版 24)

前述の第30号住居跡の直下にほとんど重複して発見された。4.8×3.8mの長方形住居で、面積18.2㎡の中規模類となる。東西両辺に沿ってベッド状遺構が設けられ、床面中央の第30号住居の炉の真下に小さめの炉が張り込まれている。2主柱穴で、南壁中央内側には壁際土塚がみられる。周壁溝は検出されなかった。典型的なベッド付住居であるが、ここで注目されるのは、住居壁の外側に並ぶ枕列である。間隔はまちまちであるが、直径10~5cmと小さい棒状の黒



第 70 図 第31号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 他は1/4)

色土埋土のものが周縁に47個確認された。深さは10~20cmほどである。住居壁体構築の際の芯として壁体を支える杭であったと考えられる。当住居の床面には炭化材が多く残っており、焼失家屋であったことが判かる。また、壁際土壌の東側床面には長さ30cm、幅20cmの作業台石が置かれていた。

出土遺物 (第70図)

壺 (1・2・5) 1は、口径19cmで、胴部内面は板ナデ、外面は縦ハケを施す。2は、口径17.4cm、胴部最大径26.3cmの短頸壺である。頸部後下4cm間の内面はナデ、それ以下は横ハケ、底部近くの内面はナデている。胴部外面中位は雑なハケ、下半はナデている。5は、胴部最大径

12.1cmの小型品で、外面へラ磨き、内面上位はナデ、以下はハケ調整である。

高杯（3）口径29cmで、口縁が長くのびて外端部はわずかに垂れるほどとなる類である。外面は縦へラ磨きで、体部内面は磨滅しているがへラ磨きと思われる。口縁部内面は横ナア調整であろう。

鉢（4）薄手精製のボール形となる。口径15.8cm、器高7.5cmで、口縁外端をわずかにつまみ出す。内面はハケの上をへラ磨き、外面もへラ磨きを施す。

石庖丁（6）長さ11.6cm、幅5.1cm、厚さ0.6cmで、石材は赤紫色砂岩（凝灰質）である。背面は面取り状になっており、全体に反っている。刃部は鋭利に研ぎ出されており、表面はわずかに窪んでいるため、研磨されない部分が各所にある。

砥石（8）粘板岩製仕上げ砥で、現存長6cm、幅7cm、厚さ2.3cmとなる。表面と左側面が使用されており、右側面は擦り切り部が残り、溝を入れて折り割ったものと思われる。裏面は未調整のままである。

軽石（7）気孔の多い極めて軟質の熔結凝灰岩（軽石）の全面を磨ったものである。長さ3.8cm、幅2.5cm、厚さ2cmである。何を磨ったものであろうか。

鉄鏃（第33図-24-26）24は現存長4.9cm、25は長さ1.8cm、現存幅1cm、26は、長さ1.6cmほどしか残っていないが、同一個体の可能性はある。

以上の第31号住居跡出土遺物は多様にとり、完形石庖丁の同伴等興味深いものがある。当住居の年代は、甕や高杯の口縁の長くのびた状態などからみて、弥生後期末末期が妥当なところと考えられる。

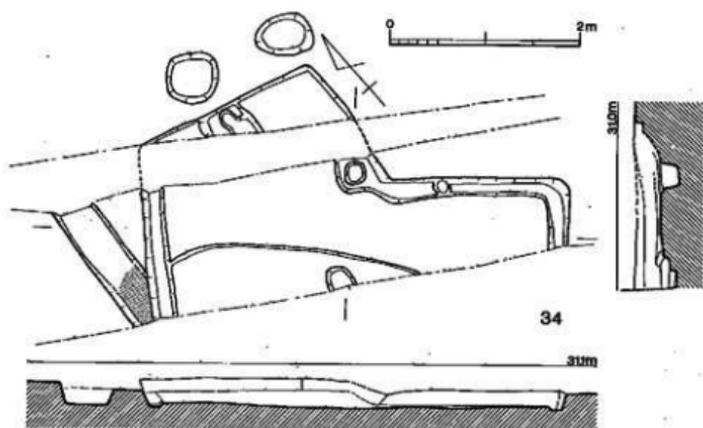
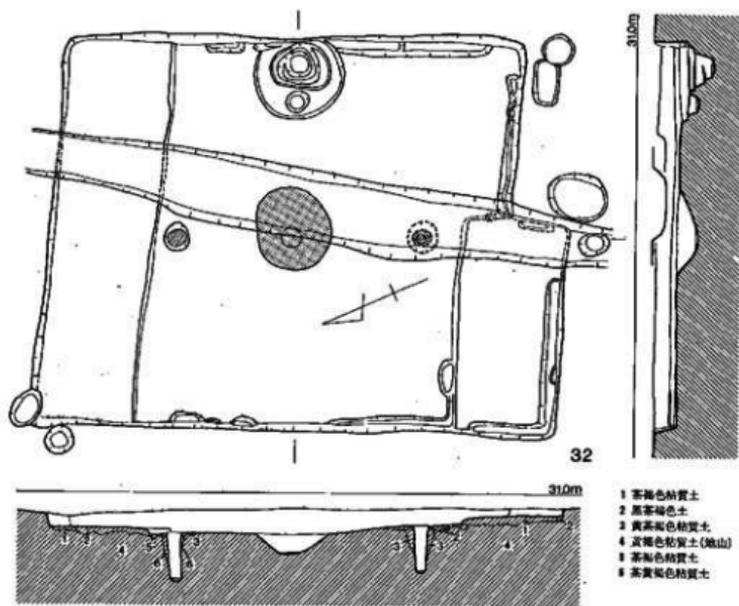
第32号壘穴住居跡（第71図、図版 25）

遺跡の中央に密集する住居群の中で、最南端に位置する。住居の中央部を第15号溝に切られている。4.8×4.2mの長方形住居で、面積21.8㎡となり、中型規模に含まれる。南辺は西半が外へ張り出して、その部分の内側がベッド状遺構となっている。北壁沿いにもベッドが設けられている。床面中央に炉を掘り込んでおり、2主柱穴で、東壁内側中央に深い壁際土壇を設けている。この土壇の直前には小柱穴を伴っている。周壁溝は壁直下とベッド内辺直下の一部とにきれぎれになって検出された。いずれも板材打込み痕と考えられる。

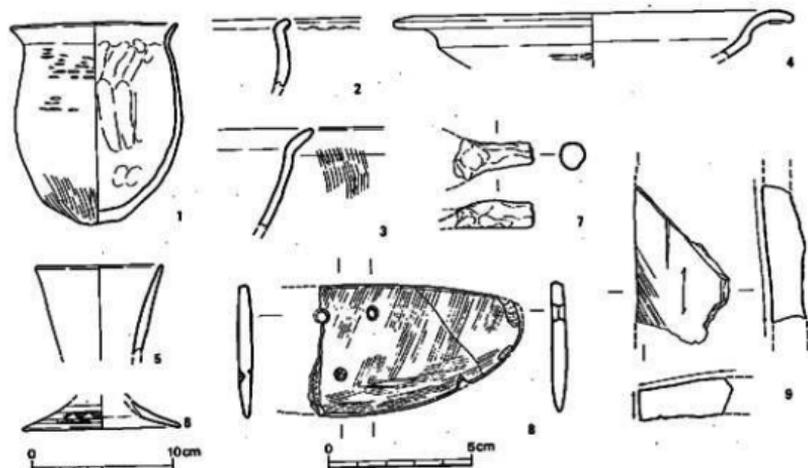
出土遺物（第72図）

甕（1）口径11.6cm、器高14.2cm、胴部最大径11.8cmとなる小甕である。胴があまり張らず、小さい不安定な底部となる異類である。胴部外面中位は磨滅しているが、上半は叩きの上をナデ、下半は縦ハケを施す。内面は指オサエナデ痕が顕著である。

鉢（2・3）2は、口縁端を小さく折り曲げたような形状をなし、内外面ともナデしているかと思われる。3は、あまり張らない体部から、折れて外傾する口縁となる。外面は縦ハケ、内面



第 71 圖 第32・34号住居跡実測図 (1/60)



第 72 図 第32号住居跡出土遺物実測図 (石器類は1/2, 他は1/4)

は丁寧にナデている。

高杯 (4) 復原口径25.6cmで、口径が長くのびて外端部が下垂する類である。体部外面にはハケが残るが、内面は磨滅しており、調整不明。

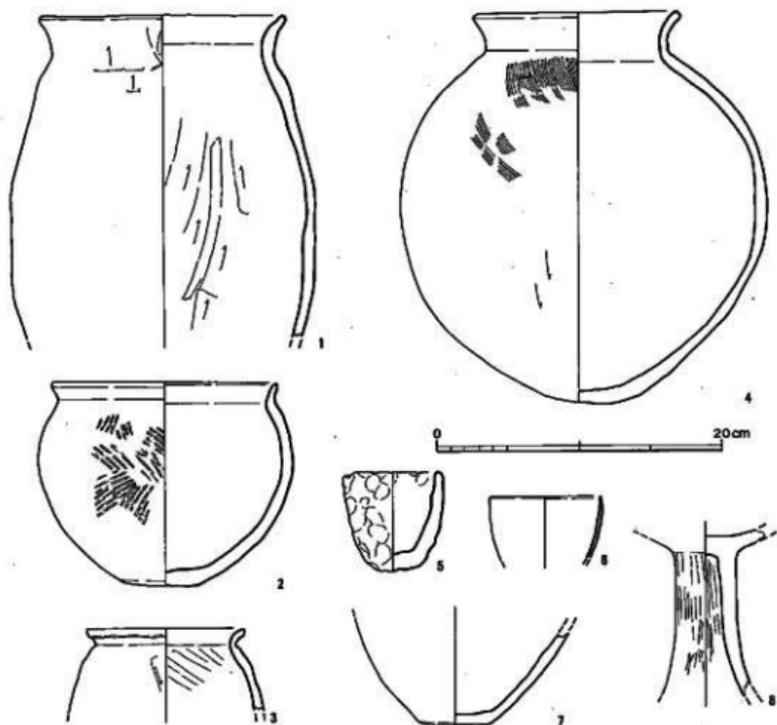
壺 (5) やや外傾して開く長頸壺口縁である。口径8.8cmとなり、内外面ともに磨滅し、胎土には石英・白色粒等の微細砂粒を含む。

脚付鉢 (6) 小ぶりの特殊な脚裾部片で、脚端径11cmとなる。裾外面にヘラ細沈線で4本の横位平行線が施され、その間2段に鋸歯文を描いている。上の段は下向き三角文部分に、下の段は上向き三角文部分に細い横線を密に描いて文様を目立たせている。内面は磨滅している。胎土に石英・暗赤褐色粒の微砂粒を少量含むのみである。焼成良好で、内面は淡橙灰色、外面は暗黄灰色をなす。他地域からの移入品である可能性が高い。

土製匙 (7) 残存長5.7cmで、すくう部分は欠損している。柄の部分は断面略円形をなし、全面に指オサエ痕が残る。

石慮丁 (8) 濃灰色の粘板岩製で、現存長7.5cm、幅4.6cm、厚さ0.5cmとなる。刃部は両面から小さく鋭く研ぎ出している。2孔間は1.4cmあるが、下方にも穿孔を試みた所が残る。この断面はシャープな三角錐となり、金属製の鋭利な工具を使用したものと考えられる。両面から穿孔しようとして、位置がずれたため、途中で放棄したものであろう。

砥石 (9) 粘板岩製仕上げ砥で、現存長5.5cm、幅3.2cm、厚さ1.4cmの小片である。表面と左側



第 73 図 第33号住居跡出土土器実測図 (1/4)

面を使用している。表面には金属器の鋭利な刃先でつけたキズが多くみられ、裏面にも深めの線が彫り込まれている。

鉄鏝（第33図-27）弓箭形となつて思われるが、先端は錆で明瞭ではない。全長5.3cm、幅1.7cmで短い茎部を伴う。

以上の第32号住居跡出土物は、多種に及び、土器も変化に富む。住居の年代としては、高杯や甕の特徴などから、弥生後期終末期に比定できる。

第33号竪穴住居跡（第50図、図版 26）

遺跡中央住居群の南端近く、前述の第32号住居の北西隣に位置する。第18号住居を北東側で

切っている。4.65×4.3mの長方形住居で、面積20㎡の中型規模類となる。東西両壁沿いにベッド状遺構を設け、床面中央に浅く小さめの炉を掘り込んでいる。2主柱穴で、南東壁内側中央に壁際土壇を設けている。ベッドと床面は、断面図に見る如く、貼り床構造をとっている。床面の炉の東側には固く焼けた焼土部分が見られ、その周辺に土器が集中していた。周壁溝は四壁直下に狭くきれぎれの類が見られ、板材打ち込みの痕跡と思われる。南隅近くのベッド状遺構上には偏平な作業台石が置かれていた。

出土遺物 (第73図)

甕 (1~3・7) 1は、口径16.8cm、胴部最大径21.4cmで長胴となる類である。胴部内面はヘラ削り上げ、外面は板ナデ調整である。2は、口径15.7cm、器高14.4cm、胴部最大径18cmを測り、底部はややふくらんでいる。胴部外面は叩きを施し、内面はナデている。3は、口径11cmで、頸部で丸く屈曲して反転する短い口縁となる。内外面ともに板ナデで調整している。7は、底径4.8cmのわずかにふくらむ底部となる。内面は削りに近いナデ、外面は板ナデ調整とみられる。

壺 (4) 口径13.8cm、器高27.7cm、胴部最大径25.9cmで、底部は意識はしているが殆ど丸底である。胴部内面はナデ、外面上半はハケ、下半は削りかと思われ。底外面はナデている。

鉢 (6) 口径7.8cmで薄手精製品である。内外面ともに磨ぎに近い丁寧なナデで仕上げている。低く広がる脚台が付く類になるかもしれない。

高杯 (8) 脚部片で、脚柱外面は縦位のヘラ磨き、内面はナデているがシボリ痕が残る。杯部内面はナデている。

手捏ね土器 (5) 口径6.4cm、器高7cmのコップ形となり、内外面ともに指頭圧痕を多く残してナデている。内外面ともに黒色をなし、意識して塗っているようである。

以上の土器は、1・4・6など弥生後期終末期以降の特徴を示すものが多く、在地的土器の中に新しい調整技法がとり入れられていることがわかる。時期的には庄内併行期のあたりと思われるが、住居の形態からみると、それ程下降する類ではないと思われ、上述の新様相の土器はあとから投棄されたものと考えられ、本来の住居の時期は、2・7・8などの弥生後期終末期前後の年代であると判断しておきたい。

第34号壑穴住居跡 (第71図、図版 26)

遺跡中央の密集住居群の南端に位置する。当初、側溝掘削に伴ってその部分のみの調査を実施した分にかかった住居である。南側の大半は区域外で全容は不明である。一辺が4.4mで、周辺のものと同様に長方形住居となると推定される。北隅に張り出し部をつくる類で、北東壁に沿ったベッド状遺構がみられる。主柱穴、炉、壁際土壇等是不明である。住居壁に沿って幅の広い周壁溝がめぐらされ、排水を目したものと考えられる。

出土遺物が無く、住居の年代は明確にできないが、ベッド付住居であることや、方向が周辺の住居と同じであることなどから、弥生後期段階のものと考えられる。

(2) 掘立柱建物

本遺跡で検出した遺構のうち、最多数のものはおびただしい小ピット群である。中から遺物が出土したもののだけでも400個に及ぶ。しかし、それらのうちで柱穴として整然と配置されて建物或いは柵列等が復原できるものは極めてわずかである。

ここでは、この多数のピット群のうち、まとまりをみせる2棟分の掘立柱建物について説明し、さらに、ピット出土の遺物について記述しておきたい。

第1号掘立柱建物（第74図）

遺跡中央の住居跡密集地の東側の浅い低地に沿って第2号溝がみられるが、その溝の西側に位置している。西半は現在利用している農業用水路下にあたり、調査できなかった。

桁行方向の主軸をN48°Wにとり、梁行2間、桁行2～3間となると思われる。柱間心々距離はいずれも150cm等間であり、柱穴径は30cm前後と小さめで、深さも15～30cmと浅い。隅柱の柱穴が24～30cmの深さであるのに対し、他の間の柱穴が15cm前後であることも特色である。

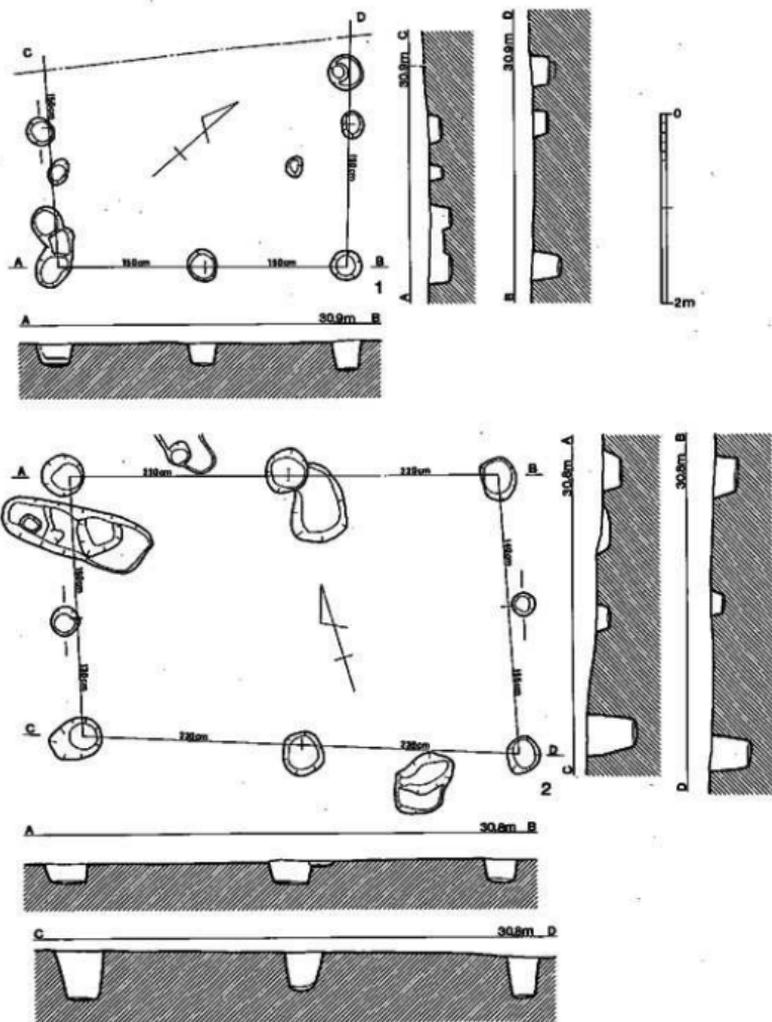
この建物は、時期の決め手となる手掛りが無い。第2号掘立柱建物と方位も異なり、比較しようもない。柱穴内から土器細片が出土しているが、時期の判断ができる類ではない。本遺跡では歴史時代の遺物は一切出土しておらず、可能性としては、弥生後期の集落に伴う建物が最も有力である。

第2号掘立柱建物（第74図、図版33）

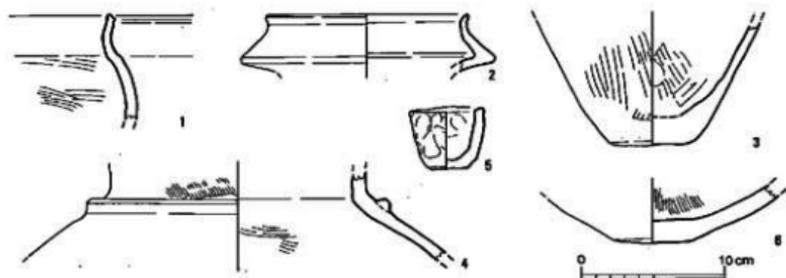
前述の第1号掘立柱建物の北西側に位置する。遺跡中央の住居跡群の東側で、丁度住居がとりまく広場状の空地に建てられている。

棟をN70°Wにとる2×2間の略東西棟である。桁行柱間は220～230cmとほぼ一定しているが、梁行柱間は130～155cmと不揃いである。妻部分の中央の柱穴は、東西いずれも直径24～30cmで深さ15cmと、他柱穴に比べ明らかに小さく浅い。しかも、この2柱穴はいずれも柱筋から外側へ15cmほどずれており、棟持ち柱であったと考えられる。

北東隅の柱穴から土器細片が出土しているが、時期決定できる類ではない。可能性としては、



第 74 图 第 1·2 号独立柱建筑物实测图 (1/60)



第75図 各ピット出土土器実測図(1/4)

前述の第1号掘立柱建物とともに、弥生後期の集落に伴う高床倉庫棟が推定できる。

以上の2棟分しか掘立柱建物は確認し得なかったが、他に柱穴となりそうな小ピットは多数有り、本遺跡集落全体として2棟のみであったとは考えられない。しかし、住居密集地をはずして占地していることや、高床倉庫の様相を持っていることから、中央住居群に伴う倉庫棟と考える蓋然性は高いと思われる。そうだとしたら、この弥生後期後葉を中心とする集落においては、住居群(グループ)毎の集中管理貯蔵形態がとられていたと判断できよう。当該期においては、西日本各地で集落集中管理が行われ、早いところでは既に貯蔵施設の独立の萌芽もみえており、本遺跡でのグループ集中管理も発展段階としては矛盾しないものである。

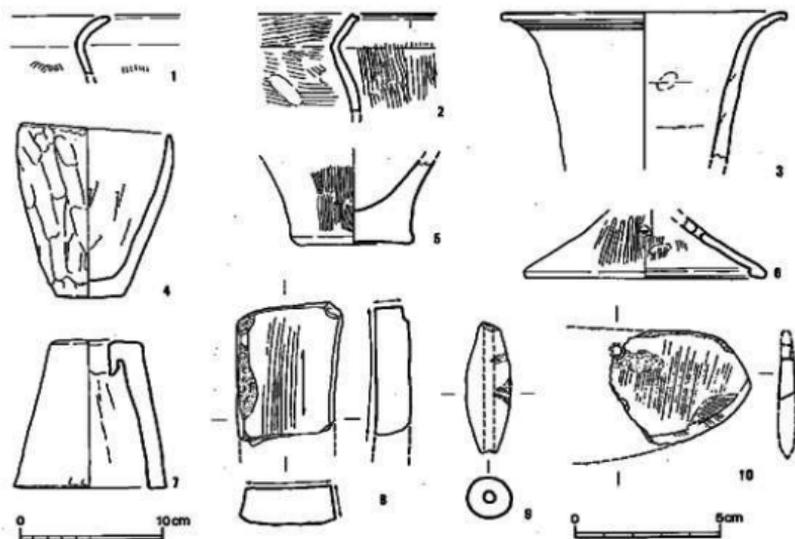
各ピット出土の遺物(第75図)

ここでは、既述各種遺構以外の柱穴状ピットや、小ピット・不定形掘り込み等から出土した縄文時代以外の遺物、及び検出時や包含層出土の遺物についてもとり上げて報告したい。

甕(1・3) 1は、P-267出土品で、口縁の傾きが異様で、他器種になるかもしれない。胴部内面は横位の板ナデ、外面は磨滅している。3は、P-341出土品で、凸レンズ状にふくらむ底部となる。胴部内外面はハケ目の明瞭でないハケ工具によりナデられている。

甕(2・4・6) 2は口径14.1cmで、口縁端が丸く屈曲して小さく外反する形態をなす複合口縁壺である。P-280出土品で、内外面ともに横ナデを施す。4は、P-257出土品で、胴部上端に断面梯形凸帯を付ける大型壺である。頸部径18.1cmとなり、頸部外面は縦ハケ、胴部内外面とも磨滅しているがハケ調整のようである。6は、P-341出土品で、直径5.4cmの底部は凸レンズ状にふくらむ。内外面ともに磨滅しているが、内面はハケ、外面はヘラ磨きであろう。

手捏ね土器(5) P-240出土土器で、口径4.8cm、器高4.4cmのコップ形ミニチュアで、内外面ともに指オサエ痕が顕著に残っている。



第76図 包含層出土遺物実測図(1~7は1/4, 8~10は1/2)

包含層出土の遺物(第76図)

ここでは、遺跡西端近くの第25・27号住居跡西側の包含層から出土した縄文土器以外の遺物を報告しておく。

匙(1・2・5) 1は、第25号住居西側の包含層出土品で、丸く屈曲外反して開く口縁片である。薄手で、胴部内外面ともにハケ調整を行う。2は第27号住居跡西方包含層出土品で、内面に後をつくり、口縁端面を凹状とする終末期類で、内外面ともにハケを施している。5も、第27号住居跡西方包含層出土品で、底面全体がわずかな上げ底となっている。外面は密な縦ハケ、内面は丁寧にナデている。弥生前期末~中期初願期のものであろう。

壺(3) 第27号住居西方包含層出土品で、口径19.6cmとなる異類壺である。口縁下外面に2条の沈線を施し、外傾する頸部の上半で更に開きをみせる。内面はナデているが、外面は調整不明である。

高杯(6) 第25号住居西側包含層出土品で、脚端径16.6cmとなる。端部内側が段状に張り出す異類である。焼成後の穿孔がみられるが、何ヶ所に配置されたものかは不明。外面は縦位のヘラ磨き、内面はハケの上をナデている。

鉢(4) 手捏ね気味のコップ形品である。第27号住居跡西方包含層出土品で、口径10.3cm、器

高12.3~11.5cm, 底径4.6cmとなる。内面は板ナデ, 外面は削りに近い板ナデである。

支脚(7) 上面中央に円孔をあける土製五徳である。上面径6.2cm, 器高10.4cm, 脚端径10.6cmで, 第27号住居跡西方包含層出土品である。内面はシボリ痕を残したオサエナデ, 外面から上面~孔内面までは丁寧にナデている。脚端面は閉っている。

砥石(8) 第15号住居跡の北側包含層出土品で, 淡黄茶白色のもろい粘板岩製仕上げ砥である。表面と上辺側面, 右側面をよく使用している。

土鏝(9) 第24号住居跡の西約5mの地点で採集したもので, 長さ4.7cm, 直径1.5cm, 孔径0.35cmである。赤茶色を呈し, 時期は不明。

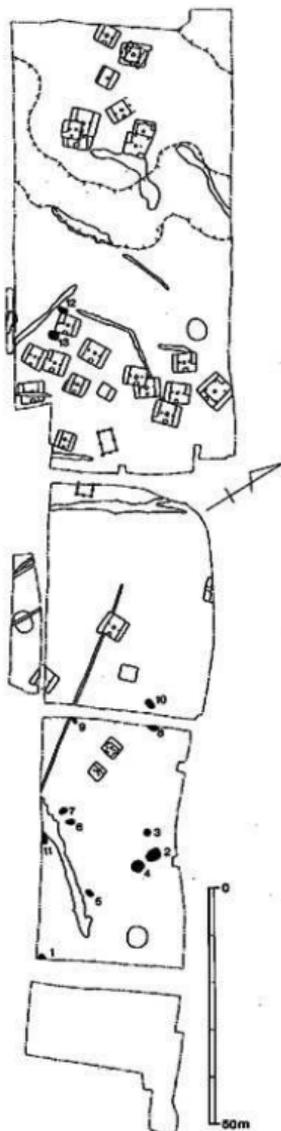
石磨丁(10) 第19号住居跡付近で採集したもので, 暗灰~灰褐色の砂岩製で, 現存長4.8cm, 幅4cm, 厚さ0.6cmとなる。孔は片側穿孔のようである。背の上縁は再研磨したことが明瞭である。

(3) 土 壙

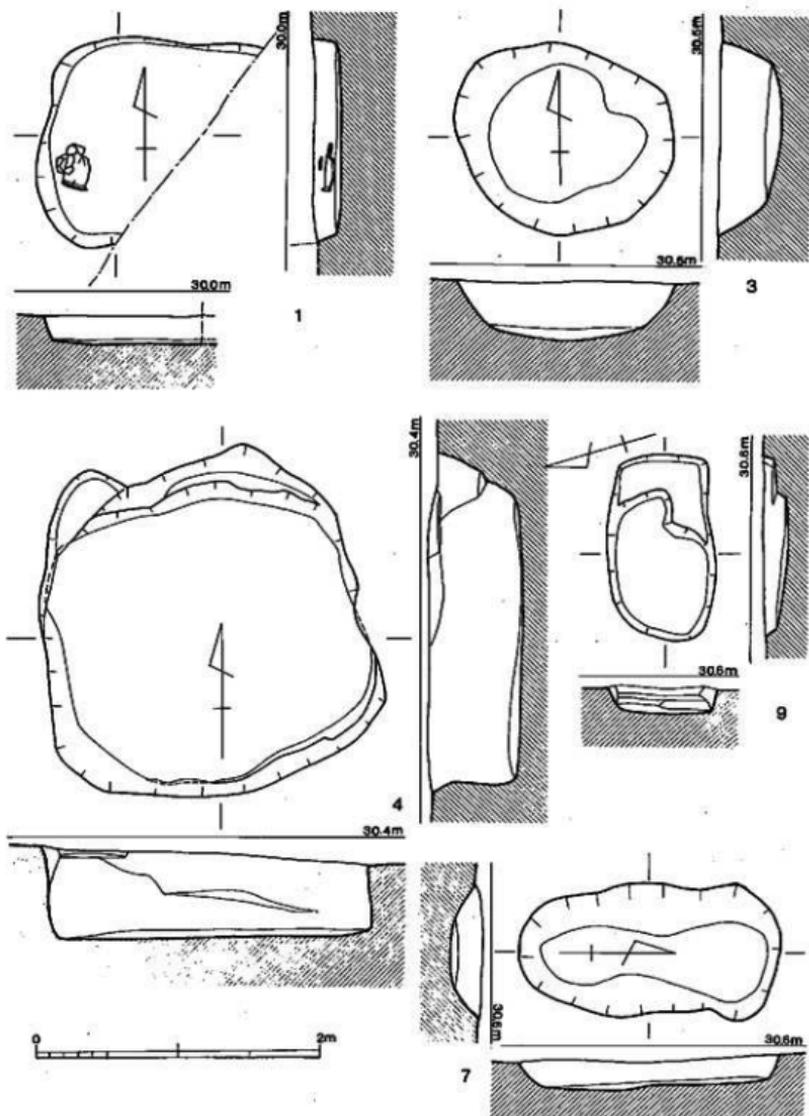
本遺跡調査で土壙としたものは, その形状・規模・出土遺物等から判断して, 大別して3種の性格を有するものからなると考えられる。

第1は, 弥生前期袋状竪穴の系統に含まれ得る弥生前半期の貯蔵穴と推定されるもの(第1~4・8・10号土壙)である。遺跡東端近くの第1号住居跡の近辺に存在し, 両者の強い関連がうかがわれる。

第2は, 土壙墓的な長方形に近い形状のもの(第5~7・9・11号土壙)であるが, 明確な副葬品と思われようなものは一切出土しておらず, 時期・性格と



第77図 十遺跡土壙配置図 (1/1,200)



第 78 图 第 1·3·4·7·9 号土壕实测图 (1/40)

第1表 十双遺跡土壌一覧表

(単位 cm)

№	平面形	長軸×短軸×深さ	主軸方位	構造の特徴	出土遺物	備考	時期	遺物の性格
1	隅丸長方形	150+a×145×20	N90°W		甕	東半分未掘	弥生前期末	貯蔵穴
2	不整楕円形	340×260×105	N 0°	底面中央に小柱状	甕片, 壺片		弥生前期末	貯蔵穴
3	不整円形	150×135×40	—	底面皿形				貯蔵穴か?
4	隅丸方形	240×230×65	—	瓮状となる	甕片		弥生前期末	貯蔵穴
5	隅丸長方形	180×100×30	N73°E	途中で段が付く				土壌墓か
6	隅丸長方形	195×90×67	N26°E	北端が一段高い				土壌墓か
7	不整長円形	180×90×22	N 0°	底面凹凸				土壌墓か
8	隅丸方形?	230×?×30	—	底面中央に小柱状	縄文片	西半分未掘	弥生前期?	貯蔵穴か?
9	不整長方形	130×77×17	N75°W	途中で段が付く	粗製燐鉢		縄文晩期	土壌墓か?
10	長楕円形	225×140×90	N80°E	階段状, 底面に穴	甕片, 壺片		弥生前中初	貯蔵穴か
11	隅丸長方形	240+a×120×57	N88°W	底面に穴		葺1.1m, 南西半部掘		土壌墓か
12	長方形	190×114×30	N65°E	底面平組	高杯, 甕片, 壺片	住19より古	弥生後期中葉	祭祀?
13	不整形	200+a×290×30	—	底面やや凹凸	壺蓋・高杯・甕・ミナチ	住19より新	弥生後期終末	祭祀?

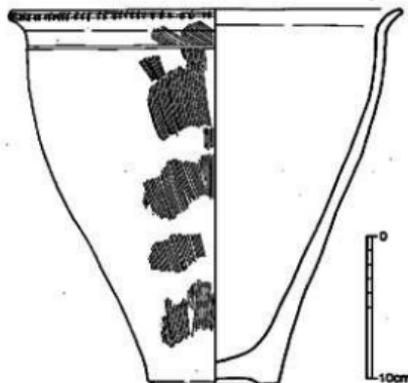
もに今ひとつ断定できない類である。遺跡東半の第3・4号住居跡の西南側に点在する。主軸方位も一致しておらず、たとえ土壌墓であったとしても、集団の墓地としては形成されずじまいの類かと考えられる。

第3は、遺跡中央に位置する第19号住居跡と重複関係にあるもの(第12・13号土壌)で、土器の出土状況から、住居(集団)に関する祭祀の性格を持ったものである。出土土器の種類からみて単なる土器廃棄土壌では無いと思われる、近隣住居の時期に符合することからも、上記の性格と判断した。

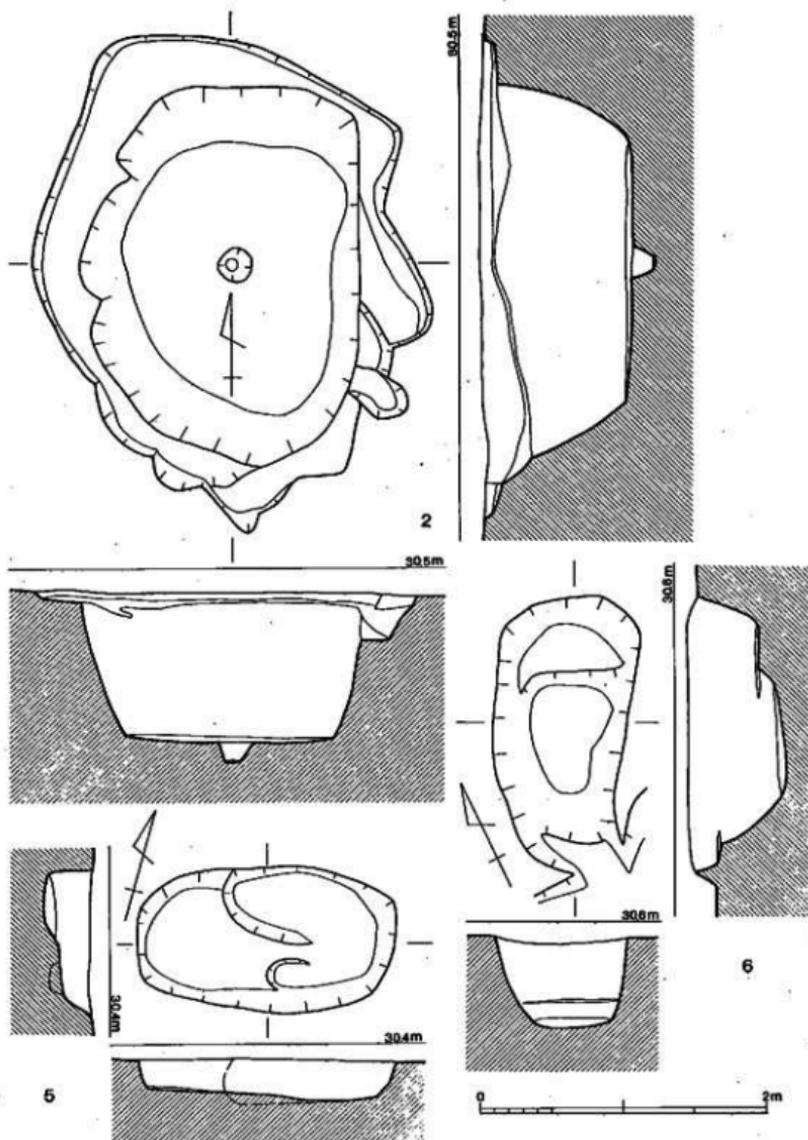
以下、各土壌について説明を加えてゆきたい。

第1号土壌(第78図, 図版 27)

遺跡東端近くの第1号住居跡の南方17mに位置する。東半部は農業用水路確



第79図 第1号土壌出土土器実測図(1/4)



第 80 图 第 2·5·6 号土槎尖测图 (1/40)

保のため、未掘のままです。東西に主軸をとる隅丸長方形プランの土壌で、長さ150cm以上になると思われる。底面は平坦で、深さは20cmほどしか残っていない。底面よりわずかに浮いて、西端近くに変形土器1個体が横転して出土した。浅いのが難点であるが、長方形タイプの小ぶりの貯蔵施設ではないかと考えられる。

出土遺物 (第79図)

壺 口径27.6cm, 器高26.4cm, 底径9.2cmの如意形口縁類である。口縁外端にはヘラによる刻目を施し、外面頸部下には一条の沈線を巡らせている。胴部外面には目の細かい縦ハケを施し、内面は剥離しており調整不明である。底部は中央のみが上げ底状となっている。

この土器からみて、第1号土壌は弥生前期末の時期と考えられる。

第2号土壌 (第80図, 図版 28)

遺跡東側の第1号住居跡の北西側に不整形の柱穴等掘り込みの密集する部分があるが、その中で同種遺構である第4号土壌の北隣に位置している。上面の深さ10cmほどの一段低くなる部分が、本体の掘り込みより10~30cmほど外側へ広がっており、木蓋等の蓋受け部或いは雨除け屋根の覆う範囲とも推定される。本体の掘り込み上面径は270×190cmと大きく、深さも1m前後と深い。床面中央には直径25cm, 深さ13cmの柱穴が検出された。当遺跡は形状と規模からみて、第4号土壌と並ぶ袋状壜穴系の貯蔵穴と判断される。なお、当土壌の東隣小ピット中からサヌカイト製の立派な打製石槍 (第10図) が出土したが、当土壌に伴うものであるかどうかは定かではない。

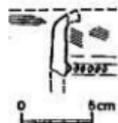


第81図 第2号土壌出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (第81図)

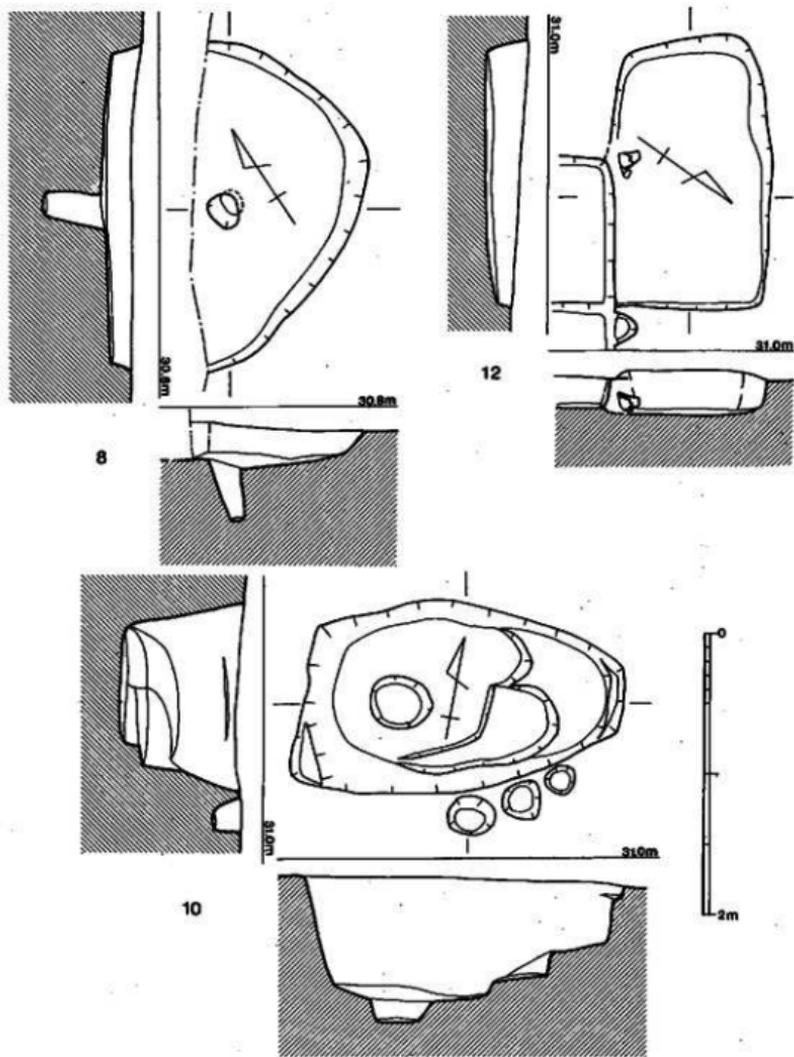
壺 (1) 如意形口縁で、外端にヘラによる刻目を施す。頸部下外面には2条の沈線が巡らされている。口縁内面は横ヘラ磨き、胴部外面は縦ハケを施し、内面は磨滅している。

壺 (2・3) 2は、中形壜口縁と思われ、内面はヘラ磨き、外面は横ナア調整である。3は、直径10cmの平底で、胴部外面は縦ハケの上をヘラ磨き、内面はナデている。底外面には靱圧痕がみられる。



第82図 第4号土壌出土土器実測図 (1/4)

以上の土器から、第2号土壌は、弥生前期末の貯蔵施設と判断できる。



第 83 图 第 8·10·12号土城遗址图 (1/40)

第3号土墳 (第78図, 図版 28)

前述の第2号土墳の西隣に位置する。上面径150×135cmで深さ40cmの略円形土墳である。断面皿形に近く、袋状堅穴系貯蔵穴とは形状・規模ともに異なる。遺構の性格については、明確にし難いが、第2・4号土墳の近隣に位置することや、埋土が黒色土と同様であることなどから、小型の簡易な貯蔵施設の一種と推定することもできようか。出土遺物が無いので、時期は不明である。

第4号土墳 (第78図, 図版 29)

前述の第2号土墳の南隣に位置する。両者ともほぼ同規模・形状であり、同種性格の遺構であると考えられる。上面径240×230cmの隅丸方形気味のプランとなるもので、壁が上半で内側へせり出し、袋状堅穴の形態となる。底面は中央部がやや低くなり、深さは65cmとなる。形態・規模・位置からみて、袋状堅穴としての貯蔵施設と考えられよう。

出土遺物 (第82図)

甕 口縁端部を欠損する小片である。口縁内面は横へら磨き、頸部下外面の断面三角形凸帯上にはへらによる刻目が施される。胴部内面は横ナデ、頸部外面は斜めハケの上を横ナデ調整している。

以上の土器から、この第4号土墳は弥生前期末の時期と考えられる。

第5号土墳 (第80図, 図版 29)

遺跡の東端近く、第1号溝の北側に位置する。上面径が180×100cmの隅丸長方形をなすもので、深さは30cmとやや浅い。底面途中で不整な段が付くが、意味不明である。主軸の長さからみると、土墳墓と考えてもよさそうだが、幅も広く、底面も一定していないなど、疑問点が多く、性格を明確にし得ない。

出土遺物が無く、時期は判断できない。

第6号土墳 (第80図, 図版 30)

遺跡東半の第1号溝の北側に、第7号土墳と並ぶように掘り込まれている。上面径195×90cmの不整隅丸長方形をなし、深さは67cmとかなりしっかりしている。北側の小口側が一段高くなっており、中央部底面はせまく、西・南壁の傾斜は緩くなっている。規模からみると、土墳墓としても充分であるが、壁の形状や、底面の狭さなどに土墳墓とするには疑問点も多く、明確な性格はつかみ難い。

出土遺物も無く、年代は判断できない。

第7号土壙 (第78図, 図版 30)

前述の第6号土壙の西隣に位置する。上面での長さ180cm, 幅90cmとなる不整長円形の平面形態をなす。長軸はほぼ真北に近い方向を示している。底面はやや凹凸があり, 中央付近が狭くなっている。壁は傾斜がゆるやかで, 全体として整然とした遺構ではない。遺構の性格としては, 土墳墓としての要素はあるが, 上記の如く疑問点も多く, 明確ではない。

出土遺物が無く, 時期の判断は困難である。

第8号土壙 (第83図, 図版 31)

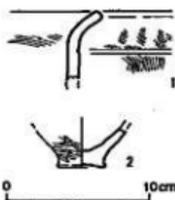
遺跡東半の第4号住居跡の北方7mに位置し, 西半部は農業用水路確保のため未掘のままとなった。直径230cmほどの隅丸方形乃至は略円形プランとなると思われる。底面は中央部がやや深くなるが, 深さは30cmほどと浅い。底面中央とおぼしき位置に深い小柱穴が検出されている。形態的には袋状竪穴の系統かとみえるが, 明確な同種遺構である第2・4号土壙の位置とは離れており, 一括には扱えない。むしろ, 西側に近接する第10号土壙との関連性を考えた方がよいかもしれない。

埋土中から縄文土器片が出土し, 既に前章で報告したが, この土壙形態からみて, 縄文期の遺構とは考えられず, やはり弥生前半期の中で把えるべきと思われる。

第10号土壙 (第83図, 図版 32)

東半の住居群の中で, 第5号住居跡の東方5mに位置する。これまで記述してきた土壙と形態がかなり異質である。長軸の長さ225cm, 幅140cmで, 深さは90cmとかなり深い。プランは舟形乃至は長円形を呈し, 東側は2段の階段状形態となっている。底面中央には直径40cm前後の大きめの穴が検出されたが, 深さは15cmと浅めである。以上のような規模・形態などから, 何らかの貯蔵機能を持った施設かとも考えられるが, 通有の袋状竪穴の形状をなしていないことなど, 疑問点も多く, 明確にし難い。

出土遺物 (第84図)

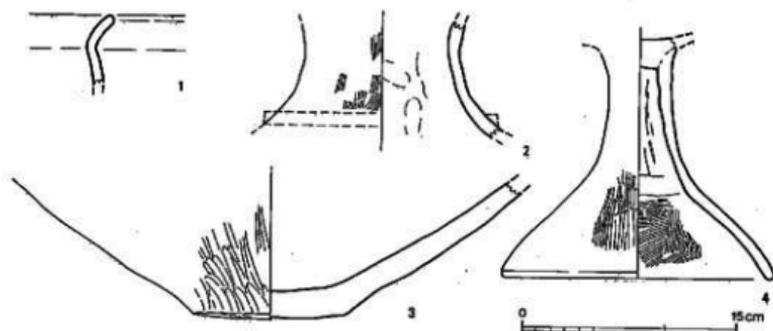


第84図 第10号土壙出土
土器実測図 (1/4)

壺(1) 如意形口縁で, 口縁外端に刻目を施さず, 頸部外面に一条の沈線をめぐらす類である。頸部内面と胴部外面には細かいハケを施し, 胴部内面はナデている。

壺(2) 直径3cmの厚い底部片である。わずかに上げ底となる精製小壺で, 内面はナデ, 胴部外面は横へら磨きとなる。底外面は丁寧にナデている。

以上の土器は, 弥生前期末～中期初頭の時期のものかと判断でき, 第10号土壙の時期を示すと思われる。



第 85 図 第12号土墳出土土器実測図 (1/4)

第11号土墳 (第86図)

遺跡の東端近くで、第1号溝が西端で発掘区外にかくれる位置に検出された。西端で第1号溝に切られており、西南側の大半は未掘となつてしまった。ほぼ東西に長軸をとつており、上面での長さ240cm以上、幅120cm、深さは57cmと深い。底面は幅60cmほどあり、壁も下半では立っている。底面には深さ15cmほどの掘り込みがみられる。全体の形状・規模から、土葬墓としての可能性を充分有している遺構と考えられる。

遺物の出土が無く、当土墳の年代を明確にすることはできない。

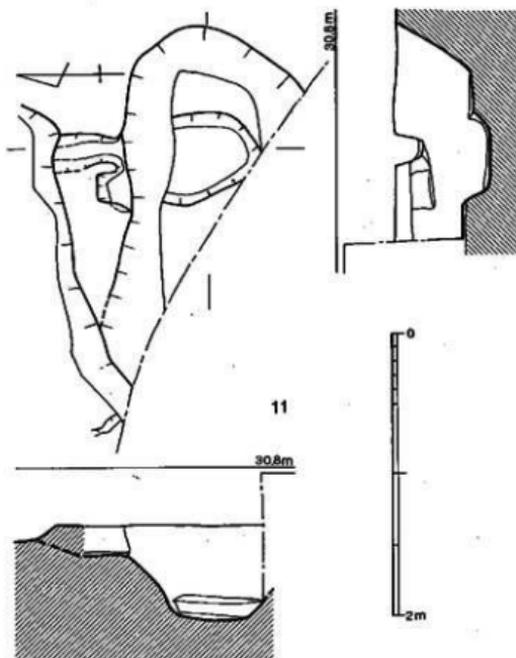
第12号土墳 (第83図)

遺跡中央部の住居跡が密集する部分の西端に位置する。第19号住居跡に東南辺を切られている。ただ、この住居との接し方が、いかにも住居付属の施設らしい状況でもあり、その可能性も残る。長さ190cm、幅114cmの長方形プラン土墳で、底面は平坦であり、深さは約30cmとなる。全体に整然とした形態であり、ごみ捨的な状況ではない、床面近くから高杯が出土しており、第13号土墳と同様に一応住居群に伴う祭祀土壇と考えておけるが、上述した如く、第19号住居そのものに付属する施設という案も残しておきたい。

出土遺物 (第85図)

壺(1) あまり張らない胴部から、ゆるやかに折れて外傾する口縁となる。胴部は内外面ともにナデ、口縁は内外面ともに横ナデ仕上げとなる。

壺(2・3) 2は、頸部片で、胴部との境目に凸帯を付けた痕跡が残る。内面はオサエナデ、外面は縦ハケの上をナデている。3は、大型壺の底部で、復原底径10.8cmとなる。凸レンズ状にふくらみをみせるタイプで、胴部～底部外面はナデのあと雑なへう磨き、内面は丁寧にナデ



ている。

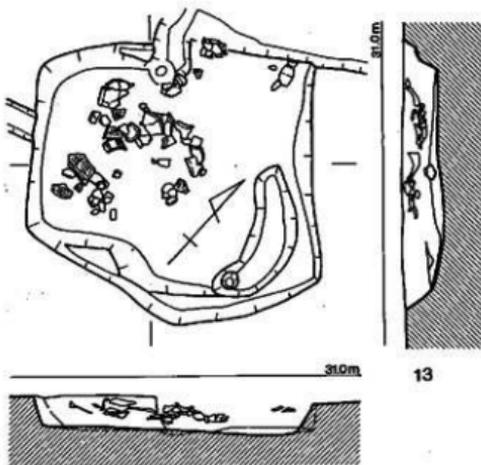
高杯(4) 脚端径18.6cmで、内面稜以下はハケ、脚柱内面にはシボリ痕を残しており、板ナデが施される。外面は縦へら磨き。第12号土壌の時期は弥生後期中葉。

第13号土壌 (第86図)

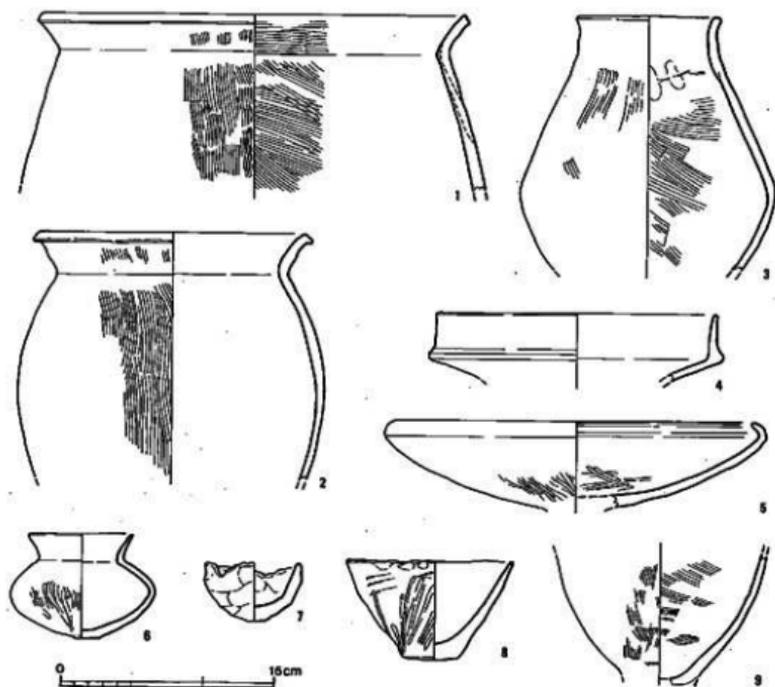
第19号住居を切る。底面はかなりの凹凸がみられる。多量の土器の出土がみられた。平面プラン、底面の形状、土器出土状況などからみて、住居群と関連する祭祀土壌であると考えたい。

出土遺物 (第87図)

甕(1・2・9) 1は、口径29.8cmの大型品で、内外面ともにハケ調整を施す。2は、胴部外面は縦ハケ、内面は丁寧なナデ。9は内外面ともにハケ調整を施すが、内面はその上をナデている。壺(3・4・6) 3は、胴部の内外面ともにハケ調整。4は、口径19.2cmの複合口縁壺であろう。口縁部の立ち上がりわずかに外傾気味となる程



第86図 第11・13号土壌実測図 (1/40)

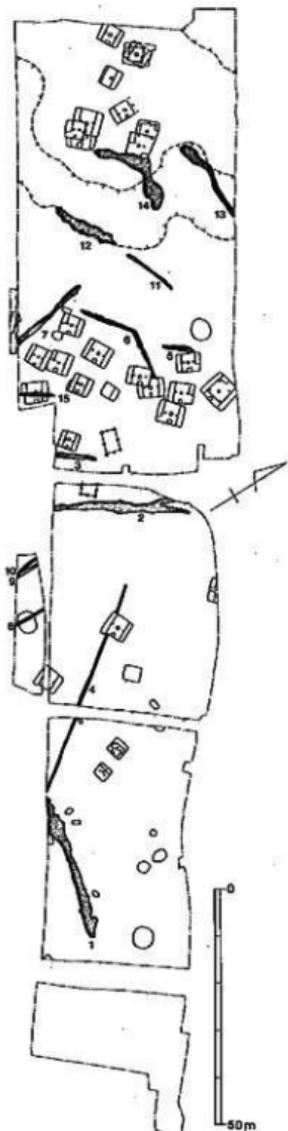


第 87 図 第13号土濱出土土器実測図 (1/4)

で、二重口縁壺への移行形態を示している。口縁内外面は横ナデであるが、以下内外面は磨滅して調整不明である。6は、直径1.8cmの小さな底部にやや扁平な胴を付けた小型壺である。口径7.4cm、器高7.4cm、胴部最大径10.2cmを測る。胴部外面は縦へら磨き、内面はナデている。高杯（5）口径25.2cmとなる、内曲げ口縁タイプで、強く内湾している。体部内面はへら磨き、外面は磨滅しているが下半にへら磨きが残っている。

手捏ね土器（7・8）7は、口径6.6cm、器高4.1cmの丸底のミニチュアである。全面に指圧痕を顕著に残す。口縁も歪つである。8は、口径11.6cm、器高7.4cmの鉢形土器で、内面はナデ、外面はナデのあと荒いへら磨きを施す。口縁外面には指頭圧痕が残る。

以上の土器をみると、2のように古相を残すものもみられるが、4のように土師器へと継が



第 88 図 十叉遺跡溝配置図 (1/1,200)

る器形のものもあり、いくらか幅がみられる。この第13号土墳の年代としては、弥生後期の最終末段階と考えておきたい。

(4) 溝状遺構

本遺跡では、遺跡内各所に計15本の溝状遺構を検出した。各々大小あり、自然流路的な浅く不整形なものや、明らかに人工的掘削によるものがある。ただ、大規模で集落を囲むような環濠的人工掘削溝はみられない。また、各々時期を決定できる類は少ない。

以下、各溝毎に簡単に報告しておきたい。

第1号溝状遺構

遺跡の東端近くで、ほぼ東西方向に走る幅広い溝である。検出分での長さ31m、幅1～3mで底面は凹凸著しく、10～30cmの浅くだらっとした形状である。東へ流れた自然流路的な性格と思われる。

出土遺物 (第89図)

壺 (1) 小壺の肩部片で、2条の沈線の上に、短線を斜位に施した「之」の字文的な沈線文を施している。弥生前期の所産。

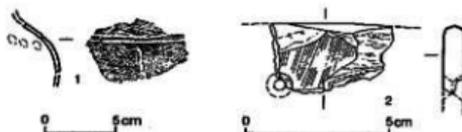
石匙丁 (2) 赤紫色砂岩製で、厚さ7.5mmと部厚い。孔は両面からの穿孔である。

以上の出土遺物がこの溝の年代を示しているとは考えられず、単に上限を示すにすぎないと思われる。

第2号溝状遺構

遺跡中央の集落密集部分の東側にあり、南西から北東へ直線的に流れる溝である。深い所は2段掘り状に

なり50cmほどの深さとなるが、全体に水が流れていた排水路的性格と思われる。出土遺物で時期を確定できるものがないが、現在の農業用水路と平行しており、或いは耕地整理以前の水路であった可能性もある。



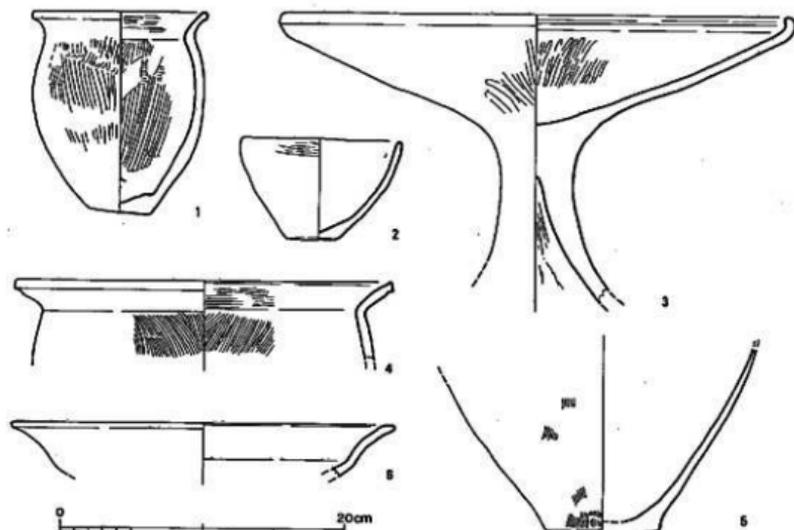
第 89 図 第 1 号溝出土遺物実測図 (1 は 1/4, 2 は 1/2)

第 3 号溝状遺構

遺跡中央部の第 2 号住居跡の東側に検出された。幅 1m 前後で深さ 20cm ほどの浅い類で、南西から北東へ直線的に流れている。埋土も新しい感じで、東隣の現在の農業用水路と平行していることから、耕地整理前の水路かとも考えられる。

第 4 号溝状遺構

遺跡の東半で、南東から北西へ全長 46m 分を検出した。幅 40cm ほどで深さ 30~40cm のしっかりと掘り込まれた溝である。第 6 号住居跡に切られており、時期の下限が判明した。



第 90 図 第 4・5 (6 のみ) 号溝出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (第90図)

甕 (1・4・5) 1は口径12cm, 器高14.4cm, 胴部最大径12.1cmの小甕である。胴部内面は縦ハケ, 外面もハケ調整で下半部はナデ消している。4は, 復原口径26.6cmで, 口縁端部の上下端をわずかにつまみ出している。口縁内面横ハケ, 外面は横ナデ, 胴部は内外面ともに細かいハケ調整である。5は, わずかに凸レンズ状にふくらむ底部で, 胴部内面は丁寧なナデ, 外面はハケのわずかに残る板ナデ, 底外面はナデている。

鉢 (2) 口径11.3cm, 器高7.2cm, 底径3.9cmの, いくらか内湾気味に開く形態である。全面ナデているが, 口縁外面には横ハケが残っている。

高杯 (3) 口径35.4cmの大きなもので, 内曲げ口縁となる。杯部内面はへら磨き, 外面も磨減しているがへら磨きと思われ, 脚柱部外面は調整不明。内面にはシボリ疵が残る。

以上の土器からみて, この第4号溝は, 弥生後期中葉のものと考えられる。

第5号溝状遺構

遺跡中央の第16号住居跡に切られる, 浅くだらっとした短い溝である。長さ7m, 幅0.3~1mで深さ0.2mほどである。しっかり掘り込まれた類ではなく, 雨落ち風の細長いくばみとみられる。

出土遺物 (第90図)

高杯 (6) 口径26.6cmで, 体部中途で屈折反転して開く口縁となる。内外面ともに磨減している。屈折部の外面に稜をつくらない。

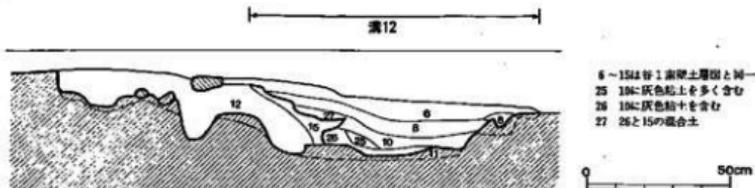
この土器は, 弥生後期後葉でも終末期に近いもので, この溝の時期を示すものであろう。

第6号溝状遺構

遺跡中央の住居密集地区の西側から中央に位置する。東から西へ17m並びた所で45°屈折して, さらに南西へ12m延びている。幅1~0.5mほどで, 深さ20~40cmとなりわりとしっかり掘り込まれている。東側で, 第8・12・13号住居跡に切られており, 時期の下限がわかる。出土遺物がなく明確ではないが, 住居との関係から, 弥生後期後葉以前のものとなる。埋土の状況から, 縄文期のものではなく, やはり, 住居群の時期に近接した弥生後期の範囲におさまるものと考えられる。

第7号溝状遺構

中央住居群の西端に位置し, 略南から北へ流れる。幅1.3~0.6mで全長19mを調査した。深さ20cm程と浅いが, わりとしっかりした感じの掘り込みである。中央住居グループの西端を区画するような溝であるが, 出土遺物のうち時期を明確にできるものがなく, 残念である。



第 91 図 第12号溝土層実測図 (1/20)

第 8 号溝状遺構

遺跡の東側の側道部分の拡張区で南北方向に走る細い溝である。縄文晩期の住居跡である第20号竪穴住居を切っており、時期の上限は判かる。幅0.4~0.6m、検出分の長さ7mとなる。深さ40cmほどのしっかり掘り込まれた溝であるが、出土遺物が無く、時期は明確にできない。

第 9 号溝状遺構

上記第8号溝の西側にはほぼ平行して位置する。長さ5m分だけ検出したが、幅0.7mほどで深さ0.4~0.5mのはっきり掘削された溝である。出土遺物が無く、時期は明確にできない。真北方向であることから、律令期以後と考えることも可能であろう。

第10号溝状遺構

上記第9号溝状遺構の西側で、南端を第9号溝に切られている。やや幅が狭く深めであるが、曲線的であり、第9号溝と様相が異なる。出土遺物がなく、時期は明確にできない。

第11号溝状遺構

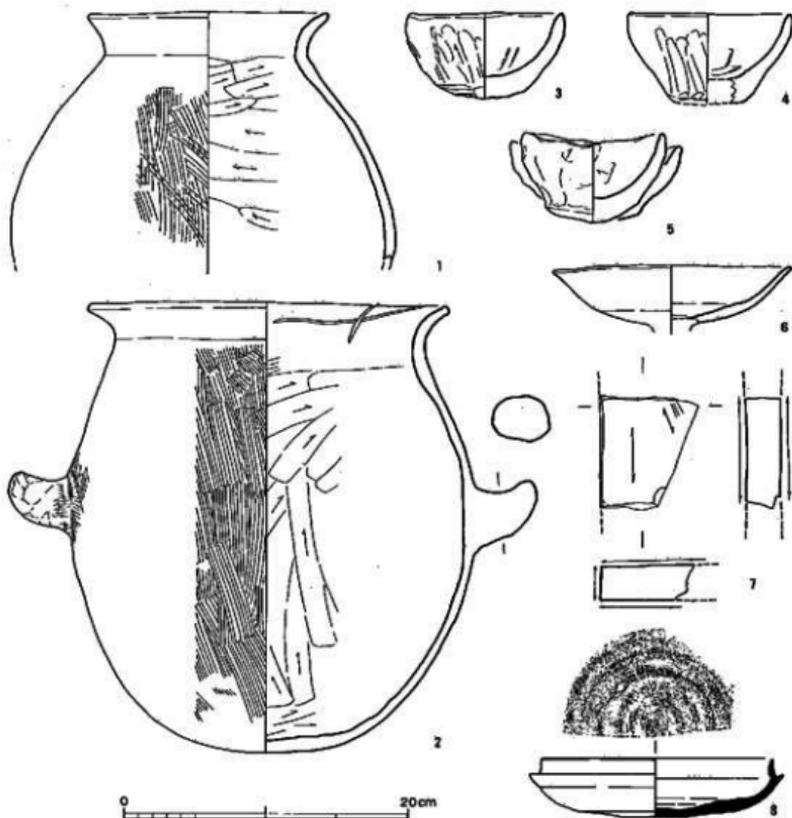
谷の西岸に位置し、東北東から西南西へ13mほど直線的に走る細い溝である。幅50cmほどで、深さ20cmと浅い類である。谷方向への排水路的性格かと思われるが、出土遺物が無く、時期は明確にできない。

第12号溝状遺構 (第91図)

谷の西岸に沿って、南西から北東へと走る水路と思われる溝である。谷かほとんど埋没した頃に、谷西岸の内側に掘り直して灌漑用水路とした古墳時代後期の農業技術の成果と考えられる。幅3m、深さ70cmほどの規模である。谷埋土中に掘り込まれていたため、埋土の灰色粘土の検出が困難で、北東半は未検出のままとなった。

出土遺物 (第92図)

壺(1・2)1は、口径16.7cm、胴部最大径27.4cmで、胴部内面は横へら削り、外面は縦へ



第 92 図 第12号溝出土遺物実測図 (砥石のみ1/2, 他は1/4)

を施す。2は、把手付で、口径25cm、器高32.2cm、胴部最大径28.2cmとなる。胴部内面はへら削り上げ、外面は縦ハケを施す。口縁内面には×印のへら沈線が描かれている。1・2ともに頸部がそれ程肥厚しておらず、同時期のものと思われる。

高杯（6）溝底面出土品で、口径16.5cmの土師器杯部片である。内外面ともに横ナデを施している。

手捏ね土器（3～5）3は、口径10.6cm、器高6.1cmで、内面は横ナデ、外面は削りに近いナデ

で、底外面は削りである。4は、口径11.2cm、器高6.4cmで、内面は板ナデ、外面は指オサエナデのままである。5は、口径9.7~11.7cm、器高5.5~6.4cmで、大きく歪んでいる。内面は板ナデ、外面は指オサエナデのままである。

須恵器杯(8)口径16.2cm、器高4.1cm、受け部径17.8cmとなる。底外面は静止ヘラ削りで、内底面にはヘラ記号がみられる。焼成軟質で外面灰色、内面は灰白色をなす。

砥石(7)粘板岩製仕上げ砥の小片で、表裏面と左側面を使用している。現存長4cm、幅3.4cm、厚さ1.3cmである。

以上の出土遺物は、8の示す6C中頃前後の時期と矛盾するものは無く、第12号溝の年代を示すものであろう。また、3~5の同種のミニチュア3個出土は、水路への祭祀を示すものであろう。

第13号溝状遺構

谷の北端から西へのびる灰色粘土埋土の溝で、長さ18m、幅2.5~1m、深さ15~20cmほどの浅いものである。谷が埋没する途中で、西側から流れた自然流路と考えられる。出土遺物のうち、時期の明確なものが無く、年代の決定はできないが、谷埋没の状況からみると、弥生後期終末から古墳時代後期までの幅の間のものと推定できる。

第14号溝状遺構

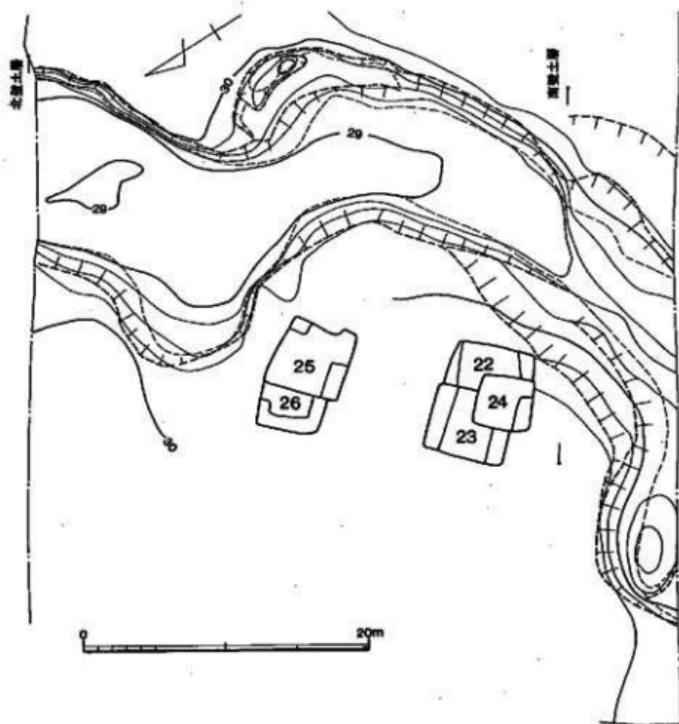
上記第13号溝の西南隣に位置する蛇行溝である。長さ18m、幅3~1.2mで深さ10~20cmの浅い類である。第22・25住居跡と接しているが、両者の前後関係は明確ではない。第13号溝と全く同じ性格の自然流路であろう。出土遺物が無く、時期は明確にできない。

第15号溝状遺構

遺跡中央の住居密集地区の南端で、第32号住居跡の真中を切って直線的に掘られている。長さ8m、幅0.8m、深さ0.3mのU字溝である。出土遺物がなくて時期が確定できないが、弥生後期終末期の第32号住居よりも新しいことは判かる。

(5) 谷

本遺跡や、西隣の赤橋森ヶ野遺跡が占地する沖積微高地は、南西側の丘陵裾から広がっており、現状ではほぼ平らな水田・畑地で、地形の変化など判からない状況である。しかし、今回



第 93 図 谷部分測量図 (完掘後) (1/400)

このバイパス建設に伴う発掘調査や試掘調査などで、往時は各所に河川や谷・低地が入り込んでいたことが判明した。これらの悪条件を克服して開田事業にはげんだ祖先に対して頭の下がる思いさえする。

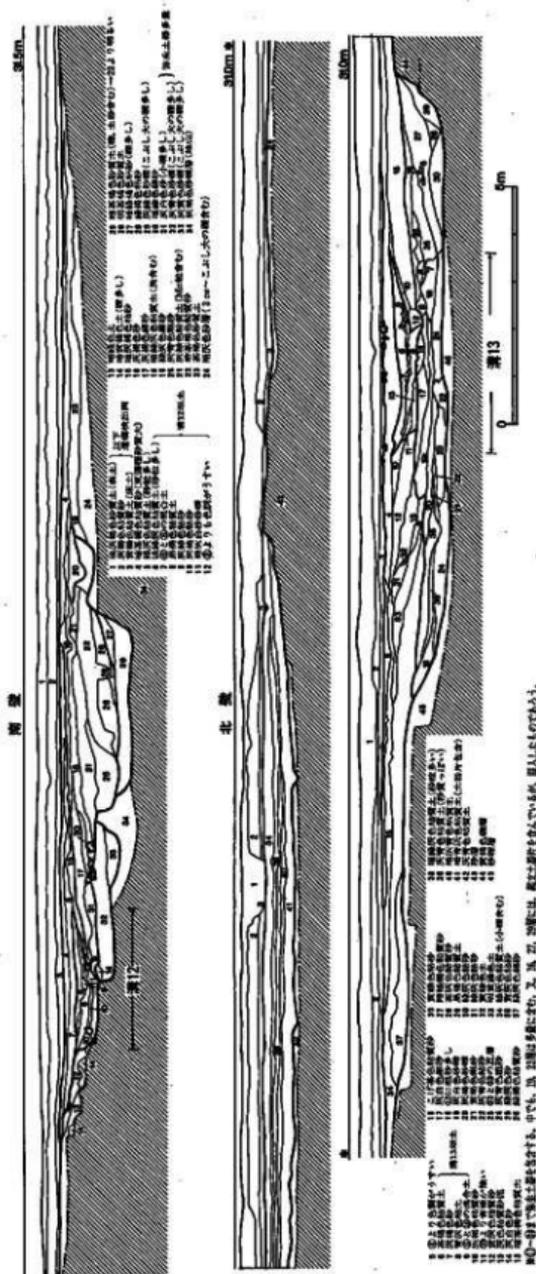
さて、本道跡西側に蛇行して検出された谷は、正確には自然河川であったと思われ、その埋土の大部分が砂礫と灰色粘土からなっている。(第94図土層図参照)幅は10-15m、深さは南端で1.5m、北端で1.2mあるが、全体としては、南西から北東へ流れたと考えられる。

埋没状況についてみると、最下層まで弥生後期土器片がみられることから、この頃までは兩岸・底の侵食が盛んであり、その後埋没がはじまったと考えられる。第12号溝が掘削されたところ、つまり古墳時代後期には、すでに九割方埋没してしまっている。よって、その間に大洪

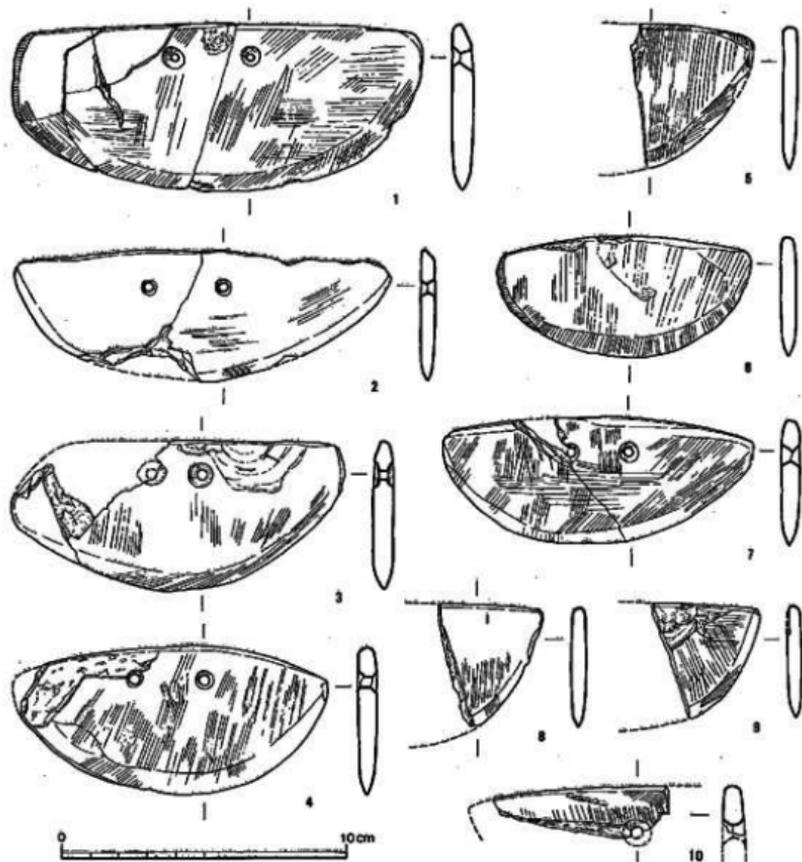
水等の度重なる出水によって埋没したことになる。だが決して一回で埋まったものではなく、何回もの段階を経ていることが土層の観察で判断できる。

本遺跡で弥生後期に一大集落を形成して、古墳時代初頭まで続いたものが、突如として姿を消してしまった最大の理由がここにあったと考えられる。更に西方の森ヶ坪遺跡で古墳時代後期になって再び集落が形成されたということは、これらの暴れる自然河川が殆ど埋没してしまい、用水路掘削等の土木技術の発達も相まって、この沖積地を人間の手に取り戻せる状況にあったことによると考えられる。この背景には、当然、社会組織の明らかな変化があったものと想定される。

以下、多量の出土遺物のうち既報告の縄文期のものを除いて報告しておきたい。



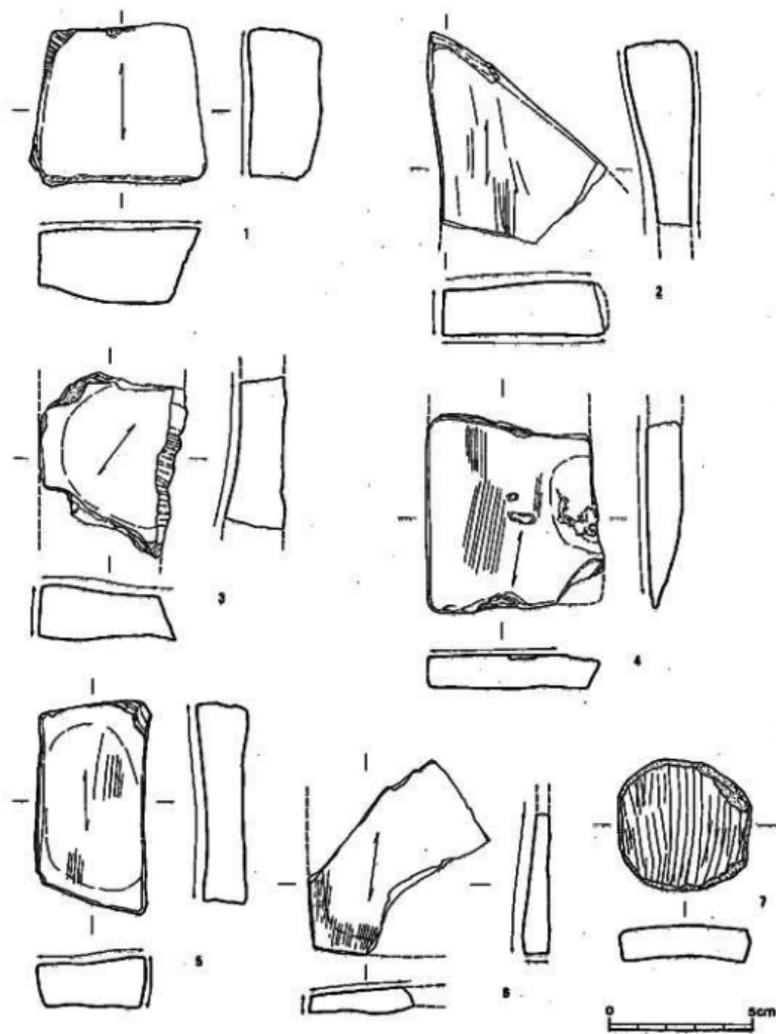
新 94 図 谷部分南・北土層実測図 (1/120)



第 95 図 第 1 号谷出土石庖丁実測図 (1/2)

出土石器

石庖丁 (第95図) 谷部から10点が出土しているが、1・3・4・6・8・9が谷中央部の砂礫層出土品、2が谷北端の砂礫層出土品、5が第12号溝に切られる部分の谷埋土出土品、7・10が南端の側道部分下の谷砂礫層出土品である。1は、赤紫色砂岩製で、長さ14.3cm、幅5.9cm、厚さ0.75cmの大型品である。2孔間は2.3cmあり、両面から穿孔している。2は、灰褐色の凝灰質粘板岩製で、長さ13.1cm、幅4.6cm、厚さ0.5cmの薄手品である。2孔間は2.3cmで、両面から



第 96 图 第 1 号谷出土砾石等实测图 (1/2)

穿孔している。表面は風化して、酸化鉄が付着している。3は、灰色の砂岩製で、長さ11.6cm、幅5.3cm、厚さ0.7cmの全体に部厚い作りである。2孔間は1.4cmと短く、孔のあけ方に特異な方法を用いている。おそらく先端の太い石製穿孔具で両面から窪めた後に、中央部を細い工具でほがしたものであろう。右上部の割れた部分は、かなりすれている。左下あたりの刃部には細い使用痕が認められる。4は、赤紫色砂岩製で、長さ10.8cm、幅5.3cm、厚さ0.65cmとなる。表裏面ともに粗い擦痕を残している。2孔間は2.1cmあり、両面から穿孔して、更に中央部分をくり抜いている。左上側の割れた部分はすれており、そのままかなり使用したと思われる。5は、現存長4.3cm、幅5cm、厚さ0.5cmで、赤紫色砂岩（凝灰質）を用いている。背部は面取り状に研磨している。両面ともに丁寧な仕上げである。6は、濃灰色の粘板岩製で、長さ8.8cm、幅4.3cm、厚さ0.55cmの特異な小型品である。穿孔の痕跡は全く認められない。表面の研磨擦痕が鮮明で、作りたてでこれから穿孔する段階のものかとも思われるが、むしろ、手の中にすっぽり収まる小型品であるため、穿孔の必要の無い完成品なのかもしれない。7は、長さ10.8cm、幅4.5cm、厚さ0.65cmの赤紫色砂岩製である。2孔間は、1.7cmあり、両面から穿孔している。粗い研磨擦痕が明瞭である。8は、現存長3.6cm、幅4.3cm、厚さ0.5cmの赤紫色砂岩製で、片面に酸化鉄が付着している。9は、現存長3.8cm、幅4cm、厚さ0.5cmの赤紫色凝灰岩製である。10は、現存長6.2cm、幅1.8cm、厚さ0.8cmの暗灰青色の砂岩製である。背部に金属利器による刻目状の小さな加工キズが多く残る。

砥石（第96図）1は、谷北端砂礫層出土の粘板岩製仕上げ砥で、珍しく上面しか使用していない。長さ5.7cm、幅6.1cm、厚さ2.6cmで、右側面は金属利器で粗く横位に削った跡が顕著である。2は、杭51北側の第12号溝より下の砂礫層出土品で、粘板岩製仕上げ砥である。現存長7.4cm、幅5.8cm、厚さ2.3cmで表裏面と左側面をよく使用している。3は、谷北端砂礫層出土品で、長さ6.5cm、幅5.2cm、厚さ2cmの粘板岩製仕上げ砥石である。表面が大きくへこみ、左側面とともによく使用されている。右側面は割れた後に、粗く鉄ノミ等で縦位に削った痕跡が残ったままである。4は、谷北半部砂礫層出土品で、長さ7cm、幅6.1cm、厚さ1.2cmとなる灰緑色粘板岩製仕上げ砥である。表面のみを使用しており、左側面は磨いてはいるが使用面ではない。裏面も粗く調整はしているが、殆ど磨いてはいない。石材中の異質部分や孔等が各所にみられ、あまりいい材料ではない。5は、谷中央部砂礫層出土品で、長さ7.5cm、幅3.9cm、厚さ1.8cmの小型品である。淡灰色の粘板岩製仕上げ砥で、中央がくぼんでいる。表面のみを使用しており、裏面は雑に磨いてはいるが砥石としては使用していない。6は、南側掘道部分下の谷砂礫層出土品で、薄く割れてしまった粘板岩製仕上げ砥である。表面と左・下側面を使用している。

出土鉄器 (第33図)

鉄鑿 (28) 南端の側道部分下谷砂礫層出土品で、現存長6.2cm、幅0.7cm、厚さ0.6~0.7cmの角柱状品である。先端が片刃状に削られており、小細工用工具と考えられる。

鉄錐 (29) 側道部分下の谷砂礫層出土品で、現存長3.4cm、先端幅0.7cm、基部幅0.4cm、厚さ0.35cmとなる。幅の小さな斧形形式かと思われるが、細根状となることも併考すると、木工具の一種とする可能性も捨てきれない。

鉄斧 (30) 長さ8.4cm、刃部幅4.6cm、袋部上端は4.5×2.7cmとなる。南端部側道下の谷砂礫層出土の鍛造鉄斧で、袋部は両側から曲げて中央であわせた類である。

以上の鉄器は、谷埋土の砂礫層出土品ということで、厳密には時期を確定し難いが、共伴の土器や、周辺の住居等遺構からみて、古墳初頭期以前で、弥生後期終末を中心とした時期のものであることはほぼ間違いない。その意味でも貴重な資料である。 (中間)

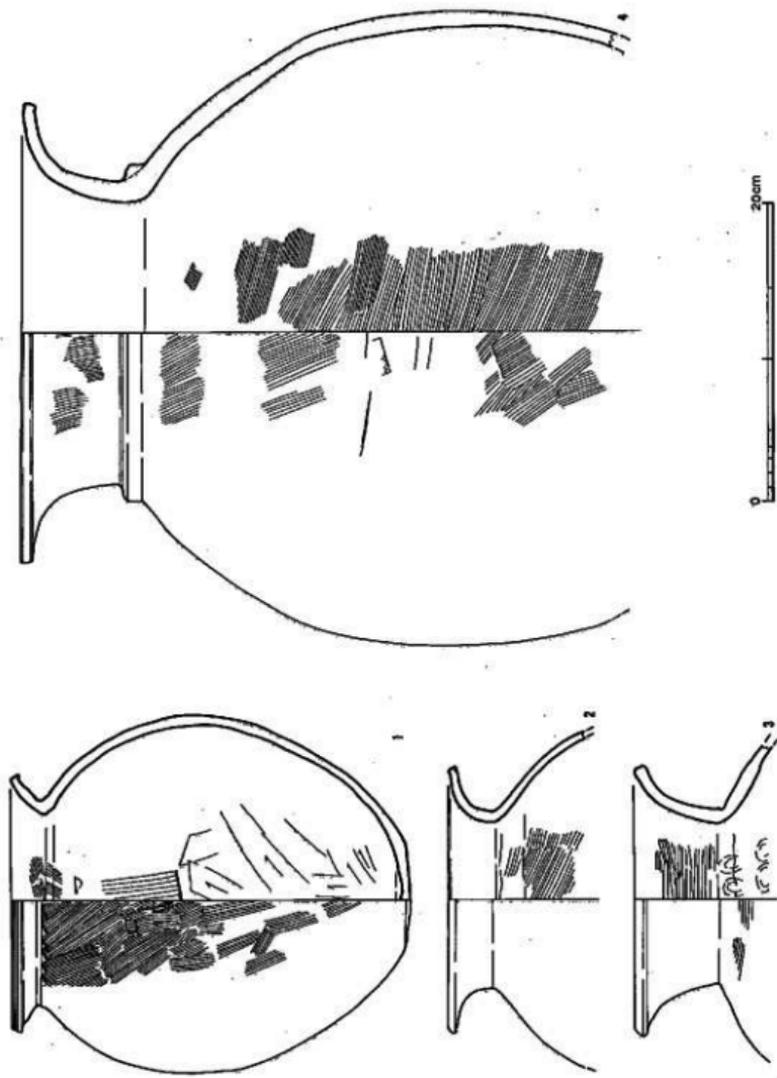
出土弥生式土器 (第97~105図)

壺 (1~29) 器形・口縁部の形状などから大きく7種類に大別できる。①球形の胴部に強く「く」字状に外反した口縁部を有する壺形壺(1)、②球形ないしは扁球形の胴部に立ち気味に大きく開く口縁部を有する広口の壺(2~5)、③扁球形の胴部に細頸の口頸部がつく壺で、頸部が短かいものと長いもの(6~8・24~26)がある。④鋤先状口縁の壺(15・17)、⑤袋状口縁系の壺(18~20)、⑥広口短頸壺(22)、⑦無頸壺で、口縁部が外湾気味に立ち上がるもの(27・28)と内湾するもの(29)がある。

①タイプである1の口縁部外面には凹線文が施されている。調整は胴部外面刷毛、内面下半をへら削り、上半は板状工具によるナデ、口縁部内面は刷毛、その後内外ともヨコナデで仕上げている。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。凹線文・内面へら削り技法など吉備系壺の影響を受けている土器である。

②タイプは北部九州でもみられるが、豊前地方で普遍的形式をなすようである。調整は胴部外面を刷毛のもの(4・5)とナデないしはへら磨きのもの(2・3)があり、5の胴部外面下半はへら削りしている。内面も刷毛のもの(2・4・5)とナデのもの(3)がある。口縁部外面を刷毛調整するもの(4・5)とナデのもの(2・3)とがあり、内面はナデ(2)と刷毛(4・5)、さらにはへら磨きのもの(3)もある。大きさにも大小あり、4は大型品で復原口径33cmを測る。

③タイプは、いわゆる細頸壺で作りの良い土器である。調整は胴部外面を刷毛、内面は刷毛とナデの併用(7)とナデのもの(6・8)があり、頸部外面はいつでも刷毛、内面は刷毛のもの(6)とナデのもの(7・8)がある。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。6の底部付近はナデ調整で、凸レンズ状の平底である。



第 97 図 第 1 号谷出土弥生式土器模刻図 (その 1) (1/4)

15・16はいずれも小破片のため明確ではないが、鐮先状口縁をなす壺と思われる。17は小型品で、復原口径16cmを測り、端部下端に櫛状工具により刺突文を施している。

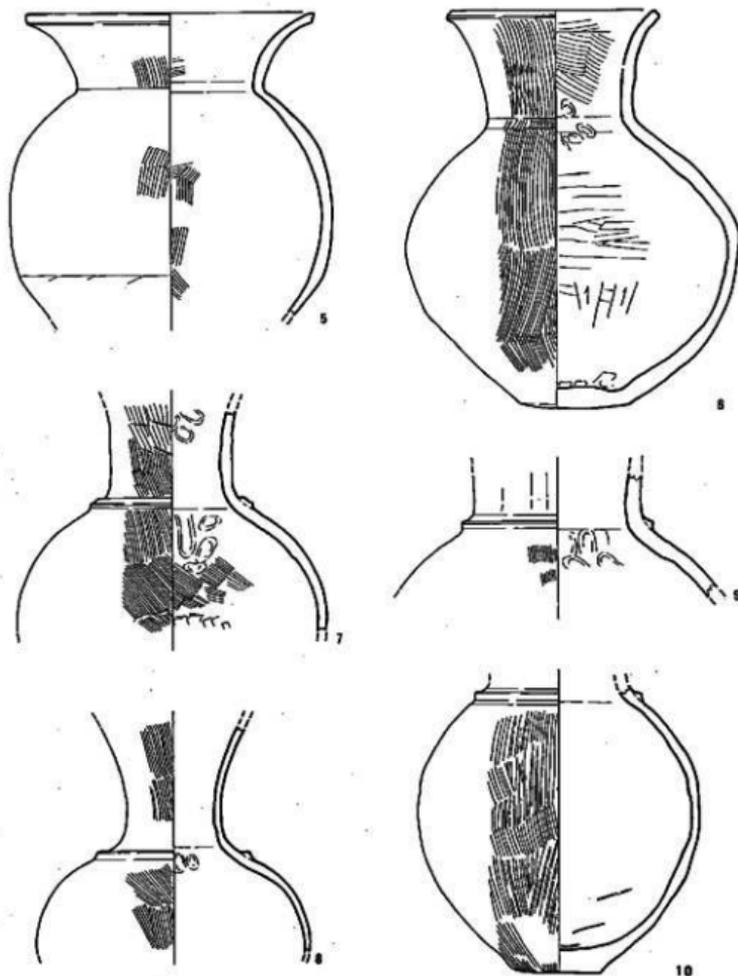
⑤タイプは袋状口縁壺で、口縁部が外湾気味に外反し、端部をつまみ出している。18は口縁部外面に櫛描き波状文、19・20はへら状工具による暗文を施している。

22は広口の短頸壺で小型品、復原口径10.1cmを測る。内外ともナデて仕上げている。色調は外面暗褐色、内面灰色を呈し、焼成は良好である。

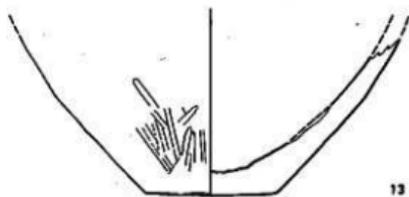
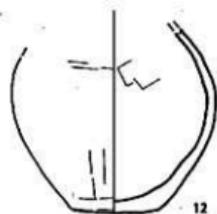
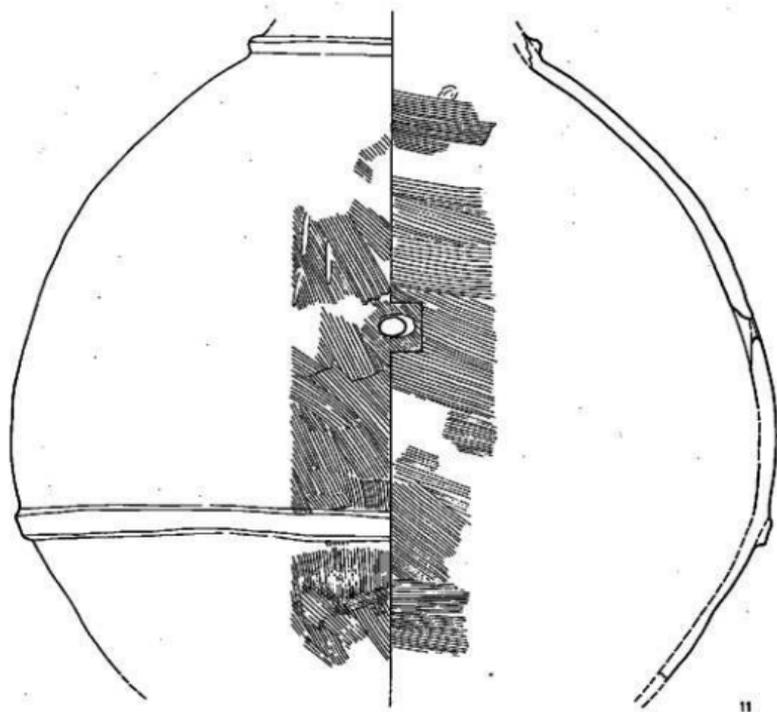
27・28は北部九州では極めて珍しいタイプで、他地域でもあまり類例をみない器種である。現在知られる資料としては、森ヶ坪遺跡で4例以上、前原町三雲寺口遺跡で1例、長崎県対馬佐藤白岳遺跡の1例のみである。佐藤白岳例は朝鮮半島系の瓦質土器で、形態的には最も類似する資料で、国内よりも半島との関係を考えるべき土器であろう。27は完形で、口径7～7.9cm、胴部最大径16.5cm、器高14.5cmを測る。胴部はソロバン玉状を呈し、底部は緩やかな凸レンズ状平底である。調整は体部外面を丁寧なクテへら磨き、胴部内面は細かい刷毛、口縁部内外はヨコナデ、底部内外はナデて仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。28は小型品で、復原口径6.55cmを測る。調整は体部外面をへら磨き、内面はナデて仕上げている、一部に刷毛を残している。29は内湾する口縁の無頸壺で、復原口径9.2cm、体部最大径14.8cmを測る。調整は体部外面を丁寧なへら磨き、内面はナデて仕上げた暗黄褐色を呈す焼成良好な土器である。

壺(30～51)大きく5種類に大別できる。①タイプは頸部が強くしまった短かい「く」字状口縁を有する大型甕で、頸部に凸帯をめぐらす(30・31)。口縁端部には凹線をめぐらし、31の凸帯には刻目が施されている。復原口径は30が22cm、31が30.7cmを測る。②タイプはいわゆる「く」字状口縁の長頸甕で、大中小がある(33・36～49)。39～43は大型、36・44～48は中型、33・49は小型品である。いわゆる「く」字状口縁でも37は、口縁端部をつまみ上げ気味に仕上げた跳上げ口縁の甕である。調整は胴部内外を刷毛で仕上げたものが一般で、内外ともナデ仕上げ、外面下半をへら削りしたもの(42)、内面をへら削りしたもの(48)、刷毛とナデを併用したもの(37・38)、刷毛とへら削りを併用したもの(45)、他に外面をへら磨き、内面をナデて仕上げた特異な甕(47)もある。底部はいずれも平底で、わずかに凸レンズ状をなす平底の甕(42・43)もある。36の口縁部付近外面と内底部、42の胴部上半には煤の付着がみられる。色調は30～32・40が褐色ないしは淡褐色、36・41・46～48が暗茶褐色、他は全て黄褐色を呈し、焼成は32・42がややあまい他は、良好である。

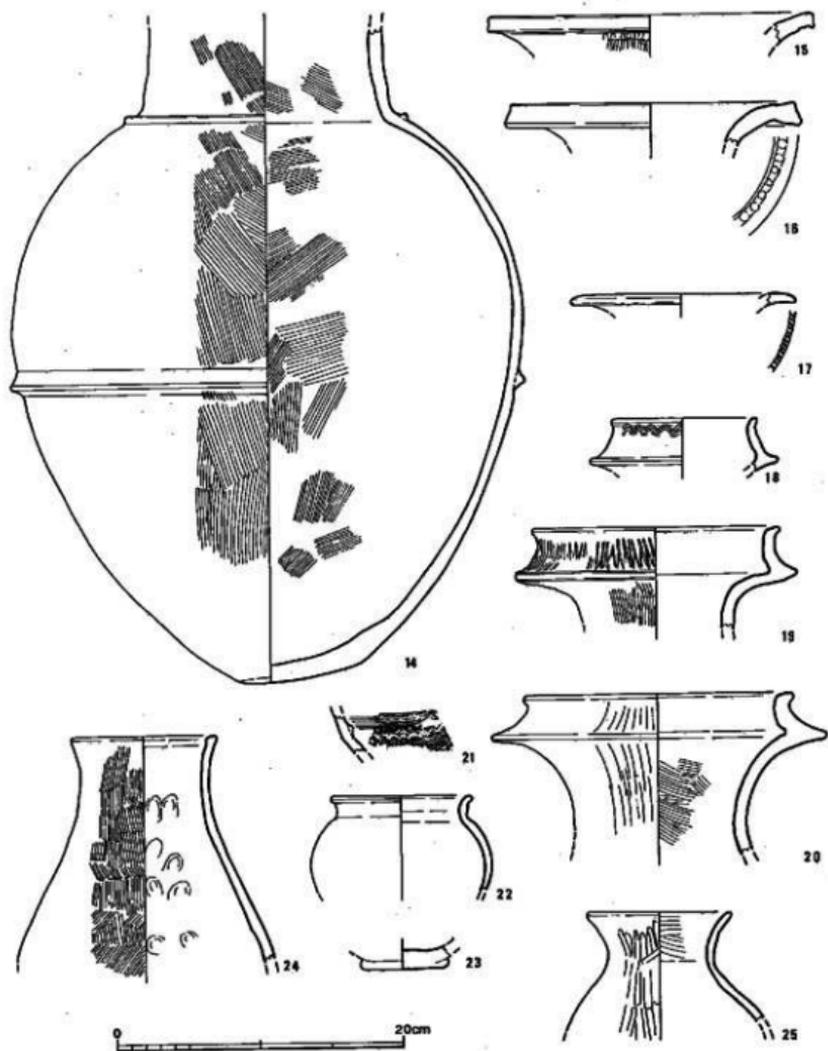
50・51は全体の形状は不明だが脚台付甕の脚台付近の資料で、50は脚台に比べ、体部が小型である。50の体部と脚台部外面はへらナデ、内面と台部内外はナデて仕上げている。体部外面には煤の付着がみられる。51は体部外面刷毛、内面ナデ、脚台部内外はヨコナデで仕上げている。脚台径は50が9.5cm、51が9.3cmを測る。



第 98 図 第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 2) (1/4)



第 99 図 第 1 号谷出土弥生式土器実測図 (その 3) (1/4)



第100图 第1号谷出土弥生式土器实测图(その4)(1/4)

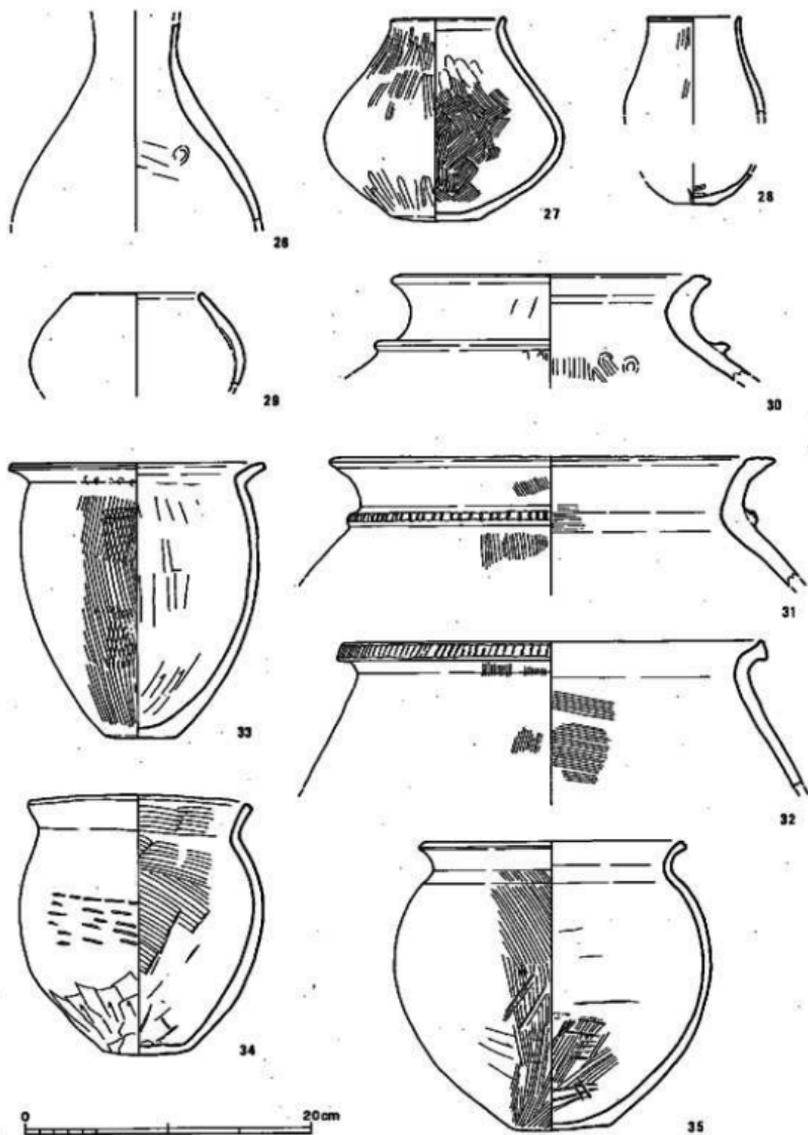
鉢 (34・35・62) 球形の胴部に緩やかに外反する口縁がつく鉢である。34は口径15.3cm, 胴部最大径17.5cm, 底径6.4cm, 器高18.1cmを測る。35は口径19cm, 胴部最大径22.6cm, 底径6.9cm, 器高20.1cmを測る。調整は34が胴部外面下半をへら削り, 上半を粗いタタキのあと口縁部外面も含めてナデ, 内面は下半をナデ, 上半から口縁部内面は粗い刷毛で仕上げている。35は胴部外面刷毛, 内面は下半を粗い刷毛, 上半はナデ, 口縁部内外はヨコナデで仕上げている。また, 62は小破片のため明確ではないが偏平な把手がつく平底の鉢で, 珍しいタイプである。復原底径は12.7cmを測る。内外ともナデで仕上げている。

甗 (52・53) 底部付近の破片資料で底部に小孔がある。52の外面は粗いタタキ, 内面はナデで仕上げている。53は内外ともナデで仕上げている。色調はいづれも黄褐色を呈し, 焼成も良好である。

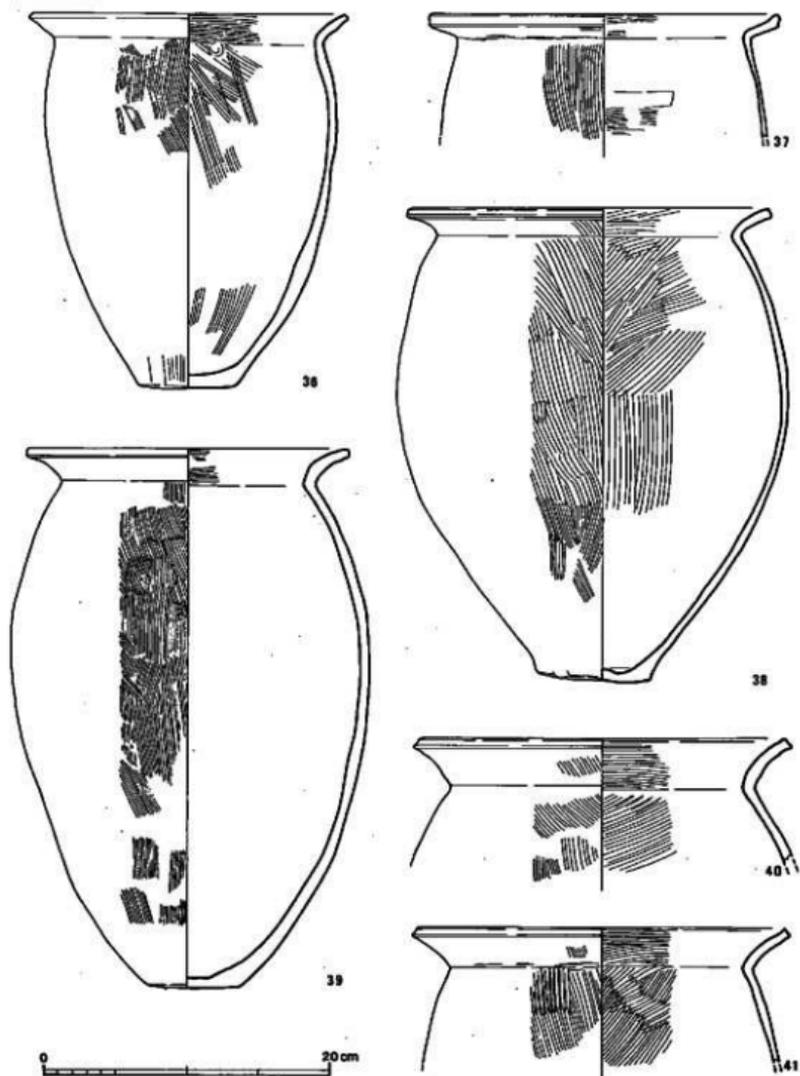
碗 (54~61) 54~56は体部にへら描きにより鋸歯文帯をめぐらす碗である。54は鋸歯文を二段に重ね, その間と上下を沈線で画している。55・56は小片のため明らかではないが, 鋸歯文帯は54とは上下逆で, 55は2条の平行沈線でその下を画している。鋸歯文内の文様は, 54がタテへら描きの沈線文, 55は櫛歯による横位の刺突文, 56はへら描きの斜格子文である。いづれも精良な土器で, 色調は54が茶褐色, 55・56が黄褐色を呈し, 焼成も良好である。この種の鋸歯文で飾った碗は, 九州内でも4例(福岡県三輪町大竹遺跡2例, 北九州市野屋遺跡1例, 熊本県山鹿市方保田東原遺跡1例)を知るだけで極めて少ない。鋸歯文を多用した地域は, いわゆる吉備地方を中心とした東部瀬戸内地方で, とりわけ, 壺や器台等の主文様として採用されている。谷部で出土した口縁端部に凹線文を施した壺(1), 甗等の胴部内のへら削り手法の採用, 吉備系の低脚付高杯(65~67), 北部九州の後期を代表する高杯(69)の母胎が吉備系高杯にあるということなど, 吉備地方との密接な交流が考えられる。従って, このような交流の中で, 鋸歯文で飾られた碗が流入したのか, 影響下に形成された土器か, どちらかの可能性が高い。筆者の勉強不足で吉備地方での類例を知らないが, 今後の類例の増加を期待したい。

57~59は平底の碗で, 体部下端に57が1条, 58が3条の沈線をめぐらしている。調整は57が体部内外をへら磨き, 底部内外をナデ, 58は体部外面ナデ, 内面刷毛, 底部内外はナデ, 59は内外ともナデで仕上げている。いづれも胎土・焼成とも精良な土器である。60・61はいわゆる手捏の小型碗である。

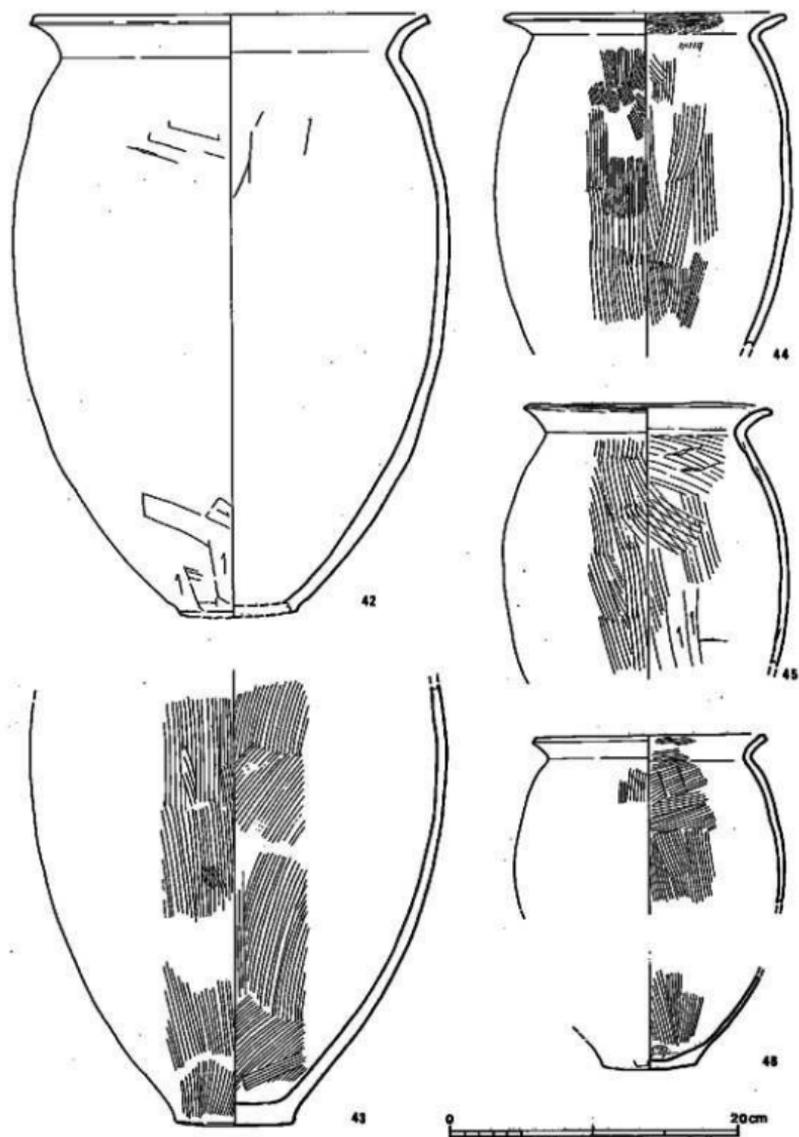
高杯 (63~74) 65~67は低脚でラッパ状に開く小型高杯の脚部の資料で, 柱状部上端に3~5条の沈線がめぐっている。調整は脚部外面を丁寧なへら磨き, 内面はナデで仕上げた精製土器である。色調はいづれも黄褐色から黄橙色を呈し, 焼成も良好である。この種の沈線文をめぐらす低脚高杯は吉備地方で類例の多い高杯で, 他の土器と同様, 吉備系土器といえる。64は吉備系高杯の影響下に北部九州で成立した高杯といわれるもので, 体部外面下端には2条の沈線がめぐっている。調整は内外とも器面が剝離しているため不明である。復原口径は38.3cmを測



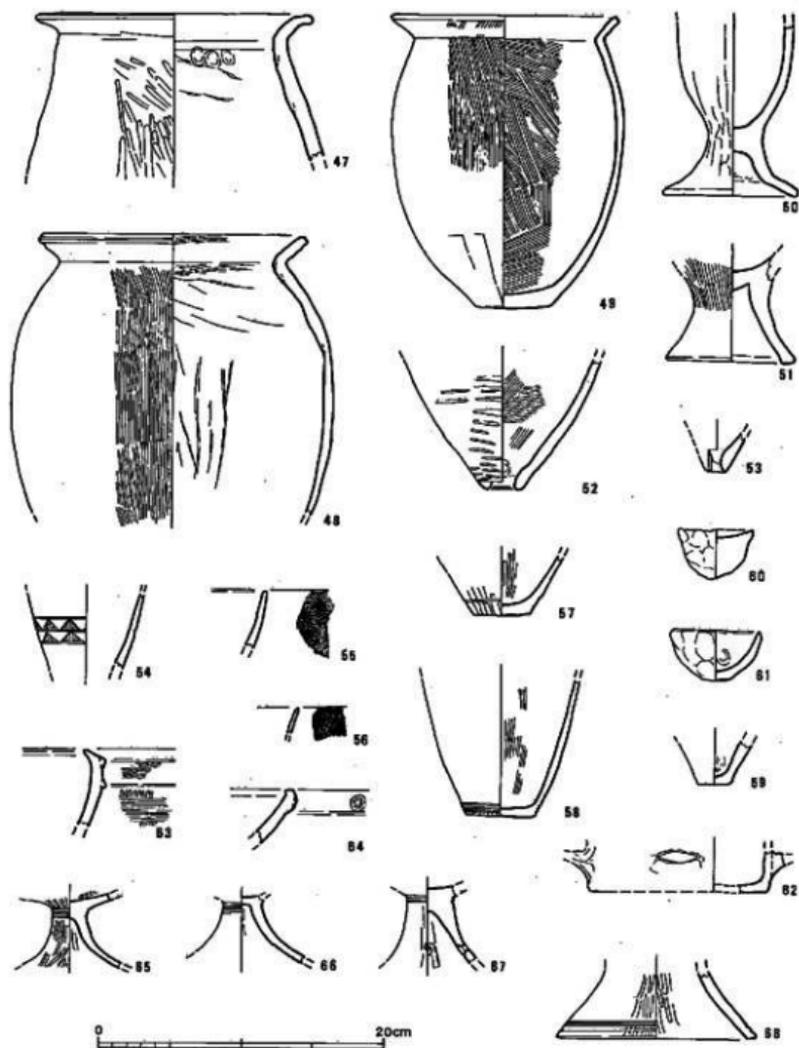
第101图 第1号谷出土弥生式土器実測图(その5)(1/4)



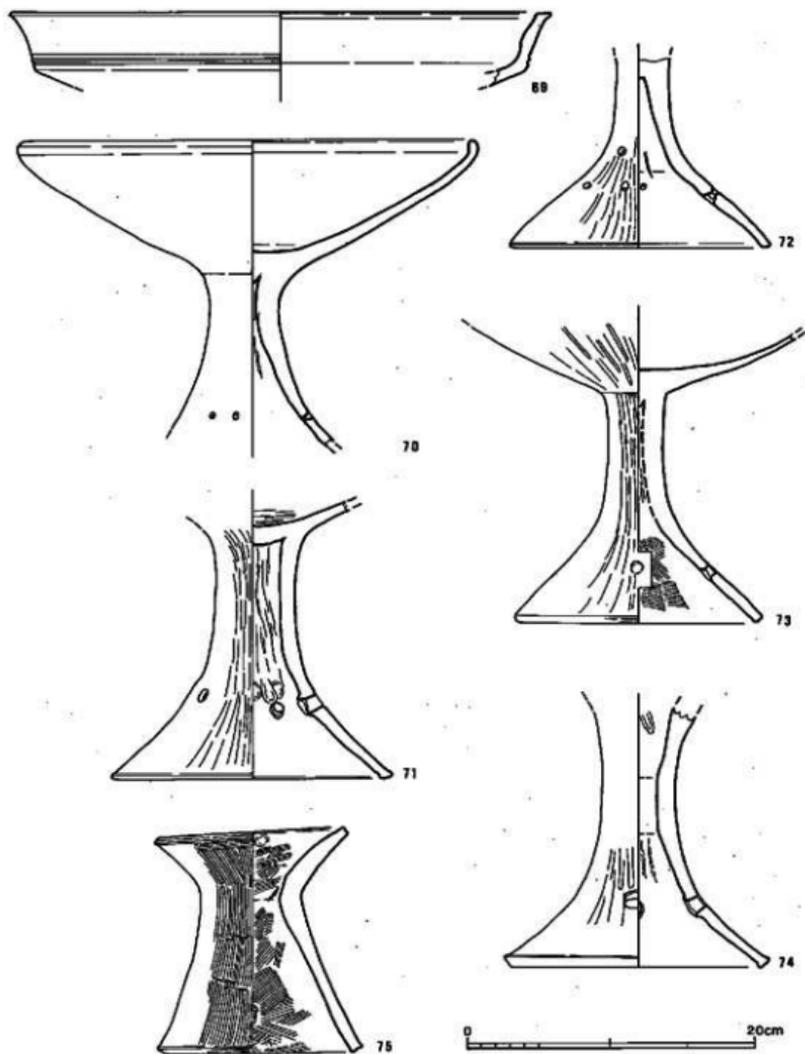
第102図 第1号谷出土弥生式土器実測図(その6)(1/4)



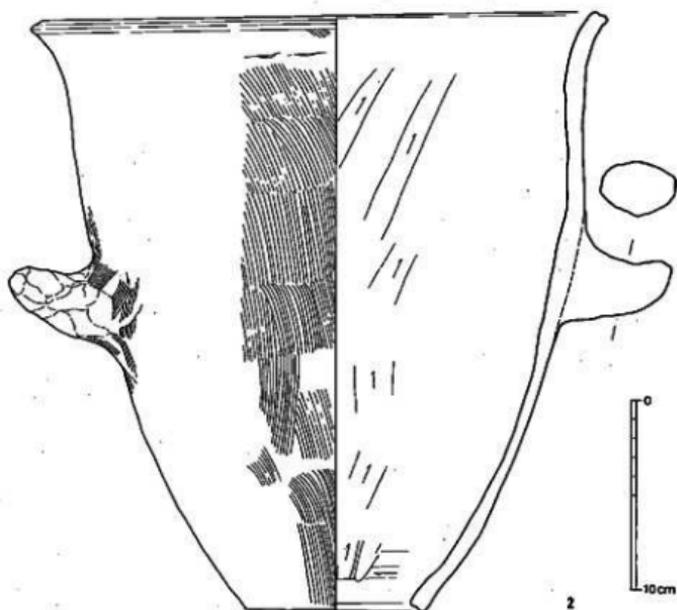
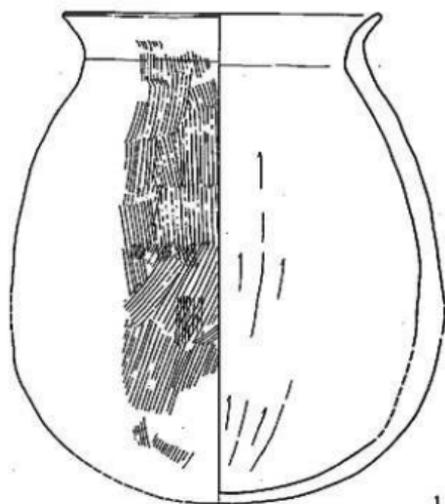
第103図 第1号谷出土弥生式土器実測図(その7)(1/4)



第104図 第1号谷出土弥生式土器実測図(その8)(1/4)



第105図 第1号谷出土弥生式土器実測図(その9)(1/4)



第106图 第1号谷出土土器实测图 (1/3)

る。70はいわゆる豊前特有の高杯で、杯部口縁が短く内湾するタイプで、脚部は柱状部が長くラッパ状に開く裾部がつくものである(70~74)。70は杯部径32.6cmを測る。調整は杯部内外と脚部外面は丁寧なヘラ磨きで仕上げ、内面はナデているものと刷毛のもの(73)がある。63・64は小破片のため明確ではないが、高杯の杯部の一部と思われる。63は外面に2条の三角凸帯を付し、その間に波状文を施している。64の杯部端部には円形浮文が貼付されている。68は裾部の破片資料で、端部外面に3条の沈線がめぐっている。復原裾部径14.2cmを測り、内外とも丁寧なヘラ磨きで仕上げている。色調は淡橙色を呈し、焼成は良好である。

器台(75)上下に強く開く筒形の器台である。調整は内外とも刷毛で、器受部内外の端部付近はさらにヨコナデで仕上げている。器受部径12.7cm、脚部径12.9cm、器高15.3~16.4cmを測る。色調は橙褐色を呈し、焼成は良好である。

出土土師器(第106図)

1は下腹れの胴部に緩やかに外反した口縁部がつく甕で、底部は丸底である。器面調整は胴部外面を刷毛、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。外面は全体に二次加熱を受け赤変していて、煤の付着もみられる。口径16.6cm、胴部最大径22.5cm、器高25.9cmを測る。2は把手のつく甕で、口径28.8cm、底径9.2cm、器高31.2cmを測る。調整は胴部外面は刷毛、内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗橙色を呈し、焼成も良好である。

これらの古墳時代土師器は、既述の谷埋没後に掘削された第12号溝状遺構の出土品(第92図)と同類である。おそらく、この溝の続きの北半の部分で谷埋土として発掘してしまった際の出土品であろう。

以上、谷部から出土した土器群のうち、その大半である後期の弥生式土器については、すでに触れてきたように、吉備地方と密接な交流が考えられる土器が多いのが大きな特色といえる。すぐ西側に隣接する赤幡森ヶ坪遺跡でも同様な傾向を示している。出土土器の時期については、壺・甕・高杯等の特徴からすれば、基本として後期中頃に位置付けられるであろう。しかし、一部、壺等に新しい傾向(18~20)のものもみられ、谷部という性格を反映したものかもしれない。

(井上)

4. 自然科学的分析

(1) 十双遺跡出土銀製品の分析調査

大澤正己

概要

弥生時代後期（2世紀）の9号竪穴住居跡から出土した装身具の一部とみられる金属片（縦10.5mm、横53.5mmの長方形で厚み1.5mm）を調査して次の事が判った。

(a) 金属片は、純度のよい銀製品であった。非破壊でCMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査による定量分析結果では銀 (Ag) 97.6%と大部分を占める。他は微量のアルミ (Al) を1.2%含む。これと表皮は錆化されて汚染物質があるため炭素 (C) 0.9%が検出された。

(b) 銀製品は、共伴した漢式土器（瓦質土器）が、韓半島の樂浪郡（平壤付近：前漢の植民地）地域で多く出土するので、大陸側からの舶載品と考えられる。

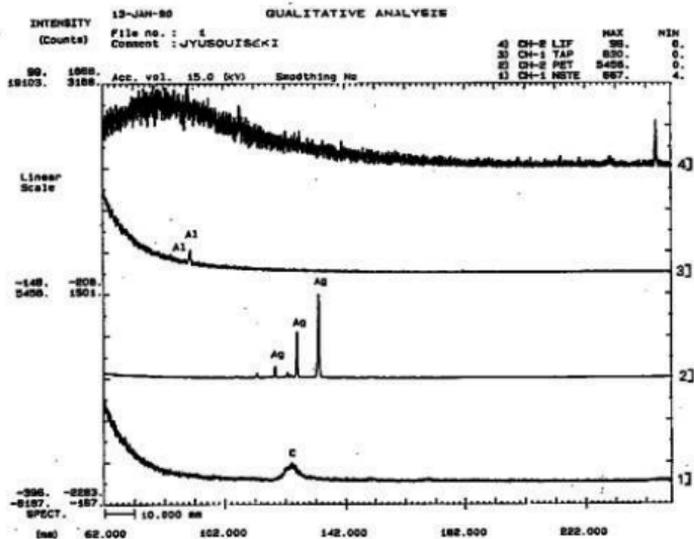
A いきさつ

十双遺跡（7C地点）は、福岡県築上郡築城町大字広末字十双に所在する弥生時代後期の集落跡である。当遺跡内の9号竪穴住居跡内より出土した金属片の解析を福岡県教育委員会より要請された。

この金属片は、発掘後の時点で、その材質が銀か鉛ではないかと予想されていた。これを非破壊で科学的に解明しようとするものである。一方、該品が銀であれば、弥生時代後期では、佐賀県佐賀郡大和町所在の惣座遺跡出土の銀製指輪に次いで、全国で2例目という見解も出されていた。



第107図 十双遺跡出土銀製品（実大）



第108図 銀製品定性分析結果

B 調査方法

(a) 供試材

銀製品は、縦10.5mm、横53.5mmの長方形で厚さ1.5mmの小さな帯状の金具である。色調は灰色を帯びた銀白色で比重が大きい。外観を第107図に示す。

(b) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査

分析の原理は、真空中で試料面に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得た後、標準試料とX線強度との対比から元素定量値を得ることができるコンピューター内蔵の新鋭機器である。旧式装置は、E PMA (Electron Probe Micro Analyzer) とも、X線マイクロアナライザーとも呼ばれるものと、原理は一緒である。

CMA装置は、日本電子製：JXA8600Mスーパープローブ型を使用した。

C 調査結果

調査は非破壊とし、そのままの状態ですべて表面中央部に電子線を照射した。第108図にCMAによる定性分析結果を示す。検出元素は、銀 (Ag)、アルミ (Al)、炭素 (C) である。定量分析結

果を以下に示す。不純物の少ない銀製品である。銀 (Ag) が97.6%で大部分を占める。不純物はアルミ (Al) の1.2%であった。炭素 (C) が0.9%と出たが、これは最表層の酸化膜からくる汚染物質であろう。

定量分析結果 (%)

銀 (Ag)	アルミ (Al)	炭素 (C)
97.6	1.2	0.9

D まとめ

9号住居跡から出土した弥生時代後期 (2世紀) の金属片は、純度の高い銀製品であった。装飾品の一部であろう。銀製品と共伴する土器として、ろくろを使い窯で焼成した漢式土器 (瓦質土器) が検出された。楽浪郡で焼かれた渡来品と推定されることから、銀製品も大陸側よりもたらされたと結論づけられる。九州北東部でも弥生時代後期において、大陸との交流があった事を示す貴重な資料である。

(2) 石庖丁等の石材鑑定

経過

椎田バイパス関係遺跡発掘調査まっ盛り期の1989年6月、十友・赤幡森ヶ坪遺跡発掘現場に北九州市埋蔵文化財調査センターの梅崎恵司氏が見学に来られた。この時、十友遺跡では石庖丁が異常に多いことを話し、実物をお見せしたら、使用石材の産地について興味深い御教示をいただいた。

我々北部九州の研究者が、通常立岩産輝緑凝灰岩と呼んでいる小豆色の石庖丁石材が、北九州市域内にも産地があり、豊前地方のものは立岩産のものではない可能性があるとのことであった。

早速梅崎氏を通じて北九州市立自然史博物館の藤井厚志氏に石材鑑定をしていただく話がまとまり、それまで出土していた石庖丁・砥石・石槍等をお渡しした。

後日、梅崎氏が再来され、藤井氏の鑑定結果を頂くことができた。

鑑定結果

藤井氏の鑑定結果は、石材名称として本書の各石庖丁の説明の中に記したのでここでは重複を避けるが、小豆色の石材が「赤紫色砂岩」や「赤紫色凝灰岩」とされ、いささか面くらった次第であった。更に、他の凝灰質粘板岩や砂岩等の石材をも含めて、殆んどが北九州市域内の産地であろうとの結果には、人生観を変えざるを得ない程に意外であった。

表層地質図をもって説明していただいたが、それによると、北九州市の帆柱山・血倉山の斜面あたりから南へ広がり、小倉南区の山中から新道寺に至るまでの間に、脇野亜層群と呼ばれる中世界固結堆積物の層があり、その産地であるとのことであった。脇野亜層群には、石灰岩礫岩・凝灰岩・凝灰質砂岩・頁岩・砂岩・礫岩などがあり、十友遺跡の石器石材の産地がその地域に求められるとの結果であった。

以上の結果をいただいて、従来小豆色の石庖丁はすべて立岩産であり、その出土範囲をもって立岩の首長の経済基盤の強固さを語る筋があったことに対して、強い疑問を感じた。それとともに、もっと綿密な各地域における産地探すと、従来の資料の見直し、特に自然科学的分析の必要性を痛感した次第である。

末尾になったが、快く鑑定を引き受けて下さり、重大な御教示をいただいた藤井・梅崎両氏に心から感謝の意を表したい。

5. 小結

(1) 弥生後期集落について

A 竪穴住居の構造

十双遺跡では34軒の竪穴住居跡を調査したが、うち縄文・弥生前期の3軒を除いた31軒の弥生後期～古墳前期の方形住居についてここでとり上げてみたい。

ベッド状遺構 31軒のうち第5号住居を除いてすべてに設けられている。大まかな分類は、第109図に示したとおりである。

A類：短壁沿い両側にベッドを設ける類で、12例あり、後期後葉を中心として終末期にもみられる。大きめの住居に多く、小さめのものでもが・壁際土壇・2支柱穴が揃っており、パターン化した典型的類型として確立されていたと思われる。

A'類：両側にベッドを設けるが、片側のベッドが途中で切れたもので、6例あり、すべて中央のBグループに含まれる。いずれも壁際土壇寄り側が切れており、土壇から向かって左側が切れたものが4例、右側が切れたものが2例となっている。後期後葉から終末期のもので、切れた部分が入出口部となる可能性がある。

B類：短壁のうち片側沿いのみベッドを設ける類で、途中で切れるものを含むと5例ある。いずれも小型住居で、支柱穴・壁際土壇等を有しないものが多く、後期終末期に集中する。また、第25号住居の如くコーナーに正方形のベッド状遺構を設けるものもあるが、時期的にC類と同じ古墳時代初頭の変形類である。

C類：基本的に4壁沿い全周にベッドを設ける類で、3例ある。4本支柱であり、壁際土壇は小さい。古墳初頭の庄内式併行期のものである。大型のものやや小型のものがある。以上の分類とは別に機能の問題がある。まず例外なく幅が1～1.1mであること。これは住居面積には関係ないので、その幅に意味があることがわかる。まぎれもなく就寝所であり、シングルベッドの幅がそれを裏付ける。

また、C類のベッドは壁沿い毎に高さが違うことがあり、低い部分については物置き場等、別の機能を考える必要があろう。

壁際土壇 研究者によっては屋内土壇等と呼称されている。本遺跡では小型住居以外にはすべて付設されている。この機能として、かつて梯子基部を埋め込んだ痕跡であるという説が流布していたことがあったが、住居の深さには関係なく、小型住居のみにみられない例が多いという事は、この説を退けている。

第2表 十友遺跡竪穴住居跡一覧表

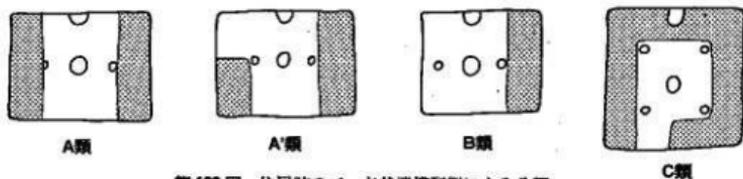
No	時 期	平 面 形	長辺×短辺×深さ	面 積	ベツド	炉	壁 土 際 境	周 壁 構
1	弥生前期後葉	円 形	4.2×4.2×0.34	13.9	—	不 明	—	×
2	弥生後期後葉	長 方 形	4.06×3.74×0.24	15.2	A	中 央	東 南 壁	×
3	弥生後期終末	方 形	3.06×2.85×0.15	8.7	B	中 央	×	×
4	弥生後期終末	方 形	3.55×3.3×0.1	11.7	C'	中 央	南 壁	3壁にA・B
5	弥生後期後葉	長 方 形	3.55×3.0×0.1	10.7	×	×	×	3壁にA
6	弥生後期後葉	長 方 形	5.15×4.6×0.1	23.7	A	中 央	南 壁	×
7	弥生後期終末	長 方 形	3.5×2.8×0.3	9.8	B	×	×	×
8	弥生後期後葉	長 方 形	5.57×4.6×0.18	25.6	A'	中 央	南 壁	×
9	弥生後期後葉	長 方 形	5.2×4.25×0.3	22.1	A'	中 央	南 壁	4壁にA
10	古墳前期	方 形	6.0×5.65×0.4	33.9	C	中 央	南 壁	4壁にB
11	弥生後期後葉	方 形	4.34×4.15×0.18	18.0	A	中 央	南 壁 東 南 壁 西 壁 内 側	×
12	弥生後期後葉	長 方 形	5.65×3.95×0.14	22.3	A	中 央	南 壁 東 南 壁 内 側	×
13	弥生後期終末	長 方 形	4.8×3.85×0.18	18.5	B	中 央	東 南 壁	1壁にA
14	弥生後期後葉	長方形か	4.9×?×0.18	約24	A'か	不 明	不 明	部分的A
15	弥生後期中葉	長 方 形	5.2×4.2×0.3	21.8	A	中 央	南 壁 か	4壁にB
16	弥生後期終末?	長 方 形	4.7×3.9×0.2	18.3	A'	中 央	東 南 壁	×
17	弥生後期後葉	長 方 形	5.6×4.6×0.3	25.8	A	中 央	南 壁	×
18	弥生後期後葉	方 形	4.8×4.6×0.3	22.1	A'	中 央	南 壁	2壁にB
19	弥生後期後葉	長 方 形	4.6×4.1×0.3	18.9	A'	中 央	南 壁	×
20	縄文晩期	不整楕円形	5.0×4.0×0.1	15.0	—	西 壁	—	×
21	弥生前期?	円 形	4.5×4.0×0.1	14.2	—	不 明	—	×
22	弥生後期中葉	長 方 形	6.4×?×0.2	約28.8	Aか	中 央	東 南 壁	×
23	弥生後期後葉	長 方 形	5.65×5.2×0.2	29.4	Aか	中 央	東 南 壁	×
24	弥生後期終末	長 方 形	4.1×3.6×0.2	14.8	B'	東 寄 り	×	1壁にA
25	古墳前期	長 方 形	5.0×4.6×0.12	23.0	B'	中 央	南 壁	×
26	弥生後期終末一	方 形	4.5×?×0.18	19.8	C'	中 央	北 西 壁	×
27	弥生後期終末?	長 方 形	?×3.5×0.2	約18.9	Aか	中 央	東 壁	×
28	弥生後期後葉	長 方 形	4.2×3.7×0.4	15.5	Bか	中 央	×	部分にB
29	弥生後期終末	長 方 形	4.9×4.0×0.4	19.6	A	中 央	南 壁	×
30	古墳初頭	長 方 形	5.5×4.7×0.2	25.9	C	中 央	北 壁	×
31	弥生後期終末	長 方 形	4.8×3.8×0.4	18.2	A	中 央	南 壁	×
32	弥生後期終末	長 方 形	4.8×4.2×0.3	21.8	A'	中 央	東 壁	部分にB
33	弥生後期終末	長 方 形	4.65×4.3×0.36	20.0	A	中 央	南 壁	4壁にB
34	弥生後期	長 方 形 か	?×4.4×0.3	20以上	Aか	不 明	不 明	A

(単位 m ar)

主柱穴	2柱間 距離	棟方位	出土特殊遺物	備考	所属群
不明	—	不明			A'
2	1.96	N52°E	石廬丁	貼ベッド	B
2か	約1.5	約N72°E	石廬丁	小型住居。床面川原石多し	A
2	2.25	N74°E		小型住居。床面川原石多し	A
不明	—	約N46°E		小型住居。床面硬化	A
2	2.85	N67°30'E	礫石、鉄片	南西隅に入口状突出部。溝4より新	A
不明	—	約N67°E	石廬丁	小型住居	B
2	2.5	N48°E	石廬丁、礫石3、鉄鍬、刀子	住9より新。溝6より新	B
2	2.5	N41°E	銅製品、作業台石、石廬丁、 礫石	住8より古	B
4	(3.08 2.68)	N77°E	石廬丁、銅、鉄鍬、刀子 板状鉄製品、鉄片	大型住居。壁外沿いに小柱穴並ぶ	B
2	1.65	N62°E	石廬丁、礫石	南西辺に突出部	B
2	3.2	N27°30'E	鉄鍬	住13より古。溝6より新	B
2	2.35	N39°E	横式土器、石廬丁	住12より新。溝6より新	B
2か	不明	約N41°E		大半は未掘	A'
2か	約2.5	N68°E	石廬丁2	中央部未掘 南西隅に入口状突出部	A
2	2.15	N21°E	礫石		B
2	2.55	N61°E	石廬丁、礫石、鉄鍬	貼床・貼ベッド	B
2	2.35	N55°E	礫石、鉄鍬	住33より古。貼ベッド	B
2	2.05	N52°E	石廬丁、礫石	土層12より新 土層13より古。貼ベッド	B
不明	—	東西か	磨白	溝8より古。屋内に焼土土塊あり	A'
不明	—	不明			B'
2	2.6	N37°E	礫石、鉄鍬、鍬先	住23・24より古	C
2	2.6	N46°E	鉄鍬	住24より古。住22より新	C
2	2.25	N44°E	小鉄斧	住22・23より新	C
2	2.0	N58°E	礫石3	住26より新	C
4	(3.95 3.6)	N39°E		住25より古	C
2	3.5	N1°E		北半削平	C
不明	2.9か	N33°W			C
2	2.35	N59°E	刀子、焼 作業台石、石廬丁3、鉄鍬		C
4	(3.05 2.5)	N51°W		住31より新。北隅に入口状突出部	C
2	2.45	N65°E	作業台石、石廬丁、礫石、鉄鍬	住30より古。壁外沿いに枕列並ぶ	C
2	2.6	N24°E	石廬丁、礫石、鉄鍬	溝15より古	B
2	2.25	N60°E	作業台石	住18より新。貼ベッド・貼床	B
不明	不明	約N43°E		大半は未掘	B

〈前頁一覧表の説明〉

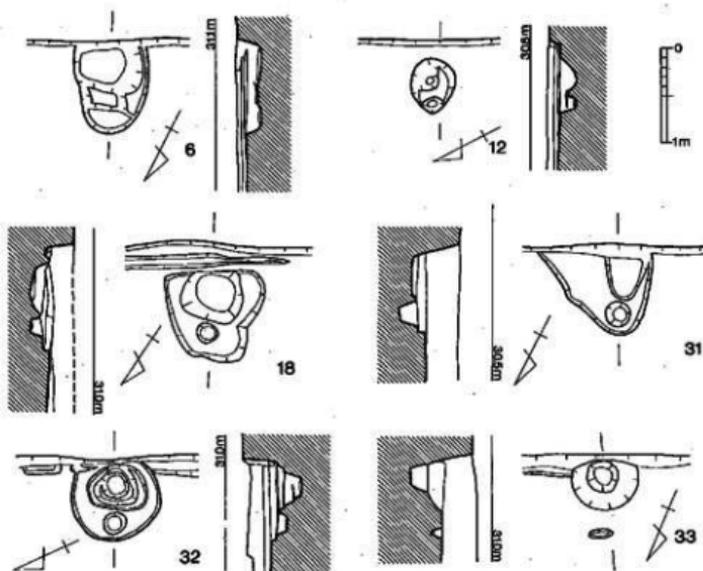
- ・「深さ」は、床面から壁上面の最も残りの良い部分まで。
- ・「面積」は住居跡上面（上端線内部）での計測値。よって、ベッド、炉、周壁溝、壁際土塊、柱穴等の面積も含む。小数点第2位以下は四捨五入。
- ・「周壁溝」の分類は、「A=幅10cm前後の広い類」、「B=幅5cm以下の狭い類で、板材差し込み痕と考えられるもの」
- ・「2柱間距離」は、心々間距離の計測値。
- ・「棟方位」は、2支柱の場合、2支柱上に棟が載せられると考えたので、2支柱を結んだ線の方角を示した。2支柱以外の場合は、長軸方向で計測した角度を表示した。
- ・「所属群」は、第111図で示したグループピングによる。ただし、縄文住居、円形住居の場合は、もちろん他の大多数の弥生後期～古墳初期の住居群の各グループに含まれるわけではないが、位置を示すために、便宜上、括弧をつけて表した。
- ・「ベッド」の分類は、以下の図に示すとおりである。



第109図 住居跡のベッド状遺構配置による分類

後期前～中葉の初期ベッド住居の段階では、この土塊が壁際から離れた内側に位置することは、既に柏屋郡古賀町久保長崎遺跡例で知られている。この第三次調査においては、周壁溝と細い溝で連結したり、土塊内両端に対となる小穴を有したりする異例が調査されている。

この壁際土塊の機能を決定することは現在でも困難であるが、いくらかでも見通しはつけたい。本遺跡調査中に気付いた点を報告しておくことにする。この土塊前面（内側）に小穴が存在する。第110図に示す6例である。第18・31・32号住居のものは、同じ掘り方内に直径20～25cmの円形穴が掘り込まれている。第6・12号住居例でも本来円形穴であったかと思われる掘り込みがみられる。これらは支柱穴ほどしっかりした深いものではないが、小枕等を立てる程度には充分である。これらに対して、第33号住居の例は、小さな壁際土塊と離れた床面に、つまり壁ラインから80cm離れて細長い穴が検出されている。これも他例と同じ性格と考えられる。第22号住居では土塊内に2本の掘り込みがみられるが、前面に穴のあるものとは意味が異なる

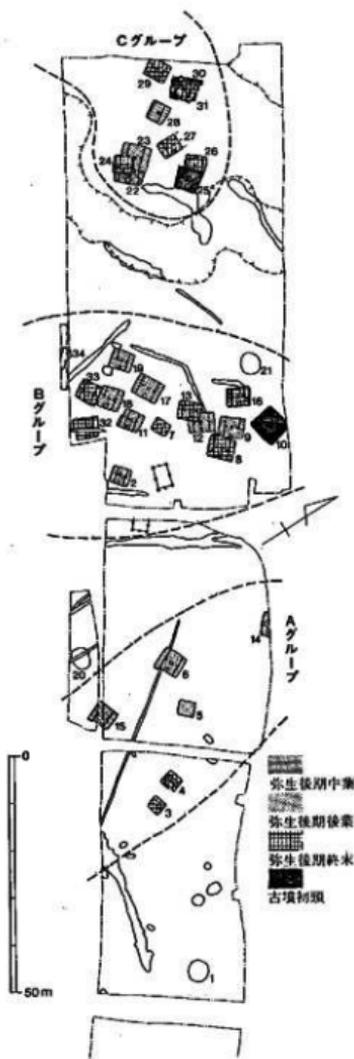


第110図 壁際土壇前面に小穴のある例 (1/60) (番号は住居No.)

ようである。

このように、杭あるいは小柱を立てて土壇と関連して機能した状態が想定されるわけであるが、具体的に何の場であったか明らかにはできない。ただ、この壁際土壇が本遺跡ではすべて住居内の東南～南方向にあること（ただしベッドC類の新期で2例のみ北西側にある）の規制力は確かなものであった。更に、屋内貯蔵穴と呼ばれることもあるが、貯蔵されたものが確認されたことや、土器等が収納されていた例もないため、この一般的にだらっとした掘り込みが貯蔵穴であるとは考えられない。火を焚いた痕跡もなく、周壁溝の幅広い類がこの種土壇へと流れ込むようになっているものがあることから、水を溜めて調理場とした遺構と考えたこともあった。これについては、初期ベッド住居の場合、周壁溝と全く離れている例がかなりあり、説得力を欠くように思える。

次に、この土壇の近辺に20～30cm大の大きい作業台石を置く例が第9・24・29・31号住居跡でみられる。第9号住居では西側床面上であるが他はすべて東側床面上である。第24号住居では壁際土壇は無いが他と同じ位置に作業台石が置かれている。以上のことから、何らかの作業台と考えることも可能である。ただ、いずれの住居にも土壇がみられることから、特殊な作業



第111図 弥生後期～古墳初期集落の変遷とグループ (1/1,200)

狭ではなく、一般的な作業種と考えねばならぬだろう。

更にこの性格としてもう一つ考えられることは、集落の中でその設置位置が一定していることから、精神的拠り所としての聖所であるという考え方である。狭い竪穴住居空間内で日常的な一般作業がどの家でも同一位置で行われる必要性も無く、新しい4本柱住居の型式に変わってやっとその向きが変わったということからも、方角規制がいかに強かったかを物語るであろう。棒状のものを立てた前面の穴は、祭祀に伴う依代の木の枝等の存在を想像させる。それが上方(天)を祀るものであるならば、その根元にあたる壁際土壇は下方(地)を祀る場として、随時埋納行為が行われたことも想像できよう。第30号住居跡の壁際土壇内から手捏ねのミニチュア土器が出土していることも、この説を裏付けるひとつにもなる。また、この土壇の無いもの(第3・5・7・24・28号住居)は、すべて小型住居であり、2本柱穴や炉もみられないなどの特殊家屋であり、日常居住空間とは認められない。時期も終末期のものが殆どである。この種家屋に各家庭毎の祭所が必要無いことは言うまでもないと思われる。

以上、壁際土壇の性格について種々模索してきたが、結局今回も明確にすることができなかった。ただ、現時点では、作業台石をきっかけとする作業壇説と、聖所説が有力と考えられ、中でも筆者は、聖所説を強く推す立場をとりたいと思う。

出入口 上層構造が残存していない以上、推測の域をまぬがれないが、ここでは入口の位置に

ついでのみ触れておきたい。

本遺跡の住居の中に、住居角が外へ突出するものがある。第6・15・25号住居は南西角が、第30号住居は北西角が張り出している。この張り出し部内側には小穴が複数検出されており、出入口構造に関するものであると推定される。

更に、第6・15・25号住居の張り出し部と同じ位置のベッド部分がそこだけ無いものがある。第8・18・19・24・32号住居がそうであり、張り出し部同様に出入口部を意図した構造と考えられる。また、その反対位置の東～東南角がベッドを切られているもの（第9・16号住居）もあり、同様の性格かと思われる。

このように同一集落内ではほぼ同じ向きに各戸出入口を付けたであろうことは、充分考えられる。ただ、棟方向に直角のしかも家屋隅であることは、従来建築学の方面から、妻入り或は平入りの中央に出入口を復原したことが多かったことは相容れない。今後、今回提言した出入口の位置が建築学的に可能かどうか、充分検討を要する課題である。

B 集落の変遷

十双遺跡調査の方形住居については、既に出土土器から各住居毎の年代推定を記した。ただし、後から投棄された土器と住居に確実に伴うものとの識別することは極めて困難で、殆んどが投棄土器を含めての判断であることを付記しておきたい。また、切り合い順や、棟方向等をも含めた住居構造からの時期判定を主眼とせざるを得なかった例もあった。

変遷 出土土器からみて、大旨4期に分期できた。以下各期毎に変遷をみてみたい。

弥生後期中葉：明らかにこの期のものは2軒であり、わりと大型の住居である。後期後葉としたものの中にも、第6号住居のように中葉に近いと考えたものもあり、第15号住居と棟方向・構造・規模が酷似し、極めて両者は近似した時期で、同時存在した可能性もある。

弥生後期後葉：十双遺跡で最大の棟数となった時期で、明確にできたもので15軒となる。この時期のものの中には、第8・33号住居などのように、切り合いから終末期に近いと判断せざるを得ないものもある。また、第5・28号の如き小型特殊家屋も出現しており、集落の各機能が整備されたと考えられる。更に、第18・19号住居のように規模・構造等が酷似し、棟方位を同じくして並列するものもあり、同時存在を推測させる。

弥生後期終末：この時期は、以前と連続して集落は維持されるが、やや棟数からみてかげりのみえてきた時期である。全体で11軒が確認できたが、若干増える可能性もある。この時期の特色は小型家屋が増えてきたことで、第3・4・7・24号の4軒があげられる。これらはいずれも家屋内施設が典型的ベッド住居のような揃い方をせず、不備な類である。家屋の機能の分化が進んだのか、階層の分化を示すものか判断はできないが、大きな面目を目前にしての見落とすことのできない特色である。

古墳前期初頭：具体的な土器型式としては、庄内式併行期～布留古式に一部かかる時期と考えられ、3軒が認められる。この最終段階では、既に大集落は他所へ移動し、細々と数軒のみが生活していた時期で、明らかに前代との大きな落差の両者に認められる。住居形態も4本主柱タイプに変換するなど、がらりと様相が変わり、もはや集落の観を呈していない。

この時期以降当遺跡には人影を見ることは無くなり、6世紀の古墳時代後期になってやっと西隣の赤幡森ヶ坪遺跡に集落が形成され始める。この間の集落衰退・途絶の理由については、谷の頂で述べた如くである。即ち、谷の埋まり方でみられる如く、淀み状におだやかな水面で植物が繁茂堆積した状況は全くみられず、急流で押し流されてきた砂礫がたまるだけの暴れ川であったことから、平野部に進出してきた集落も自然の猛威の前に退かざるを得なかったと想像されるわけである。その後は、農業用水路等の土木技術に支えられた古墳時代後期になって、わずかに第12号溝の掘削が行われたのみで、再び人が住むことはなかった。

グループ 第111図にA～Cの3グループを示した。これらは、それぞれ谷や浅い低地によって区切られており、自然地形に従ってのグループングと言える。発掘調査範囲に限ってみれば、各グループ毎の時期的変遷にはそれほど違いは無いようである。

Aグループは、どの時期にも少数であるが、グループの中心部が調査範囲外にあった可能性もある。また、古墳時代に入ってから家屋がみられないのも、本来少数グループであったためとも考えられる。

Bグループは、後期後集段階では3グループのうち最大家屋数を誇るが、密接するものが多く、同時存在したのは4～6軒ほどであろう。後期終末期もあまり数は変化せず、相かわらず本遺跡の中心的地位を占めている。掘立柱建物2棟がもし住居に伴う時期のものであるとすると、グループ管理の貯蔵施設（グラ）をもそなえた諸機能を完備したグループだと言える。終末期には小型特殊家屋もグループの中心に設けられており、グループ内における家屋の機能分化もうかがわれる。古墳時代に入ると、1軒だけ大型住居が残るのみで、その変化は歴然としている。

Cグループは、後期終末期に最大家屋数を数えることになり、古墳時代に入っても2軒が残っており、他のグループと若干様相が異なる。わりと細々と最後までしっかり居すわっていたグループといえよう。

以上の各グループの状況の中で特に目立つのは、Aグループの閑散とした家屋配置に対するB・Cグループでの密集度である。これは明らかにAグループの性格の違いを示していると思われ、ひょっとしたら、ゆったりとした各戸占有面積を誇っていたのかも知れず、他グループより卓越していたのだと考えることもできる。

単位集団としての規模をみると、Bグループの後期後集期で同時存在は4～6軒、終末期で5軒、Cグループの終末期で4～5軒程度と考えられる。この十数集落が仮にこの3グループ

一歩だけだとしたら、調査範囲内だけからみると、後期後葉頃には15軒前後が生活していたと推計できる。ただし、遺跡の広がりからみて調査範囲外に最低同数の住居が想定されるので、1時期に30軒以上もあった大集落であったことが推定できる。

石庖丁の多さ 本遺跡からは計30本の石製穂摘具（石庖丁）が出土した。うち17本が弥生後期～古墳初頭住居跡内から出土している。中でも2本出土した第15号住居跡や、3本も出土した第29号住居跡例は特異である。弥生後期以降の集落でこれほど出土した例はまずあるまい。鉄器への変化が遅れていたのだという解釈は、既報告のとおり各種鉄器が各住居から出土していることから、単純には当を得ていない。ただ、鉄器の中に手鎌が全く見当たらないのは、当地方における農業技術面に限ってのがんこなまでの保守性を示しているのかもしれない。第10号住居跡出土の石庖丁が住居に伴うものであったとすれば、なんと古墳時代初頭まで石庖丁が使用されていたことになる。他地域では早いものでは弥生後期中葉段階には鉄製手鎌が出現しており、石庖丁の出土する様相は、残存形態としてのみ扱えられている。しかし当遺跡の多量の出土状況を見ると、弥生前～中期の他の大集落の出土状況にまさるとも劣ることは無い。ここでの穂摘具の大量使用は、別の視点から、同時に多人数の刈り手を必要とした稲作面積の拡大と技術的発展に伴う集約的農業の確立に裏付けられるものではないかと考えられる。そして、常時使用する道具ではなく、年に一度だけ、しかも同時に多人数が使用できる条件として、必ずしも未だ高価な鉄器である必要性は無く、伝統的な石製品を大切に保持していたものと考えられる。以上のことから、十双遺跡集落は、ひとえに稲作農耕に生産基盤を置いた活気あふれる農業共同体であったと言える。このことは、直後の古墳時代初頭に生産基盤としての耕作地が自然条件の悪化により荒廃すると、集落自体が直ちに他へ移動してしまい、水利事業等の土木技術の発達をみる古墳時代後期まで人影のみられない土地となってしまったことから裏付けられよう。

砥石の多さ 本遺跡からは砥石が24点出土している。うち16点が弥生後期住居跡からの出土品である。上記の石庖丁と同様に、全住居の約半数の住居に所持されていたことになる。うち、目の細かい砂岩製の中砥の1点以外は、すべて粘板岩製の仕上げ砥石である。これらは鉄器を対象とするもので、金属器によるものと思われる擦痕やキズが多く認められる。石庖丁を磨いたような粗砥・中砥はみられない。各住居から鉄鎌・刀子・鉋・鋸先・鉄斧等の鉄製武器・工具・農耕具等が出土しており、鉄器の普及が進んでいることがわかる。本遺跡での鉄生産・小鍛冶に関する資料は見発見されておらず、今回出土の砥石は各戸所有の鉄製品の手入れに用いられたものであることが判かる。更に、砥石自体の石材が入手困難なものであったらしく、溝を彫り込んで半載したものが少なからずみられ、總体的に薄手・小型化している。

(2) 漢式土器について

第13号住居跡から出土した瓦質鉢形土器は、共存した弥生土器から後期終末期と時期を決めることができた。胎土精良、焼成瓦質、轆轤成形技法、特徴ある器形等から、楽浪系漢式土器と呼称される一群に含まれることは疑う余地が無い。

まず類例を簡単に示してみよう。平塚市南郊の楽浪土城址発掘の鉢が谷豊信氏によって紹介されており（『楽浪土城址出土の土器（中）』東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第4号1985）、中には対馬小式崎第1号箱式石棺出土の摺鉢様放射状沈線を施すものと類似するものもある。側面下部は横方向に寛削りされ、底部外面は静止糸切り痕が残っている。

長崎県の対馬においては、九州大学文学部考古学研究室編『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』（1974 長崎県教育委員会刊）の中に類例が掲載。詳細な検討が加えられている。まず、美津島町小式崎遺跡第1号箱式石棺墓出土の鉢は上記した如く、楽浪土城址出土のものによく似ているが、内面の放射状沈線が前者は4方に施されるのに対し後者は6方に施され、底部付近の調整が若干異なるようである。共存した長頸壺から弥生後期後半とされている。白蓮江浦第2遺跡第2号石棺で細頸壺と共存し、最古式土器の時期とされる鉢があり、口縁がややだらけた感じになっている。また、乙宮小学校所蔵資料の中に観音鼻遺跡出土品として鉢片が1点ある。淡黄褐色をなすが胎土精良で同種器形と思われる。

福岡県糸島郡前原町三雲遺跡番上II-5地区の土器溜状遺構からは、壺・筒杯・器台・鉢・釜などの楽浪系漢式土器が出土している。（『三雲遺跡III』福岡県教育委員会 1982）共存土器から中期末～後期終末期に各々属するとされているが、これらのうち十双出土鉢と酷似する鉢は、中期末～後期初頭と考えられている。

福岡県糸島郡志摩町御床松原遺跡D-6区3層上部からは罐の肩部片と甕胴部片が出土している。（『御床松原遺跡』志摩町教育委員会 1983）時期は弥生中期後半～後期終末期までの幅がみられる。

また、近年福岡県糸島郡二丈町井牟田遺跡から、十双遺跡出土鉢とは口縁形態の異なる他器種の鉢が1点出土している。古川秀幸氏の御教示によれば、夥しい共存土器が未整理であるが、大旨弥生後期後半～終末に属するとのことである。

以上の出土例からみて、日本での楽浪系漢式土器は、対馬と伊都国所在地の糸島郡のみに限られており、楽浪産と言ってもよい程の類似性からも、むべなるかなとも言える分布範囲を示している。これらより大量に出土してくる地域が別にあるとすれば、そこが邪馬台国そのものであろう。

以上のような特殊な当時の時代背景すら示すこの種土器が、九州島東海岸という離れた所か

らばつんと出土したのである。

前漢の前進基地として平壤付近に設けられた楽浪郡は、B.C.108年武帝によって置かれたが、A.D.313年晋代に滅亡するまで、その間新・後漢・魏の各王朝においても維持されていた。楽浪漢墓等の出土遺物にも明らかなように、半島における中国文化の拠点でもあった。楽浪郡・帯方郡を通じての倭の中国諸王朝との接触は周知のとおりである。

日本出土の楽浪系漢式土器が、楽浪土城出土のものの中に類似品を求められ、その時期が弥生中期末～後期終末に集中することは、年代的にも矛盾するものではない。この種の土器が後で述べる銀製品とともに、この京畿の地に至った経緯については、2つの説が考えられる。第1は、当地域には、弥生後期にクニ的な範囲を持った政治勢力が存在していて、それが伊都国等を通じた楽浪郡等との交流に間接的に、或はより直接的に関与していたからであるという仮説。第2は、伊都国から他の倭の強国への経路の位置にあたっており、海上覇権を握る勢力がこの交通要衝の地をおさえていたために分与されたのだという考え方である。

前者については、後世この地域が何故か新羅との強い結びつきを示すこと、古代寺院において新羅系古瓦出土廃寺が集中することが連想される。年代こそかけ離れているが、弥生時代後期頃からの伝統的国際交流感覚に育まれた結果であったのではないかと想像される。

後者については、既に報告した如く、十双遺跡や隣の赤幡森ヶ坪遺跡出土の土器中に、無視すべからざる量の東瀬戸内系の弥生後期土器がみられることから、瀬戸内海を通じた海上交易にたけた集団が居たことと強く関連する。意外な程の交易範囲の広さは、海上交通路の定着と吉備・播磨地方との政治的結びつきさえ予想させるところである。

以上の2説のうち、いずれが漢式土器・銀製品をもたらした理由となるか判断はなし難いが、少なくとも全く偶然に小破片としてこの地に残ったものではないことは確かだと言える。それは、十双遺跡出土品の内面には赤色顔料の塗布が明瞭にみられ、黒い土器を殊更赤く塗って特別扱いとしたことが知られ、その由来や貴重性をもとより知りつくしていたからこそその扱い方であったと考えられることから首肯できる。交流感覚にたけた人々の活躍の結果が、まさにこの遠来・貴重な2者をもたらしたのだのである。

(3) 銀製品について

十双遺跡第9号住居跡床面出土の銀製品は、新日鉄TACセンターの分析の結果、銀(Ag)97.6%の極めて純度の高いものであった。発掘当初、表面が灰白色をなしていたため、銀の黒色酸化状態とは違うことから、鉛の可能性も考えた。銀であつたら弥生期のものとしては大

変な発見となるという半信半疑の期待から、九州歴史資料館横田義章氏に相談した。氏から大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館山田拓伸氏を紹介していただき、早速現物を持参した。X線回折装置を用いて分析していただいた結果、金かもしれないが、色からみて銀であり、しかもかなり純度の高いものであると御教示いただいた。この時の感激は忘れない。この後、既報告の如く大澤氏を通して正式にTACセンターの定性・定量分析を得たわけである。山田・大澤氏には心からお礼申し上げたい。

さて、日本出土の銀製品を弥生時代に限ってみると、他にわずか2例しか知られていない。第1は、佐賀県佐賀郡大和町惣座遺跡の弥生後期石蓋土壇から出土した3個の銀製指輪がある。直径2cmほどのもので、玉類7~8千個とともに出土している。指輪は楽浪産かと考えられている。

第2は、北海道知床半島基部南側にあたる羅臼町植別川遺跡第2号墓から出土した3片の刀装具或いは収納箱の飾り金具である。うち2片が長さ30mm、幅7mm、1片が長さ17mm、幅7mmで、厚さはいずれも0.25mmと薄い。長い方の1片は、断面コの字形に長辺の両側が折り曲げられている。同墓中からは鉄刀子2本、虎珀玉101個、磨製石斧2本が出土し、縄文時代初期の小型壺の副葬から年代が決められた。これについては、沿海州~アムール川流域からの北方ルート流入が考えられている。

ちなみに、弥生時代の金製品については、著名な志賀島出土金印と、糸島郡前原町三雲遺跡出土の金銅製四葉座金具、山口県地蔵堂出土の金銅製壺弓帽が知られるのみである。いずれも外来の品であり、銀製品とともに珍貴そのものの扱いを受けたことであろう。

ところで、我十双遺跡出土銀製品については、時期は弥生後期後葉と判断できたが、本来の製品について明確さを欠く。現存長5.35cm、幅1.05cm、厚さ0.15cmの帯状製品で、片端は明らかに折り取られているが、他の片端はいきている。断面も薄いカマボコ型で、製品であることは間違いなく、銀素材等ではない。全体が蛇行しているということは、当初直線的なものではなく、曲線的に用いられていたものをまっすぐに延ばそうとした結果であると推測できる。片端から0.9cm前後の位置に折れ曲げられたようなシワが集中しており、その側面もわずかにへこんだ状態をみせている。これは、この部分を強く縛りつけて、何か他のものに接合してあった痕跡ではないかと思わせる。

以上のことから、用途を考えてみると、まず剣等の鞘装具によく銀が用いられることから、鞘飾り金具があげられる。ただし十双のものは環状となっていないので、疑問が残る。次に、袴帯にも銀製品が多く、その腰佩の下端にぶらさげる短冊状製品かとも思われたが、全容がわからず、つり下げ部の孔等の有無が確かめられないため、いまひとつ説得力を欠く。次に、冠帽の縁に付けられた銀帯を候補に掲げたい。幅や断面形態、端が縛りつけられたような状況からみると、可能性があると考えられる。

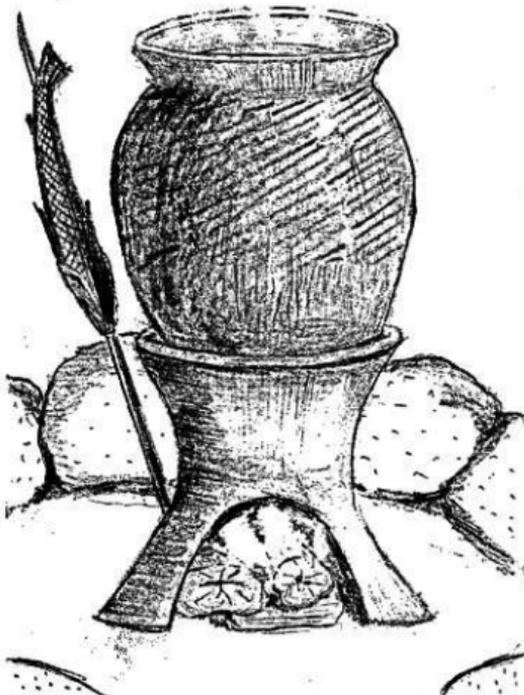
今後とも、鋭意類例を探し求め、各位の御教示を仰ぐ所存であるが、現時点の私見としては冠帽を縁どっていた銀帯が最有力ではないかと考えている。

製作地としては、諸研究者から楽浪産であるとの御教示を得て、漢式土器も出ていることだし、まことにさもあらんと考える。ただ、科学的に現状で銀製品の産地同定が可能とされているわけではないので、中国東北部～騎馬民族地帯をも含めた視野の中でデータの蓄積が進むことを心から望むものである。

いずれにしろ、外来品であることは間違いなからうし、これ入手し得た背景には、漢式土器の項で既に述べたとおり、交流にたけた特異な勢力の存在が浮かびあがってくる訳である。

(4) 挟りのある 器台について

本遺跡各住居跡や、西隣の赤幡森ヶ坪遺跡の中央谷東岸線などから、かなりの数の片端に大きな挟りのある器台が出土した。通常の弥生後期後葉を中心とする時期の器台は、高さ15～18cm、径10～15cmのものが多く、この焼成前に挟り込む類は、高さ20cm以上のものも多く、直径も中位のくびれ部で15cm程と、全体に大きく、径が大きい。これは、製作当初から意図して一般の器台とは区別して、別器種として作っていたということを示している。それは、用途



第112図 挟りのある器台使用例器像図(岩瀬正信氏図)

の違いがあったことを示唆している。

この用途について、調査当時から思いを巡らしていたが、九州歴史資料館での遺物整理の段階で、岩瀬正信氏から御教示いただいたので、ここで紹介しておきたい。

本書の土器実測図においては、挟り部を上にした状態で掲載したが、岩瀬氏の案では、天地逆にして、中に残り火のオキを入れ、簡便な移動式カマド風に用いるとのことである。(第112図参照)が本体に置いて、下からどどん燃やすのではなく、残り火の余熱で甕の中の食べ物や湯を保温する程度の用途である。特に屋外においては、風からの種火の保護に用いれば効果抜群であろう。重量も無い簡便なものであるから、屋内のすきま風のひどい場所でも、厳冬の候には個人用の暖房器具として、火鉢のように用いれば、最適であっただろう。

この器台の内外面を観察しても、煮沸に用いられた甕のような、こびりついた煤や強い熱による赤変状態はそれ程見られず、強火で熱やしたのではないことがわかる。また、本遺跡住居跡内出土品の場合、中央炉の脇で発見されたものもあり、本説に関連すると思われる。

また、この種の器台形土器は、西は福岡県朝倉郡地域まで散見できるが、主体はここ豊前地域となろう。更に、胴部をくり抜いて窓をあけた甕や手焙形土器などとの関連も今後検討を要する課題となろう。

(5) まとめ

十双遺跡は、平坦な田園中の単純な地形の中で、当初、実はあまり期待もかけなかった遺跡であるが、調査の結果は予想を大きく超えて、多大な成果をあげることができた。以下にまとめとして、成果の要点と問題点を掲げ、今後の課題としたい。

1. 縄文時代の十双遺跡は、後期初頭～晩期後葉期まで、遺物・遺構が散見するが、晩期初～前半代がぬけており、その理由が気にかかる。住居跡は1軒しか発見されなかったが、包含層の広がりからみると、南側に集落の本体が存在すると予想される。また、多量に出土した偏平打製石斧の検討もなし得ないままである。研磨を施した幅広い類もあり、用途について探求を進めたい。

2. 弥生前期の集落は小規模であるが、柱穴や炉がはっきりしないなど、その構造について問題点が多い。この小地区内ではすべてそうなのか、或は今回検出の住居だけが特殊なのか、いずれとも現状では判断し難い。とにかく、少なくとも前期末段階では平野部に集落が下り、稲作農耕社会に突入していたことははっきりした。

3. 弥生後期～古墳初頭の住居群は、大規模集落になると予想され、後期後葉～終末に最盛

期をむかえ、石甕丁の多量出土にみる如く、ひとえに稲作を生産基盤とする共同体であったことが判明した。

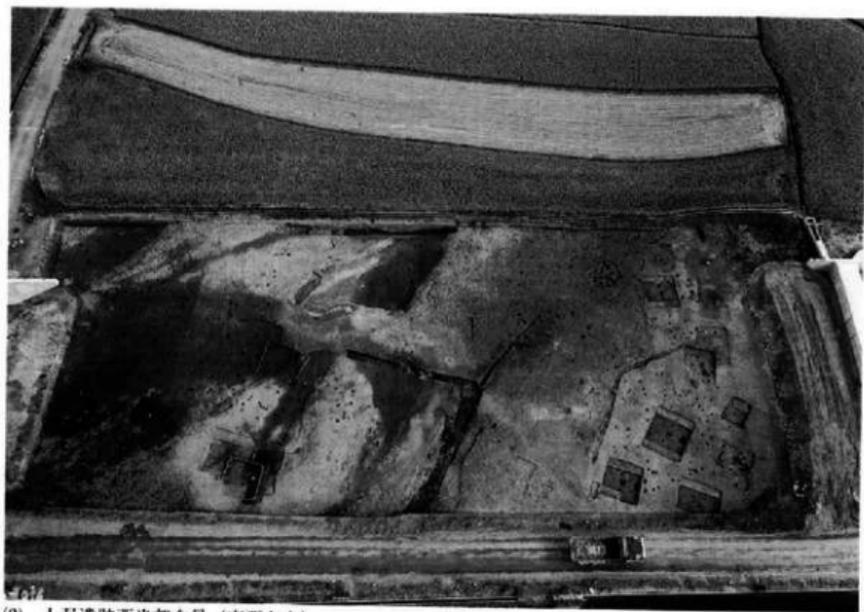
4. ただ、古墳初頭期を境にして人跡が絶えてしまうが、そこには谷の埋土状況に見る如く、暴れ川の自然の猛威の前に撤退せざるを得なかった人間の限界が読みとれる。

5. 漢式土器と銀製品、及び吉備等の東瀬戸内地方の土器の多量出土は、航海技術と交流にたけた特異な勢力の存在をこの地に推定できる。魏志倭人傳中の百余国のうちのクニと断定するには時期尚早と思われるが、中心としての拠点集落の解明や卓越した階層の抽出などの作業を通して、今後避けて通れない検討課題であることは間違いない。

末尾になってしまったが、横なぐりのみぞれの中、真夏の炎天下、ともに汗を流した地元の作業員の方々、無理難題にいっしょに悩んで下さった道路公園の関係者諸氏に、心からの感謝とお礼を申し上げます。



(1) 十双・森ヶ坪遺跡遠景 (南から)



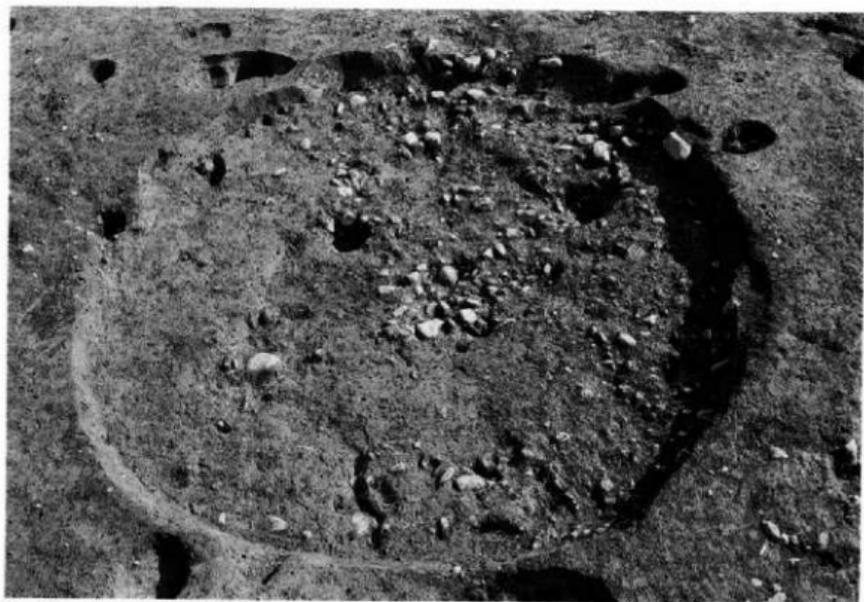
(2) 十双遺跡西半部全景 (南西から)



(1) 十双遺跡西半全景（北から）



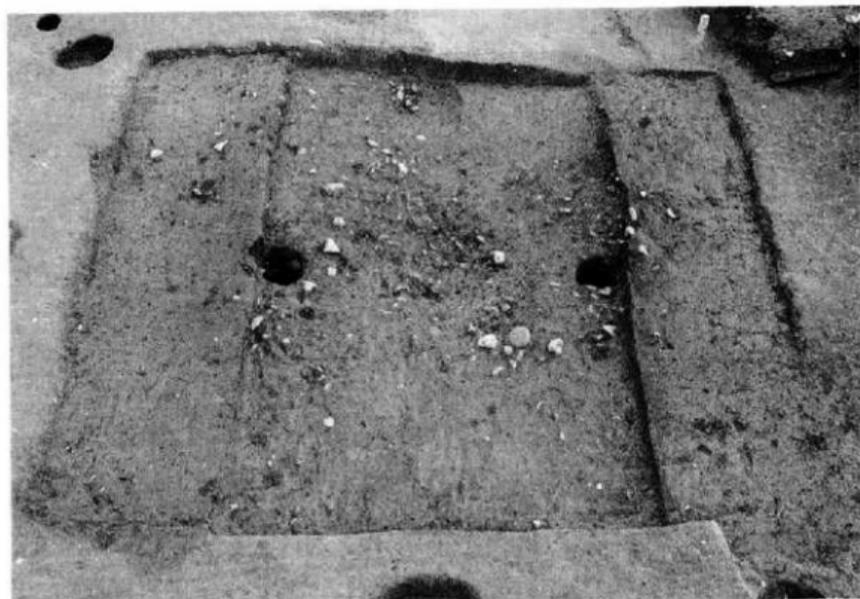
(2) 第1号竪穴住居跡周辺全景（北から）



(1) 第1号整穴住居跡 (西から)



(2) 第2号整穴住居跡・第3号溝周辺 (南から)



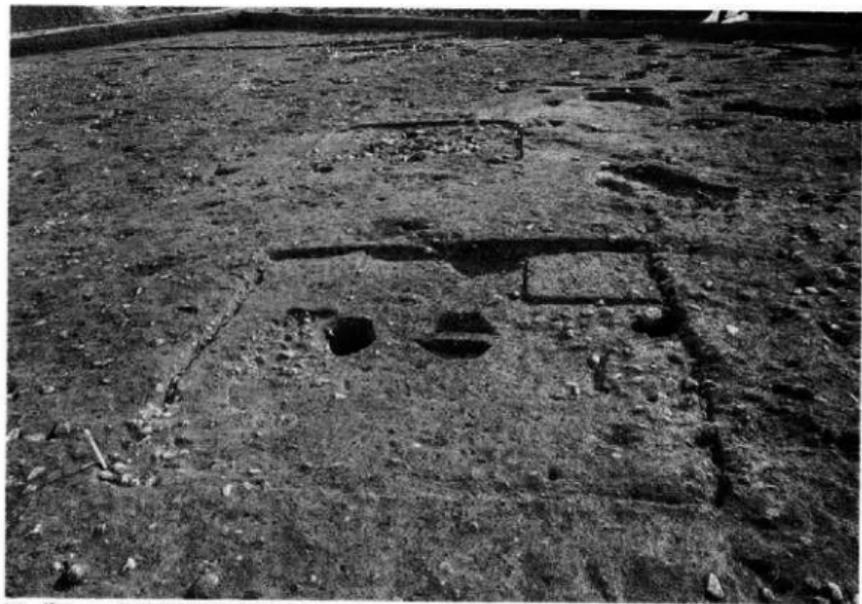
(1) 第2号竪穴住居跡（北西から）



(2) 第3号竪穴住居跡（東から）



(1) 第4号竪穴住居跡 (北東から)



(2) 第3・4号竪穴住居跡 (北から)

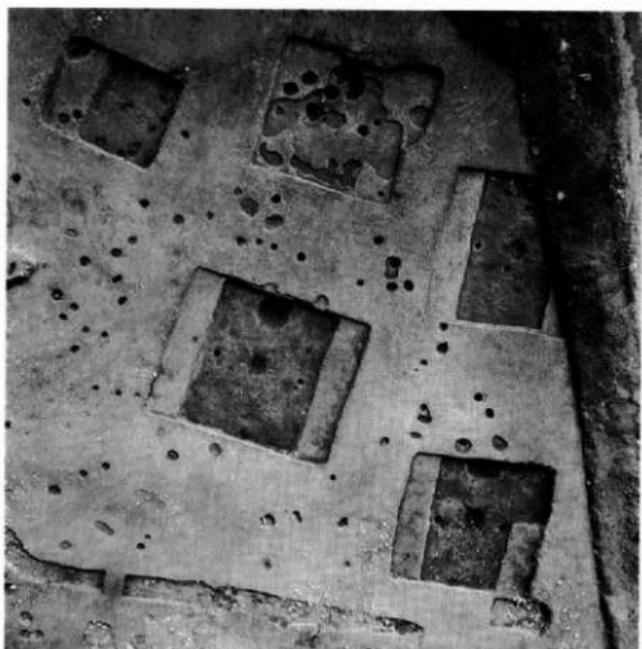


(1) 第5号竪穴住居跡 (南西から)



(2) 第6号竪穴住居跡 (北西から)

(1) 第7・11・17～19号
竪穴住居跡



(2) 第7号竪穴住居跡 (北から)



(1) 第8号竪穴住居跡 (南西から)



(2) 第9 (手前)・8号竪穴住居跡 (北西から)



(1) 第9号竪穴住居跡 (南西から) (床面の2本棒位置に銀製品出土)



(2) 第10号竪穴住居跡 (西から)



(1) 第11(7~13)号竪穴住居跡(南西から)



(2) 第11・17~19・33号竪穴住居跡(南から)



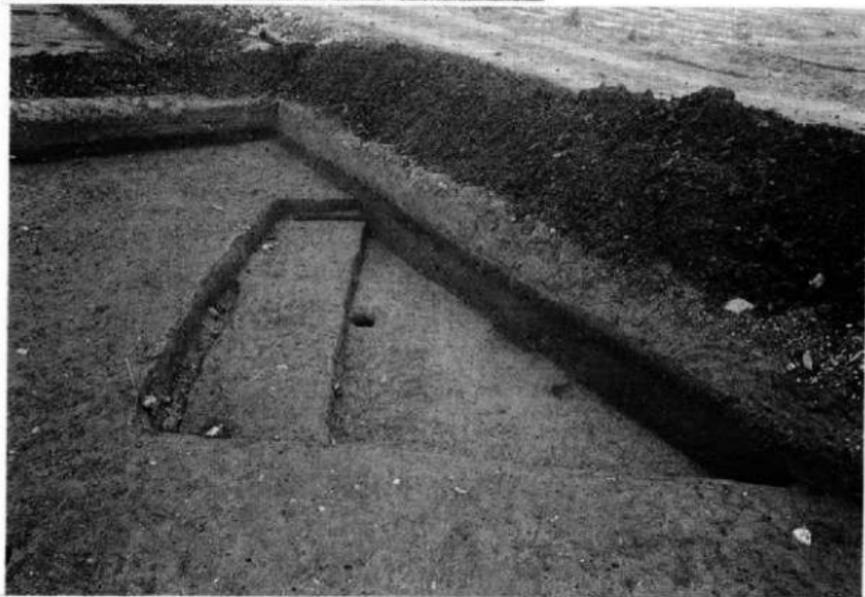
(1) 第12号竪穴住居跡 (南から)



(2) 第13号竪穴住居跡 (南東から)



(1) 第14号竪穴住居跡 (南東から)



(2) 第15号竪穴住居跡北半部 (北から)



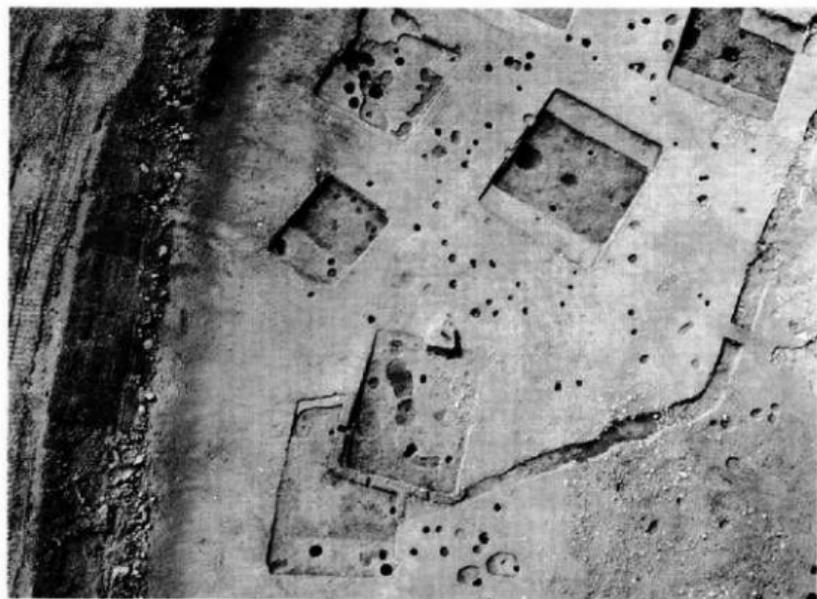
(1) 第15号竪穴住居跡南半部 (南から)



(2) 第16・21号竪穴住居跡周辺部 (上空から)



(1) 第16号竖穴住居跡（北西から）



(2) 第7・11・13・17・19号竖穴住居跡，第6号溝（上空から）



(1) 第17号整穴住居跡（北から）



(2) 第18号整穴住居跡（北西から）



(1) 第18号竪穴住居跡（北東から）



(2) 第19号竪穴住居跡（北西から）



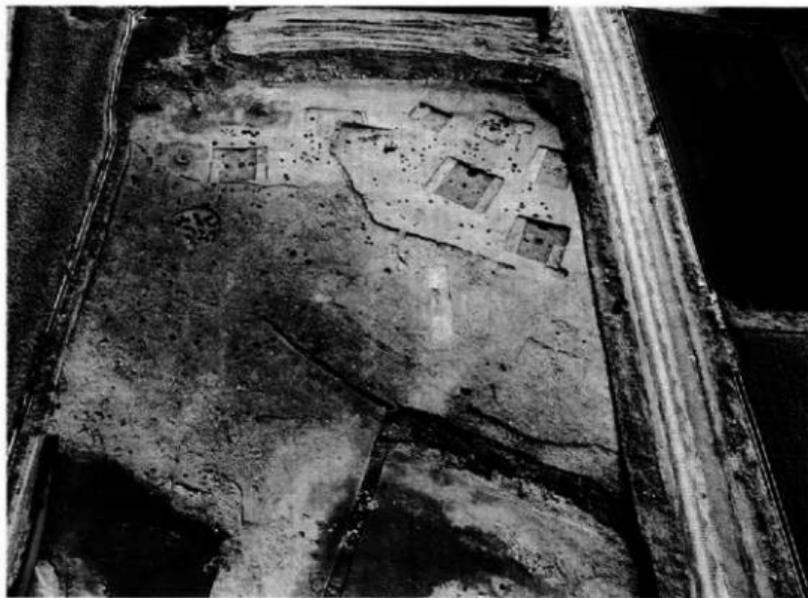
(1) 第19号竪穴住居跡
遺物出土状態（北西から）



(2) 第15号竪穴住居跡付近
側道部分全景（南東から）



(1) 第20号竪穴住居跡 (南東から)



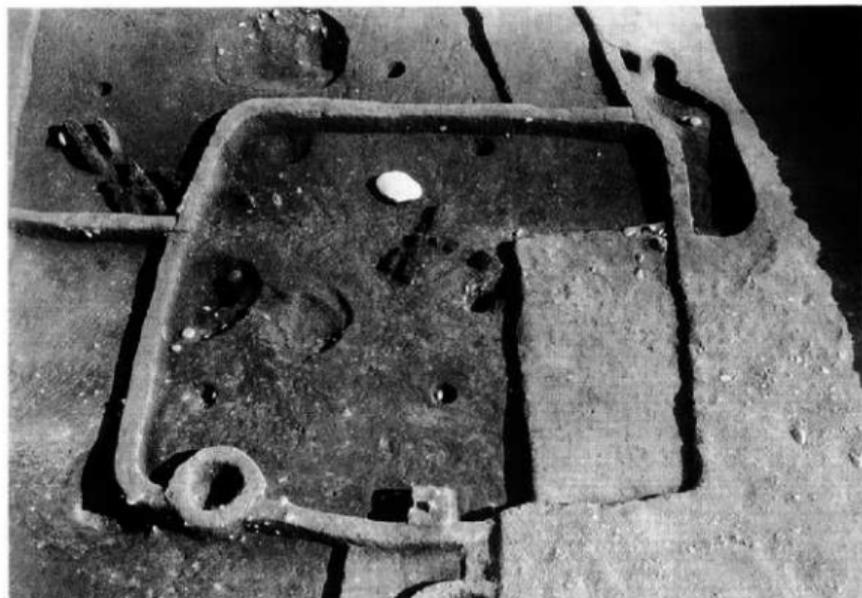
(2) 遺跡西半部全景 (北西から)



(1) 第21号竪穴住居跡 (北から)



(2) 第22～24号竪穴住居跡 (北西から)



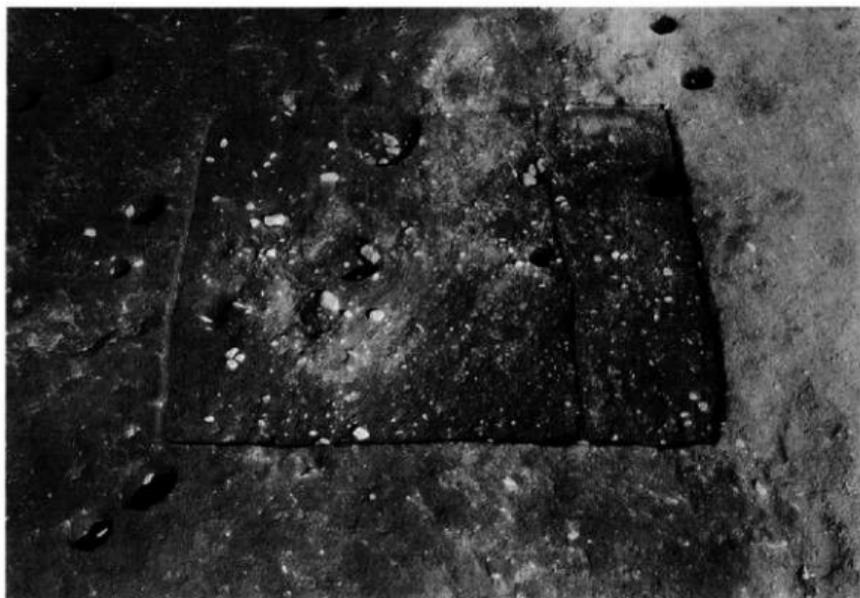
(1) 第24号竪穴住居跡 (北西から)



(2) 第25・26号竪穴住居跡 (南東から)



(1) 第27～31号竪穴住居跡（北東から）



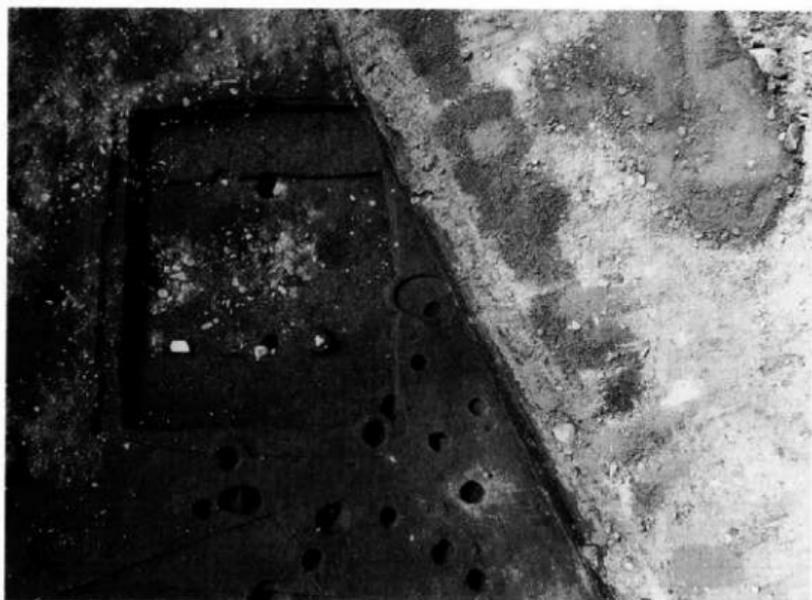
(2) 第27号竪穴住居跡（西から）



(1) 第28号竪穴住居跡 (北東から)



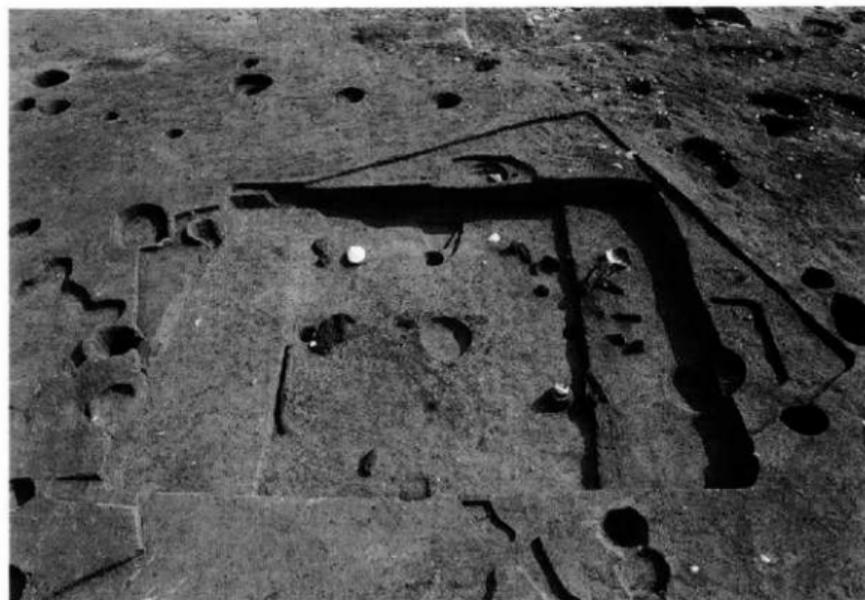
(2) 第29号竪穴住居跡 (南から)



(1) 第29号竪穴住居跡（上空から）



(2) 第30号竪穴住居跡（北東から）



(1) 第31号竪穴住居跡 (北から)



(2) 第28~31号竪穴住居跡 (東から)



(1) 第11・17~19・32・33号竪穴住居跡 (東から)



(2) 第32号竪穴住居跡 (南東から)



(1) 第33号竪穴住居跡 (北西から)



(2) 第34号竪穴住居跡 (南東から)



(1) 第1号土壌 (北西から)



(2) 第2・4号土壌 (北から)



(1) 第2号土塚 (西から)



(2) 第3号土塚 (北から)



(1) 第4号土坑 (東から)



(2) 第5号土坑 (北から)



(1) 第6号土城（北から）



(2) 第7号土城（北から）



(1) 第8号土壇 (南東から)



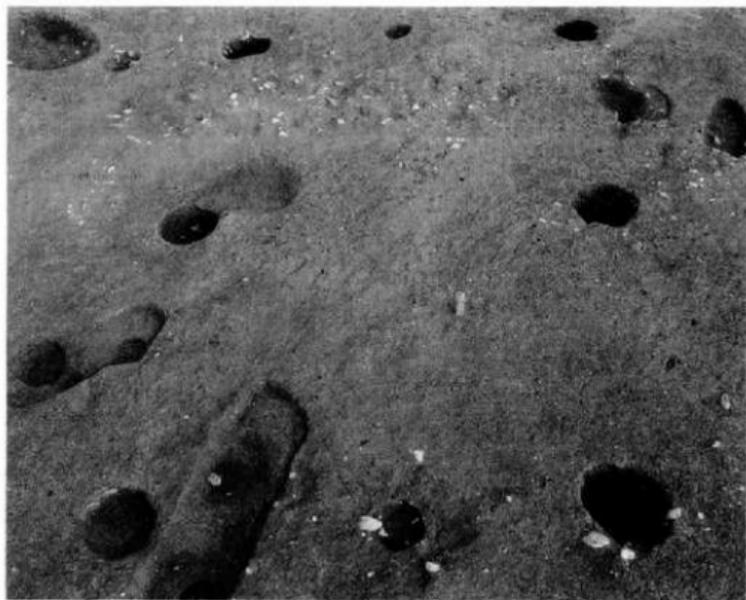
(2) 第9号土壇 (東から)



(1) 第10号土壙 (北から)



(2) 第13号土壙 (南西から)



(1) 第2号掘立柱建物（西から）



(2) 遺跡東端付近全景（北東から）



(1) 第2号溝周辺全景 (北東から)



(2) 第12号溝土層断面 (北東から)



(1) 第1号谷完掘後全景 (北東から)



(2) 第1号谷北壁土層断面 (南西から)



(1) 第1号谷南半部上層面完掘後全景（東から）



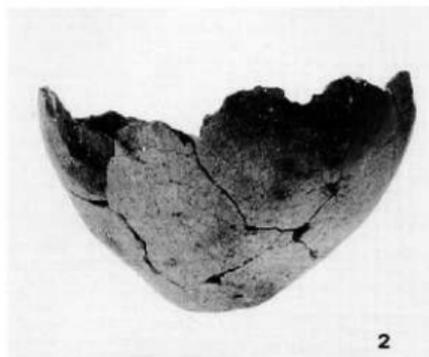
(2) 第1号谷南壁土層断面（北東から）



(1) 縄文包含層トレンチ発掘状況（北西から）



(2) 同上作業風景



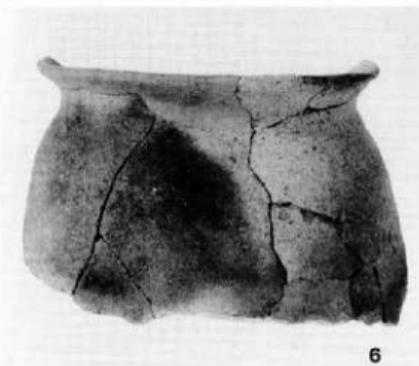
2



2



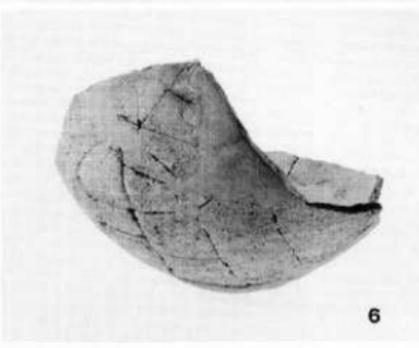
3



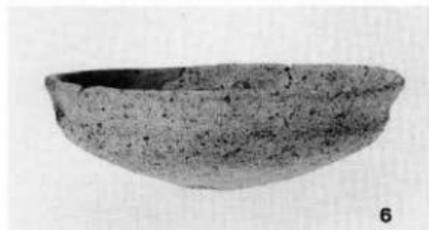
6



6



6



6



6



6



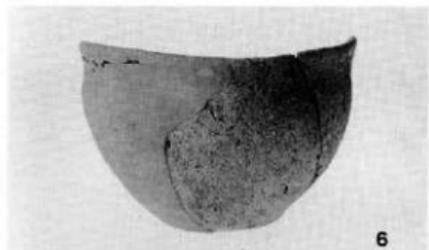
6



6



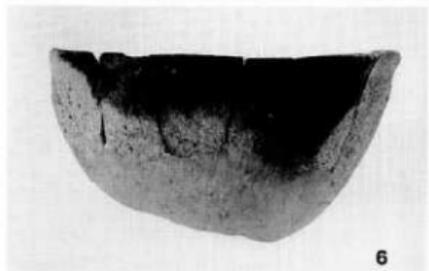
6



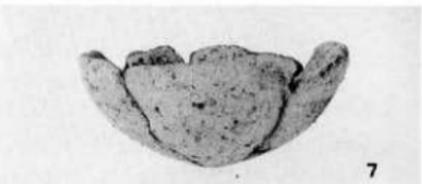
6



6

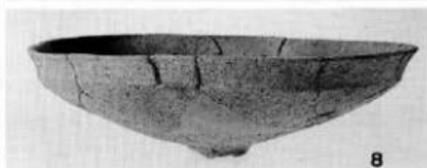
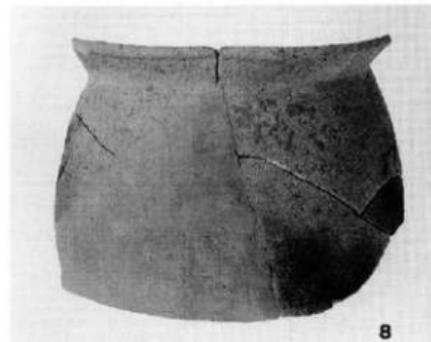


6

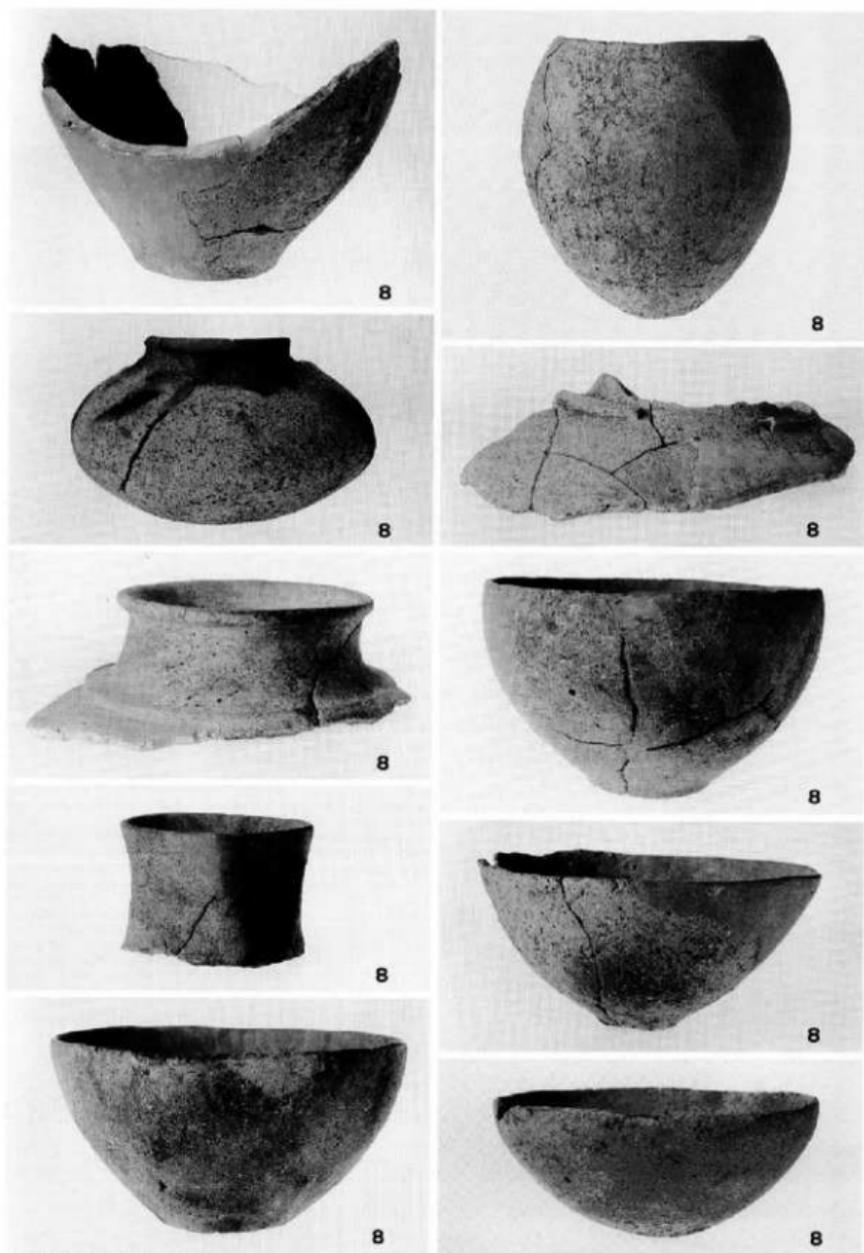


7

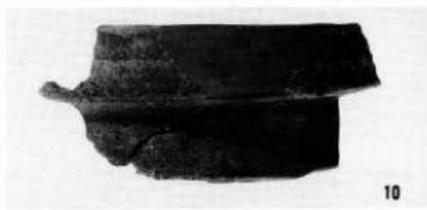
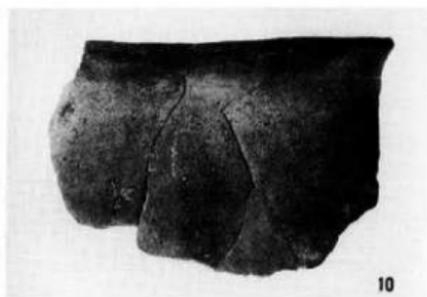
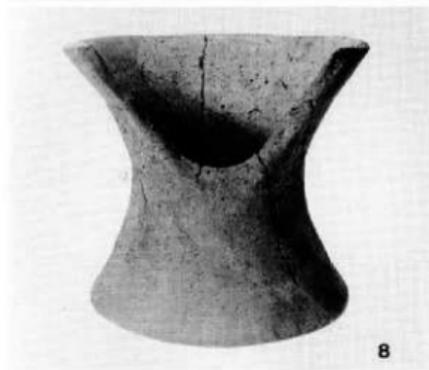
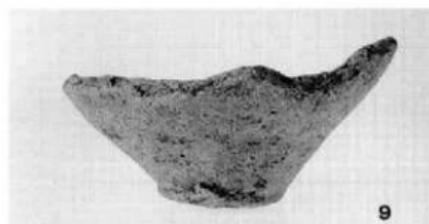
第6·7号住居跡出土土器

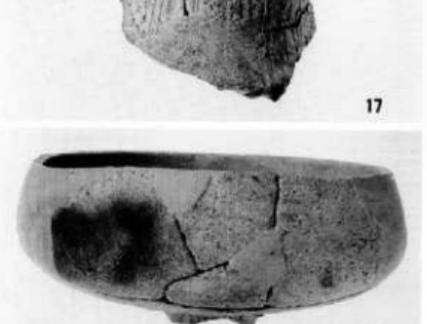
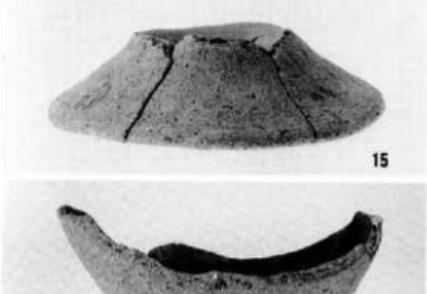


第8号住居跡出土土器(その1)

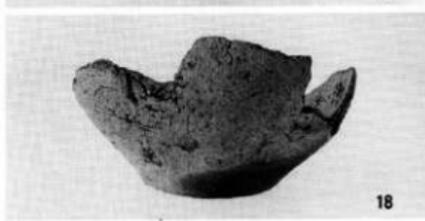
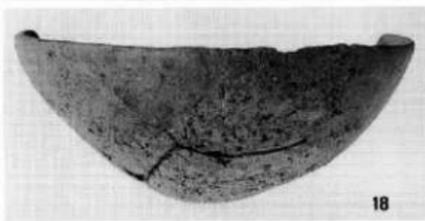


第8号住居跡出土土器 (その2)

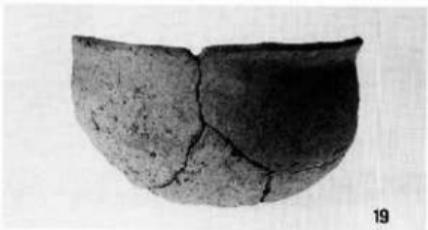
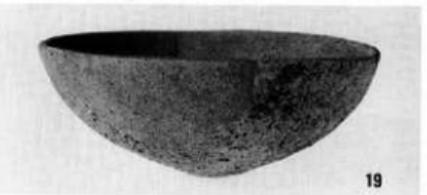
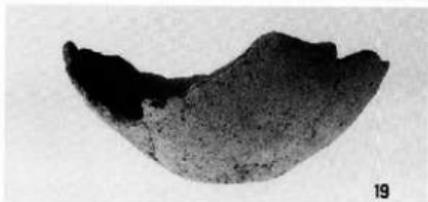




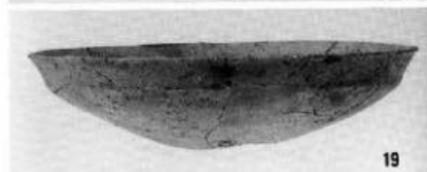
第10·11·15~17号住居跡出土土器



第17·18号住居跡出土土器



第19号住居跡出土土器 (その1)



第19号住居跡出土土器（その2）



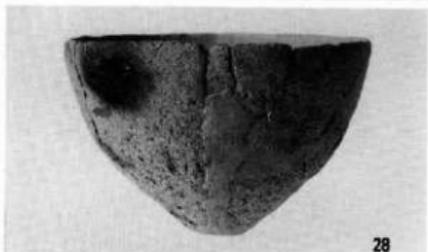
23



28



23



28



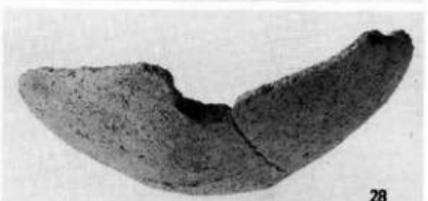
23



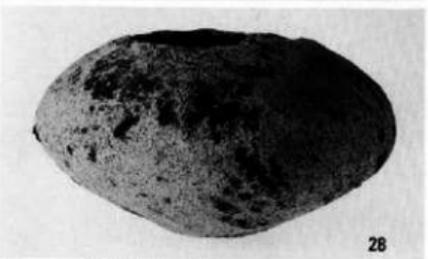
28



28



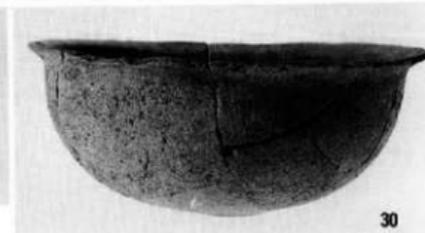
28



28



28





30



31



32



31



33



31

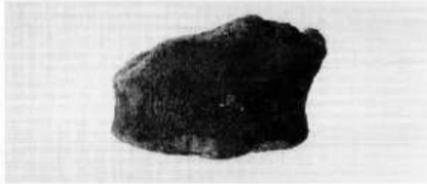
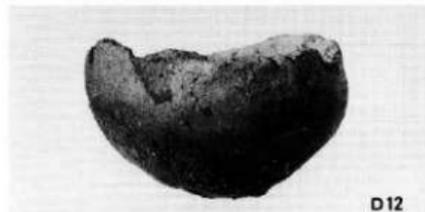


33



33

第30~33号住居跡出土土器



第33号住居跡・土壙・包含層出土土器



M4



M4



M4



M4



M12



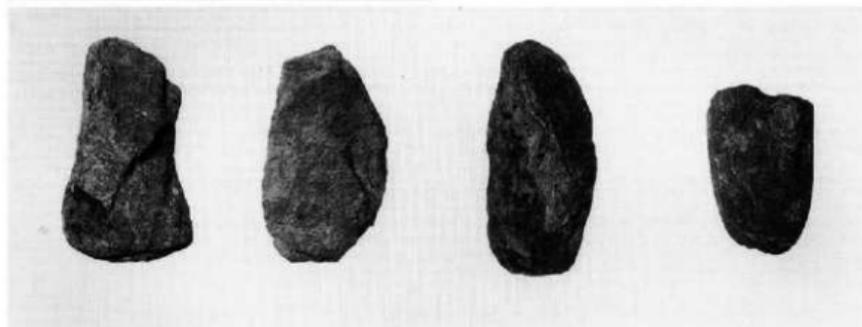
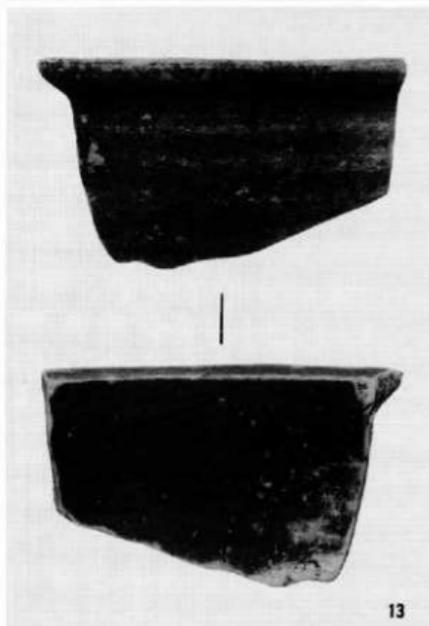
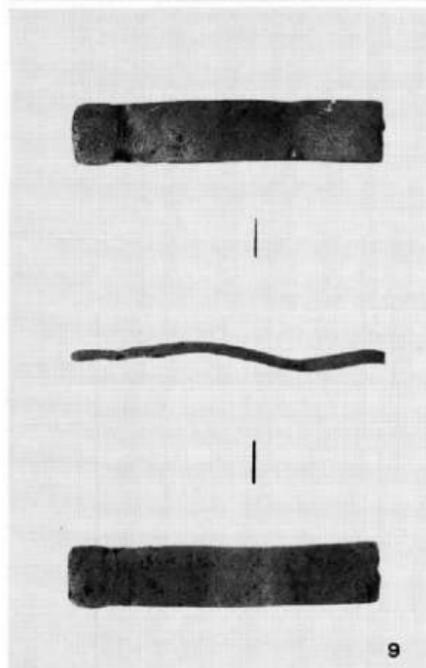
M12



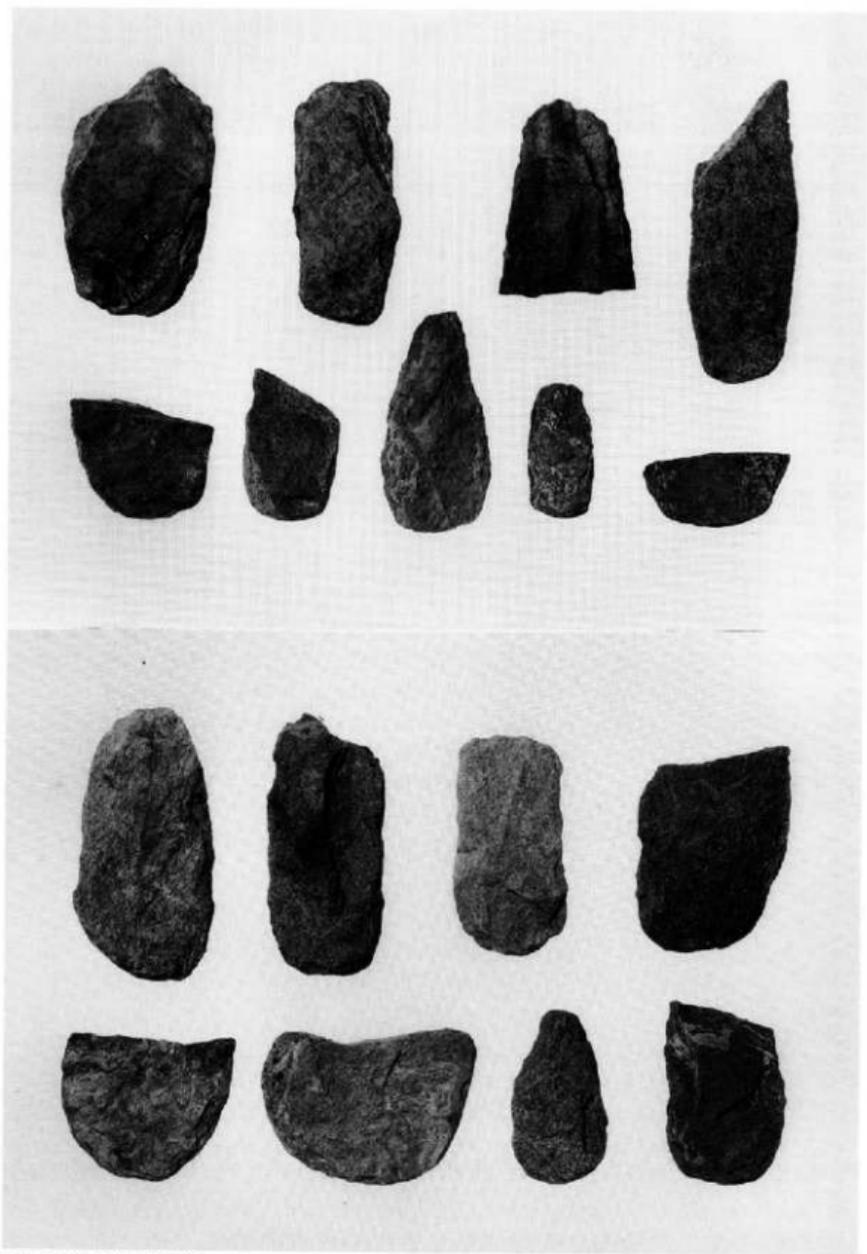
M12



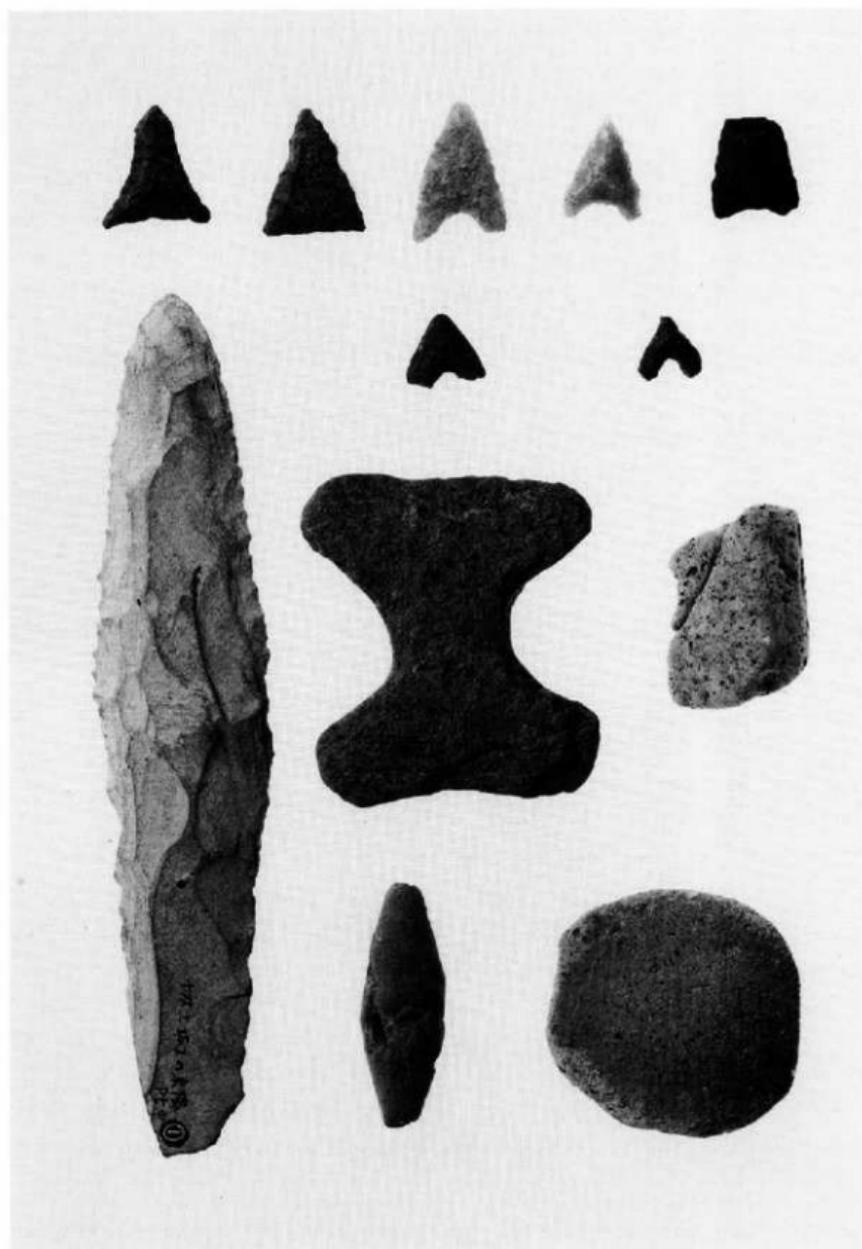
M12



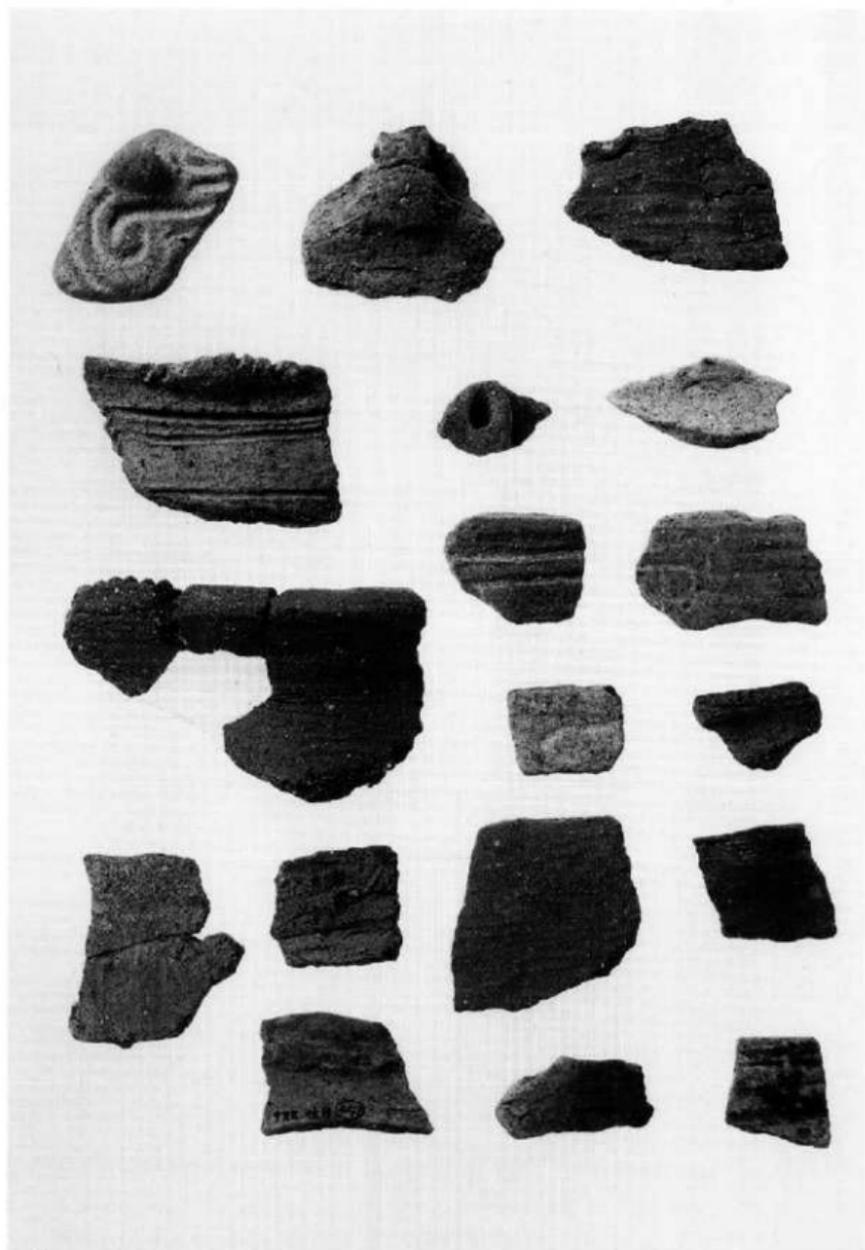
第12号沟出土土器·第9号住居跡出土銀製品·第13号住居跡出土漢式土器·各遺構出土扁平打製石斧



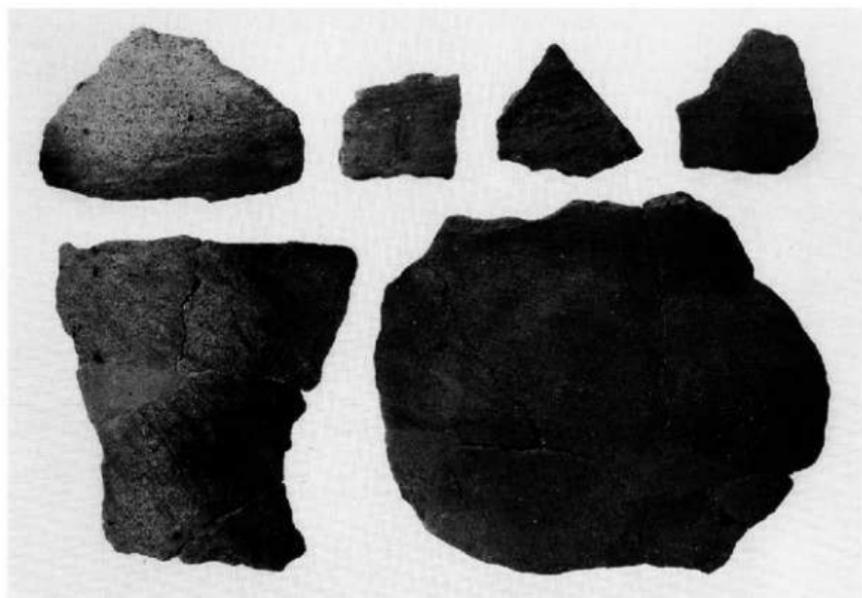
各遺構出土扁平打製石片



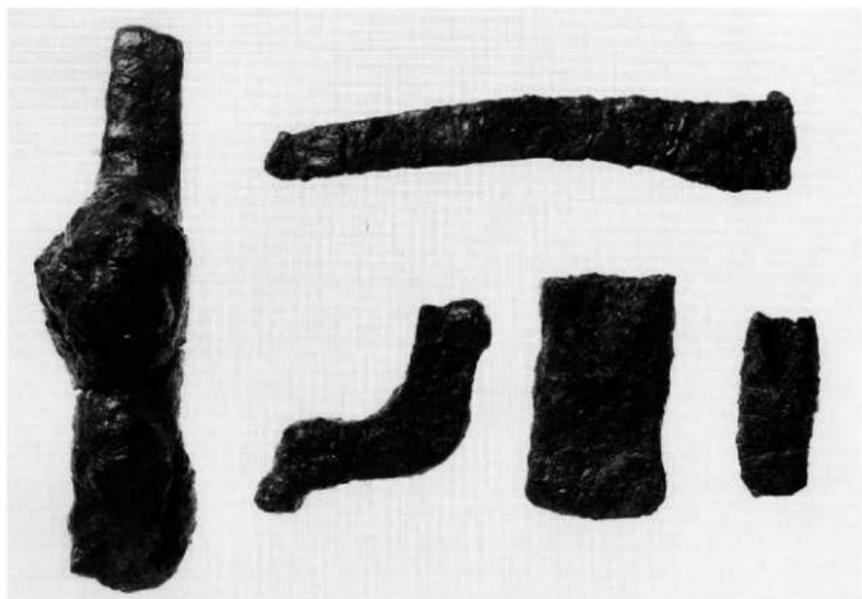
各遺構出土石器・土製品



各遺構出土縄文土器（その1）



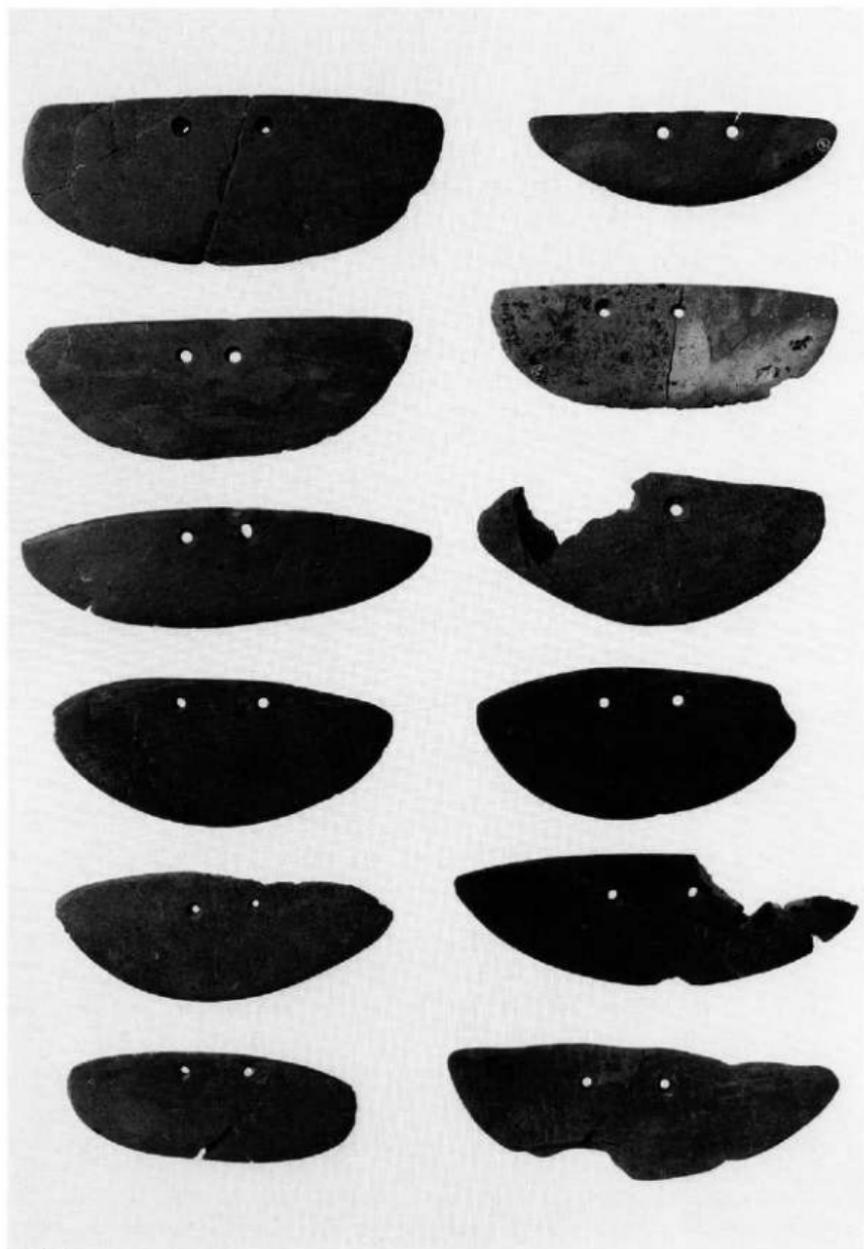
(1) 各遺構出土縄文土器 (その2)



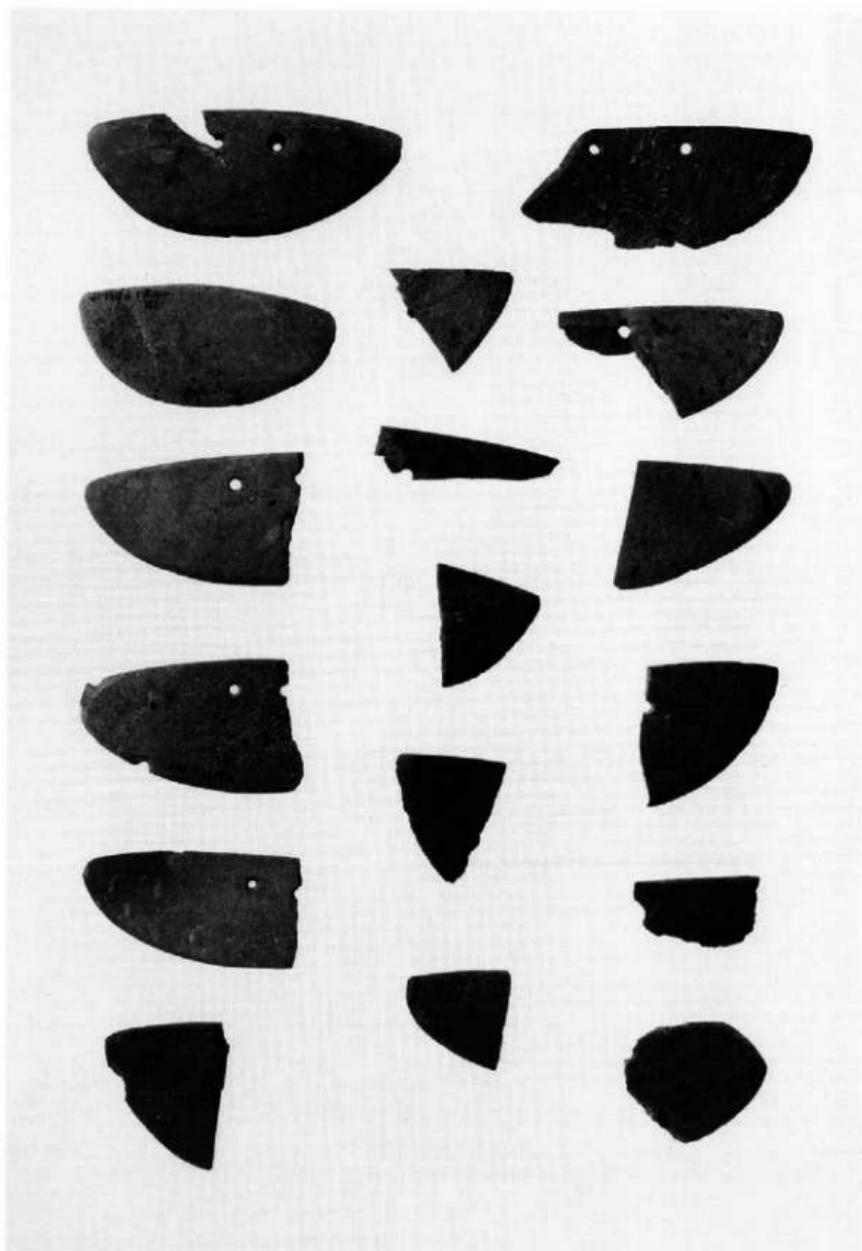
(2) 各遺構出土弥生時代鉄器 (その1)



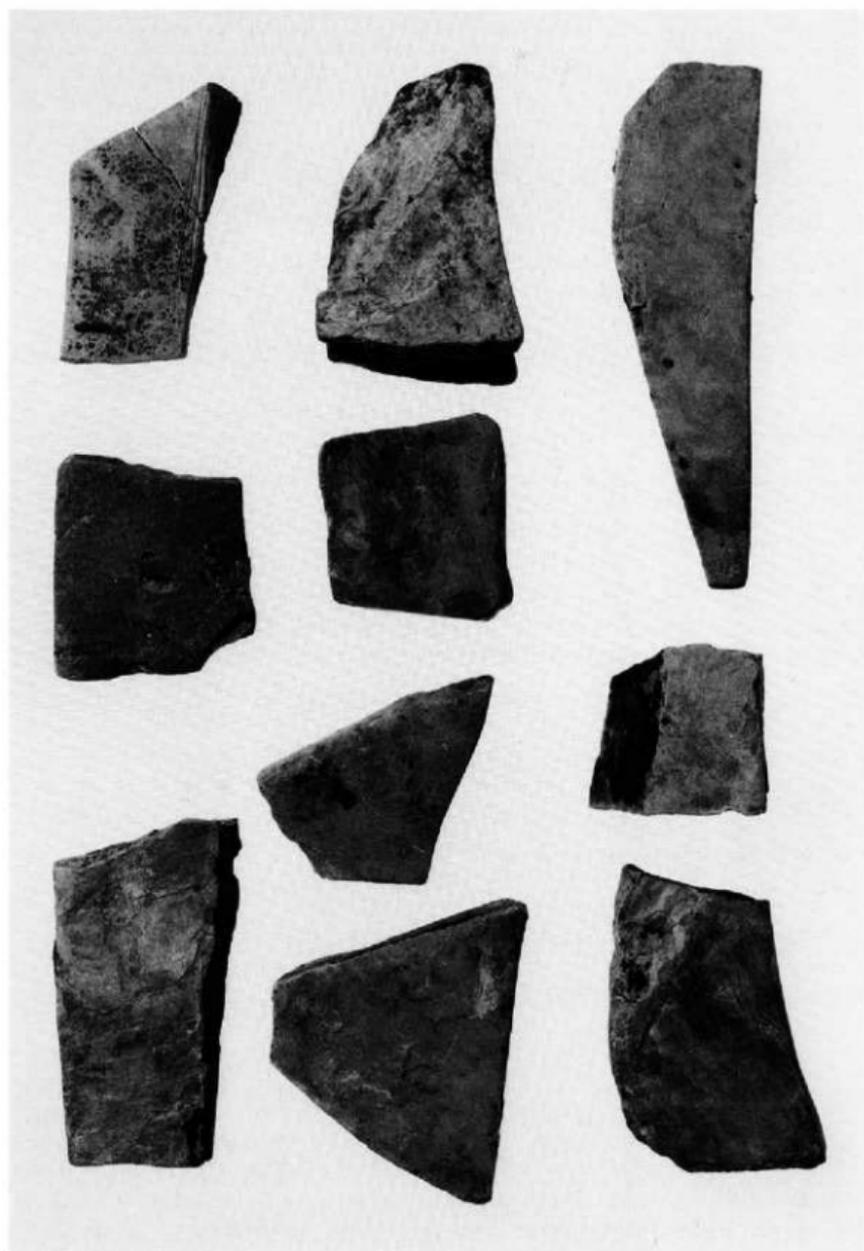
各遺構出土弥生時代鉄器（その2）



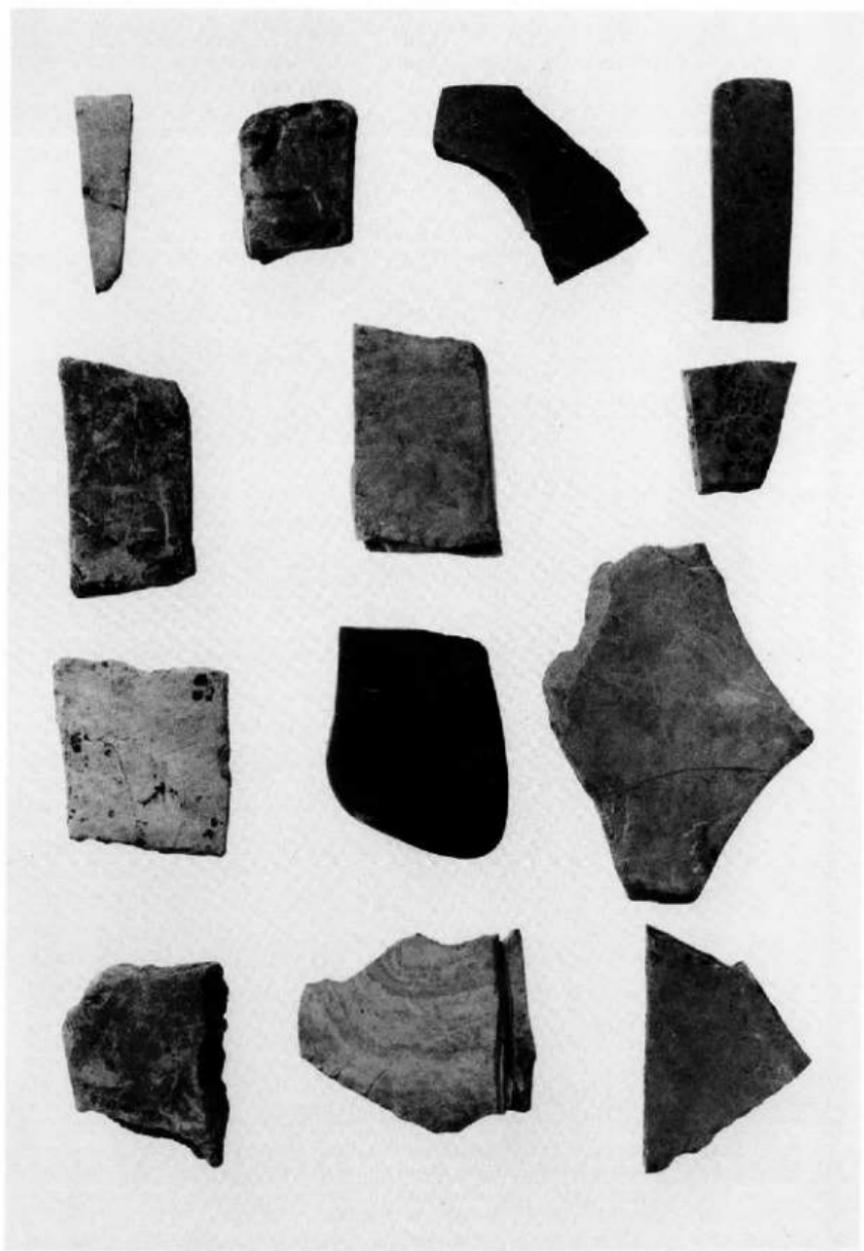
各遺構出土石砲丁（その1）



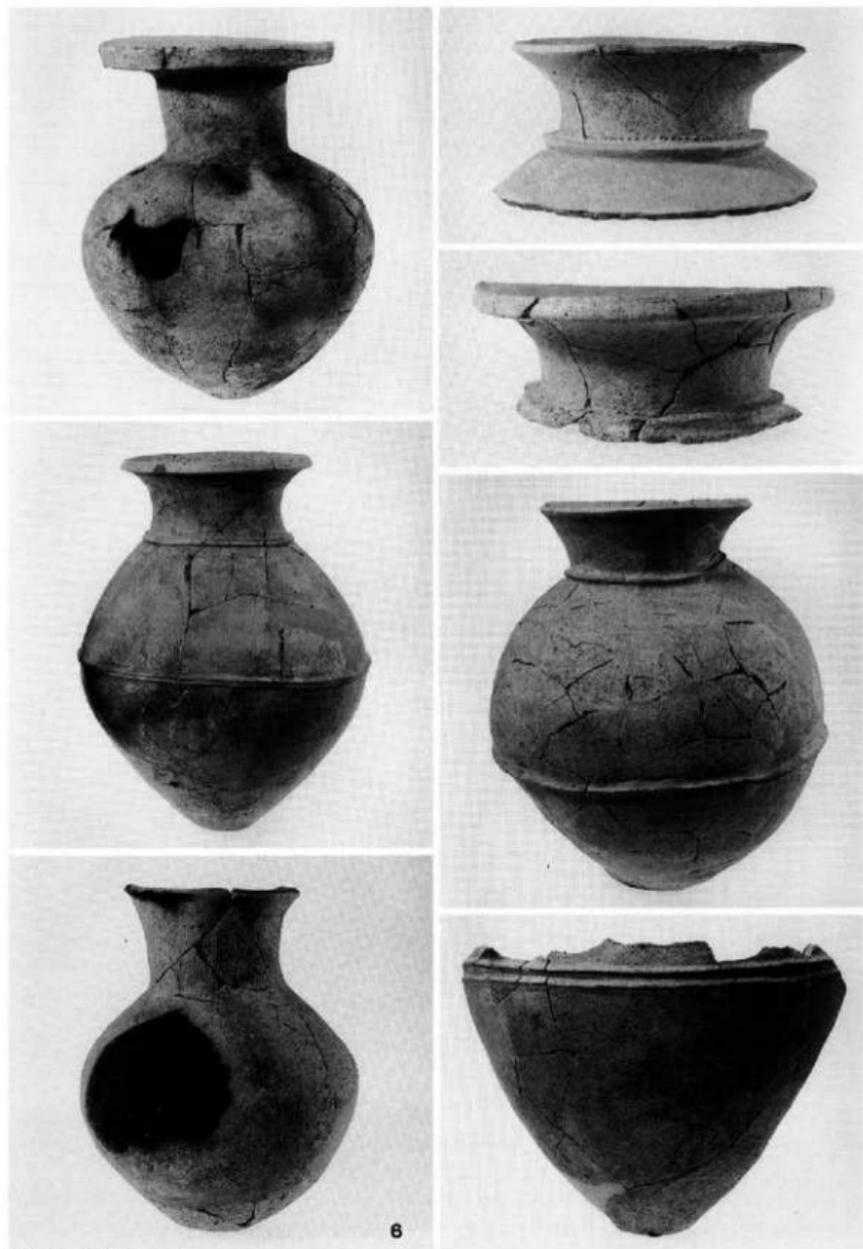
各遺構出土石庖丁（その2）



各遺構出土砥石（その1）



各遺構出土磁石 (その2)



谷出土土器 (その1)



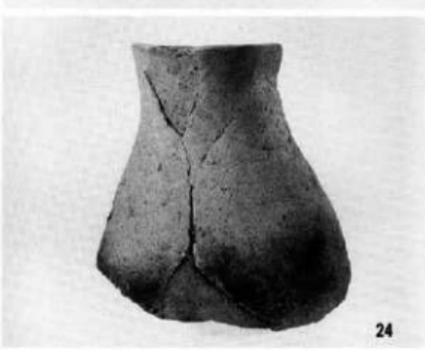
12



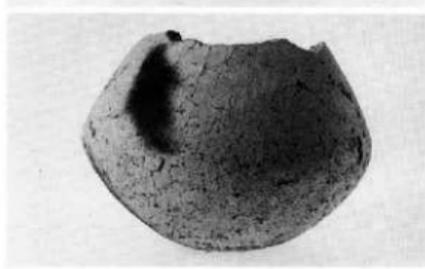
26



27



24



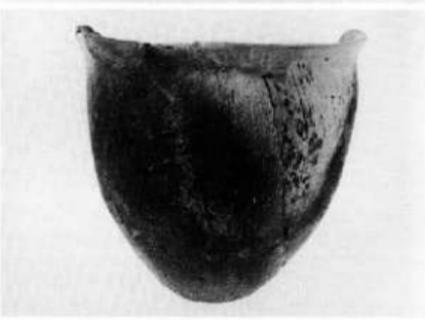
25



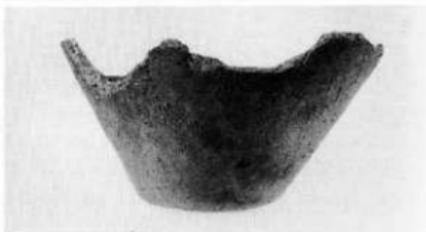
23

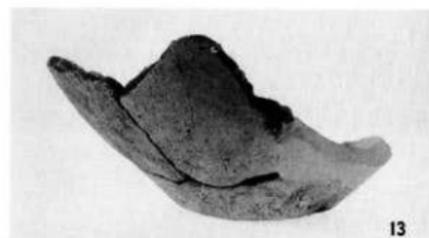


21



22

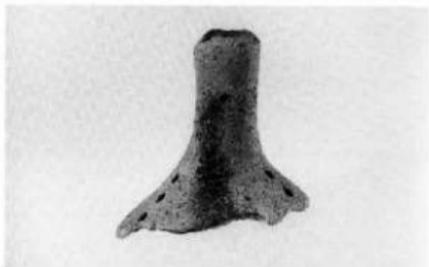
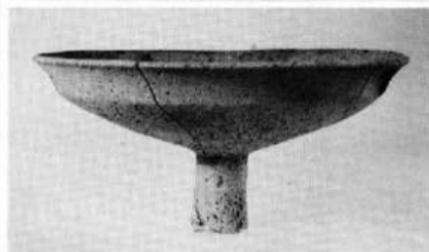




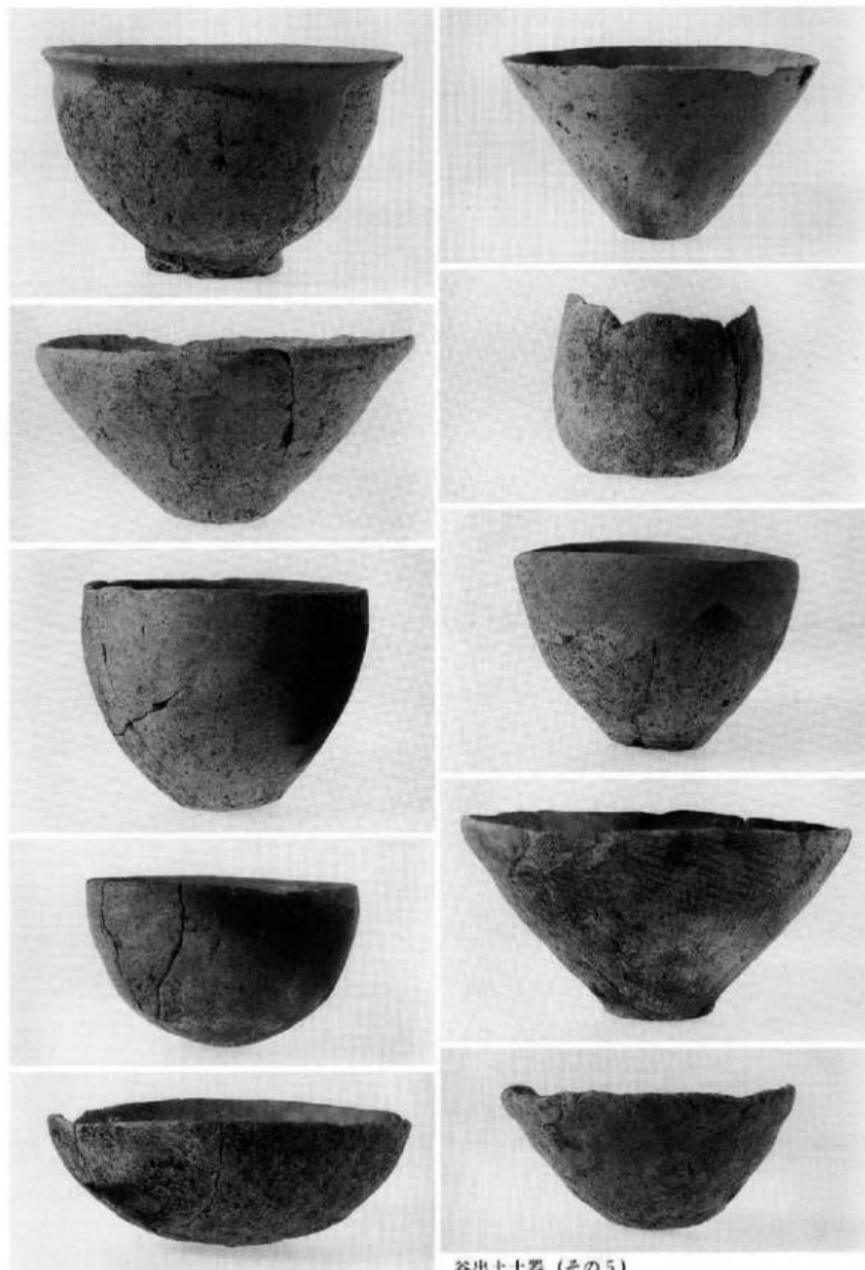
13



1



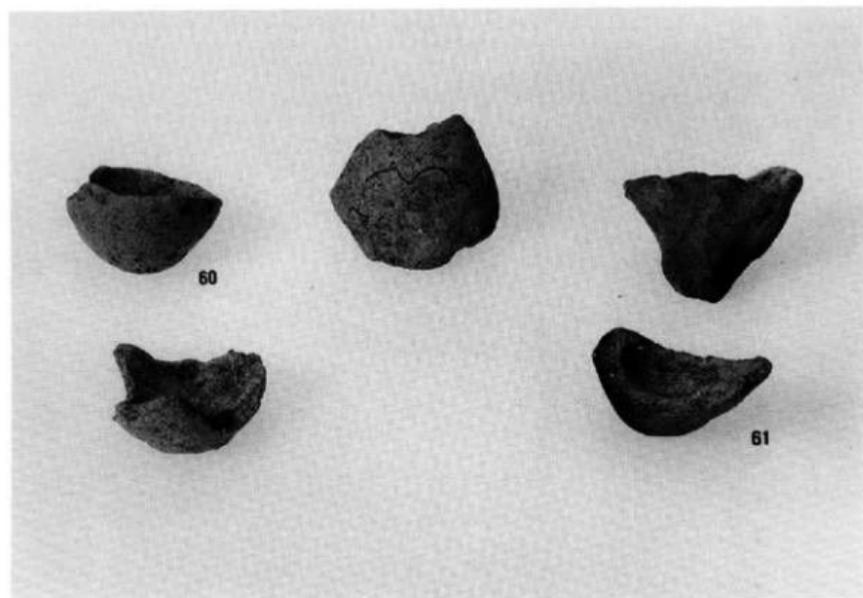
谷出土土器 (その4)



谷出土土器 (その5)



谷出土土器 (その6)



谷出土土器 (その7)

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 8 卷 下 巻

平成 4 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社

福岡市中央区大手門 1 - 8

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
J H	2 1 3 3 0 5 1
登録年度	登録番号
H 3	12

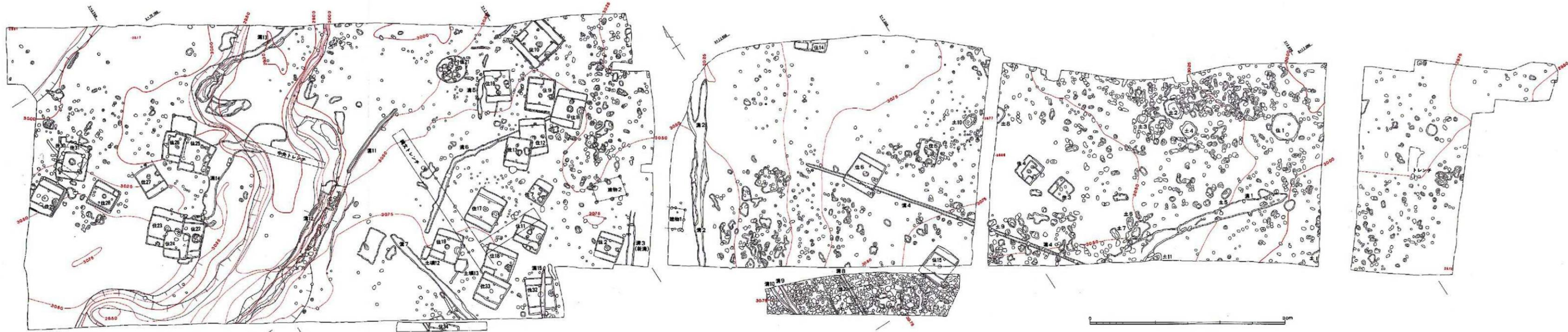
椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

— 8 —

下 卷

十双遺跡の発掘調査

付 図



付図 十双遺跡遺構全体図(1/300)